夢判断

下

新関良三 訳

ARS

Freud

Die Traum-deutung

Freud

夢判斷

新關良三訳

下巻

フロイド
精神分析大系
3

アルス刊

目次

第六章　夢の仕事……五三三
第三節　夢の表出手段……五三三
第四節　表出可能性の顧慮……五八三
第五節　夢に於ける象徴による表出――類型的な夢（續）……六〇二
第六節　表出の實例――夢に於ける計算と說話……六九九
第七節　不合理な夢――夢に於ける智的な成績……七三四
第八節　夢の中の情念……七九六
第九節　第二次の加工……八四七
補遺
第二次加工作用と機能的現象……八七一
第七章　夢經過の心理學……八八二

第一節　夢の忘却……八八七
第二節　逆　行……九二五
第三節　願望實現について……九五二
第四節　夢による覺醒——夢の機能——恐怖の夢……九九〇
第五節　第一次經過及び第二次經過——排斥……一〇一五
第六節　無意識と意識——現實……一〇五〇
第八章　補　遺……一〇七一
第一節　判斷可能の限界……一〇七一
第二節　夢の内容に對する德義上の責任……一〇七七
第三節　夢の神祕的意義……一〇八三

夢判斷

下卷

第六章　夢の仕事

第三節　夢の表出手段

夢の壓縮と夢の轉移、これは、潛在的な思想材料が顯在的な夢内容となる變化の際に働きをなすところの、二つの動因である事を吾々は見つけだしたのであるが、この調査を續けて行くと、吾々はこの二つの外に、なほ更に二つの條件があつて、夢に入つてくる材料の選擇に對し、疑ひなき影響を及ぼしてをるのに、遭遇するであらう。それに先だち、調査の途中で停滯するやうに見える恐れはあるけれども、私は敢て、夢判斷の實行に於ける經過をば、一度瞥見しておきたい、と思ふ。

夢判斷の經過を明らかになし、そしてそれの信用し得る事を、抗議辯駁に對して、保證するには、或る箇的な夢を範例として用ひ、その夢の判斷を、第二章に於いて私がイルマの注射の夢の

場合に示したやうに、展開させ、然る後に、發見したところの夢思想を綜合し、そしてさてそれ等の夢思想に基いてその夢の形成を再び行つてみる、卽ち、いくつもの夢の分析を夢思想の或る綜合によつて補充するならば、一番よく成功するであらうと、私は自分で首肯してをるのである。數多の實例についてさういふ仕事をしてみて、私はみづから習得することがあつた。併しその實例をここに採用することは出來ない。何故ならそれの公表のために必要な心理的材料に對しては、いろいろと、且つ正當な考への人なら誰でもが尤もだとするやうな、遠慮があり、それが妨げをなすからである。こんな遠慮は夢の分析の際には割合に邪魔にならなかつた。分析だと不完全であつてもよく、分析によつて夢の組織の中へただいくばくでも立入ることができたならば、分析はその價値を保有するものだつたからだ。それが綜合といふことになると、人を確信せしむるためには、どうしても、完全であらねばならない、とより外に、考へやうがない。一箇の完全な綜合、私がそれを與へ得るのは、ただ、讀者諸君には未知であるやうな人々の夢についてのみであらう。ところが私にその手段を提供する者はただ患者、卽ち神經病者のみなのであるから、それで夢の描寫のこの部分は、私が――別の箇所に於いて――神經病の心理學的解說を、吾

吾の主題と聯絡がつけられる程度まで、行ひ得るに至るまでは、一先づ、延期しておかねばならない。（私はその後二つの夢の完全な分析と綜合を、「或るヒステリー症分析の斷片」、Bruchstück einer Hysterieanalyse, 1905 に與へてをる。ランクの分析、「自から判斷される夢」は、割合に長い一つの夢の完全なる判斷であると、認めてやらねばならないものだ。）

夢を思想に基いて綜合的に組み立てる私のいくつもの試みから、私は、判斷の際に生じてくる材料が種々の價値のものである事を、承知してをる。この價値の一部をば、本質的な夢思想が形成してをるから、若しも夢にとつて檢閲が無かつたならば、その本質的な夢思想は夢を全く代表し、それだけで夢の代表には十分であるかもしれないのである。（價値の他の部分に對しては、普通に僅少な意味しか與へられてゐない。夢思想は總て夢形成に參加してをるものだ、といふ主張に對しても、何等の價値が置かれてはゐない。寧ろ、夢思想の中には、夢の後の、夢を見てる時とそれを判斷する時との間の體驗に結びつくやうな、思ひ付きの考へがあるかもしれない。それでこの部分は、顯在的な夢內容から潛在的な夢思想へまで通じてをる一切の聯絡、それと同時に併し、判斷の仕事に際してかかる聯絡の道を知るところの方法となつた、媒介的な、接合的な聯想をも、包括してをる。）

ここでは我々は專らかの本質的な夢思想を關心の對象としよう。大抵の場合、この夢思想の實體は、覺醒時からして吾々に知られてをる思想經過の凡ゆる特質を具へた、極めて紛糾した構造の、思想と記憶との複合體であることがわかる。それが、一つ以上の中心地から出發する、併し接觸點を缺いてはゐない、思想の行列であることが、稀でない。一箇の思想經過の傍には、殆どきまりきつたやうに、それの正反對的な對照の思想經過が立つてゐて、その二つは對照聯想によつて結びついてをるものである。

この複雜なる形成物の箇々の部分は、極めて多樣な論理的關係を相互に有してをる。彼等は前景をなし、背景をつくり、岐路に逸れ、說明となり、條件や、論證や、反證を形成する。而してこれ等の夢思想の集塊全體は、夢の仕事たる抑壓の下にあつて、成分が例へば漂流する氷の如く、ねぢ廻され、叩き壞され、そして寄せ集められたるものであるとするならば、今までその組織を作つてゐた、かの論理的關係は、一體どうなるのか、といふ問題が生じてくる。「若し――ならば、」「である故に」「恰かも――の如く」「假令――であつても」「これか――それとも、あれか」など、其他總ての接續詞、それが無くては吾々が文章なり、話なりを理解することのできない、

あの接續詞は、夢の中に於いて、いかなる表出を得るのであらうか？

これに對しては先づから答へねばならない。夢は、夢思想の間に存するかの論理的關係をば表出するのに、何等の手段をも、わがものとして持つてはゐない。夢は大抵、これ等の總ての接續詞を顧みることなく捨て、そして夢思想の具體的な内容だけを取りあげて加工する。それで、夢の仕事が破壞し去つてしまつてゐる聯絡を、再び作りあげてみる、それは、夢判斷に殘された仕事である。

夢自身にこの表現能力が缺けてゐるとすれば、夢が作られてゐる心理的材料を問題にせねばならない。說話を使用することのできる詩歌にくらべて、繪畫や彫塑、卽ち表出的な藝術は、丁度、これに似た或る制限を蒙つてゐる、そしてこの兩つの藝術に於いても、その非力の原因は、彼等が何物をか表現せんと努力して加工するところの材料に存してをる。繪畫にとつて妥當な表現法則の知識を得られなかつた以前には、この不便の埋め合せをしようと骨を折つた。古い繪を見ると、描かれた人物の口から紙片がぶらさげてあつたりする。そしてそれは、畫家が畫中に表出しようとして、なし得なかつた說話をば、文字として、現してをつたのである。

恐らくここで一つの異論が起り、論理的關係の表出を夢が斷念することなどはない、と抗議するかもしれない。勿論、覺醒時の思考に於けると同じく、極めて複雜した精神作業が行はれ、證據とその辯駁が示され、機智的な言ひがかりや、比較も行はれるやうな夢もあることはある。併しながらかかる場合にあつても、その外見は虛僞であつて、かかる夢の判斷にとりかかつてみると、それ等總ては夢の材料であり、夢に於ける智的仕事の表出でない事を知るのである。夢の外見的な思考によつて再現されてゐるのは、夢思想の內容であつて、思考なるものの仕事として元來これを確定すべきである、夢思想の相互の關係ではない。私はこれについて、いくつかの實例を持ち出して見るであらう。だが、最も容易に確證される事は、總ての說話、それは夢に出て來て、そして明らかに說話として示されるところの、一切の說話が、夢材料たる記憶の中にやはり同じ樣に現存する說話の、變更されてゐない、若しくば、ほんの僅かだけ變容された模倣である、といふ一事である。說話は時として、夢思想の中に含有された一箇の出來事に對する一つの暗喩でしかない。そして夢の意味はそれと全く別のものである。私は勿論次の事に對して異論を述べないであらう。ただ簡單に夢思想の中から材料を取り、それを繰り返へすだけではないやうな、

批判的思考の仕事も亦、夢形成に與かり關係する事に對して。この研究の終りに於いて、私はこの要因の影響を解明せねばならぬであらう。そしてその時には、この思考の仕事は夢思想によつてではなく、或る意味に於いて既に完成せる夢によつて喚起される事實が、明らかとなるであらう。であるから、先づ唯今のところ、夢思想の間に於ける論理的關係は、夢の中にあつて何等の特別なる表出を見出すものではない、と定めて置かう。夢の中に於いて、例へば矛盾が見出されても、それは、その夢自身に對する矛盾であるか、でなければ夢思想のうちの或る一つの思想の內容から發する矛盾であるか、いづれかであり、夢の中の矛盾が夢思想の間に於ける或る矛盾に該當するのは、ただ、非常に間接的な仲介的方法を以てのみであるにすぎない。然るに丁度繪畫にとつては、表出された人物の少くとも說話的意圖を、その溫情や、威嚇や、抑制の態度や、其他を、ひらひらと垂れさがる紙片などによるより以外の方法で、表現することが成功するに至つてをるのと同じく、夢にとつても亦、その夢思想の間に於ける論理的關係の箇々のものに對して、獨得な夢表出の適切な變容を加へることによつて、顧慮してやる可能性が生じてをる。吾々は、いろいろな夢がこの點の顧慮に於いてはいろいろ相違してをる事を、經驗する事が出來る。或る夢は

その材料の論理的組織を全く超越してゐるのに、他の或る夢はできるだけ完全にこれを暗示しようとする。この點に於いて、夢は自分の前に改作のために置かれてある原本から、多かれ少かれ、離れてゐるものである。その他、夢思想の時間的組織に對しても、若しかかる組織が無意識の中に作られてをる場合には（例へば、イルマの注射の夢に於けるやうに）、夢は前のと似たぐあひに變化的な態度をとつてをる。

いかなる手段によつて併し、夢の仕事は夢材料の中にある表出しにくい關係を暗示することができるか？　私はその手段を箇々に數へあげてみるであらう。

先づ、夢はこの材料を境遇又は經過として一つに綜合する、そしてそれによつて、夢思想の凡ゆる部分の間に明らかに存在する聯絡に對して顧慮を拂つてをる。夢は論理的聯絡をば同時性として再現する。その點に於いて夢は、凡ゆる哲學者又は詩人をばアゼンスの學校か又はパルナソスの山の繪に集めて描く畫家と類似した、處置をとる。それ等の哲學者や詩人は決して一堂に會したり、又は一つの山顚に集まつてゐたりしたことはないのであるが、併し思考的な觀察にとつては、彼等は一箇の團體を形成してをるがためである。

かかる表出法を夢は細目に亙つて續ける。夢が二つの要素を互ひに接近して示す場合には、いつも、夢思想の中に於いてその要素に該當する者の間に存する、或る特別に密接な聯絡を保證してをるものである。その狀、恰かも吾々の文字筆記の方法の如し。ab と書けば、この二つの文字は一綴を以て發音せられねばならない事を意味し、aとbとが間を置いて書いてあるなら、aは一方の語の最後の文字、そしてbは他のもう一方の語の最初の文字なる事が、認識される。これによつて考へると、夢の結合は、夢材料の任意な、全く異種的な要素成分からは形成されず、夢思想の中に於いても密接なる聯絡をなしてをる成分から形成されるものである。

夢が因果關係を表出するのには、二つの處置がある。この二つは、その本質に於いて、歸するところは同一のものである。より屢々行はれる表出方法、例へば、これはしかじかであつたのであるから、これとあれとが起るのに相違なかつたのである、といふぐあひに、夢思想の內容ができてゐる場合の表出方法は、その前置きの文を前提の夢として出し、そして然る後に結びの文をば主要な夢としてそれに結びつける。私にして若し正しく判斷してをるとすれば、時間の順序はまたその逆であることもできる。それにしても、常に、夢の一層詳しく作られてゐる部分は、必

ずこの主要な夢に該當してをる。

因果をかくの如く表出する一つの面白い實例を、嘗つて或る女の患者が私に提供してくれてをるが、その夢を私は後に完全に報告するであらう。これは一つの短い前提の夢と、一つの大變に詳しい、非常によく集中せられ、そして花によつて、とでも標題をつけることができる部分とから、成立つてゐた。前提の夢の內容はかうである。彼女は臺所へ行き、二人の女中に向ひ、彼等が「少しばかりの食事」をまだ片付けてゐないのを叱つた。その時彼女は、大變に澤山の雜な臺所道具が水の滴を切るためにさかさまにして臺所に置いてあり、しかも積み重ねてあるのを見た。二人の女中は水をとりにでかける、そしてその時、何か或る河の中へでも下りて行かねばならないやうな様子であつて、その河は家の傍か、又は內庭の中まで來てをつた。

その後に主要な夢が續いて、その冒頭は次の如くであつた。彼女は高いところから、獨得な形に出來てゐる欄干を越えて、降りて行き、その際彼女の着物がどこにも引きかかつてゐないのを悅んだ、云々。さて、かの前提の夢はこの婦人の兩親の家に關係してをる。臺所で言つたやうなあの言葉を、彼女は自分の母の口から實に屢々聞いたことがあつた。雜な臺所道具の積んである

のは兩親の家と同じところにあつた、質素な道具店から來てゐる。前提の夢の後半は、父に對する或る暗示を含むもので、父は女中等を相手にすることが多く、且つある出水の時に——その家は河の岸に近かつた——致命的な疾患を身に招いだのであつた。それで、この前提の夢の背後に匿れてゐる思想は、妾はこんな家、こんなつまらない、そして面白からぬ境遇の出身だものだから、といふのである。主要な夢は正にこの思想を再びとりあげ、そしてそれを願望實現によつて變化し、妾は高貴な素性の者だ、といふ形の中に入れてゐる。從つて元來の意味は、妾はこんな卑しい素性の者であるから、妾の經歷はこれこれであつたのだといふにある。

私の見る限りでは、夢が二つの相同じからざる部分へ分割される事は、必ずしもつねに、その兩方の部分の思想の間の、或る因果的關係を意味してはゐない。屢々、同一の材料が二つの夢に於いて相異れる觀察點からして、表出されてをる、かのやうに見えることがある。（確かにこの事は、夢精に終る或る一夜の夢の系列にあてはまり、かかる系列では、身體上の欲求が或る前進的により明瞭なる表現を、どうしても作り出すものである。）乃至は二つの夢は夢材料内に於いて離れてゐる別々な中心から發し、そして内容の中では互ひに重なり合ふので、その結果、一方の夢の中では、他方の

夢にあつて暗示として協働してゐるものが、中心になつてをる、又はその逆である。然るに或る程度の數の夢に於いては、比較的短い前の夢と、比較的長い後の夢と、二つへの分裂が、事實的に、兩方の部分の間の因果的關係を意味することがある。因果關係の、もう一つの表出方法は、比較的內容分量の少い材料の場合に使用せられ、夢の中の或る形象が、それは或る人物のでも、又は或る事柄のでもよい、とにかく或る形象が、別の形象に變化する、それがこの方法である。この變化が夢の中で行はれるのを見る場合に於いてのみ、因果的聯絡は眞面目に主張されるのであつて、或る形象の代りに今や別のが現れた、のをただ認める如き場合に於いてではない。私は前に、因果關係を表出する二つの處置は、歸するところ、同一のものである、と言つた。いづれに於いても、原因的惹起は繼起によつて表出せられる、一方ではいくつもの夢の連續によつて、他方では或る形象が別のものへ直接に變化することによつて。大多數の場合、勿論、因果關係は一般に表出せられずして、夢の經過にあつても避けがたいところの、諸要素の繼起の下に匿れるのである。

いくつかの中から一つを選ぶ、かの「これか——或ひは、あれか」を、夢は大體表現することはできない。夢はそれの中の各部分を、同等に權利あるもののやうに、一箇の聯絡の中へ採用す

るのを常とする。これに對する一箇の典型的な實例が、イルマの注射の夢に含まれてをる。その潛在的思想には、明らかに、次の事項がある。私はイルマの苦痛がいつまでも繼續するのに對して責任がない、罪は或ひは彼女があの解決を受け容れるのを肯んじないで反抗する點にあるか、或ひは、彼女は私がどう變化することもできないやうな、不便な性的條件の下に生活してをる、といふ點にあるか、或ひは、彼女の苦痛は大體ヒステリー症的のものではなくて、器官的性質のものであるか、なのである。然るに夢そのものは、是等の、互ひに殆ど相容れない可能性總てを收容し、そして夢の願望に基いて或る第四の、あのやうな種類の解決を附け加へて平氣でをる。それで私はその夢の判斷後に於いて、これか、或ひは、あれかを、夢思想の聯絡の中へ挿入して置いたのであつた。人が見た夢を後に物語る際に、あれはどこかの庭であつたか、或ひは居間であつたか、云々と、一度、このこれか、或ひは、あれか、を使用したがる場合があつても、その時に、夢思想の中に於いて、現れるのは、これか或ひはあれか、の接續詞ではなくして、及びといふ簡單な竝列なのである。若し吾々が、これか或ひはあれかを使用する時があれば、その時大抵吾々は、これから猶ほ解決のできるやうな、或る夢要素に附屬してゐる曖昧さの特質を說明する

のであつて、かかる場合にとつての判斷の規則は次のやうである。即ち、外見上のこれか、或ひはあれかの各部分は、それぞれ、互ひに同等に置かれ、そして「及び」によつて結ばれる。例へば、私が伊太利に滯在してをる友人の住所の通知を長い間空しく待つてゐた後で、この住所を知らせる一本の電報を受取る夢を見た。電報の紙片の上に、青くそれが印刷してある。最初の語はぼんやり消えかけて、via か或ひは Villa かであるやうだし(第二の語は、明白に Sezerno であるから)、或ひは(Casa)とも見えるやうだ。

第二の語は伊太利の名稱らしい響を持つてゐて、語源についての私達の議論を追想させるものであるが、相手の友人がこんなに長い間その滯在地を私に對し、祕密にしておいたのについての、私の憤懣をも表現してゐる。併し第一の語に對するかの三樣の暗示の各々は、この夢を分析してみると、夢思想連鎖の獨立した、そして同等に道理ある出發點に當つてるものだ事が、認められるのである。私の父の葬式の前夜に、私は一枚の板紙、一枚の貼紙か、或ひは掲示紙の夢を見た——鐵道の待合室にある喫煙禁示の掲示紙のやうなもので——その上に讀まれる文句は、「兩眼を閉ぢられたし」か、或ひは、「一眼を閉ぢられたし」か、であつて、それを私は普通次のやうな形

式に表現する。

「両眼／一眼を閉ぢられたし。」

この兩つの取り方は、各自、特別なる意味を持ち、夢判斷を行ふ時には、各自が特別なる道へつれてゆくのである。私は、故人はかかる行事についてどんな考へを持つてゐたかを、承知してゐたから、儀式をできるだけ簡單に選んだのであつた。然るに他の家族はそのやうに清教徒的な簡單さには同意でなかつた。彼等の意見は、葬式の客の前で耻かしい思ひをせねばならんだらう、といふのである。そこで夢の一方の文言は、「一眼を閉ぢる」、即ち、斟酌することを乞うてゐる。吾々がこれか或ひはあれか、を以て説明した曖昧さの意義は、この夢では、特別容易に把握される。夢思想のために一つの統一した、併しそれでゐて曖昧な文言を作り出すことは、この夢の仕事には成功してゐない。それ故に既に夢内容の中に於いて、二つの主要な思想列が互ひに分裂してるのである。

二三の場合には、夢が二つの同等な大きさに分れることは、表現しがたい、これか或ひはあれかを、現してゐる。

極度に眼を惹くのは、對立及び矛盾の範疇に對する夢の態度である。これは頭から無視せられ、「否」は夢にとつて存在してゐないやうに見える。對立は特に好んで一致に包括されてしまふか、或ひは一箇のものとして表出されるか、である。夢は實に、或る任意な要素をばそれの對立的願望を通して表出する自由を行ふものだから、その結果、夢思想の中に於いては肯定的に含まれてをらうと、又は否定的に含まれてをるのであらうとも、何か反對を起し得るやうな要素は、先づ存在しないやうである。（カ・アベルの著書「根源語句の反對意味」、K. Abel, Der Gegensinn der Urworte, 1884. から私は、最も古い言語がこの點に於いては夢と全然類似の振舞をするものである、といふ驚くべき、そして他の言語學者達によつても實證されてゐる事實を知つた。最古の言語は初めの間、性質或ひは行爲の一系列の極端に存する二つの對立に對して、ただ一つの語しか持つてゐない（强弱、老若、遠近、結び—離す）。そしてその二つの對立に對して、漸やく第二次的に、共通なる根源語の輕度な變容によつて、別々な稱呼を作つたのである。アベルはこの關係を古代埃及語について廣汎に亙り證明し、更にセミティック及びインドゲルマニア系言語にも存する、同一の發達の明白な殘影を指摘してゐる。Jahrbuch f. Ps.-A. II, 1910 に發表した私の短評參照。）前に掲げた夢の一つ、それの前提の部分を吾々は既に、「妾はこんな素性のも

のなんだから」と、判断した、あの夢に於いて、夢みてる本人は、欄干を越えて下りる、そしてその際兩手に花の枝を一本抱いてゐる。かうした姿は彼女に、マリア受胎告知（彼女自身マリアといふ名である）の繪にある天使が手に一本の百合の花を持つてゐる有樣、それから聖體節行列の時綠の枝を以て飾られてゐる街路を步く白衣の乙女等の有樣を、ふと思ひ浮ばせたのであるから、夢の中の花の枝は確かに性的純潔に對する一つの暗示である。然るにその枝には赤い花が一杯ついてゐて、その一つ一つは椿の花と同じだ。更に夢の續きでは、彼女の行く道の終りに、それ等の花はもはや可なり枝から落ちてしまつてゐる。その後に月經に對する分明な暗示が續く。してみると、百合のやうに、且つ純潔な乙女がするやうに、抱かれてをるかの枝は、同時に、人も知る通り、いつもは白い椿を一つ持つてゐたが、月經の時には赤いのを一つ持つてゐた、あの椿姬に對する暗示でもある。同一の花の枝が（ゲエテの水車小屋の娘の歌にある「乙女の花」が）、性的純潔を表出すると共に、その正反對をも表示するのである。人生を穢れなく通るのに成功したその悅びを表現するところの夢も亦やはり、二三の箇所に於いては（花が落ちる、といふやうなところで）、正反對的な思想の步み、卽ち性的純潔に對して種々の罪を犯すに至つた（小兒時代に於い

て）、といふ考へを、ちらちらと認めしめるのである。吾々はこの夢を分析してみると、明白に二つの思想の經過を區別することができる、そしてその中の慰安的な方は表面に陣取り、非難的な方はもつと深く陣取つてをるらしいが、兩方は互ひに對して正に正反對の方向を走るらしいけれども、併しそれ等の同等であるが對立的な要素は、同一の夢要素によつて表出されるに至つたのである。

論理的關係の中のただ一つにとつてだけは、夢形成の機構が非常な程度に於いて利益になつてをる。それは、類似、一致、接觸、即ち「恰かも――の如く」の關係であつて、夢に於いてこれほどにいろいろな手段を以て表出され得るものは、他に存在しない。（上卷、第二章冒頭、アリストテレスの夢判斷者の資格に關する注意參照。）夢材料の中にあり合せてをる合致、乃至は「恰かも――の如く」の場合は、實に夢形成の第一の支柱點であり、そして夢の仕事のかなり著しい一部は、そのあり合せてをるものが檢閲の反抗のために夢の中へ入つてくることのできない時に、新しくかやうな合致を作り出すことに、あつて存するのである。夢の仕事であるかの壓縮の努力は、この類似關係の表出を援助してをる。

類似、一致、共通は夢によつて集合せられ、或る統一となるやうに表出されるが全然普通のことであり、かかる統一は、既に夢材料の中にあり合せてをつたか、或ひは新しく形成されるかする。前の場合を同一化と名づけ、後の場合を混合形成と呼んでよいであらう。同一化は人物が中心問題である時に、混合形成は事物が聯合の材料である時に、應用される。併し混合形成は人物によつても亦作られる。土地や場所の事は、屢々、人物と同じに取扱はれてをる。

同一化なるものの特質は、或る共通的なものによつて結ばれてをる人物の中のただ一人だけが、夢内容に於いて表出されるのに、第二の又は其他の人物はその夢にとつては抑へられてしまつてるやうに見える、といふ事である。この他の者を蔽ひかぶせる人物は併しながら、夢の中に於いては、自分自身から又は彼のために覆ひかぶせられてをる他の人物から導き出されるところの、一切の關係や境遇の中へ立ち入る。人物にも及ぶやうな混合形成に際しては、既に夢形象の中に、それ等の人物にとつて特有ではあるが併し共通ではない、いくつもの點が存在してゐて、それで、これ等の點の聯合によつて必ず、或る新しい一つの統一、或る一箇の混合人物が現れてくる。混合そのものは種々な方法で成立され得る。或る時には、夢中の人物の外見的な容貌は或

る人物に屬するものであるのに、その名前は彼に關係ある、もつと別の人物から取られてゐる—この場合に吾々は、これはこの人、あれはあの人を意味してゐるのだ、といふ事をば、丁度、覺醒時に於ける知識と全く類似な工合で承知してゐるのである——、又、或る時には、夢形象そのものは、現實に於いては兩箇の人物に分布してゐる外見的な容貌から組立てられてゐることもある。第二の人物の參加は、彼に歸せられる身振り表情によつて、彼をして述べしめる文句によつて、又は彼が移し置かれる境遇によつて、代理させることもある。目印になる表出の後者の方法に際しては、同一化と混合的人物形成との間の鋭い區別が消失し始める。(併しかかる混合的人物の形成が失敗する事も亦、起り得る。そんな場合には、夢の場面は一方の人物に歸せられ、そして他方の人物は——普通に、一層重大な人物の方は——その傍に出てをりはするが、その外には何等關係のない者として現れる。夢みた人が例へば、「私の母もそこに居あはせました」と語る如きが、それである(シテーケル)。かういふ場合、夢内容のかやうな要素は象形文字の發音のためではなく、或る他の符號の說明のためとして用ひられてゐる、あのデテルミナティウム規定符號にでも比較すべきである。

兩箇の人物の結合を道理づける、といふのは、促すところの、共通的なものは、夢の中に表出されてをることもあるし、又は缺けてをることもある。普通には、同一化とか、混合物形成とかは、この共通的なものの表出の手數を省くためにこそ、役立つのである。甲は私に敵意を抱いてをる、乙も併しまた左樣だ、といふのを繰り返へす代りに、私は夢の中で、甲と乙の混合人物を作るか、或ひは、乙の特質を示すやうな、甲とは異つた種類の行動を以て、甲を表象するかする。かくして得られた夢中の人物は、その夢の中で、何等かの新しい接合を以て出現し來り、然る時に私は、この人物は甲と同時に乙をも意味するのである、といふ事情からして、夢判斷の當該箇所へ、兩者に共通であるところの事、即ち私に對する敵意的な關係を挿入する道理を引出すのである。かやうな方法を以て私は屢々、夢內容に對する或る全く異常なる壓縮の目的を遂げる。或る人物に聯絡してをる非常に複雜した事情の直接的なる表出を省略し得るためには、その關係事情の一部に對して同等の要求を有するやうな、もう一人の別な人物を、かの人物に竝べて發見すればよい。同一化による斯かる表出が、夢の仕事をいかにも困難なる條件の下に入れるところの、かの檢閲の反抗を回避することに對しても、どれほどに役立ち得るものか、は容易に理

解される。檢閲にとつての障礙は、材料の中に於いてその人物と結びついてをる表象に存してをるかもしれない。それで、私は或る第二の人物を見付け出す。その人物もやはり同じやうに、かの檢閲から故障をだされる材料に對して關係を有してはをるが、併しただその一部分に對してのみである。檢閲を自由には通過し得ないその點に於いての接觸が、今や私をして一箇の混合人物を作らしめる權利を持たしめる。その混合人物は兩方面に向つて、無關係的な容貌によつて特色づけられてをる。さて、この混合乃至同一化人物は、檢閲無事な者として、夢內容への採用に適當してをり、かくて私は夢壓縮の應用によつて、夢檢閲の要求を滿足さしたことになるのである。

夢の中に兩箇の人物の或る共通なものが表出されてをる場合であつても、これは、もう一つの別な、その表出が檢閲のため不可能にされる、或る匿れた共通のものを探すべき一箇の合圖であることが、普通である。この場合には、謂はば表出性の便宜上、その共通なものについて一種の轉移が行はれたのであつた。私の夢の中で混合人物が或るどうでもよいやうな共通を以て示された、といふ事からして私は正に、夢思想の中に存する、もつと別な、決してどうでもよくはないやうな、或る共通のものを推定せねばならないのである。かくの如くであるから、同一化又は混

合人物形成は、夢に於いて種々の目的に役立つ。第一には、兩箇の人物に共通なる或るものの表出に、第二には、或る轉移されてしまつた共通性の表出に、第三には併し更に、ただ單に願望せられただけの或る共通性を表現せんがために、役立つ。兩箇の人物の間に存する或る共通性を取り出さうとする願望は、屢々、その人物の取り換へと聯絡するものであるから、夢の中のこの關係も亦、同一化によつて表現される。私はイルマの注射の夢に於いてこの患者をもつと別の人と取換へようと願望してをる、即ち、この別の人はイルマがさうであると同じに私の患者であつてほしい、と願望してをる。すると、夢はこの願望を斟酌して、イルマといふ名ではあるが、それは、私が別の人についてのみ見る機會を持つたことがあつたやうな、一種の姿勢で診察される一箇の人物を見せてをるのである。伯父についての私の夢では、この取り換へが夢の中心點となつた、そして私は自分と大臣とを取り換へて、私の同僚達をば大臣が取り扱ひ且つ判斷すると同じやうに、ひどく扱つてゐる。

凡ゆる夢は自分自身を取り扱ふものである、といふ事は、私の經驗するところであり、そしてそれには一つの例外をも私は見出したことがない。夢は絶對に主我的である。夢の中に私の我で

なく、ただ或る他人が現れる場合があつても、私は安んじて、私の我が同一化を經てその人物の背後に匿れてをるのである事を、認定してよいのである。私は私の我を補つてよい。又、私の我が夢の中に現れる場合には、その我の現れてをる境遇は、私の背後に或る他の人物が同一化によつて潛んでゐる事を、私に敎へる。かかる場合には私は夢判斷に當つてこの人物に附屬してをる或るもの、卽ち蔽匿されてをる共通のものを、私自身へ移さねばならない。私の我が他の幾人もと竝んで現れる夢もある。是等の幾人かの人物は、同一化をほごしてみると、やはり私の我である事が暴露する。その時私は、私の我に對して、この同一化された手續からして、檢閱がそれを採用するのに反對した、或る表象を結合させてみなければならない。かやうな譯で、或る夢に於ける私の我は幾通りにも表出される、或る時には直接に、或る時には他の人物との同一化の手續によつて。幾多のかやうな同一化を以て、一つの異常に豐富な思想材料は壓縮せられるのである。夢に出現する幾人かの人物の中のどれの背後に私の我が探されねばならないのか、について、疑ひがある場合には、私は次のやうな規則を守る。卽ち、私が睡眠中に感ずる或る情念に支配されてをるやうな、夢の中の人物が、私の我を潛めてをるのである、と。（或る夢に於いて元來

の我が幾通りにも現れる、又は種々なる姿となつて出現する、といふ事は、要するに、それが或る意識的な思想の中に於いて幾通りにも、且つ種々な箇所に、或ひはもつと別な關係を以て含まれてをる、といふ事に較べて、より一層不思議な事柄ではない。例へば、私がどんな健康な子供であつたか、それを、私が追想する時には、といふ文句に於いてのやうに。）

同一化の解決は、人物の場合よりかも、固有名詞を以て示された土地の時に、なほ一層透明に作られる。この時には、夢の中で威力を振ひすぎる我によつての妨害がないからである。私の羅馬に關する夢の一つに於いて（第五章、第二節、「夢源泉としての幼時的のもの」參照。）私の居る土地は羅馬といふ名であるが、私は或る街角で獨逸語で書いた澤山の貼紙を見て驚く。この後の事件は一箇の願望實現であつて、私に直ぐプラーグ市を思ひつかせる。願望そのものは、今日では私はもう征服してしまつてをる、青年期の獨逸國民黨主義時代から發してゐるかもしれない。私があの夢を見た頃に、プラーグ市で私の友人と會合する期待があつた。だから、羅馬とプラーグとの同一化は、一つの願望せられた共通性によつて説明される。私は友人とプラーグに於いてよりも、寧ろ羅馬に於いて會ひたかつた。この會合のためには、プラーグと羅馬を取り換へたか

つたのである。

混合形成を作る可能性は、夢に對し屢々或る空想的な風姿を與へる原因の中で、最上位に立つてをる。この可能性によつて夢內容の中へ、決して知覺の對象ではあり得なかつたやうな要素が輸入されるからである。夢に於ける混合形成に際しての心理的經過は、明らかに、丁度吾々が覺醒時に於いて半人半馬のケンタウルや、或ひは龍を表象したり、又は描いてみたりするのと、同一である。その相違はただ次の點にある。卽ち、覺醒時に於ける空想的創作に際しては、その新規な形成物の豫め意圖せられた印象そのものが規準を與へるものであるのに對して、夢の混合形成は、その形體構成の以外にある一つの契機、卽ち夢思想に存する共通的のものによつて、決定される。夢の混合形成は非常に複雜なぐあひに行はれることがある。最も技巧の無いやり方では、或る一つの事物の特性のみが表出せられ、そしてその表出は、それが或るもつと別の對象物にとつても亦妥當してをるのだ、といふ認知を伴つてをる。それよりもつと丁寧な技巧は、一方の對象物と他方の對象物の特徵を結合して、一つの新しい形象となし、そしてその際に、その兩つの對象物の間に實際に存するかもしれない類似點をば巧みに利用するのである。かくて出來た新

形成物は、全然奇妙なものとなつてをるか、或ひは空想的にとてもうまく成功したやうに見えるかするが、それは、その組立ての際に材料と機智が影響する次第による。一つの單位に壓縮されるべき筈の、幾つかの對象物が、餘りにも異種的のものである時には、夢の仕事は、一つの比較的明瞭な中心へ幾つもの比較的不明瞭な變容の附着した混合形成物を作り出すことで、滿足する場合が屢々である。かかる場合、一箇の形象への結合は謂はば成功したものでない。兩方の表出が重なり合つて、そして、何か、目に見えるいくつかの形象の爭ひ、とでも言つたやうなものを生み出すのである。それは例へば、箇人的な知覺形象によつて或る一つの概念を形成しようとするやうな時に、繪圖を書くと、これと似た表出に達することがある、のと同じやうなものである。

夢には勿論かうした混合形成物が蝟集してをる。二三の實例を私は、今まで分析した夢に於いて、既に報告した。なほもつと、その例を附け加へよう。患者の經歷を「花によつて」、又は「花を飾りにして」說明してをる、前出の夢に於いては、夢の中の我は手に一本の花の枝を持つてをる。その枝は、吾々が知つたやうに、純潔と同時に性的の罪を意味するものであつた。さて、こ

の枝はその外に、その花をつけてをるぐあひによつて、櫻の花をも思はせるものであつた。花そのものは、一つ一つでは椿であり、その點では全體が或る異國的な植物の印象をも與へてをる。この混合形成物のこれだけの要素に存する共通點は、夢思想から生ずる結果である。花の枝は、彼女が貰つた贈物、それによつて彼女が挑みに應ずるやうに動かされた、乃至は動かされる筈であつた、その贈物に對する諷示から組立てられた。少女時代には櫻んぼがそれであり、もつと齢をとつてからは椿の切株がそれである。異國的なものは、花の繪で以て彼女の寵愛を得ようとした或る方々旅行をしたことのある博物研究家への、一つの暗示である。もう一人の女患者は夢の中で、海水浴場の脱衣場と田舍の屋外の便所と吾々の都會の住宅にある屋根裏の部屋とから、一つの中間的な物を作つた。そのうち、初めの二つの要素にとつては、人間が裸體になるのと、露出するのとに對する關係が共通である。そして第三の要素とそれが組合せられてをることから して、(彼女の小兒時代には)屋根裏の部屋も亦、露所の場出であつた事が推定される。(或る男は二つの場所から混合された一つの場所を夢にみたが、その二つの場所は、「治療」(保養)の行はれる處であつて、即ち、一つは私の治療室、もう一つは彼がそこで初めて彼の妻と知り合つた會館であつた。)——

別の女患者は、兄が彼女に鹽漬の鰊をご馳走する約束をした後で、この兄の夢をみたが、兄の兩脚には黑い鰊の粒が一面についてゐた。道德的な意味に於ける「傳染」と、兩脚を黑いのでない、赤い斑點が一面についてをるやうに見えしめた小兒時代の吹出物についての記憶と、この二つの要素が、ここでは鰊の粒と結び合つて、「彼女が兄から受けたもの」の或る新しい概念を作つたのである。人間の身體の部分は、この夢にあつては、對象物の如く取扱はれてをるが、それは其他普通の夢に於いても左樣である。（フェレンチが報告してをる或る夢の中にも、一つの混合形成物が出てゐた。それは、一人の醫者と一匹の馬から組立てられ、その上寢衣のシャツを身につけてゐる。分析してみると、この三つの要素の共通點が判然となつたが、寢衣のシャツはこの夢を見た女が父について小兒時代に經驗した或る光景への暗示であつた。三つともに、彼女の性的好奇心の對象物と關係してなる。彼女は小兒であつた頃、子守女に時々軍隊の種馬所へ連れて行かれ、そこで彼女は——その頃には未だ何の防止もなく——彼女の好奇心を滿足させる機會を持つたのであつた。）

私は前に夢は矛盾、對立、「否」といふものを表現するのに、何の手段をも持つてゐない事を、主張して置いた。今、初めて私はこの主張に矛盾しかかつてゐる。これは「對立」だと約言され

るやうな場合のうち、一部分は、吾々が既に觀察したやうに、簡單に同一化によつて、即ち、その對立に對して、取り換へ、代りに置くことを結びつけ得るならば、表出されるのである。これについては、吾々は繰り返へし實例を擧げて置いた。夢思想に於ける對立の他の部分、それは「逆に、反對に」といふやうな範疇に入る部分のものは、次の如き注目すべき、殆ど機智的と名づけられるべき方法を以て、夢の中にあつて表出されるに至る。「逆」はそれ自身では夢内容の中へ入つて來ない、それが材料の中に存在してゐる事が現れるのは、既に形づくられた夢内容のうち、何か他の理由からして手近かにある一つの要素が——謂はば追補的に——逆にされる事によつてである。この經過は記述するよりも、說明する方が、容易い。かの「上り下り」の美しい夢（上卷、第四章、第一節參照）に於いて、昇降の夢中表出は、夢思想中の原型、即ちドウデーのサッフォーの冒頭場面とは、反對になつてゐる。この場面での昇降は初めは容易で、後に益々難儀となるのであるのに、夢の中では、初めは難儀で、後に容易である。兄弟に關係する「上」と「下」も亦、夢の中では逆に表出されてをる。これは、逆又は對立の或る關係を指示するものであつて、その關係は、夢思想中の材料の二つの要素の間に存し、そして吾々はこれを、この夢をみた

男が小兒時代の空想の中では、彼は自分の乳母によつて背負はれてゐるのに、ドゥデーの小說の中では、主人公がその愛人を背負つてゐる、といふ事實の中に發見したのであつた。この章の第七節、第五例に述べるM氏に對するゲエテの攻擊、の私の夢も亦、一つのかやうな、「逆」を含んでをる。そしてそれは、その夢の判斷に到達し得るに先だち、先づ整形されねばならないものである。夢の中でゲエテが或る若い男M氏を攻擊した。併し夢思想が含んでをるところの現實にあつては、私の友人である一人の著名な男が、或る無名の著者から攻擊されたのであつた。夢の中で私はゲエテの死去の月日から時間を教へてゐるが、現實では、時間の計算は別の痲痺患者の生年から發するものであつた。この夢の材料に於いて規準的である思想は、ゲエテが恰かも一箇の狂人であるかのやうに取扱はれねばならない、といふ事に對する抗議であつた、とわかつた。夢は言ふのである。「逆に、若しお前がその書物を理解しないのならば、お前の方が低能なのであつて、著者ではない、」と。逆を見せる是等總ての夢の中には、更にその上、輕蔑的な言ひ方（獨逸語の、「人に裏面を見せる、」einem die Kehrseite zeigen ――人を輕く取扱ふの意に對する或る關係が含まれてをるやうに、私には思はれる（サッフォーの夢に於ける兄弟に關する逆、參照）。――（更に、排斥され

た同性愛的な感情の動きによつて刺戟される夢の中にこそは、この逆がいかに頻々と現れざるを得ないかは、指摘しておく價値がある。）

（反對のものに變る、といふこの逆の表出は、夢の仕事の最も好む手段、極めて多面的に利用され得る手段の一つである。先づ第一には、夢思想の或る一定の要素に反對する願望實現を行はしめるのに、役立つ。これが逆であつてくれたのだつたらなあ！　といふのは、屢々、或る苦痛的な記憶要素に反對する我の關係にとつて、最もよい表現である。併し逆が全然特別に價値あるものとなるのは、檢閲の役に立つ時であつて、その際には、この逆の表出が表出されるべきものを或る程度まで歪めてしまひ、それによつて夢の了解をさしあたり全く蹉跌せしめる。それ故に若し或る夢がその意味を頑固に否定する場合には、必ずそれの顯在的内容の一定の要素に對する逆を敢て試みるがよい。さうなると、一切が直ちに明瞭となることは、稀でない。）

（内容上の逆と竝んで、時間上のそれも看過すべきでない。夢の歪みといふ一種の頻々たる技巧の本性は、事件の落着又は思想經過の結論をば夢の發端に表出し、そしてその夢の終りに於いて結論の前提なり又は出來事の原因なりをば、追補することにある。夢の歪みのかういふ技巧的手段に思ひ及ばなかつた人は、夢判斷の任務に對して途方にくれるのである。――ヒステリー症の發作は、それを見てゐる人に對してその意味を蔽匿するために、時々、この時間上の逆といふ同一の技巧を利用することがある。例へば、或るヒステリー

症の少女は、發作に際して一つの小さい小説を表出しようとしたが、それは彼女が無意識の間に、市内電車の中での或る邂逅に關聯して、自分で空想したものであつた。一人の男が彼女の足の美しさに惹きつけられ彼女が何か讀んでると、彼女に話しかける、やがて彼女は彼と一緒に行き、あらしのやうな戀愛場面を體驗する、といふやうな話。で、彼女の發作は、身體の痙攣(その際に、接吻のための唇の動き、抱擁のための兩腕の交叉)によるこの戀愛場面の表出を以て始まり、その後につづいて彼女は別の部屋へ急いで行き、一つの椅子に腰をかけ、足を見せるために着物を持ちあげ、恰かも書物に讀み耽つてゐるかのやうになし、そして私に話しかける(私に返事をするのである)。これについては、アルテミドロスの次のやうな注意を參考せられよ。「夢の話を判斷する場合には、吾々はその話を一度は初めから終りへ、もう一度は終りから初めへ向つて注目してみなければならない。」)

(實際、多くの場合に於いては、夢內容について種々なる關係に應じて幾通りもの逆を試みた後に、初めてその夢の意味を得るのである。例へば、或る若い强迫神經病患者の夢に於いては、恐れられてゐた父に對する幼兒時代の死の願望についての記憶が、次の文句の陰に潜んでをる。「彼の父は彼がそんなに遲く歸宅するので彼を罵り叱る。」併しながらこの患者に試みた精神分析的治療の聯絡と、患者に浮んで來た考へは、それは先づ、「彼は父に對し憤慨してをる、」といふ文句であらねばならない事を證明し、更にその次には、父はいつ

でも彼にとつて早すぎて（といふのは、餘りにも直ぐに）歸宅したのであつた事を證明するのである。彼としては、父は全く歸宅することとなければ、と言ひたかつたのであるかもしれない。それは父に對する死の願望と同一のことである（上卷、第五章第四節、類型的な夢、參照）。即ち、この夢をみた男は小さい子供であつた時、父がかなり長い間留守であつた際に、或る人に對し性的攻擊をやつた罪があり、そして、「いやねえ待つてなさいよ、今にお父さんが歸つてくるから！」といふ威嚇を以て罰せられたのであつた。）

＊

夢內容と夢思想との間の關係をもつと續けて辿つてみようとするならば、今や、夢そのものを出發點となし、そして夢表出の或る形式的性質は夢思想に關係して何を意味するものなるか、といふ問題を出してみるのが、最も宜しい。夢に於いて吾々の眼につくに相違ないこの形式的性質の一つは、先づ何よりも先に、箇々の夢形成物の感覺的强度に於ける、及び箇々の夢の部分又は全體的な夢の明瞭さに於ける、相互に比較して認められる相違である。箇々の夢形成物の强度に於ける相違は、吾々が——假令證據はないのであるが——現實のそれ以上であるとしたいほどの表明の銳さからして、忌々しいほどの曖昧朦朧さに至るまでの、大きな段階を包含してをる。そして

その曖昧朦朧たるや、吾々が現實界の對象物について時々知覺することがあるところの不明瞭さの程度の、いかなる程度とも、完全には比較せられないやうなものだから、吾々はこれを夢にとつて特質的なものと言つてをる。その上、吾々は或る不明瞭な夢對象物から受ける印象を、普通には、「瞬間的な」と名づけてをるが、比較的明瞭なる夢形象については吾々は、その形象は知覺に對して比較的長い間を通して持ちこたへたものだ、と考へるのである。さて、夢內容の箇々の部分の潑剌性に於けるかかる相違は、夢材料中のいかなる條件によつて惹起されるのであるか、といふ問題が生じる。

ここで吾々は先づ、或る期待に遭遇せねばならない、そしてこの期待は避くべからざるもののやうに現れるのである。夢の材料のうちには睡眠中の現實的な感覺作用も亦入り得るのであるから、人は恐らく次のやうに前提するであらう、卽ち、この作用か、又はこの作用によつて導き出された夢要素は、夢內容の中にあつて、特別なる强度によつて際立つものだ、と。或ひは又、その逆に、夢の中で全然特別に潑剌と注目を惹くやうなものは、かやうな現實的な睡眠時感覺作用に溯らせられ得るものだらう、と。私の經驗は併しながら決してこれを實證したことがないの

である。睡眠中に於ける現實的な印象（神經の刺戟など）の所産であるやうな夢の要素が、記憶から由來するところの他の要素以上に、潑剌性によつて際立つことは、本當ではない。現實といふ契機は、夢形象の强度の決定にとつては、何の甲斐もない。

更に人は、箇々の夢形象の感覺的强度（潑剌性）は、夢思想中にあつてその形象に相應する要素の心理的强度に對して或る關係を有する、といふ期待を固持するかもしれない。後者にあつては、强度は心理的價値性と一致する。最も强度の高い要素は、夢思想の中心點を形づくる最も意味ある要素に外ならない。さて、正にこの要素こそは檢閲のために夢內容の中へ大抵は採用されないことを、吾々は勿論知つてをる。併し次のやうなことはあるかも知れない、卽ち、この要素を代表してそれから發生してをるものが、夢の中に於いて、或るより一層高い强度を持ち來たし、しかもそれだからというてそのものが夢表出の中心を形づくるとは限らない。この期待も亦、夢と夢材料との比較的考察によつて破壞されるのである。夢材料に於いての要素の强度は、夢そのものに於ける要素の强度とは、何等關係するところがない。夢材料と夢との間には、事實上、或る完全なる、「凡ゆる心理的價値の代理的置換へ」は起らない。或る瞬間的に吹き消された、そして一

層强い形象によつて蔽はれてしまつたやうな、夢要素の中にこそ、吾々が唯一に、夢思想中にあつて過度なほどに勢力を揮つてゐたものの、或る直接的な產出物を發見することがあるのは、屢ばである。

夢要素の强度は別に決定されてをる、しかも二つの、互ひに獨立な契機によつて、決定されてをる。先づ、次の事は容易に理解される、卽ち、願望實現がこれによつて表現されるやうな要素は、特別な强度に表出されてをる。併し次に、分析の敎へるところでは、夢の最も潑剌たる要素からして、やはり大抵の思想經過は出發してをり、そして最も潑剌たる要素は同時に最もよく決定された要素である。それで前に經驗的に受け入れた命題をば次のやうな形を以て言ひ現すとしても、それは意味を少しも變更したものではない。最大の强度を示すものは、夢の要素のうち、それの形成のためには最も夥しく壓縮の仕事が要求されたやうな要素である、と。かく言ひ現せば、この條件と、それから願望實現の他の條件とが、ただ一つの公式を以て表現され得る、と考へてよろしい。

私が今取扱つた問題、箇々の夢要素の强度又は明瞭さの大小の原因の問題を、もう一つの別の

問題，卽ち、全體的夢又は夢の各節の相違せる明瞭さに關係する問題と、とり違へないやうに用心したいと思ふ。前者に於いては明瞭の反對は曖昧であるが、後者にあつては混亂である。勿論、兩方の段階に於いて、强度の昇降は互ひに一緒になつて現れる事は、見紛ふべくもない。吾吾に明瞭だと思はれる夢の部分は、大抵の場合、强度の要素を含み、その反對に、不明瞭な夢は强度の殆ど無い要素から組み立てられてをる。併しながら外見的に明瞭な程度から不明瞭混亂の程度までの段階が與へる問題は、夢要素の潑剌さの動搖の問題に較べると、遙かに複雜であつて、前者は後に述べるべき理由からして、未だここではそれを論議しないで置かう。箇々の場合にあたつて、吾々は次のやうな事實を認め、驚かされることがある、卽ち、吾々が或る夢から受ける明瞭さ又は不明瞭さの印象は、大體、その夢の構成にとつて何等の意味を持たず、夢材料からその一つの要素として由來してをるにすぎない。例へば私はこんな一つの夢を思ひ出す。その夢は、目を覺ました後に特別立派に構成せられ、缺目もなく且つ明瞭だつたやうに思はれたので、私はまだ寢ぼけた狀態のままで考へた、壓縮と轉移の機構には從つてゐない、寧ろ「睡眠中の空想」とでも名づけるべき、さういふ一つの新しい夢の範疇をも認めねばならない、と考へたほ

どであつた。併し立ち入つて吟味してみると、この稀な夢もやはり、凡ゆる他の夢と同じやうな裂目と跳躍をその構成の中に示してをる事がわかつた。それで私は夢空想なるかの範疇を再び捨て去つたのである。その夢の內容を整約すれば次の如くであつた。私は友人に向つて雌雄兩性の或るむづかしい、そして長い間求めてゐた理論を講釋した。そして夢の願望實現的な力が、この理論を（それは併し夢の中では報告はされなかつたのである）明瞭に且つ缺目なく見えしめてくれたのである。してみると、私が完成した夢についての一つの判斷だと考へたものは、一部であつて、しかも夢內容の本質的な部分であつた。この夢では夢の仕事が謂はば覺醒最初の思考の中へまで手を伸ばし、そして私に夢についての判斷として夢材料のうち、その正確な表出が夢の中では夢の仕事として成功しなかつた、さういふ部分を傳達したのである。これに對する完全に對照的な一例を私は或る女患者について經驗したことがある。彼女は最初、分析に必要な一つの夢をどうしても語りたがらなかつた。それは「その夢はいかにも不明瞭で且つ混亂してをるから」といふのであつた。そして最後に、幾度も妾の說明は確かではないと抗辯しながら述べたところによると、夢の中に幾人か人物が出て來た、彼女と彼女の良人と彼女の父と。そして彼女には自

分の良人が自分の父であるのか、それとも一體誰が自分の父であるのか、その他さういつたやうなことが、わからないやうな氣持がした。會談中に彼女に思ひ浮んでくる考へとこの夢を綜合してみた結果は、次の事柄は疑ひないことだと判然したのである。卽ち、夢の中心は小間使の少女などにとつてかなり普通な出來事であつて、彼女は小供を生みかけてをる、そして「一體誰が(その子の)父なんだらうか」といふ疑惑を抱くに至つた、(昔の記憶を)白狀せねばならなかつた。(これに隨伴したヒステリー症的徵候は、月經の停滯と非常な不快とで、それはこの患者の主要な病苦であつた。)夢が示した不明瞭はかういふ譯でこの場合に於いても亦、夢を惹起する材料の中の一部であつた。材料的內容の一部が夢の形を以て表出されたのである。

(夢又は夢みることの形式は、全く驚くほど頻々と、蔽匿された內容の表出に使用されるものである。)

(夢についての註釋、夢に對する外見上は無邪氣な思ひ付きの言葉は、屢々、その夢みられた事柄の一部を實に巧緻な方法で蔽ひ包むのに役立つのであるが、實は却つてそれを暴露する。例へば、夢みた人が、ここでこの夢は消えたやうだ、といふ。そして分析してみると、それが或る人物へのひそかな注意についての或る幼兒時代的記念であることがわかり、その人物は綺麗に拭き消されてゐる。又は、或る別の場合の如きも一例

であつて、これは詳しく報告する價がある。或る若い男が一度非常に明瞭な夢を見た。それは彼の少年時代の意識に殘つてゐる空想を思ひ起させるものであつた。即ち、彼は夕方何處かの避暑地のホテルにゐる、部屋の番號を間違へて或る部屋へ入ると、其處に一人の中年の婦人と彼女の娘二人が寢床に入るため着物を脫いでるところだつた。その男がなほ語り續けて言ふのには、「それから後夢に少し缺目がある。何かが缺けてをる。そして最後に一人の男がその部屋にゐて私をはふり出さうとしたので、私はその男と格鬪せねばならなかつた。」彼はこの夢が明らかに暗示してをる少年時代の空想の內容と意圖を思ひ出さうと努力したが、無駄であつた。併しながら結局吾々は次の事に氣付くのである。即ち、その求められた內容は既に、夢の不明瞭な箇所に關する言葉によつて與へられてゐるのだ、と。「缺目」といふのは、寢床に入らうとしつつあつた婦人達の××の裂目であり、「何かが缺けてゐる」といふのは、婦人生殖器の主要性質を說明するものである。この男は少年時代に於いて女の陰部を見たい知識慾に燃えた、そして女にも男の陰莖があると考へる小兒時代の性的知識を固持するより外なかつたのである。)

(もう一人の男の夢のこれに類似した幼兒記念は、やはり、全然これに似た形に包まれてをる。彼は夢みた「私はK孃と平民公園食堂へ行く」——この後に一つの曖昧な箇所、一つの中斷がある——それから私はどこかの女郎屋にあがつてゐる、そこで二人乃至三人の婦人を見たが、一人は下着とシュミーズを着てゐた。」分

析。Ｋ孃は彼自身語るところでは彼の以前の上役の娘で、妹の代役である。彼には彼女と話をする機會などは稀にしかなかつた。併し一度二人で話をした時、不意に、「お互ひに、俺は男だし、お前は女だ、と言はうとでもするかのやうに、謂はばお互ひの性的區別を悟つた」やうな話の出たことがあつた。夢に出た食堂へはただ一度だけ、彼の義兄の妹を連れて行つたことがある。これは彼にとつては全く無關心な少女だつた。もう一度は、三人の婦人に蹤いてこの食堂の入口まで案内したことがある。その婦人は彼の妹と、義姉と、それから前に述べた義兄の妹であつて、三人とも彼にとつてはどうでもよい人々ではあつたが、三人とも姉妹關係に屬してをる。女郎屋へは稀にしか行つたことがない、生涯に於いて恐らく二三回ぐらゐだらう。この夢の判斷はかの「曖昧な箇所」、「中斷」に基いて行はれ、そして彼は少年らしい知識慾を以て二三度、勿論ほんの稀にであるが、彼の二三歳年下の妹の陰部を見たことがある、といふ事を斷定した。二三日後になつて、この夢から暗示された惡戯についての意識的な記憶が、この男に浮んで來た。）

（同一夜に於ける總ての夢は、その内容から言ふと、同一的な全體にするものである。それが數多の部分に分離することや、その類合や、その數や、それ等總ては、意味深いものであつて、潛在的夢思想から來る報告の一部と解釋し得るものである。數多の主要部分から成立つてをる夢か、又は大體同一夜に屬するやうな夢の判斷に際しては、これ等の種々なるそして相次いで起る夢は、同一のものを意味し、同一の昂奮を種々なる

材料を以て表現するのである事を忘れてはならない。これ等同一性の夢のうち、時間的に先に立つものは、屢ば、より多く歪められてをり、より多く臆病であり、次に來るものはより多く大膽であり、より明瞭である。（ヨゼフが判斷した聖書に載せてある穗と牡牛についてのファラオの夢が既に、この種のものであつた。この夢は聖書によりも一層詳しくヨゼフスの本（Josephus, Jüdische Altertümer, Buch II, Kap. 5 u. 6）に報告されてをる。ファラオ王は第一の夢の話をした後で、かう言つた。「この第一の夢をみた後に私は不安になつて目を覺した。そしてこれは一體何を意味するのかしらん、と考へて見たが、そのうちにだんだんまた眠りこんでしまひ、そして今度は猶ほずつともつと奇妙な一つの夢をみたのだ、そいつは私を猶ほ一層懸念と混亂に導いた。夢の話を聞いた後で、ヨゼフは言つた。「王さま、あなたの夢は外見からいふと、なるほど二通りのものですが、併し兩方の夢はただ一つの意味しか持つてゐないのです。」）

（ユンクは「噂の心理の研究」Jung, Beitrag zur Psychologie des Gerüchtes）の中に、一人の女學生の情事を蔽匿した夢はその友達等によつて判斷を加へるまでもなく理解せられ、そしてそれの續きがいろいろ變更されて彼等によつて更に續けられるものである事情を語つてをるが、さういふ夢の話の一つに對し彼は次のやうに注意を述べた。「夢形象の或る長い系列の最後の思想

は、その系列の最初の形象の中にそれを表出しようと試みられたものを、確かに含有してをる。檢閲はできるだけ長い間この複合體をば、繰り返へし新しく行はれる象徴的な蔽匿や轉移や、無邪氣への轉向等によつて、推しのけて置くのである」(同書、第八七頁)。シェルネルは夢表出のこの特色をよく知つてゐて、彼の器官刺戟說と關聯しこれを一箇の特別なる法則として記載してをる(R. A. Scherner, Das Leben des Traums, 1861. S. 116)。「併し最後に、空想は、一定の神經刺戟から發する一切の象徴的夢形成に於いて、次の如き一般妥當的な法則を守るものである、卽ち、空想は夢の冒頭にはただ刺戟對象物の極めて緣遠いそして極めて自由な暗示だけを描く、けれどもその描寫力が盡きてしまつた最後に於いては、刺戟そのもの、乃至はその刺戟に該當する器官又はそれの機能をば、赤裸々に出してみせる。これを以て夢は、自分の器官的原因そのものを示しつつ、終りに達するのである…………。」)

(このシェルネルの法則の立派な一實證を、オットー・ランクがその著作「自から判斷される夢」の中に提供してくれた。彼が其處に報告してをる或る少女の夢は、一夜の間に於ける併し時間的にも分離された二つの夢から組立てられ、そのうちの第二の方は夢精で終つた。この夢精の夢は、夢を見た本人の參考陳述を大抵探

用しないでも、箇々の點に亙る判斷を許すものであつたし、兩方の夢內容の間に存する澤山な關係は次の事實を認識せしめ得た。即ち、第一の夢は第二のと同一のものを臆病な表出を以て表現したものであつて、その結果、第二の、即ち夢精の夢は、第一の夢の十分な解明に役立つものであつたのである。ランクはこの實例を出發點として、夢みること一般の理論にとつて有する夢精の夢の意義を研究してをるが、それは十分道理あることとである。)

夢の明瞭又は混亂をば夢材料に於ける確定と疑惑へ移して判斷することができるやうなことは、私の經驗によれば、ただ僅少な場合にしかない。私は後に、夢形成の際に作用する、今まで未だ論及されてゐない因子を發見しようとしてみるであらう。夢の强度の段階はこの因子の影響によつて本質的に左右されてをる。

或る時間の間或る一定の境遇と場面に固執するやうな夢には、多く中斷が現れる。この中斷は次のやうな言葉を以て說明される、「その後では併し、それが同時にどこか別の場所であつて、これこれの事が起つたやうに思はれた」と。かやうな工合に夢の主要な運びを中途で中斷し、そしてその運びが暫くした後に再び續けられるやうにするものは、夢材料の中を探してみると、一箇

の従屬的な文章として、一箇の挿入された思想として存してをるものであることがわかる。夢思想中に存する條件は、夢の中では、同時性によつて表出されるものである（即ち、若し――の時には）。

夢の中にあのやうに頻々と現れ、そして殆ど恐怖に近いところの、あの妨害された運動の感じは、何を意味するのであるか？　歩かうと欲するのに、その場から離れられない、或ひは、何かやらうとすると、絶えず邪魔に突きあたる。汽車は今しも動かうとしてゐる、そしてそこまで行きつくことができない、或ひは何か侮辱を受けてその仇を返へさうと手を上げるが、手が動かない、等々。吾々は既に露出の夢に於いて夢中のかかる感じに遭遇したのであつたが、併し未だその判斷を眞面目には試みてゐない。睡眠中には今述べたやうな感じによつて目立つてくる動力の痲痺が存在するのである、と答へて置けば、便宜ではあるが、それだけでは併し十分でない。吾吾はかう質問し得る、然らば何故に吾々はかかる妨害された運動を絶えず夢みることをしないのであるか？　そして吾々は次の事を期待し得るのである。睡眠中にいかなる時でも呼び起されるこの感じは、表出の何等かの目的に役立つものかもしれない、そしてかかる表出を求める夢材料

中の欲求によつて喚起されるのかもしれない、と。

何一つ成就しない、といふ事は、夢の中で必ずしも感じとしてばかり現れるのではなく、簡單にただ夢內容の一部として現れることもある。私はさういふ一つの場合を、この夢欲求の意味を明らかにするために、特別に適當してをる、と思ふ。私はここに一つの夢を手短かに報告する。その夢に於いて私は不誠實の罪を被せられてをる。「場所は或る私立療養所と數多の他の建物との混合である。小使が現れ、私を何か取調べのために呼ぶ。夢の中で私は知つてゐた、何かが紛失してをるんだ、そして取調べは、その紛失したものを私が所持してをるといふ嫌疑のために、行はれるのだ、と。分析してみると、取調べは二樣の意味に取られ、醫者としての診察もそれに含められてをる事がわかるのだが、私は自分の無罪と、この家に於ける自分の顧問的職分の意識を抱きながら、落ちついてその小使と一緒に行く。或る部屋の扉口で別の小使が吾々を迎へ、そして私を指しながら言つた。この人を君は伴れて來たのか、この人は無論立派なお方だ、と。然る後私は小使をつれずに一つの大きな廣間へ入つた。其處には機械が置いてあつて、兇惡な刑罰道具を備へた地獄を聯想せしめた。或る道具に同僚が一人くくりつけられてをるのが見える。この同

僚は私のことを氣にかける十分な理由があるべきだつたのに、彼は私を顧みなかつた。然る後、私はもう行つてもよい、とのことだつた。ところが私の帽子が見つからない、それでどうしても私は行くことができない。」

私が正直な男と認められ、そして行つてもよい、といふのは、明らかに、夢の願望實現である。してみると、夢思想の中に凡ゆる材料があつて、それがこれに對する反對を含んでをる。私が行つてもよい、といふのは、私の冤罪の徵である。してみると、夢の終りに當つて、私が行くのを引留める一つの出來事が現れるとすれば、抑壓されてゐた反對の材料がこの動きによつて力を發揮するのである、と推論しても敢て不當ではない。私が帽子を見つけない、のはそれ故、お前は決して正直な男ではないぞ、といふ事を意味する。夢の成就不能は反對矛盾の一つの表現であり、一つの「否」である。それから考へれば、夢は否を表現することはできない、と言つた以前の主張は訂正されることになる。（完全に分析すると、次のやうなものの介在によつて、或る小兒時代の體驗に對する一つの關係の存在してをることが、判然してくる。――その黑奴は自分の責任を果した、黑奴は行つてもよい。それから次には、戲談の質問がある、「その黑奴が責任を果した時には、幾歲であるか？

一歳だ。そんなら行つもよい。」——私は生れつき非常に縮れた黒い髪の毛だつたので、私の若い母は私を小さな黒奴と言つた、といふ話である。——私が帽子を見つけない事は、やはりその時代の體驗であつて、それが幾つもの意味に置換へられてをる。私の家の女中は物を藏つておく名人で、私の帽子を匿しておいたことがあつた。——この夢の背後には猶ほ、死についての悲しい考への拒否も亦、潜んでゐる。「私はまだまだ私の責任を果してはゐない、私はまだ行つてはいけない。」——生と死のことは、その少し前にあつたゲエテと神經痲痺症患者についての夢の中にもあつた。）

運動の成立不能がただ單に境遇としてばかりでなく、感じとしても含まれてをる他の幾つかの夢に於いては、運動妨害の感じによるその反對は、或る反對意思によつて抵抗されてをる一つの意志として、もつと力強く表現されてをる。してみると、運動妨害の感じは或る意志爭鬪を表出する。後に吾々は、睡眠中に於けるこの動力的痲痺こそは、夢みてる間の心理的經過の基本的條件に屬するものである事を、聞き知るであらう。さて、意志とは動力的軌道に移された衝動に外ならない。そして睡眠中にこの衝動が妨害されたと感じるのが確實である、といふ事實は、全體の經過をば、意望とそれに對立されてをる「否」の表出にとつて、非常に適切ならしめる。恐怖

についての私の說明を理解してくれるならば、意志妨害の感じは恐怖に甚だ近いものであり、そして夢の中に於いて非常に屢々それと結びついてをる事も、容易に理解されるのである。恐怖は無意識から發しそして前意識によつて妨害されるリビド的衝動である。從つて、夢の中に於いて妨害の感じが恐怖と結びついてをる場合には、中心となるものは、リビドを展開せしめる能力のあつた或る意欲、卽ち或る性的昂奮であるに相違ない。

（夢の間に頻々と浮びあがる判斷、「これは無論ほんの夢なんだ」といふ言葉は、何を意味するか、そして如何なる心理的力に歸屬せしめられるものであるか、その事を私は後に別の處で探求するであらう。ここには前以て、それは夢みられた事柄の價値を引き下すことに役立たせられようとするものである、とだけ言つておく。或る內容が夢そのものの中に於いて「夢みられたのだ」と言はれるやうな場合、それによつて何が表現せられるのか、といふ、これに近い、興味ある問題、卽ち「夢の中の夢」の謎を、シテーケルは二三の確信的な實例の分析によつて、私のと類似した意味を以て解決してをる。夢の中の所謂「夢みられた」部分は、やはり、價を引き下され、その現實性を奪はれる、とのことである。「夢の中の夢」から覺醒した後に、續いて夢みられるもの、それを夢願望はその消し去られた現實の代りに置かうとする。であるから、その「夢み

られた」と稱せられるものは、現實の表出、現實の記憶を含み、反之、續けられる夢の方は、單に夢みる人によつて願望された事柄の表出を含む、と認定してよい。從つて、「夢の中の夢」へ或る內容の包含されるのは、さういふぐあひにこれは夢だと稱せられた部分が、起らないであつてくれたらば、といふ願望に匹敵せしめられるのである。語を換へて言へば、或る一定の出來事が夢の仕事そのものによつて或る夢の中へ加へられる場合には、これは、この出來事の現實性の最も判然たる實證、それの最も強い肯定を、意味する。夢の仕事は夢みることとそのことをば拒否の一形式として利用し、そしてそれを以て、夢は一箇の願望實現なり、のあの見解を證據立ててくれるのである。）

第四節　表出可能性の顧慮

吾々は今まで、夢が夢思想の間の關係を如何に表出するか、の吟味に從事してきたが、その際に併し、夢材料は夢形成の目的のために一體如何なる變化を蒙るものか、といふそれ以外の課題へも、いろいろ溯つてみたのであつた。今や吾々は知つてゐる、夢材料はその諸關係を大部分消失して或る壓縮を受ける、その代り、それと同時に、その要素の間に於ける强度の轉移はこの材料

の或る心的價値の置換へを强制するものであることを。吾々が考へてみたこの轉移は、或る一定の表象に對する、それとは別であるが聯想の中に於いて如何やうにかそれに接近してをる他の表象による補充である、と證明された。そしてかくの如き方法で、二つの要素の代りに、それ等の間に存する或る中間的な共通のものが、その夢の中へ採用されるに至つて以て、轉移は壓縮作用のために役立つものとなる。轉移のもつと別な種類については、私はまだ指摘してゐない。併し私の示した分析からして、さういふ一種の轉移が存在すること、そしてそれはその當該思想に對する言語上の表現の取換への中に示現することを、讀者は知つてをる。兩者いづれの場合にも、或る聯想連鎖に沿うた轉移が中心問題なのではあるが、同一の經過が相異れる心理的方面に起り、そしてこの轉移の結果は、一方では一つの要素が他の要素によつて代理されるのに、他方では一つの要素がその言葉の表現を別のに取換へる、といふことになるのである。

夢の形成に際して現れる轉移のうち、この種のものは、啻に大きな理論的興味ある計りでなく、更にまた、夢が變裝するのに用ひる空想的な不合理性の外見を解說するのによく適當するものでもある。轉移は普通に、夢思想の抽象的で且つ色彩のない表現の代りに、形象的でそして具

體的な表現を作る、といふ方向に向つて行はれる。この代用の利益、從つてまた、意圖は、明瞭である。形象的なものは、夢にとつて、表出可能的であつて、抽象的な表現だつたら、その夢表出に對し、例へば新聞の政治的社説が挿繪に對して面倒を與へるであらうのと、丁度相似た面倒を與へるやうな、さういふ一つの境遇に適合するのである。併しこの取換へに於いては、表出可能性ばかりでなく、壓縮と檢閲の關係方面でも利益がある。抽象的に表現したのでは使用できない夢思想が、形象的な言葉に作りかへられてこそ、この新しい表現と爾餘の夢材料との間に、以前よりも一層容易に接觸と同一點が生じる、そしてかかるものは、夢の仕事がこれを必要とし、それ等が存在してゐない場合にはそれを創作するものなのである。なぜなら、具體的な表現はその發達の結果として、凡ゆる言葉に於いて概念的な表現よりも一層引きかかりの多いものだからである。夢形成の際に、分離されてゐる夢思想をば、その夢の中で、できるだけ簡潔なそして統一的な表現に還元しようと努める中間仕事がある。その中間仕事の大部分は上述の方法で、即ち、箇々の思想の適當なる言葉上の變形によつて、行はれるものである事は、想像され得る。その表現が何か他の理由からして確定してをるやうな一つの思想は、この際に、他の思想の表現可能性

に對し、分割的に且つ選擇的に影響を及ぼすのであるが、これは恐らく、丁度詩人の仕事に於けると似た工合に、初めから行はれる。一つの詩が韻をふんだ形で作られる場合には、第二番目の韻の行は二つの條件に縛られてをる、即ち、その行は自分に割當られた意味を表現しなければならないし、そしてその表現は第一の韻の行に對し同じ響を見つけねばならない。最も立派な詩は確かに次のやうな詩である。その詩では、韻を見つけようとした思惑などには氣付かれない、そして兩つの思想が初めからして相互の感應によつて言葉上の表現を選び、その表現は一寸手を加へると同じ響を生ぜしめる、やうな詩である。

二三の場合に於いては、かの表現取換への作用は夢思想の中の一つ以上のものに對して曖昧に表現を與へるやうな、言葉の組み合はせを見つけさせ、それで以て、夢の壓縮にとり猶ほ一層簡潔な方法で役立つことがある。であるから言葉の機智の全領域が夢の仕事にとつては役に立つものとなる。夢形成の時に言葉に割當てられる役割を不思議に思つたりしてはいけない。多種多様なる表象の結合點としての言葉は、謂はば、一種の豫定された多種多様的意味であつて、神經病患者(强迫表象・恐怖病)は言葉がかく壓縮と變裝に對して提供する利益をば、夢に劣らず憚るとこ

ろなく利用してをる。(「機智と無意義に對するその關係」Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten, 1905 及び神經病的徴候の解釋に於ける「言葉の橋」、參照。)夢表象が表現の轉移によつて利益を受ける事は、容易に示される。無論、意味明白な二つの言葉の代りに意味の曖昧な一つの言葉が置かれる場合には迷ひを惹起するし、日常にあるやうな率直な表現法の代りに或る比喩的な表現法が代用されれば、吾々の理解を妨げる。殊に夢は次の事を述べ立てないのであるから、左様である。卽ち、その夢によつて持ち來らされた要素が果して言葉通りに判斷されるべきであるか、それとも轉化された意味に於いて判斷されるべきであるか、それ等要素が果して直接にその夢材料に關係せしめらるべきであるか、それとも插入せられた言ひ方の媒介によつてそれに關係せしめらるべきであるか、それを夢自身は決して說明してはくれないのである。

(一般に凡ゆる夢要素の判斷に際して、次の事は疑問的である、卽ち果してその要素は、(一)、積極的な意味にか、それとも消極的な意味にとらるべきであるか——反對的關係、(二)、歷史的に判斷すべきであるか——殘存記憶として、(三)、象徵的にか、(四)、又はその要素の評價は言葉の文句から出發すべきであるか、は疑問的である。かく多樣なる判斷性あるに拘らず、吾々は言ふことが出來る、勿論理解されることなどを目ろんで

はゐないところの、夢の仕事たる表出は、例へば古代の象形文字を書く人がそれを讀む者に强ゆる面倒に較べると、表出の飜譯者に對して何等それよりも大きな面倒を强ゆるものではないのである、と。）ただ表現の曖昧によつてのみ組立てられてをる夢中の表出についての實例を、私は既に數多引用しておいた。（イルマの注射の夢の中の「口がうまく開く」。少し前に擧げた夢の中の「私はどうしても行くことができない」等々。）さて、私は一つの夢を報告しよう。これを分析してみると、抽象的思想の具象化が普通以上に大きな役割を演じてをる。この種の夢判斷が如何に象徴に基く判斷と相違するかは、ここでもやはり鋭く見定められる。象徴的な夢判斷では、その象徴を解く鍵は判斷者によつて任意に選擇されるのであるが、言葉の變裝に基く吾々の場合にあつては、これ等の鍵は一般周知のものであつて、確定的な言葉の練習によつて與へられてをる。適當な機會に於いて正しい思ひ付きをうまく浮ばせ得るならば、吾々はこの種の夢を、その夢を見た本人の陳述には賴らないでも、全部か又は部分的にか解釋をすることができる。

私の友人である一淑女が夢を見た。「彼女はオペラ劇場に來てゐる。ワーグネル歌劇の演出で、朝の七時四十五分まで續いた。平土間の前部にも後部にも、卓子が置いてあつて、其處で人々が

食事をしたり酒を飲んだりしてをる。新婚旅行から歸つたばかりの彼女の從兄弟が新妻と一緒にその卓子の一つに坐つてをり、彼等の傍には一人の貴族がゐる。この貴族については、新婚の妻が彼を新婚旅行から伴れて來たのだ、といふ。しかも、例へば帽子をその旅行から持つて歸る、とでもいつたやうに、全然におつぴらにである。前方平土間の眞中に一つの高い塔があり、その塔の上部には鐵の格子をめぐらしたプラットフォームがついてゐる。その高い處にハンス・リヒテルの容貌をした樂長がゐて、格子の背後を絕えずあちこち步き廻り、恐ろしく汗をかきながらこの場所からして、下の塔の土臺のまはりに整列したオルケストラ團を指揮してをる。私の友人の淑女自身は（私とも知合ひの）或る女友達と一緒に棧敷の一つに坐つてゐる。彼女の妹が平土間から彼女に炭の大きな一片を渡さうとするが、その理由は、そんなに長くかかるとは知らなかつた、かあいさうに、さぞ凍えることだらう、といふのであつた。（それは、棧敷はその永い演出の間暖めねばならないのだ、とでもいふかのやうである。）」

この夢は甚だ馬鹿げてはをる、けれども面白い局面に作られたものだ。平土間の眞中に塔があつて、其處からして樂長がオルケストラを指揮する、就中併し、妹が渡さうとする炭の如きは！

私はこの夢については故意に何等かの分析を求めることはしなかつた。夢を見た本人の個人的な事情を少しは知つてゐたものだから、夢のうちの幾部分かを獨立に判斷することが、私にできたのであつた。私は彼女が或る音樂家に對して大變同情を有してゐたことや、その音樂家の出世が精神病のために時期到來せずして中斷されてしまつたことなどを、知つてゐた。それであるから私は、平土間の塔なるものをその言葉通りに受取らうと決心した。さうしてみると、彼女がハンス・リヒテルの代りに置いてみようと願望したらしいその音樂家は、オルケストラ團の他の團員を、塔の如く高く、凌駕してをる、意味は明らかであつた。この塔は同格をつけた一つの混合形成物だ、と言ふべきである。塔の土臺をみせることで、塔そのものはこの音樂家の偉大さを表出し、音樂家がその背後を恰かも囚人のやうに、或ひは檻の中の獸のやうに（不幸なこの人の名に對する暗示——音樂家の名は Hugo Wolf——狼であつた）、走り廻る上の方の格子を以て、この人のその後の運命を表出してをる。「狂人の塔」といふのが、恐らくは、兩つの思想を結合せしめることができた言葉であつたかもしれない。

夢の表出方法がこんな工合に發見されてしまつた後に於いては、私は第二の外見上の馬鹿らし

さ、即ち、妹が彼女に渡すところの炭といふものを、同一の鍵を以て解決しようと試みてもよかつたわけである。「炭」は「祕密な戀」を意味するものに相違なかつた。

「誰も知らぬ、祕密なる戀の如くに、熱くは、いかなる火も、いかなる炭も、燃え得ざるなり。」

彼女自身と彼女の女友達とは、坐つたままでゐた。まだ結婚する未來の期待を有する妹が、彼女に炭を渡すのであるが、それは、「そんなに長くかかるとは知らなかつたから」である。何がそんなに長くかかるのであるかは、夢の中で言はれてゐない。何か現實の話としてならば、吾々はそれを補充して、演出が、と言ふであらう。併し夢としては、その文章それ自身だけに眼を留め、そしてそれを曖昧であるとなし、それに、「彼女が結婚するまで」と補充してよいのである。次に、「祕密な戀」といふ判斷は、新妻と一緒に平土間に坐つてをる從兄弟の點出により、及びこの新妻に配合せられたおつぴらな戀愛關係の點出によつて、支持せられる。祕密な戀とおつぴらな戀との間の對照、新妻の情火と冷淡との間の對照が、この夢を支配してをる。その外に、前に於いても竝びにここに於いても、「高い處に居る人」が、貴族と、あの大きな希望を當然有する音樂家との

間に於ける聯絡語として、存在してゐる。

以上の所論によつて吾々は終に、夢思想が夢內容へ轉變するに當つて低くは評價すべからざる參加をなすところの、第三の一契機を發見した。それは、夢が利用する特有なる心的材料に存する表出可能性への顧慮、といふ事である。そしてそれは大抵の場合、視覺的形象によつて行はれる。本質的な夢思想への從屬的な關聯物は種々ある。その種々ある中でも、或る視覺的表出を許すやうなものが、特に選まれるのであらう。そして夢の仕事は骨惜みすることなく、先づ第一に取りつきにくい思想を或る別な言葉の形に鑄直すのであるが、その言葉の形は、ただ表出を可能ならしめ、そして板挾みになつた思考の心理的困惑をなくなしてくれるものでさへあるならば、假令普通には使はれない形であつても、かまはないのである。然るに思想の內容をかく或る他の形に注ぎ入れる作用は、同時に、壓縮の仕事にも役立つことができて、或る別の思想との引きかかりを作ることもできる。そしてかかる引きかかりは、この作用がなかつたなら存在しないかもしれないのである。この別の思想自身は、かかる引きかかりに迎合する目的からして、中途で、自分自身の元來の表現を變更してしまつてをることもあるであらう。

（ヘルベルト・ジルベレルは、夢形成の際に思想が形象に置換へられる經過を直接に觀察し、從つて夢仕事のこの一契機を單獨に研究することのできる、一つのよい途を示してくれた。彼が疲勞と寢惚けた狀態に於いて何かを思考してみようと努力した場合には、その思想がするりと逃げてしまひ、そしてその代りに一つの形象が現れ、それの中にかの思想の代償を認識することができたやうな場合が頻々と起つた。ジルベレルはこの代償を「自動象徵的のもの」と名づけたが、それは全然には合目的的な呼び方でない。私はここにジルベレルの著作から二三の實例を引用しよう。それ等の觀察された現象には或る種の特色があるから、私は猶ほ別の箇所に於いて再びこれに論及するであらう。「實例一。私は或る論文の中で或るぎごちない一節を改訂しよう、と考へてゐるんだ、といふことに思ひ及ぶ。象徵――私は自分が一本の材木に鉋をかけて滑かにしようとしてをるのを見た。」「實例五。私は自分が丁度やらうと考へてゐる或る形而上學的研究の目的を、自分に思ひ浮べようと努める。私は自分でこんなぐあひに考へる、この目的は次の點に存するのだ、卽ち、人は生存の根柢を探求しつつ、益々一層高い意識の形式或ひは生存層へ向つて、かき分けて進むものだ、といふ點に。象徵――私は一本の長いナイフを一つのお菓子の中へぐいと切り入れる、丁度それから一片を取らんがためのやうに。判斷――ナイフを以ての私の動作は、今の話に出た、その「かき分けて進む」を意味してをる…………。象徵の基礎の說明は次の如し。食卓で菓子を切つて差出す役目が時々私にあたることがある。

長い曲り易いナイフでそれをやるには、若干の心づかひが要る。殊に切つた部分を綺麗に取りのけることには、或る面倒が結びついてゐる。ナイフは用心深く菓子のその部分の下へ押し込められねばならない(根柢に到達するために、徐々と「かき分けて進む」のである。)猶ほその外にも、この形象には象徴がもつとある。即ち、象徴たる菓子はドボスといふ菓子であつた、それをナイフで切るには、種々の層を突き通さねばならないのである(意識と思考の層に該當する。」「實例九。私は或る思想を進行させる中に聯絡を失ふ。これを再び見出さうと骨折るが、併し結合點が全く脱落してしまつてをるのを、認識せざるを得ない。象徴——文書の一部、それの最後の數行が脱落してしまつてをる。」)

機智の文句や、引用句や、歌謡や、諺などが教養ある人士の思想生活に於いて演じてをる役割を考へると、その種の變裝物が夢思想の表出にとつて異常に頻々と使用される筈であるとしても、それは、完全に期待通りの事であらう。例へば、てんでに別々の野菜を滿載した車は、夢の中で何を意味するか？「菜つ葉も蕪靑も、」即ち「混雜」の願望對立であつて、從つて「無秩序」を意味する。私はこの種の夢がただ一回しか私に報告されてゐないのを、不思議に思ふ。(この種の表出には實際その後二度と私は出會つたことがないので、この判斷の當然なるか否かについては、私は迷ふ

やうになつた。」一般に知られてゐる諷示や言葉の代用に基いて、或る一般妥當な夢象徴が形成されたのは、ただ僅少な材料に對してのみである。併し又、夢のこの種の象徴性の大部分は、神經病患者、傳說及び民間慣習と共通である。

實際、一層正確に注目してみると、夢の仕事はこの種の代用を以て一般に何等獨創的な成績を擧げるものではない事を、吾々は認めざるを得ない。檢閲の故障を蒙らない表出可能のこの場合に、夢の仕事が目的を到達するためには、旣に無意識的な思考に於いて步かれてをる道を辿るにすぎないのであつて、その不都合な材料を變裝するため特に選び用ひる轉化は、機智や諷示として意識され得るものでもあり、且つ神經病患者の總ての空想を充たしてをるやうなものである。ここまで考へてくると、突然、かのシェルネルの夢判斷に對する或る理解が開けてくる。私は別の箇所でこの判斷の正しい核心を辯護しておいた。自分の身體を空想的に取扱ふことは、決して夢にのみ特有なものであつたり、又は夢にとつて特質發揮的のものであることはない。私の分析が示したところに據ると、あれは、神經病患者の無意識的思考の中に於ける正規的な現象であつて、性的好寄心に溯るものである。そして生長しつつある青年や處女にとつて、この好奇心の對象とな

るのは、異性の、併しまた自分と同性の者の、生殖器なのである。併しシェルネルとフォルケルトが全く肯綮を得た指摘を行つてをるやうに、この身體についての象徴化に利用せられる唯一の表象範圍が、家屋であるとは限られない――夢に於いても、又、神經病患者の無意識的な空想作用に於いても、左樣ではない。私は或る患者達を知つてゐる。彼等は無論、身體と生殖器の建築的な象徴（そして確かに性的興味は外部的生殖器の範圍以上に亙つてをる）を保留してをり、彼等には角柱や圓柱は脚を意味し（舊約書の「雅歌」に於けるやうに）、門を見ると彼等は必ず身體の裂目のどれかを考へる（「穴」）、又、水道設備を見ると彼等は必ず尿器官を思ひ出す、等々、である。が併し、それと同じく好んで、植物界や臺所の表象範圍が性的形象の潛伏所に選まれる。（これについての豐富な參考材料がフックスの「繪入風俗史」補遺三卷に載せてある、Ed. Fuchs, Illustr. Sittengeschichte, 3 Ergänzungsbände. Privatdrucke bei A. Langen, München）。前者については、極めて古い時代の人々の空想的比喩の沈澱したものとして、言葉の慣用法が豐富な先例を與へてをる（雅歌の中の、主の「葡萄畠」とか、「種子」とか。處女の「庭」とか。）臺所の裝置に對する外見上は無邪氣な諷示を以て、性的生活の極めて醜惡な、竝びに極めて親密な箇々の事柄が、思考もせられ、夢み

られもする。そして若し吾々にして、日常的なもの、目に立たないものの背後に性的象徴が、それを最もよき潛伏所として、匿れてをることができるのである、事を忘れるならば、ヒステリー症の徴候作用は正に判斷し得ないものとなる。神經病の小兒が血や赤い肉を見たがらなかつたり、玉子や素麵を見て嘔吐を催したりする時、蛇を見て恐がるといふ人間にとつて自然な恐怖が神經病患者に於いては途方もなく昻揚する時、それは、立派に性的なる意味を有してをる。そして神經病症がかかる蔽匿作用を使用する場合、いかなる時にも、それは、嘗つて古代の文化時期に於いて全人類が歩いて來た道を辿るのであり、かかる道の存在することについては、輕い土砂を冠せてはをるが、今日猶ほ言葉の慣用法や迷信や風俗が證據を與へるのである。

私は豫告しておいた或る女患者の花の夢をここに挿入しよう。性的に判斷されるべき點には、全部、傍點を加へておく。この美しい夢は、判斷された後、夢をみた本人にはもはや、どうしても氣に適らないものであつた。

(一) **前提の夢。** 彼女は臺所へ行き、二人の女中に向ひ、彼等が「少しばかりの食事を」まだ片付けてゐないのを叱つた。その時彼女は、大變に澤山の雜な臺所道具が水の滴を切るためにさ

かさまにして臺所に置いてあり、しかも積み重ねてあるのを見た。二人の女中は水を取りにでかける、そしてその時、何か或る河の中へでも下りて行かねばならないやうであつて、その河は家の傍か、又は内庭の中まで來てをつた。（「因果的のもの」として解釋されるべきこの前提の夢の判斷については、この章第三節冒頭を見よ）。

（二）**主體たる夢**。（彼女の經歴を示す）。彼女は高いところから降りる（高貴な素性、前提の夢に對する願望對照）、獨得な形をした欄干か生垣を越えて。それは大きな菱形につないであつて、小さな正方形の編細工から出來てをつた。（彼女が其處で兄弟と遊んだことがあり、後に彼女の空想の對象となつてゐたところの、父の家の屋根裏の部屋と、彼女をいつもからかつた意地惡な叔父の家の內庭と、この二つの場所についての混合形成である。）元來は昇降のために作つてあるのでない。彼女は自分の足を置く場所を見付けるのに、いつも心配をしたが、その際彼女の着物がどこにも引つかからず、歩くのに大變上品にしてをられたのを、彼女は悅んだ（彼女が其處で眠りながら身體を露出するのが常であつた、叔父の家の內庭についての現實的な記憶に對する願望對照）。その時彼女は手に一本の大きな枝を持つてゐる（マリア受胎告知に於いて天使が一莖の百合を持つやうに）。それはま

ゐで一本の樹木のやうであつて、赤い花をうんと一杯つけてをり、澤山の小枝が擴がつてゐた（この混合形成の說明については、この章第三節參照。純潔、月經、椿姬）。櫻の花といふ考へもその時浮んだ。併しそれはまた滿開の椿のやうにも見える。勿論、椿は吾々の國の樹木には咲かない。降りてくる間、彼女は最初一本、次に突然二本、その後また一本持つてゐた（彼女の空想に役立つ人物の數に關係するものである）。彼女が下に降りてしまつた時には、枝の下の方の花は既にかなり散つてしまつてゐた。次いで下に來てしまふと、一人の下男を彼女は見た。彼は丁度同じやうな樹木を——彼女に言はせるなら、梳つてゐた、といふのは、その樹木から苔のやうに垂れさがつて密生した毛の房を木片で搔きむしつてゐたのである。別の勞働者達がやはり同じやうな枝を或る庭から切り落し、それを街路の上へ投げるので、其處には枝があたり一面にあつて、澤山の人々がそれを取りあげてゐた。併し彼女は訊いてみる、一體そんな事をしていいのか、一本取つたりしてもよいのか、（一體、梳き下ろしたりしても、といふのは、手淫をしたりしても、よいのか）。庭の中に一人の若い男が立つてゐる。彼女の知つてる或る人物の姿をしてをるが、家族の者ではない。その男をめがけて彼女は步み寄り、彼に訊く。どうしてこんな枝をわたし自身の庭

へ移し植ゑかへることができるのか（枝はずつと前から男子生殖器の代表として採用されてゐるのであるが、その外に、その家族の姓に對して甚だ明瞭な諷示を含んでをる）。彼が彼女を抱く。彼女はそれに抵抗し、一體わたしをこんなにして抱いてもかまはないなんて、どんな考へを起したの、と彼に訊く。彼は言ふ、ちつとも惡くはない、これは許されてるんだ（次の事と同じく、結婚の申込みに關係してをる）。その後で彼は、彼女と一緒に別の庭へ行つて植込みの有樣を彼女に見せたいんだが、と言つた。そしてその時彼女に向つて、彼女にはよく判らない事を、何か語つた――でなくとも俺には三米（後になつて彼女は、平方米と言ひ直してるが）、或ひは三尋の地面が缺けてるんだよ、と。その樣子は、彼が自分の好意に對して彼女から何かを要求でもするかのやうであり、彼女の庭で自分の損の埋め合はせをしようとするかのやうであり、乃至は、彼女には損をかけずに或る利益を得んがために、何等かの法律をごまかさうとするかのやうでもあつた。その後で彼が實際に何かを見せてくれたか、どうかは、彼女は覺えてゐない。

私はもう一つの表象範圍を指摘しておかねばならない。これも、夢に於いて竝びに神經症に於いて、性的內容を蔽匿するのに、頻々として役立つてをる。卽ち私が言ふのは、轉居の表象である。住

居を轉ずる、といふことを、脫け出る、といふことで代理させるのは、容易であらう。そしてこの語は、衣服の表象範圍へ聯絡ある一箇の多樣な意味あるものだ。なほ又、若し夢の中に昇降機(Lift)が出てくるならば、吾々は次の事を思ひ起す、英語の to lift は揚げる(aufheben)ことを意味する、卽ち、「着物をまくりあげる」(Kleider aufheben)と聯絡する。(今揭げた、その象徵的要素の故に特に注目される夢の如きは、「傳記的の」ものと呼ぶべきである。かかる夢は精神分析に屢々出てくる。恐らくそれの以外には、稀であらう。)

當然のことだが、この種の材料ならば私は有りあまるほど澤山に持つてをる。併しそれの報告をしたなら、神經症的事情の論議にあまりにも深入りすることになるであらう。總ては次のやうな同一の結論に導くものである、卽ち、吾々は夢の仕事に於ける心理の何等特別なる象徵化的活動を假定するの必要はない、寧ろ、かやうな象徵化は旣に無意識的な思考の中に出來上つて含まれてをる、それを夢が利用する、そしてそれは、かかる象徵化はその表出可能性を持ち、且つ又、檢閱を自由に通過できるものであつて、夢形成の諸要求をよりよく滿足させるが故にである。

第五節　夢に於ける象徴による表出――類型的な夢（續）

前掲の傳記的夢の分析は、私が夢に於ける象徴性を最初から認識してゐた事を立證するものである。併し私がこの分析の範圍と意義を十分に評價し得るに至つたのは、漸く徐々に、私の經驗が增加した結果、及びシテーケルの勞作（W. Stekel, Die Sprache des Traumes, 1911）の感化の結果であつた。それについて此處に述べねばならない。

この著者は精神分析に對しては、恐らく、利益を與へると同じほどに損害を與へた人であるが、彼は非常に多數の、豫想もされなかつた象徴の飜譯實例を提供してくれた。その實例は、初めには信用されなかつたが、併し後には、大部分實證せられ、そして承認せられざるを得なかつた。他の人達が懷疑的に逡巡してゐたのは道理ないことではなかつた、と言つたからとて、シテーケルの功績は減殺されるものではない。なるほど、彼が彼の判斷の基礎とした實例は、屢々、人を確信せしめるものではなかつたし、又、學問的には信賴し難いとして排斥せらるべきやうな一つの方法を、彼は使用したのであつた。シテーケルは象徴を直接に理解する彼に獨得なる能力のお

かげで、象徴の判斷を直感によつて見出した。そのやうな技術は併しながら一般には前提せられ得ない。そのやうな技術の能率は凡ゆる批判から逸れてゐて、從つてその成果も信用の要求權を持つものではない。それは丁度、傳染病の診斷を病室に於ける嗅覺印象に基いてなさうとするのに、似てをる。併し疑ひもなく次のやうな臨床醫師が居たことがある。その醫師には、大抵の人にあつては萎縮してしまつてをる嗅感覺が、他の醫師の場合よりも一層多く成績を擧げた、そして實際に彼は、或る腹部チフス症を嗅覺によつて診斷することができたのであつた。

精神分析の進歩しつつある經驗は、吾々をして、夢象徴性のかやうな直接的理解をば驚くべきぐあひに明白にした患者を、見つけ出さしめてをる。それが早發性精神病(Dementia praecox)患者であること實に頻々たるものであつたから、一時の間は、夢みる人の總てにこの情念のかやうな象徴理解の疑ひをかける傾向が續いたほどであつた。併しながらそれは當つてゐない。その場合の問題の中心は、明らかな病理學的意義を持たない或る個人的天禀か又は特色かである。

性的な材料を夢の中に表出するためには象徴作用が豐富に利用される。この事實に親しんでしまつたならば、次の問を出してみるに相違ない。是等の象徴の多くは、速記の「略符」のやうに、

絕對に確定された意味を以て現れるものではなからうか、と。そして一つ暗號法によつて新夢判斷の本でも書いてみよう、などといふ氣にもなるであらう。これに對しては下のやうに注意してやるべきである、卽ち、かかる象徵作用は夢に特有なものではなく、寧ろ無意識的な表象作用に屬するものだ、殊に民族のそれに屬するものであつて、土俗の話や、神話や、傳說や、熟語成句や、格言や、或る民族の間に普く行はれる機智などの中に、夢に較べると、一層完全に見出されるのである。であるから、若し吾々にして象徵の意味を正しく解し、そして象徵の概念に結びついてをる多數の、大部分は未だ解決されてゐない諸問題を論議しようとするのであつたなら、吾吾は夢判斷の任務を遙かに踏み越さねばならないであらう。（ブロイレルと彼のチューリヒの弟子達、メエデル、アブラハム其他の人々の、象徵に關する著作、及び彼等が引照してをる醫學者以外の著述家達、例へばクラインパウル等を參考せよ。この題材に關係して述べられたものの中、最も適切なるものは、ランクとザックスの著「精神科學に對する精神分析の意義」に見出される、O. Rank u. H. Sachs, Die Bedeutung der Psychoanalyse für die Gisteswissenschaften, 1913, kap. I. 更に、ヨーネスの「象徵作用の理論」、E. Jones, Die Theorie der Symbolik, Intern. Zeitschr. f. Ps A., V, 1919——吾々はここではただ次の事を言

ふに留めておかう、即ち、或る象徴による表出はなるほど間接的な表出の一種ではある、が併し象徴表出をば他の間接的表出の種類と區別もなく一緒にしてしまひ、そして區別的な特徴な明瞭な概念を以て把握することができないやうではいけない。吾々はさういふことをしないやうに、凡ゆる徴候によつて警告されてゐるのである。象徴と、それからその象徴が代理してをる本體との間に存する共通的のものは、或る場合には大つぴらであるし、或る場合には蔽匿されてをる。後の場合には、象徴の選擇は謎のやうに見える。併しこの場合こそは、象徴關係の究極的な意味に對して光を投げることができるに相違ない。この場合が吾々に指示するところでは、象徴關係は發生的性質のものである事だ。今日では象徴的に結ばれるものが、原始時代には恐らく概念上及び言語上の同一性によつて一體となつてゐたのであるかもしれない。(この解釋は、ハンス・シペルベルによつて述べられた學說の中に、異常なる支持を見出すであらう。シペルベルは「言語の起原と發達に對する性的契機の影響について」H. Sperber, Ueber den Einfluss sexueller Momente auf Entstehung und Entwickelung der Sprache, Imago I, 1912 の中に、次のやうな意見を述べてをる。即ち、原始語は全部性的の事物を表示してゐた、そしてやがて、それが性的の事物や活動と比較された他の事物や活動へと移り行きながら、この性的意味な失つたのである。)、象徴關係は嘗つて以前の同一性の殘餘であり目じるしであるらしい。加之、吾々は、既にシューベルトが千八百十四年に主張してをるやうに、象徴共通が

言語共通以上に立ち至る場合は澤山ある事を、觀察することができる（例へば、ホンガリア語には獨逸語のやうに、urinieren――小便する、に代る schiffen――船で行く、語が無いのにも拘らず、ホンガリヤ人の夢みる尿の夢に、水の上を走る船が現れる。佛蘭西及び其他の羅甸系の民族は獨逸語の Frauenzimmer ――女の部屋、女房、阿女、に類似の彼等の語を知つてゐないに拘らず、彼等の夢に於いて、部屋は婦人の象徵的表出に使はれるのである。）象徵の或る多數は言語形成一般と同じほどに古い、併し他の多數は現代に於いて絕えず新しく形成される（例へば、輕飛行船、ツエッペリン）。

さて、夢はその潛在的思想の變裝的な表出のために、かかる象徵作用を使ふものである。ところで、かく使用される象徵の中には、勿論、定まりきつて、或ひは殆ど定まり切つて同一の事を意味しようとする象徵も澤山ある。ただ心的材料の一種獨得なる造形性のことを記憶しておいて貰ひたい。或る象徵は實に屢々夢內容の中に於いて象徵的にでなく、寧ろその本來の意味を以て判斷されるべきであることもあるし、また別の場合には、その夢をみる本人の特殊なる記憶材料のために、一般にはその意味で使用されないやうな、有りとあらゆるものをば、性的象徵として使用するのが、當然であることもある。夢みる人にとつて或る內容の表出のため數多の象徵を思

ふが儘に選擇し得る場合に、彼が採用の決心をする象徴は、さういふことの外に猶ほ、彼の其他の思想材料に對し具體的關係を示すやうな、卽ち、類型的に通用する動機づけの外に、或る個人的なる動機づけをも許すやうな象徴であらう。

シェルネル以來夢に關する新しい研究は、夢象徴の承認を拒むべからざるものとなしたとは言へ――エッチ・エリスでさへ、吾々の夢が象徴作用によつて充たされてをる事については、疑惑はあり得ない、と意見を改めてをる――それでも併し、夢判斷の任務は夢に於ける象徴の存在によつて、容易にされただけではなく、更にまた難しくもされてをるのである。夢みた本人の自由な思ひ付きに基いて行ふ判斷の技術は、夢內容の象徴的要素に對しては大抵の場合吾々を途方にくれさせる。さうかと言うて、古代に行はれたやうな、そしてシテーケルの亂雜な判斷の中に再び復活してをると思はれるやうな、夢判斷者の得手勝手に復歸することは、學問的批判の動機からして、問題にはならない。かくして夢內容に存在し、象徴的に把握されるべき要素は、吾々に或る結合的な技術の採用を强ゆるものである。この技術は、一方夢みる本人の聯想に基礎を置き、他方不足な部分を判斷者の象徴理解から附け足すものだ。象徴の解決には批判的用意を持ち、特

別に透明な夢の實例によつて象徴を細心に研究する、この二つが一緒になつて、夢判斷に得手勝手なことがあるといふ非難を減殺せしめねばならない。夢の判斷者としての吾々の働きに今猶ほ附着してをる不安定は、一部分、吾々の不完全なる認識に由來してをり、この認識は一層沒頭することによつて進歩し高められることができる。又、かの不安定は一部分、正に夢象徴の或る特性のためにも左右されてをるのである。夢象徴は屢々多様な意味を持ち曖昧であつて、その結果、丁度支那の文字に於いてのやうに、先づ全體の聯絡が、必ず正しい解釋を可能ならしめる。象徴のかかる多義性に對し次には、一つの內容の中に種々の、時としてはその性質から言へば互ひに甚だ離反的である思想形成物や願望活動を表出する、從つて超過的な判斷をも起らしめる、さういふ夢の資格が結びついてをる。

以上の制限と留保をした後に、私は次の事を持ち出してみる。皇帝と皇后（王と王妃）は實際に大抵の場合夢みる人の兩親を表現し、王子又は王女は夢みる人自身である。皇帝と同じやうな高い權威は併し偉大な男子達に對しても承認せられ、多くの夢に於いて例へはゲェテが父の象徴として現れるのは、そのためである。——杖とか、樹木の幹とか、傘とか、總て長きに亙る品物

（勃起に比較される伸張のためだ！）、小刀とか、短劍とか、槍とか、總て長めなそして鋭い武器は、陰莖を代表しようとする。瓜鑪は、どういふ譯かよくは判らないが、頻々として陰莖の象徵である（擦すり且つ剝ぐためであらうか？）――筥、罐、箱、棚、ストーブは、婦人の胎に相當する。洞穴や船、及び總ての種類の容器も亦、然り。――夢の中の部屋は大抵の場合婦人であつて、その種々なる入口と出口の描寫はこの解釋の誤りでないことを示してをる。（「或る下宿屋に住んでをる患者が夢をみた。彼は女中のうちの誰かに出會ひ、お前の居る部屋は何番かと訊くと、彼女は十四番だと答へて、彼を驚かした。事實彼は今夢に出たこの女中と關係してゐて、度々彼女と彼の寢室で會合したこともあつたのである。彼女は下宿の主婦に疑はれるのを當然恐れてゐた、そしてこの夢の前日に彼に向つて、誰も住んでゐない部屋の或る一つで會はうと申出でた。その部屋が實際に第十四の番號を持つてゐたのだが、夢の中では女がその番號を有してゐる。婦人と部屋の同一化に對する、これよりももつと明瞭な證據は、殆ど考へられない。」Ernest Jones, Intern. Zeitschr. f. Ps A. II, 1914 及び Artemidorus, Symbolik der Träume, übersetzt von F. S. Krauss, Wien 1881, p. 110 參照。「それで例へば、若しさういふのが家の中にある場合には、寢間は妻を意味する。」）部屋が「開いてる」か、それとも「閉つてをる」か、といふ

關心は、この聯絡を以てすると、容易に理解される(「或るヒステリー症分析の斷片」の中のドラの夢參照)。どの鍵が部屋を開けるかは、この場合特に言はれるまでもない。錠と鍵の象徴味をウーラントはその「エベルシタイン伯爵」といふ歌の中で、極めて愉快なる淫猥の諸謔に利用してをる。——一竝びの部屋部屋を通つて行く夢は、娼家か又は閨房の夢である。更にこの夢は、ザックスが面白い實例幾つかによつて示したやうに、結婚の表出にも使はれる。——以前には一つであつた二つの部屋の夢をみるとか、又は、或る住宅の見覺えある一つの部屋が夢の中では二つに分れて現れる、乃至その逆である場合には、幼兒時代の性的好奇に對する興味ある關係が示されるのである。小兒時代には女子生殖器(則ち小兒の言葉でいふ Popo お臀)はただ一つの場所だと思はれた、そして漸く後に、身體のこの部分は二つの別々な凹みと口とを包括するものである事が經驗される。——坂、梯子、階段、乃至それ等を上へ下へ昇降することは、××××の象徴的表出である。(私はこの點に關し、別の箇所で——「精神分析的治療法の將來の見込」Die zukünftigen Chancen der psychoanalytischen Therapie. Zentralbl. f. Ps.-A. I, 1910 に述べた事を繰り返へしてみよう。「少し前の事であるが、吾々には緣遠い或る心理學者が吾々の一人に向つて、君達は確かに夢の祕密な性的意

味を買ひ被りすぎる、俺が頻々とみる夢は或る坂を登ることなんだが、それには併し確かに何等性的のものが潛んではゐない、と言つてくれたことを、私は知つた。この抗議のために注意を喚起せられ、吾々は夢の中に於ける坂や階段や梯子の出現に注目し、間もなく、その坂なるもの（及びそれに類似したもの）は交接の或る確實なる象徴を象出する事を確め得たのである。この比較の根柢を發見するのは難しくはない。リズミカルな間隔を以て、次第に呼吸の困難を增しながら、頂上に達し、そして然る後に二三の急速なる跳躍を以て再び下に降りる。即ち、××のリズムは坂の昇降の中に再現されてをる。ここでも忘れずに言葉の慣用を引き合ひに出してみよう。普通にあの男は「上へあがる奴」Steiger と言はれるし、「蹤いて上がる」Nachsteigen といふ言葉も使はれる。言葉の慣用からすると、「上へ上がる Steigen はその儘で性的行爲の代用的稱呼としてもある。佛蘭西語では、階段の段々は la marche と言ひ、un vieux marcheur は獨逸語の ein alter Steiger ——老いたる登攀者、即ち助平爺——と全く合致する。）攀ぢ登る滑らかな壁や、それを傳はつて——屢々ひどい恐怖の下に——降りてくる家屋の正面、などは、直立した人體に該當し、夢の中では恐らく、小兒が兩親や子守りの人々の體を攀ぢ登つた時の記憶を反覆するものであらう。「滑らかな」壁は男子である。夢の中の恐怖に於いて家屋の「張出し」にしつかりとつかまることは、稀

でない――卓子、テーブルクロースをかけた卓子や板は、同様に、婦人であるが、それは多分この場合には身體の彎曲を止揚するところの對照のためであらう。「木」は一般にその言語的關係からして女子に屬する材料の一つの代表者であるらしい。島の名のマデーラ（Madeira）は葡萄牙語で、木を意味してをる。「卓子と寢臺」は結婚の資格を形成するものであるから、夢の中では、頻々として前者が後者の代りに置かれ、融通のきく限りは、性的表象群は食物表象群に置換へられる。――衣裳の類の中で、或る婦人の帽子は、非常に屢々、確實に生殖器、殊に男子のそれとして判斷される。外套も同じである、但しこの象徴應用に對して言葉の響き工合が如何なる關與をなすか、それは不問にして置くより外ない。男子の夢では襟飾が屢々陰莖の象徴になる。それはネクタイは長く垂れさがつてゐて、そして男子に特有なものであるからばかりではない、その上に、人はそれを好むが儘に選み出すことができる――この象徴の本來からいふと、それは天性的に拒否されてをる一つの自由を（對照的に）示すが故にである。（「精神分析學中央雜誌」Zbl. f. Ps.-A. II, 675 に出てをる繪を參照せよ。それは十九歲の或る偏狂症患者が描いたもので、或る少女の方へ頭を向けた一匹の蛇をネクタイにしてをる一人の男の繪である。更に、「羞しがりな男」といふ話 Der

Schamhaftige, Anrthropophyteia VI, 334 には、次のやうな描寫がある。或る浴室へ一人の婦人が入つて來た。其處には一人の紳士がゐた。彼は殆どシャツを身につけることができなかつた。彼は大變に羞しがつたが、早速シャツの前の方で頸を蔽うて言つた、「ご免ください、ネクタイをつけてゐませんのですけど。」この象徴を夢の中で利用する人々は、その實生活に於いてネクタイに贅澤をつくし、それこそ澤山のネクタイを蒐集してをることが多い。――夢中の複雜な機械や道具類は總て、どう考へても生殖器――普通には、男子の――であるらしい。そしてそれの描寫については、夢の象徴作用は丁度機智の仕事と同じやうに、倦み疲れることを知らない力を示してをる。又、總ての武器や仕事道具、鋤や槌や小銃や短銃や短劍やサーベルなどが男根の象徴に利用せられる事も、全く明らかである。――同じく夢中の多くの風景や、殊に橋や又は森林の山などのある風景が、やはり生殖器描寫である、と認めるのは難しいことではない。夢みる者が自分の夢を、その中に現れる風景や土地狀況を表出すべき繪圖によつて解説してをる一聯の實例を、マルツィノウスキーが集めてゐる。是等の繪圖は、夢に於ける顯在的意義と潛在的意義との區別を、非常に判り易くしてくれるものだ。何の氣もなく眺めると、是等の繪圖は設計圖や地圖其他を持ち出すもののやうであるが、一層突き込んで調査をすれば、人體の、生殖器其他の表出であることが暴露せられ、そしてかく解釋してこそ初めて、その夢の理解は可能となる。(これについては、プフィステルの暗號記錄及び判じ繪に關する研究を參照せよ。)

又、理解しにくい新造語の形成に際會する時には、性的意味を持つ要素の組合せに考へを及ぼしてよいのである。——夢の中では小兒も亦生殖器以外の何物をも意味しない事が多い。丁度、男子や女子が自分等の生殖器を愛撫して「わたしの小さい奴」と呼ぶのと同じに。シテーケルが「小さな兄弟」を陰莖なりと識別したのは、正しいことだつた。小さな子供と遊ぶとか、小さい者を打つとかは、屢々、手淫の夢表出である。——去勢の象徴的表出のためには、禿頭、散髮、脱齒、及び斬首などが、夢の仕事に手傳ひをする。慣用的な陰莖象徴の中の或る一つが夢の中で二倍乃至數倍の數で現れることがあれば、それは去勢に對する抗議であると解すべきだ。蜥蜴が——この動物には切斷された尾が後で生えてくる——夢の中に出現するのも、同一の意義を持つてゐる。——神話や土俗傳説の中で生殖器象徴として使用される動物は、夢の中でも同一の役目を勸める。魚や蝸牛や猫や鼠(陰毛の故に)や、就中併し男根の最も著しい象徴は蛇である。小動物、毒蟲の類は、小さな子供、例へば欲しくはない兄弟姉妹の代表であり、毒蟲につかれてゐる、は屢々、妊娠と同意義とすべきである。——男子生殖器の全く斬新な夢表徴としては、飛行船が擧げられる。これは、飛翔に對する關係からも、竝びに場合によつてはその形からしても、當然かかる象徴に使用される理由がある。——一部分はまだ十分に證明されてゐない、他のいろいろな象徴の一聯を、シテーケルが提示し、そして實例を添へてゐる。シテーケルの著作、殊に「夢の言語」(Die Sprache des Traumes)は、象徴解釋の極めて豐富

な蒐集を收め、その解釋の一部は烱眼なる推量であつて、仔細に吟味してみても、正しいものだと實證されてをる。例へば、死の象徵に關する節に於いての如きはそれである。併しこの著述家の不十分な批判と、いかなる代價を拂つても一般化しようとする彼の習僻とは、彼の判斷の他のものをば疑はしい、乃至用ひ難きものになし、その結果、彼の研究を利用する際には用心するやうに切に勸めねばならない。であるから私は少數の實例を採用するに留めておく。)

シテーケルに據ると、右と左とは夢の中では倫理的に解釋せられねばならない。「右の道は常に正義の道を、左の道は犯罪の道を意味する。例へば、左の道は同性愛、近親相姦、墮落を、右の道は夫婦の生活、或る娼婦との交際等を表出する。それは常にその夢を見る人の個人的な道德觀によつて評價されてである。」親族關係の者一般は夢の中では大抵の場合生殖器の役目を勤める、ともいふ。この點では私は併し、ただ息子、娘、妹だけ、卽ち、前出せる「小さい者」の應用範圍以內に於いてだけ、それを確認することができる。反之、確められた實例に據るならば、姉は乳房の象徵であり、兄弟は大腦の象徵である、と認識されるのである。或る馬車に追ひつけないのをシテーケルは取りかへされない年齡の差異についての遺憾だと解いてをる。彼に據ると、旅行

に携へる荷物は人を押しつけてゐる罪の重荷である、といふが、併し旅行の荷物こそは自己の生殖器の見誤るべからざる象徴であることが、屢々實證される。夢に頻々として現れる數に對しても、シテーケルは一定化した象徴的意味を指定した。けれども是等の解決は十分に確定されたものでも、又、一般に妥當なものでもないやうである、とは言ひながら箇々の場合の判斷は大抵眞實らしいと承認してやることができる。とに角、三の數は男子生殖器に對する種々の方面から確定された一箇の象徴である。シテーケルが竝べ立てる一般化の中の一つは、生殖器象徴の二重的意味に關係してをる。「若し空想が些しでもそれを許すならば——男子的にと同時に女子的にも使用せられ得ないやうな象徴が、何處かにあるであらうか！」若し——ならば云々と附け足した文章は、彼のこの主張の確實性から勿論多くの重みを減殺せしめるものである、何故かと言ふと、空想こそは必ずしもそれを許しはしないからである。併し私は次の事を言つて置いても餘計なことではないと思ふ、即ち、私の經驗に據ると、シテーケルの一般的命題は或る一層大きな多樣性を承認する時には、引き退らねばならないものである、と。女子生殖器の代りになるものと同樣に頻々と男子生殖器の代りになる象徴の外に、主として或ひは殆ど獨占的に兩性の中のいづれか

一方しか示さないやうな象徴もあるし、猶ほその外に、それについてはただ男性的意味だけ、或ひは女性的意味だけが知られてるやうなのもある。長い固形的な品物や武器を女子生殖器の象徴として使用することや、或ひは凹んだもの（箱、鑵、筥等）を男子のものの象徴として使用することは、正に空想の許さざるところである。

夢及び無意識的空想が性的象徴を男女兩性的に使用する傾向は、一種の懷古的な特性を暴露するものである、といふのは正しい。何故ならば小兒時代には生殖器の差異は知られてゐないで、兩性は同一の生殖器を持つと考へられてるからである。併しながらそのために若し、多くの夢では一般的な性的倒錯が企てられ、男子的のものが女子的のものによつて表出され、またその逆も行はれることがあるのを忘れるならば、男女兩性的性象徴をややもすれば誤つて認定するに至るかもしれない。一般的な性的倒錯の夢は、例へば、寧ろ男子でありたい、といふ願望を表現するものである。

生殖器はまた夢の中に於いて人體の他の部分によつて代理されることもある。陰莖は手又は足によつて、女子陰門は口、耳、眼によつてさへ代理される。人體の分泌物――鼻汁、涙、尿、精

液等——は夢の中に於いて互ひに代り合ふことがある。シテーケルの全體から言つて正しい是等の列擧は、ライトレル(R. Reitler, Internationale Zeitschrift f. Psychoanalyse I, 1913)の批評により、當然なる批判的制限を蒙るところがあつた。その制限の主要な問題となるのは、精子のやうな十分意義ある分泌物が或る無關係的なものによつて代理されることについてである。

是等の非常に不完全な暗示でも、一層細心なる蒐集的研究を誘發するに足りるやうであつてほしい。(ここに展開された解釋とシェルネルの夢象徵の解釋との間には大變に相違あるにも拘らず、私は敢て、シェルネルこそは夢に於ける象徵作用の本來の發見者であると認められねばならないこと、そして彼の世間から空想的だと思惟された、丸五十年前——一八六一年——に發表された著書を、精神分析の諸經驗は後れ馳せながら尊重するに至つたことを、力說せざるを得ない。)夢の象徵作用のもつと詳細な記述を私は私の「精神分析入門」(Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse, 1916—17)の中に試みておいた。

私は夢に於けるかかる象徵の使用に關する若干の實例を附け足してみよう。この實例によつて、若し吾々が夢の象徵作用を認めなかつたなら、夢の判斷を得ることは不可能となる、多くの場合

に於いてかかる夢の象徴作用がいかに否定し得ないほど甚だしく現れるか、それを示したいのである。併しそれと同時に私は、夢判斷にとつての象徴の意味を過度に重んじすぎてはいけない、若しかして夢飜譯の仕事を單に象徴飜譯に局限したり、夢を見た者の思ひ付きを評價する技術を放棄したりすることのないやうに、力を籠めて警告したい。夢判斷の兩つの技術は互ひに補ひ合はねばならない。併し實際上でも理論上でも、優先權は最初に説明された處置に、即ち、夢を見た者の陳述に對し決定的な意義を歸屬せしめる技術に存し、吾々が企てた象徴飜譯の技術は補助手段として附け加はるのである。

一、男子（男子生殖器）の象徴としての帽子。（誘惑恐怖の結果場所恐怖症になつてをる若い婦人の夢の一部。）

「私は夏に街路の上を散歩してゐて、異樣な形の麥稈帽を冠つてゐる。帽子の中央部は上の方へ曲りあがつてるが、兩側部は傍へ垂れてゐた（説明がここで一寸澁つた）。しかもそれは、一方は他方よりも、もつと低くなつてる、といふぐあひだつた。私は朗らかで、落ちついた氣分で、そ

して若い士官達の一隊の傍を通りすぎた時には、お前さんたちは誰だつて、私に手だしなんか決してできないのだよ、と心の中で思つた。」

この夢の中の帽子について彼女は何の思ひ付きをも引き出すことはできないので、私は彼女に言つてやつた。突起した中央部と垂れ下つた兩側部があるのだから、その帽子は正しく男子の生殖器だ。帽子が一箇の男子であらねばならない、なんていふのは、恐らく可笑しいことだらうが、世間では、嫁入りするのを、「帽子の下へ這入る」(unter die Haube kommen)と言ふぢやないか、と。兩側部が平均せずに垂れ下つてることについては、正にかういふ細かな點こそ、それを決定してみると、判斷にとつて行くべき道を示してくれるのに相違ないのではあるけれども、私はわざとその細部の判斷をひかへてゐた。そして私は續けて言つた。そんなに立派な×××を持つた良人があるなら、士官達を恐がる必要はない、といふのは、彼等から何物をも願望する必要はないわけだ。若しさうでなかつたら、先づあなたの誘惑空想のために、誰も身を守つてくれる者を伴れずに歩くことなんか、思ひ止まらされるだらうからだ。この患者の恐怖症についてのかういふやうな說明を、私は彼女に既に幾回も、別の材料によつてではあるが、與へることはで

きたのであつた。

さて、この判斷を受けた後に於ける彼女の態度は甚だ注目に價する。彼女は帽子についての說明を取消し、兩側部が傍へ垂れ下つてるなどとは言はなかつた、と主張したのである。併し私はそれを聞いた確信があつたので、迷はされない、そしてそれを固持してやつた。彼女は暫く默りこんでゐた、そしてから勇氣を出して、次のやうに訊いたのである。わたしの良人の××は片方が片方より低くなつてゐる、あれはどういふわけでせうか、どんな男の人でもさうなんでせうか、と。これで、帽子のあの奇妙な細部の意味が明らかとなり、この夢の判斷全部は彼女に受け入れられたのであつた。

この患者がこの夢を私に報告してくれた時には、私はもはやずつと以前から帽子象徵のことを知つてゐた。他の、併しこれに較べると透明さの點では劣つてゐるいろいろな場合からして、帽子はまた女子生殖器にとつても代理をなし得ることを觀取できると信じてゐた。(キルヒグラーベルの報告にあるこの種の一例を參照せよ。Kirchgraber, Zentralbl. f. Ps.-A. III, 1912, p. 95.――シテーケルによつて、傾斜した羽毛の中央についた帽子が男子(性的不能な男子)を象徵してる一つの夢が報告されて

ゐる、Stekel, Jahrbuch, Bd. I, p. 475.)

二、小さい者は生殖器であるし――車に轢れるのは性交の象徴である。(前と同じき場所恐怖症婦人患者のもう一つの夢。)

「私の母は私の小さな娘を他處へやつてしまつた、娘が獨りで歩かねばならないやうにしようとして。その後、私は母と一緒に汽車に乘つてゐたら、娘が眞直ぐに軌道めがけて歩いてゆくのが見えた、そんなことをしたら彼女は汽車に轢かれるに相違ない。ぽきんと骨の折れる音が聞えた(その際、不快な感じ、併し驚愕といふべきものではなかつた)。その後で私は車窓から、背後に若しかして身體の部分が見えはしないか、と見廻してみた。然る後私は母に向ひ、彼女が私の小さいのを獨りで歩かせたことについて、非難をした。」

分析。ここにこの夢の完全なる判斷を與へることは容易でない。この夢はいろいろな夢の一環聯から發してゐて、夫等の他の夢と聯絡してのみ十分に理解され得るものである。また、象徴作用の證明のために必要とせられた材料を十分箇々別々に手に入れることも、容易ではない。この

婦人患者は先づ第一に、汽車旅行は、彼女がそこの主任に勿論惚れてゐたのであつた神經病療養所からの或る旅行に對する暗示として、歴史的に判斷すべきである事に思ひついた。母が彼女を其處から伴れて行くために迎へに來た。主任である醫者が停車場へ來て、お別れのために一つの花束を彼女に渡した。彼女には、母がこの慇懃な愛の表示の目擊者とならねばならなかつたことが、不愉快だつた。卽ち、この夢で母は彼女の戀愛の努力の妨害者として現れるのであるが、この役目は彼女の少女時代に嚴格な母が實際に勸めたのであつた。――次の思ひ付きは、若しかして身體の部分が背後から見えはしないか、といふ一文に關係する。夢の正面的意味からすると、勿論、轢死して粉碎された小さな娘の身體の部分を想起せねばならないであらう。然るに患者の思ひ付きは全然別の方向を示した。彼女は一度浴室で裸體の父を背面から見たことがあるのを思ひ出し、男女の種々なる相違に言及し、男子だと背面からでも×××は見えるのに、女子では左樣でないことを指摘した。この聯絡に於いて今や彼女自身が、小さい者は生殖器であり、彼女の小さい娘（彼女は四歲になる娘を持つてゐた）は彼女自身の生殖器である、と判斷したのである。彼女の母は彼女が恰かも生殖器を有してはゐない者のやうな生活をせねばならないことを要求し

てをつた、といふ非難を母に對して抱いてゐた、そしてこの非難が夢の端緒の文に現れてゐる。卽ち、母は彼女の小さい娘を他處へやつてしまつた、娘が獨りで步かねばならないやうにしようとして。彼女の空想では、街路を獨りで步くのは、良人を持たない、性的關係を持たない (coire は一緒に步く、を意味する) ことを意味し、彼女はそれを欲しない。彼女の言つたこと總てに據つてみると、彼女は少女であつた時實際に、父が彼女を寵愛する結果母の嫉妬に苦しんだことがあつたのである。

この夢の一層深い判斷は、同じ夜に見たもう一つの別な夢から生じる。その夢では彼女は自分を自分の兄弟と同一化してをる。實際彼女は男の兒のやうな娘であつて、間違つて女に生れたのだ、とよく言はれねばならなかつた。さうしてみると、兄弟と同一化したことに關聯して、「小さい者」は生殖器を意味することは、特別に明瞭となつてくる。母は彼に (彼女に) 去勢するぞと脅かす、それは陰部をいぢくることに對する罰に外ならない。さうしてみると、かの同一化は、彼女自身が小供の時に手淫をしたことがあるのを示してをる。そして小供が手淫をするといふやうなことは、今までただ兄弟からして彼女の記憶に保存されてをつたものである。男子生殖器の

知識は彼女には後に失はれてしまつてゐたが、今この第二の夢の指示に據るならば、その知識を彼女はその頃に早く得てをつたに相違ない。更に第二の夢は、少女は去勢によつて男の兒から變つたものである、といふ幼兒時代的な性理論をも示してをる。私が彼女にこの小兒の考へを語つてやつた後で、彼女は次のやうな逸話を知つてをるといふので、早速これに對する一つの實證を見つけたのである。男の兒が女の兒に訊ねた、切つちまつたの？　それに對し女の兒が答へた、いいえ、いつもかうだつたのよ。

かくして第一の夢に於ける小さい娘を、生殖器を他處へやる、といふのは、去勢の威嚇にも關係する。結局、彼女は母に向つて、母が彼女を男の兒に生んでくれなかつたことを、憤慨するのである。

「車に轢れる」ことが性交を象徴する事實は、もつと別の多數の資料によつて確實に知られない限り、この夢からでは明瞭でない。

三。建築場、坂、坑による生殖器の表出。（父錯綜によつて障礙されてをる若い男の夢）。

「私は父と一緒に或る場所を散歩してゐた。その場所は確かにプラーテル公園だつた。何故ならあの圓頂閣が見えたのだから。圓頂閣の前には一つのもつと小さい突出建築物があつて、それに一つの繋留氣球がとりつけてあつたが、それはかなりだらりとしてるやうだつた。父が私に、これ等のものはみんな何にするんだらう、と訊いた。私はそれを不思議に思つたけれど、父に說明してやつた。その後で私達は或る內庭へ來た。その庭には一枚の大きな鐵葉の板が擴げてあつた。父はそのうちから大きな一片を引きちぎらうとした。併し誰かに見つかりはしないかと、前以てあたりを見た。私は父に言つた、監督に一寸さう言へばよいのに、そしたら造作なくそのうちから取れるんです、と。この內庭から一つの階段が一つの坑へ降りてをつた、そして坑の壁は、例へば革張りの肘掛椅子のやうに、軟かいものをつめて張つてあつた。この坑の端にかなり長いプラットフォームがあり、その先に新しい坑が始まつてゐた。……………」

分析。この夢を見た男は、患者の中でも、治療學上扱ひ易くない型の患者に屬してゐた。この型の患者は或る點までは分析一般に對し何の抵抗をもしないが、そこから先になると、殆ど到達せしめないものであることが判るのである。この夢を彼は殆ど獨立に判斷した。彼は言つた、

圓頂閣は私の×××です、その前の繫留氣球は私の××ですが、それがだらりと萎縮してるのを私は嘆かねばならないのです、と。即ち、もつと立入つて飜譯するならば、圓頂閣は——小兒によつて定まつて生殖器に數へられる——尻であり、もつと小さい突出建築物は××なのである。夢の中で父が彼に、これ等のものはみんな何にするんだと、訊いてるが、それは即ち、生殖器の目的と組織についてである。この事情はこれを逆にすべきであるのは殆ど判りきつてをる、即ち彼の方が訊ねる側となるのだ。父がこんな質問をすることは現實に於いては決して起らなかつたのであるから、この夢思想を吾々は願望と解釋するか、又は假定文的に次のやうに取るかせねばならない、「假りに私が父に性的說明を賴んだとしたら」と。この思想の續きを吾々は間もなく別の箇所に於いて見出すであらう。

鐵葉が擴げてある內庭は必ずしも象徵的に解すべきではなく、父の仕事場に起因する。祕密を守る理由からして、私はその「鐵葉」を、父が取扱ふ別の材料の代りに、假りに入れて置いたのであるが、そのために何かこの夢の文字通りの內容に變化を生ずることはない。夢をみた男は父の仕事場に入つて、一部分利益の基になつてをる少し不確かな策略を知り、ひどく氣持を損じて

ゐたのであつた。それ故、上記の夢思想の續きは次のやうなものであるとして宜しい。「(若し私が彼に訊いたなら、)彼はお客を欺くと同樣、私をも欺いたであらう。」商賣上の不正を表出するものになつてをるかの引きちぎる云々に對しては、夢をみた本人自身が第二の說明を與へ、それは手淫を意味するのだ、と言つた。この事は吾々に旣に前から知られてをる判斷であるばかりでなく(下卷第五九九頁參照)、更にこの場合には、手淫の祕密はその反對によつて表現されてをることと(おつぴらにやつたつていいんだ、云々)にも甚だよく合致する。次にそれは、手淫の行爲が、かの質問が夢の第一場に於いて父に押しつけられてをるのと同じに、ここでも父に押しつけられるだらう、といふ、全くその期待通りである。坑を彼は直ぐその壁の軟かい被裝を引合にして、××だと判斷した。降りる、竝びに登るは、膣內の××××を說明しようとするものである事を、私は他の知識に基いて(上記、第六一〇頁參照)附加することができる。

第一の坑の後にかなり長いプラットフォームがあり、それから別の新しい坑がある、といふ細かな點を彼自身は傳記的に說明した。卽ち、彼は暫くの間××をしてをつた、その後で障害のためにそれを中止してるが、今や治療の助けを以てそれが再びできるやうにと希望してゐる。然る

にこの夢の終りの方が不明瞭になる、そして專門家にとつては、次の事を考へ得るものに思はれるに相違ない。既にこの夢の第二場に於いて或る別の主題の影響が作用してをる。そしてその主題を暗示するものは、父の商賣、父の欺僞的な振舞、坑として表出された最初の膣であり、そこに母に對する或る關係を推定することができる。

四、男子生殖器は人物によつて、女子のは或る風景によつて象徵される。(巡査を良人とする下級社會出の某女の夢、ダットネルの報告。)

「――やがて誰かが家の中へ押し入つて來た、彼女は巡査を呼んだ。然るにこの巡査は二人の遍歷學生と仲睦じく或る教會(又は禮拜堂――×を意味する)へ入つて行つた。その教會へは數多の階段(××の象徵)を登つて行くのであつた。教會の背後に一つの山(Mons veneris――ヴィナスの山――××)があり、上には繁つた森(Crines pubis――××)があつた。巡査は胄形の帽子、襟章をつけ、外套を着てゐた(外套や頭巾を着た精靈は、或る專門家の解說によると、生殖力象徵の性質のものである)。彼は鳶色の鬚髯を持つてゐた。巡査と仲よく步いてゐた二人の

學生は、袋のやうに束ねたエプロンを腰のまはりにつけてゐた（××の兩方を意味する）。教會の前のところに山へ行く道がある。この道の兩側には草や藪が生え繁つてをり、それが益々繁茂し、そして山の頂上になると正に一つのちやんとした森になつてゐた。」

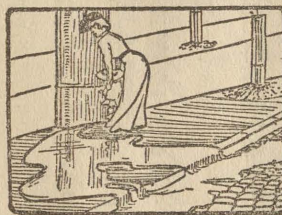
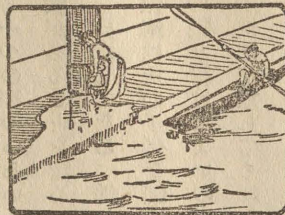
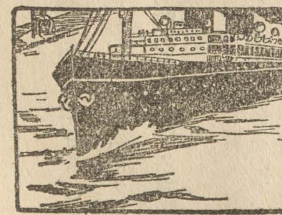
五、小兒が見る去勢の夢

（イ）。三歳と五箇月の或る男兒は父が野から歸るのを目に見えて邪魔に思ふやうであつたが、或る朝、錯亂し昂奮して目を覺し、幾度も繰り返へして訊いた、どうしてお父さんは首を皿にあげて持つてきたんだらうか？　今日お父さんは首を皿にあげて持つて來たんだよ、と。

（ロ）。目下重い强迫神經症に苦しんでをる或る學生が次のやうなことを思ひ出した。彼は六歳の時に繰り返へし次の夢を見た、彼は髮を刈つて貰ふため理髪師のところへ行く、そこへ嚴格な容貌をした大きい一婦人が彼を目がけてやつて來て、彼の頭を切つてしまふ。その婦人は母であることが彼に判つてゐた。」

六、尿の象徴について

ここに復製した繪圖は、フォレンチーが或るホンガリアの漫畫雜誌（„Fidibusz“）の中に見つけて、夢理論の繪解きに使用し得ると悟つた一聯の繪から取つたものである。「フランスの保姆の夢」と題せられたここに添へてある部分を、ランクは彼の目醒め際の夢に於ける象徴堆積に關する研究の中に既に利用してをる。

最後の繪、それは小兒の叫び聲の結果保姆が目を醒すのを内容とする繪があるので、初めて、その上の七つの繪は或る一つの夢のいろいろな面を現すものである事がわかる。第一の繪は、目を醒させるべき筈の刺戟があることを認めさせる。即ち、その男の兒は用を足したい欲求を口に出し、それ相應の助力を要求してをる。併し夢は寢室の狀況を變更して、散歩の局面にしてしまつた。第二の繪では、保姆はその子供を既に街路の隅に立たせてをる、子供は小便をしてゐる、そして――彼女はこれで眠り續けてよいのである。然るに彼女の目を醒す刺戟は猶ほ持續し、否、益々強くなる。即ち、子供は注意してくれないと思ふので、益々力強く號泣する。保姆が目を醒し手をかしてくれることを益々切に小供の泣聲が要求すればするほど、保母のみてゐる夢は、總

てはちやんとしてをる、自分は起きる必要はないのだ、といふ安心をば益々高めるのである。その際に夢は目を醒す刺戟を象徴の範圍へ飜譯する。小便をしてゐる小供から出る水の流は、益々強大となる。第四の繪では既にその流は一つの小舟を浮べてをるし、次には一つのゴンドラ、一つの帆船、最後には一つの大きな蒸汽船を浮べてをる！　利己的な睡眠欲求と倦むことなき覺醒刺戟との間の鬪爭は、ここに、剽逸な藝術家によつて、極めて警拔にも圖案化されたのである。

七、階段の夢。（オットー・ランクの報告と判斷）。

後に（第六六九頁）に引用する齒の刺戟の夢も私の同僚ランクに據るのであるが、次の同じやうに透明な遺精夢も亦、彼に負ふものである。

「私は階段のところで、私に何かした小さい女の子にその罰をくれてやらうと、彼女の後を追ひながら梯子段を降りる。階段を降り切つたところで、誰か（或る成人の女の人か？）が私のためその小供を抑へとめてくれた。私はその子を摑んだ、併し打つたか、どうかは知らない。なぜなら突然にも私はその階段の眞中にゐて、その子と（謂はば空中に於いてのやうにして）××して

ゐたのだから。實を言へば、それは××といふべきものではなかつた。私はただ私の××を彼女の××の外面に擦つたにすぎない。そしてその際に私はその××と、彼女の側面へのけぞつた頭を異常にはつきりと見た。性的××の間に私は私の頭の上、左手に（やはりまた、空中に於いてのやうに）、二枚の小さな繪が掛けてあるのを見た。緣にかこまれた一軒の家を描いた風景畫であつた。その中の小さい方には、下に、畫家の署名の代りに、それが私の誕生祝の贈物に定められたものででもあるかのやうに、私自身の名が書いてある。更にその二つの繪の前には、一枚の紙片が垂れ下がり、それにはもつと廉價な繪も求められます、と書いてあつた。（私はその後で、前の時と同じく、極めて不明瞭にではあるが、階段の中途のところに自分が寢床に寢てをるのを見た）。そして濡れた感じによつて目を醒したが、それはその時生じた××の結果のものであつた。

判斷。この夢を見た男はその日の夕方に或る本屋の店に居つた。そして待つてる時間にそこに陳列してあつた繪の二三を眺めてみたが、それは夢に出た繪と類似の畫意を表現してをつた。特別彼の氣にいつた小さい一つの繪の傍へ彼は近寄つて、その畫家の名を見てみたが、併しその名は彼には全然未知のものであつた。

同じ夕方にその後で彼はボヘミア生れの或る女中と一緒になり、彼女が、わたしの私生兒は「階段の上で出來たんだ」と自慢げに語つたのを聞いた。彼はこの普通にはない出來事の細かなわけを審ねて、次の事を知つた。この女中は彼女に言ひ寄つた男と一緒に彼女の兩親の住居へ歸つたが、そこでは××をやる機會が少しもないものだから、昂奮した男は階段の上で×××てしまつたのである。その話を聞いて彼は、酒の密造に對してよくいふ惡口を滑稽に暗示しながら言つてやつた、その子供はそれこそ「穴倉の階段に生えたんだね。」

これだけはその日の關係事項であつて、これはかなり推しつけがましく夢內容の中に代表されてをり、且つその儘で再現されてをる。併しそれと同じく容易に、或る幼兒時代的記憶の古い一片が再現せられ、同樣に夢の中に使用されてゐる。家の內でも階段のあるところは彼がその小兒時代の大部分をそこで暮し、そして殊に、性的問題をそこで初めて意識的に知るに至つた場所であつた。この階段のあるところで彼は屢々遊んだ。いろいろなことをした中で、欄干に馬乘りになつてずるずる滑り落ちることもやつたが、その際に彼は性的昂奮を感じたことがあつた。さて夢の中でも彼は同じやうに非常に急速に階段を馳け降りる。その速さは、彼自身の明瞭な陳述によ

ると、一つ一つの段々には全く觸れもせずに、よく人が言ふ通り、「飛ぶやうに降りる」か、又は滑り落ちたのである。この夢のかういふ冒頭は、幼兒時代の體驗に關して、性的昂奮の瞬間を表出するものであるらしい。――この階段のあるところ、及びそれと續く住居の中でこの男はまた、近所の子供達と屢々性的の戯れをやつたこともあつて、その時彼は、丁度夢の中にあるのと似たやうな工合で、自らを滿足させたのであつた。

フロイドの性象徴研究(「精神分析學中央雜誌」を見よ、Zentralblatt f. Ps.-A., Heft I, p.2 f.)によつて、夢中の階段と階段の昇降は殆どきまりきつて性交を象徴するものである事を知るならば、この夢は完全に透明であらう。この夢の原動力は、實にその結果即ち夢精が示すごとく、純リビド的性質のものである。睡眠狀態に於いて性的昂奮が目ざめる(夢の中に、馳け降りる――滑る――階段を越えて、といふことで表出せられた)、そしてそのサディスムス的挿入事件は、かの性的戯れを土臺として、女の子供を追ひかけて手ごめにすることに暗示されてゐる。リビド的昂奮はもつと高まり、性的行爲へとつき進む、(夢の中に、小供を摑み階段の中途へと持ちあげる、といふことで表出せられた)。そこまではこの夢は純粹に性的象徴性のものであつて、練習の少い判

断者にとつては全く不透明であるかもしれない。しかし睡眠の安靜を保證したままでのこの象徴的滿足だけでは、あまりにも强いリビド的昂奮を堪能させることはできない。その昂奮は色情亢進へと進む。かくして階段象徴作用全體は性交の代表であることが暴露される。——フロイドは階段象徴の性的利用についての原因の一つとして、階段昇降と××の兩行爲のリズミカルな性質を指摘してをるが、この夢は特に明瞭にそれを證明するやうに思はれる。なぜならば、この夢をみた當人の明らかな陳述によると、その性行爲の律動性、即ち××××××は、この夢全體に於いて最も明瞭に表現された要素であつたからである。

猶ほ二つの繪について一言述べよう。この繪は、それの現實的な意味を論外に置くとしても、象徴的意味から言つて「女の繪」として通用するものである。その事は、ここで問題となつたのは、一つの大きな繪と、一つの小さな繪とであつて、それは丁度、夢内容の中には一人の大きな（成人した）娘と、一人の小さな娘とが現れるのと同じである事からして、既に考へられることである。もつと廉價な繪も求められます、云々は、淫賣錯綜へと聯絡し、他方、小さい方の繪に夢みた當人の名があるのと、これは自分の誕生日のために定められてをるのだ云々の考へとは、

兩親錯綜を指示してをる（階段の上で生れた＝性交で出來た）。

階段の中途のところに寢床に自分が寢てをるのを見、そして濡れてるのを感ずる、あの不明瞭な最後の場景は、小兒時代の手淫を越えて猶ほもつと先の、幼兒時代へと溯り、恐らくは寢床を濡らすそれと類似の面白い場景を手本とするものであるらしい。

八、修正された階段の夢

私の患者の一人に、その空想が自分の母に固定し、母と一緒に階段を昇降する夢を繰り返へし見たことのある、ひどく病的な禁慾者がゐた。私は彼に注意をしてやつた、無理に節制をするよりは、適度な手淫の方が君にとつては恐らく害が少いかもしれない、と。この注意に影響されて彼は次のやうな夢を見るに至つた。

「彼のピアノの先生が彼に向ひ、君はピアノの演奏をなまける、モシェレスの練習曲も、クレメンティのグラドゥス・アド・パルナスムも稽古しないね、といつて非難をした。」

彼はこの夢に對し、グラドゥス（gradus）は勿論一つの階段だし、ピアノの鍵盤そのものは音

階を含むものだから、やはり一つの階段だと述べた。

吾人は次の如く言ふことができる。即ち、性的事實と願望の表出を拒否するであらうやうな表象圏は決して存在しない、と。

九、現實感と反復の表出

現在三十五歳の或る男が、四歳の時に見たのだと主張するよく記憶された一つの夢を物語つた。「父の遺言書を保管してをる公證人が――この男は三歳の時に父を失つてゐた――最上等の梨二つを持つて來た。その一つを彼は食べさして貰つた。もう一つは居間の窓板の上に置いてあつた。」彼は今夢に見た事柄が現實であるのを確信して目を覺まし、母に向ひ、も一つの梨をおくれ、だつて窓板の上に置いてあるぢやないの、と頑强にねだつた。母はそれを聞いて笑つた。

分析。その公證人は快活な老人で、この男が記憶してをると信ずるところでは、實際に一度梨を持つて來てくれたことがあつた。窓板は彼がそれを夢の中で見た通りのものであつた。この夢についてのその外のことは、どうしても、彼に思ひ浮ばない。ただ母が近頃一つの夢の話をして

くれた、といふやうなことが思ひついたくらゐだつた。母の頭の上に二羽の鳥が止まつてゐる、母はこれが何時になつたら飛び去るんだらうと自分に訊いてみた、だがそれは飛び去らないで、その中の一羽は彼女の口のところへ飛んで來て、その口から吸つた、云々。

夢を見た當人に思ひ付きが浮ばないのであるから、吾々は當然、その判斷を象徴の代償によつて試みる權利がある。二つの梨は――pommes ou poires（林檎又は梨）――彼を養つた母の乳房である。そして窓板が胸の突起であることは、家屋の夢に於けるバルコンに類似してゐる。目が醒めた後の現實感には道理がある。何故ならば、母は彼に實際乳を呑ましてゐたのである、普通の年齢以上を過ぎた後までも呑ましてゐたので、母の乳房は彼にとつてまだ與へられ得たのであつた。それでこの夢は次の如く飜譯される。卽ち、お母さん、前に一度呑んだことのある乳房を私にもう一度ください（見せて下さい）。その「前に」が一方の梨を喰べたことによつて表出せられ、その「もう一度」は他方の梨に對する要求によつて表出されてゐる。或る行爲の時間的反復は、夢に於いては定まりきつて、或る對象の數的な增加となる。

象徴作用が既に四歳の小兒の夢の中で一つ役割を演ずる、といふのは勿論非常に著しいことで

はあるが、併しこれは例外ではなくて、通則である。夢をみる者は實に抑もの初めからして象徴作用を自由自在に使用するものである、と言つてよい。

夢生活の以外に於いても、人間が如何に早くから象徴的表出を使用するものであるか、それを、現在二十七歳になる或る婦人の、次のやうな素地のままの記憶が教へるであらう。彼女が三歳と四歳の間の頃に於いてであつた。子守女が彼女と、彼女より十一箇月だけ年下の弟と、年齢に於いては彼等兩人の中間に立つ一人の從姉妹を、散步の前に各自用を足すために、便所につれて行つた。彼女は最年長者として臺に腰かけたが、他の二人は壺に用を足してゐた。彼女は從姉妹に訊いた。あんたも巾着を持つてる？　弟のウルテルはちつちやい腸詰を持つてんのよ、あたいのは巾着だわ。從姉妹の答はかうだつた、さうよ、あたいのも巾着だわ。子守女は笑ひながら聞いてゐた、そして母にその話を語つた。母はそんなこと言つてはいけないと、きつく叱つた。

次にここに一つの夢を挿んで置きたい。それの美しい象徴作用は、その夢を見た婦人の僅かな助力あるだけで、判斷できるものである。

十、「健康者の夢に於ける象徴作用の問題について」(アルフレッド・ロビツェクの報告、Alfred Robitsek im Zentralblatt f. Ps.-A. II 1911, p. 340)。

精神分析の反對者達によつて屢々——最近にはハーヴェロック・エリスによつても(Havelock Ellis, The World of Dreams, London 1911, p. 168)——持ち出された抗辯は次の如くである、即ち、象徴作用は恐らく神經症的心理の所産であつて、決して普通人に通用するものではない。さて、精神分析的研究は常態的及び神經病的精神生活の間に大體何等の原理的な區別あるを知らず、ただ量的區別のみを知るのであるが、實に健康者と病人とに於いて同じ工合に壓縮せられた錯綜が働いてをる夢を分析してみると、その分析は機構竝びに象徴作用の全然の同一性を示すのである。勿論、健康者の公明な夢は屢々神經病者の夢よりも遙かにより單純なる、より透明なる、そして一層特性發揮的なる象徴作用を含んでをることはある。神經病者の夢にあつては、象徴作用は一層強く活躍する檢閲とそれから結果として生ずる一層廣範圍なる夢の歪みのために、頻々として惱まされ、曖昧であり、判斷しにくい。次に報告する夢がこの事實の說明に役立つならば幸である。この夢は、どちらかといへば取り澄した控へ目な性質ではあるが、神經病的ではない或

る少女のものであつて、談話の間に私は、彼女は婚約中である、併し結婚を遅延させさうな故障が起りつつある事を知つた。彼女は自發的に次の夢を私に物語つた。

"I arrange the centre of a table with flowers for a birthday" (「私は或る誕生日のために一つの卓子の中央に花を整へてをる。」) 質問に對して彼女の答へたところによると、彼女は夢の中で自分の家庭に (彼女は現今ではその家庭を持つてゐない) ゐるやうであり、幸福な感情を感じてゐた。

「平易な」象徴性によつて私はこの夢を飜譯することができた。この夢は彼女の花嫁としての願望の表現である。花を中央部に置いた卓子は彼女自身と生殖器に對する象徴である。彼女は既に一人の子供の誕生といふ考へを抱きながら、自分の未來の願望を實現されたものとして表出した。即ち夢では結婚式は遠い過去になつてをる。

私は、「一つの卓子の中央」といふのは普通でない言葉だ、と注意してやつたが、彼女もそれを認めた。併し私は勿論直接にその先を質問することはできなかつた。私は愼重に夫等の象徵の意味を彼女に暗示することを避けた。そしてただ・この夢の箇々の部分に對してどんなことが思ひ

浮んでくるか、と訊いた。分析を進める間に、判斷に對する明らかな關心を持ちだし、談話の眞面目さのために腹藏のない氣持も出て、彼女の控へめな遠慮はなくなつた。——どんな花でしたか、との私の質問に對して彼女は先づ答へた、「それにお金を出さなければならないやうな、高價な花でした。」その次に言つた、「それは "Lilies of the valley, violets and pinks or carnations" (鈴蘭——文字通りには谷間の姫百合——菫、それから石竹かカァネーション)でした。」私は、百合といふ語はこの夢の中ではそれが通俗的に童貞の象徵として用ひられるその意味を以て現れたのだ、と認定した。彼女も、自分には百合は「純潔」を思ひ浮ばせる、と言つてこの認定を保證してくれた。「谷」は屢々使用される女性的夢象徵である。してみると、鈴蘭 (Maiglöckchen) に對する英語の名 (lily of valley) の中に存する二つの象徵の偶然的な結合は、彼女の高價な處女性——それにはお金を出さなければならないやうな、高價な花——の强調として、夢象徵に使用せられ、良人は自分の價値を尊重することを知るであらう、といふ期待の表現になつたのである。「高價な花云々」の言葉が三つの花象徵の各自に於いて或る別樣の意味を有してをる事は、やがて明らかになるであらう。

外見上は實に性的に思はれる「菫」violets の祕密な意味を私は――自分にも實に大膽だとは考へられたが――佛蘭西語の Viol（强姦）に對する無意識的な關係を以て說明してみようとした。ところが、私をして驚かせたことには、夢をみたこの婦人自身が、手ごめにするといふ意味の英語 violate を聯想したのである。violet と violate と兩語の偶然的な大きい類似が――英語の發音ではこの兩語はただ最後の綴のアクセントの相違によつて區別されるだけである、――「花によつて」、落花狼籍の暴行に對する考へを（defloration 花の凋落――處女を汚すこと――落花狼籍、この語も亦、花の象徵を利用してゐる）、恐らくはまた、この少女のマゾヒズム的傾向をも、表現せんがために、夢によつて利用された。無意識への道がその上を通じてをる言葉の橋に對する面白い一例であらう。「それにはお金を出さねばならない」云々は、ここでは、彼女が女になる、母になることに對して拂はねばならない生活經驗を意味してをる。「石竹」pinks の次に彼女はカアネーション carnations ―― 肉色の石竹と言ひ替へたが、これについては、私に「肉となる」といふ事に對するこの語の關係が氣づかれた。併し彼女のこれについての思ひ付きは、colour（色）であつた。彼女は猶ほ附け加へて、カアネーションは彼女の婚約

者が屢々且つ澤山に彼女に贈つてくれる花だ、と言つた。談話の終りになつて併し彼女が突然自發的に告白したところでは、彼女は眞實を言つたのではなかつた、彼女に思ひ付いたのは colour ではなくて、inkarnation（肉となる）であつた。この語を私は期待してゐたのである。とは言へ、colour といへども、思ひ付きとして縁遠いものではない。カアネーション——肉色、といふ意味によつて、即ち錯綜によつて決定されてをるものである。彼女のこの不正直は、この箇所に於いて抵抗が一番大きいのであつた事を示してをる。そしてそれは、象徴作用がここで一番透明であり、リビドと抑壓作用との間の鬪爭がこの生殖力の主題について一番强かつたのである、といふ事情に適應してゐる。この花は婚約者が屢々くれる贈物であるといふ言分は、カアネーションの二重的な意味の外に、更に、夢に於けるそれの生殖的意味に對する一つの指示でもある。花を贈る、といふ日中の原因が、性的の贈物とその返禮の贈物、といふ考へを表現する爲に利用される、即ち、彼女の方では處女性を贈る、そしてその代り豐かな愛の生活を期待するのである。この點でも、かの「高價な花、それにはお金を出さねばならない」云々は、或る——それこそ實際的な經濟上の——意味を有してると言ふことができるであらう。——かくの如くであるから、夢

に於ける花の象徴作用は處女的女性的の象徴、男性的の象徴を含み、且つ暴力的な落花狼籍に對する關係を有してをる。花の性的象徴作用は猶ほその外にも非常に擴まつてをつて、花によつて人間の性的器官を象徴し、植物の性的器官を象徴するものであることをも、指摘して置きたい。愛する者同志の間に於ける花の贈與は恐らく一般にこの無意識的な意味を有するものであらう。

彼女が夢の中で仕度をしてをる誕生日は、確かに子供の出產を意味する。彼女は自分を婚約の相手の男と同一化し、彼が彼女を出產のできるやうにする、即ち××するところの彼を表出するのである。潛在的思想は次の如くであらう、若し私があの人だつたら、私は待つてなんかゐないで婚約の女の花を散らしてやる、彼女に訊いたりしないで暴力を用ひてやるんだのに。かの violate といふ語は正にそれを指示してをる。であるから、サディスムス的リビド成分も亦表現されるのである。

夢のもう一層深い層に於いて、かの「私は卓子を用意する云々」は、或る自然戀愛的、即ち幼兒時代的意味を有してをる、と思はれる。

彼女は夢の中に於いてだけ自分の身體の貧弱さを認識してをる。彼女は自分が一箇の卓子のや

うに平ぺたいと思ふ。それだけ一層、その「中央部」の貴重さ、彼女の處女性が力說される（彼女はそれを別の時には、「花の或る中央の部分」とも言つた）。卓子の水平的なことも、象徵に對する一要素を提供してをるであらう。——この夢の集中は注目に價する。何一つ、餘計ではない。一語一語が一箇の象徵である。

彼女はその後になつてこの夢について或る補充を申述べた。"I decorate the flowers with green crinkled paper"（「私は花を綠色の縮らした紙で飾る」、彼女は猶ほ附け加へて、それは"fancy paper"即ちよく普通の植木鉢を包裝する裝飾紙だ、と言つた。更に、"to hide untidy things, whatever was to be seen, which was not pretty to the eye; there is a gap, a little space in the flowers"）見た目にはどうも美しくないものなら、何でも、その汚ならしいものを匿すためだ。花には何か裂目が、或る空隙がある」、とも言つた。"the paper looks like velvet or moss"（その紙はびろおどか、又は苔のやうに見える）。彼女は decorate に對して、私が期待してをつた通り、decorum（優美、愛嬌）を聯想した。花の色は綠色が主だつた、と言つて、それに對しては、"hope"（期待）を聯想したが、これが再び、姙娠に對する關係を

持つてゐる。――夢のこの部分には男に對する同一化作用は支配してゐない、寧ろ羞耻と公明の考へが有力になつた。彼女は自分を男の爲に美しく作り、自から耻ぢてゐてそれを矯正しようと努めてをる身體の缺點を自から認めたのである。びろおど、苔の思ひ付きは、その部分が Crines pubis (陰毛)に關係するものであることを、明白に指示してゐる。

この夢はこの少女自身の覺醒時思考の殆ど知らないやうな思想の表現である。それは、肉體的な愛慾とその器官を問題とする思想である。彼女は「誕生日のために用意される、」卽ち××される。花を散らすのに對する恐怖、恐らくはまた快感を高調した苦しみも亦、表現される。彼女は自分の身體上の缺陷を自から告白し、自分の童貞の價値を誇張することによつて、この缺陷の埋め合はせをする。肉體的愛慾が現れるのを、それは實に子供を目標とするものである、といふ事で、彼女の羞耻心は辯解してゐる。この戀を知る少女にとつては無關係である物質上の考慮までも、その表現を見出すのである。この簡單な夢の効果――卽ち、彼女の感じた幸福感――は、ここでは感情の强烈な錯綜がその滿足を見出したのである事を告白してをる。

以上はロビツェクの報告である。

フェレンチーは、「何の豫感も無い人達の夢」こそは、如何にも容易に、象徴の意義と夢の意味を推測せしめるものである、と指摘してをるが（Intern. Zeitschr. f. Ps. A.-IV, 1916—17）それは道理あることである。

私は次に現代の或る歴史的人物の夢の分析を挿入する。それは、この夢に於いて、其他の場合にも陰莖の代表物となるのに適當するであらうところの一材料が、或る附加的な目的によつてこの上もなく明白に、生殖的象徴としてしるしづけられてをるからである。一本の乘馬用鞭の「無限な延長」が勃起より以外のものを意味することは、滅多にあり得ない。その上に、この夢は、性的な方面から遠く離れた眞面目な思想が、幼兒時代の性的材料を通じて、いかに表出されるものか、といふことに對して面白い一例である。

十一、ビスマルクの夢（ハンス・ザックスの報告）。

「思想と追憶」（Gedanken und Erinnerungen, Bd. II der Volksausgabe, p. 222）の中に、ビスマルクは一八八一年十二月十八日皇帝キルヘルムに宛て書いた一本の手紙を報告してをる。

その手紙に次の一節がある。「陛下の御報告は私を元氣づけてくだすつて、ここに私が一八六三年の春、非常な難局に立つた時に見た一つの夢をお話し申上げる氣持になりました。あの難局は人間の眼を以てしては到底その打破の一路を求め得ないところのものでした。私は夢を見ました、そしてそれを早速翌朝妻や其外居合せた人々に話しました。私はアルプス山中の狹い徑を馬に乘つてゐたんです。右は深い崖、左は岩石でした。徑は益々狹くなり、遂に馬は動かなくなつて、場所の餘裕がないために、引きかへすことも、馬から下りることも不可能でした。その時私は左手に持つた鞭を以て滑かな巖壁を打ち叩き、神の御名を呼びました。鞭が無限に長くなり、巖壁は一枚の書割のやうに倒れ、そして一本の廣い道が開けて、ボヘミアの國にあるやうな丘や森林地が見えだし、旗を持つたプロシア軍隊がゐます。そして夢の中で猶ほ私は、これを陛下にどうして御報告申上げることができるだらうか、と考へてゐました。夢はそれで終り、目醒めた時私は元氣で力づいてゐました。」

この夢の筋は二つの區切りに分れる。第一部で夢を見てる本人は困窮狀態に陷るが、やがて第二部に於いて不思議な工合にそれから救ひ出される。馬と乘り手が立つてをる困難な境遇は、こ

の政治家の危機に對する、容易に認別し得る夢表出であつて、この危機を彼はこの夢を見る前の夕方に、彼の政策の諸問題を熟思しながら、特別ひどく感じたのかもしれなかつた。引用した手紙のその節に於いてビスマルク自身が、彼のその時の地位の面白からぬ事情を、夢の中で表出されるに至つた比喩的な文句を以て描いてをる。してみると、それは彼にとつて、全然熟知されてをり、心にあつたのである。その外に、ここに吾々はジルベレルの所謂「機能的現象」の面白い一例を見出す。自分の考へで解決を試みてみるが、その度毎に打越え難い障礙に突き當る、にも拘らず夫等の問題を取扱ふのを斷念することもできないし、するわけにもゆかない、といふ、夢を見る本人の精神内の經過が、前にも後にも動けない騎馬の人によつて、非常に適切に示された。譲歩か、又は退却か、などを考へるのを禁ずるところの自負心は、夢の中で、「引きかへすことも、馬から下りることも、不可能であつた」云々といふ言葉によつて表現された。他人の安寧のために苦勞して絶えず努力し活動する者、といふ資格に於いて、ビスマルクには、自分を一箇の馬に較べることは、ありさうなことであつた。事實、彼はいろいろな機會に、例へば彼の有名な格言の中に、その比較をやつたことがある。「健氣な馬はその胸革を着けたままで死ぬ」（殉職す

る)。かく解說してくると、「馬は動かなかつた」云々の言葉は、困憊した人は現在の苦勞から脫れたい欲求を感じてをる、といふ事を意味するに外ならない、或ひはそれを言ひ換へると、彼は將に自己を現實法則の束縛から睡眠と夢によつて解放しようとしてゐる、といふ事を意味してゐる。やがて第二部に於いてあのやうに強く發揮される願望實現は、旣にここに於いても、「アルプス山中の徑」なる語によつて前奏されてをる。ビスマルクがその時旣によく意識してゐたのは、次の休暇を自分はアルプス山中に——卽ち、ガスタインに於いて——暮らすであらう、といふ事であつた。夢が早くも彼を其處へ移してくれた。その夢は卽ち彼を一擧にして凡ゆる煩しい政務から解放してくれたのである。

第二部に於いて夢みる本人の願望は二重に——蔽匿されず、且つ掴み得るやうに、その上猶ほ象徵的に——實現されたものとして表出された。象徵的なのは障礙となる岩石の消失であつて、それの代りに、一本の廣い道が現れる——卽ち、最も都合のよい形を以てした望み通りの拔道である。蔽匿されずに表出されたのは、前進して來るプロシア軍隊の光景である。この豫言的な幻影を說明するのには、神祕的な聯絡などを構成する必要は全然ない。フロイドの願望實現說で以

て十分に足りる。ビスマルクは既にその頃、プロシア國內の紛糾の最上の拔道は墺太利と戰爭をして勝つことにある、と翹望してゐた。その彼が今、ボヘミヤ、即ち敵の國土に於いて、プロシアの軍隊が旗を飜へして現れるのを見る、とすれば、それによつてこの夢は、フロイドが要求する通り、この願望を實現されたものとして彼のために表出してくれた。個人的に意味深長な點はただ、今吾々がここに取扱ふこの夢をみる當人が、夢の實現だけでは滿足しないで、現實的な實現をも貫徹することができた、といふ事である。精神分析の判斷技術に通じてをる者ならば誰にでも目につくに相違ない一つのものは、「無限に長く」なるかの乘馬鞭である。鞭、杖、槍等は、吾々には生殖的象徵として熟知されてをる。然るに猶ほ、この夢の中の鞭が××の最も著しい特質、伸びる力を所有するとすると、殆ど其處に疑ひは成立しない。「無限に」延長するなどといふ、現象の誇張は、幼兒時代的飜譯を指示するものと思はれる。鞭を手に取るのは手淫に對する明白な一つの諷示であるが、勿論ここでは、夢みる本人の實行的な事情を考へるべきでなく、寧ろ遙かに以前に溯る小兒時代の興味を想起せねばならない。この點で、シテーケルが發見した判斷は非常に價値がある。それに據ると、左は夢に於いて不正、禁止されたもの、罪を意味する。そし

てそれは、禁止に反して行はれる小兒手淫に甚だよく應用されるであらう。この一番奧深い小兒時代的層と、政治家の日々の計畫に關係する一番上部の層との間に、猶ほ一つの中間層のある事が證明される、そしてこの層は前の二つの層と關係してをる。神の助けを呼びながら岩石を打ち叩くことによつて或る難儀から不思議にも解放される、といふ經過全體は、著しくも、聖書の或る場面、即ち、モーゼがイスラエルの渇せる民のために岩石を打つて水を出す、あの場面を想起せしめる。聖書を信仰するプロテスタント教徒の家庭から出たビスマルクに對しては、吾々は彼が聖書のこの節を正確に知つてをると、造作なく認定することができる。民を解放してやらうとするのにその民が反抗と憎惡と忘恩を以てそれに報ゆるあのモーゼと、自分を比較することは、紛糾時代のビスマルクにとつて、あり得ないことではなかつた。それによつて現實的な願望へのあの引きかかりが與へられたのであらう。その外に併し、聖書のあの箇所は、手淫の空想に對して甚だよく利用せられ得る箇々の點を持つてゐる。モーゼは神の誡に反して杖を手にとつた、そしてその違背の故に主は彼を罰し、即ち、主は彼に向ひ、汝は約束された國を踏まずして死なねばならぬ、と宣告するのである。禁ぜられた杖を——夢の中では明白に生殖器を意味する——

杖を摑むこと、それを以て打つために液體を生ずること、及び死の威嚇——これ等を以て、吾々は幼兒時代の手淫の總ての主要點を併せ有するのである。二つの異質的な形象、その中の一つは天才的な政治家の魂から、他の一つは原始的な小兒の昂奮から發してをる、二つの形象をば、聖書の一節を媒介として鍛ひ合はせ、そしてその際に一切の苦痛的な點を拂拭し去るに成功してをる、この加工作用は興味あるものである。杖を摑むことが一つの禁ぜられた謀叛的な動作である事は、むしろただそれを行ふ左の手によつて象徵的に暗示された。然るに顯在的夢內容に於いては、禁止とか、或ひは祕密とかに對する凡ゆる考へを直ちに虛飾的に拒まうとするかの樣に、神の御名が呼ばれる。神がモーゼに與へた二つの約束、汝は約束された國を見るであらう、だがそれを踏むことはないであらう、といふ二つの約束の中、一方は明白に實現されたものとして表出される（丘と森林地への眺め）。他の一つ、極度に苦痛的な方は、全然持ち出されない。水は多分第二義的な加工、卽ち、この場景をば前の場景とうまく一つに併合しようと努力した加工作用のための犧牲とせられ、そしてそれの代りに岩石そのものが倒壞したのである。

禁止といふ動機がそこで代表されてをる幼兒時代的手淫空想の終りを吾々は次のやうに期待せ

ねばならないであらう。子供は自分の周圍の權威的な人物がこの行はれた事について些しも知らないでゐてくれればよいがと願望する、といふやうに、期待せねばならないであらう。夢の中では然るに、この願望は正反對によつて、卽ち、出來事を早速國王に報告しようとする願望によつて、代理された。この倒錯は併しながら、見事に且つ全く目に立つやうに、夢思想の最上層に及び顯在的夢內容の一部分に含まれた勝利の空想に接合してをる。かかる勝利及び侵略の夢は、屢ば或る戀愛上の侵略願望の外被である事がある。例へば、侵入者に對して或る抵抗が加へられる併し長く伸びる鞭を用ひた後に一本の廣い道が現れる、等の夢の箇々の點は、さういふ方面へ判斷されるであらう。併しそれ等は、それを以て或る一定の、夢を貫き通す思想と願望の方向を探求するには、未だ十分ではない。吾々はこの夢に、一つの全然成功した夢の歪みの一模範的實例を見るのである。邪魔になるものは加工せられてしまつて、どこを見ても、その邪魔になるものは、保護の外被として夢の上に覆ひ擴がつてをる織物の上へ頭角を現すやうなことはない。その結果は、恐怖の凡ゆる放出は防止せられ得たのである。これは檢閱の違反なくして成功せる願望實現の理想的一例であつて、從つて吾々は、夢の當人がかかる夢なればこそ、目が醒めた時には

元氣よく力づいてゐた事をも、理解し得る。

最後に掲げるのは、

十二、或る化學者の夢。

この夢を見たのは、女性との交際によつて自己の手淫の習慣を止めたいと骨折つてゐた、或る若い男である。

前提的報告。夢の前日に彼は或る學生に、グリニァル反應について說明を與へた。この反應に於いてはマグネシゥムは分解性沃度の影響を加へると絕對に純粹なエーテルに分解されるのである。二日前にこの反應の際、爆發があつて、一人の人夫が手に火傷をした。

夢。(一)彼はフェニールマグネシゥム臭化物を作らねばならない。その裝置が特にはつきりと見えたのであるが、併し自分自身をマグネシゥムと取り換へてしまつた。さて、彼は異常に動搖的な氣持であつた。絕えず自分に言つた、これでいい、うまく行く、俺の足は旣に分解しつつある、俺の膝は軟くなりつつある、と。然る後、彼は手を伸ばして自分の兩足を觸つて見る、(どんな工合にしてであるか、彼にわからないのであるが)自分の兩脚をフラスコから取り出し、再び

自分に言つた、これぢやいけないな――いや、いいんだ、これで間違ぢやあない、と。その時彼は一部分的に目を醒まし、その夢の話を私にしようとしたものだから、その夢を繰り返へしてゐた。彼は夢の消えるのを甚だしく懸念し、この半睡狀態の間非常に昂奮してゐて、繰り返へし繰り返へし、フェニール、フェニールと言つた。

(二)。彼は全家族と一緒に某所にゐた。十一時半にショッテントールで或る婦人と媾曳をすることになつてゐたのだが、やつと十一時半に目が醒めた。彼は自分に言つた、もう晩い、あすこに行けば十二時半になる、と。次の瞬間に彼は全家族が食卓のまはりに集まつてるのを見た。母と、それからスープ鍋を持つた女中が特別にはつきり見えた。彼はその時自分に言つた、さあ、飯を食べたら、もう出ちやあ行かれんぞ。

分析。既に第一の夢が媾曳の婦人と或る關係を有してをる事は、確かである(この夢は期待された會合の前夜に見たものであつた)。彼が說明を與へてやつた學生といふのは、特別に厭な奴だつた。彼は學生に言つた、マグネシゥムはまだ全然接觸されてゐないんだから、これぢやあいけないよ、と。その學生はそんなことは自分に何の關係もありあしない、といつた風にして、これぢ

やあ、まあ、いけませんね、と答へたのだつた。その學生が今彼自身になつたに相違ない、——彼は、丁度あの學生が化合に對して冷淡であるのと同じに、自分の分析に對して冷淡である——實驗を行ふ夢の中の彼は併し私である。結果に對して自分が冷淡であるのは、私にはどんなにか厭なことに見えるに相違ない、と彼は考へてをる！

他方に於いて彼は分析(化合)が行はれるその主體である。卽ち、問題の中心は治療の成功である。夢の中の兩脚云々は、前の晩方の或る印象を想起せしめるものであつた。彼は舞踏の時間に或る婦人と出會つた。彼はその婦人を手に入れようとしてゐる。彼は彼女をあんまりしつかりと身體に抱きしめたので、彼女は一度叫び聲をあげたくらゐだつた。彼の方で彼女の脚へ壓しつけるのを止めた時に、彼は自分の兩膝の上のところまでの下腿の部分に力強く彼女が壓しつけてくるのを感じた。それは丁度、夢の中に云々された部分にあたる。この境地にあつて卽ちその女性は、終に始末のついたフラスコの中のマグネシュムである。私に對しては彼は女性的であるが、その女に對しては彼は男性的である。その婦人の始末がつくならば、治療の方も亦始末がつく。自分で觸つてみて、膝のことが氣につくのは、手淫を意味し、そして前日の疲勞にも該當するこ

とである。――媾曳は十一時半と相談で決めてあつた。それを寢過ごしてそして家庭の性的對象物（それは即ち、手淫）だけにしておきたい、といふ彼の願望は、正に彼の反抗に該當するものである。

フェニールといふ名を反復することに對しては、彼は次のやうに報告した。總て「ール」で終る化學的根は自分にいつも大變に氣に入る、夫等は使用するのに大變便利だ、ベンツィールとかアッェティールとか、など、と。ところでそれでは何の說明にもならない、そして私が彼に化學的根のシュレミール（Schlemihl）を持ち出してやつたら、彼は非常に笑つて、話していふのには、自分は夏の間プレヴォストの或る本を讀んでみた、その中の「戀愛のエクスクルス」といふ章には勿論シュレミリエの話が出てゐたが、その描寫を讀みながら自分は獨りで言つた、これは俺の場合だ、と。――彼が媾曳をずらかしたのも、或ひはシュレミーレライであつたかもしれない。

性的夢象徵は既に或る直接的な實驗的確認を見出してしまつたやうである。ドクトル・カ・シュリョッテルは一九一二年ハァ・スウォボダの刺戟によつて、深く催眠術をかけられてをる人物に對し或る暗示を以て夢を作ることができた。その暗示は夢內容の大部分を規定するものであつた。普

通的な、又は變態的な性交の夢をみてゐろ、と催眠的暗示が注文を持ちだすと、その夢は性的材料の代りに、精神分析的夢判斷によつて知られてをるかの象徵を挿入して、この注文を實行したのである。例へば、女の友達との同性愛的交際の夢をみてゐろ、といふ暗示を與へた後に、夢の中で、その女の友達が手に一つの古びた旅行鞄を持つて現れ、鞄の上には「婦人に限る」といふ文句の印刷した一紙片が貼りつけてあつた。この夢をみた婦人に對しては、夢に於ける象徵とか夢判斷とかについては嘗つて一度も何等かの知識を與へられたことはなかつたのださうである。遺憾ながら、この有意義な調査の決定は、シュリョッテルがその後間もなく自殺して果てた、といふ不幸な事實のために阻止されてをる。彼の夢實驗については、ただ當座的な一報告が「精神分析中央雜誌」に載つただけである。

一九二三年にゲ・ロッフェンシタインがこれと類似の實驗成績を發表した。併し特に興味ありと思はれるのは、ベトルハイムとハルトマンが行つた實驗であるが、それは彼等の實驗では催眠術は除外されてをるからだ。彼等は（「コルサコフ精神病に於ける錯誤反應について」Ueber Fehlreaktionen bei der Korsakoffschen Psychose. Aschiv. für Psychiatrie, Bd 72, 1924）

患者に向つてひどく性的な內容の話をごちやごちやと亂雜に語つてやつて、その話が夢に再製される時に現れる歪みに注目してゐた。すると、かの夢判斷からして吾々に知られてゐるいろいろな象徵が、(階段を登る、突き刺す、射る、などは交接の象徵として、小刀及び紙卷煙草は陰莖象徵として)、現れた、といふ結果を見たのである。階段の象徵の出現に對しては或る特別な價値が添加される。それは、實驗報告者達が道理にも述べてをるやうに、「かかる種類の象徵化は意識的な歪みの願望にとつては成し就げられないものだからである。」

かく吾々は夢に於ける象徵作用を尊重し得た後に初めて、前に上卷、第四七三頁に中斷してしまつた類型的夢の議論を續けることができる。私はこの種の夢を大雜束に二つに分類しても宜しいと考へる。一つは實際的にいつも同じ意味を有するもの、他は、同じ又は類似の內容にも拘らず極めて相違的なる判斷を受けねばならないものである。第一類の類型的な夢の中で、試驗の夢を私は既に比較的詳しく取扱つておいた。

或る列車が到着しない夢なども、類似的な感情印象のものであるから、試驗の夢と同列に置くことができる。又、この二種の夢がかく接近してをる所以は、列車の夢を解說してみても、當然である。卽ちそれは、睡眠中に感ぜられた或る他の恐怖の昂奮、死ぬかもしれぬといふ恐怖に對する慰安の夢であり「旅立つ」は最も頻々として現れそして最もよく證明せられ得る死の象徵の一つであつて、そこで、夢は慰めつつ、安心してをれ、お前は死にはしない（旅立ちはしない）だらう、と言うてくれる。丁度、試驗の夢が、何も恐れるな、今回もお前にとつて何事も起りはしないだらう、となだめてくれるのと同じである。この兩種の夢の理解に存する困難は、恐怖の感じが正に慰安の表現に結びついてをる、といふ點に基いてをる。

私は私の患者達について十分なほど屢々齒の刺戟の夢を分析せねばならなかつたが、この夢を判斷しようとすると、私が驚いたことには、いつも定まりきつて、餘りにも大きな抵抗が現れるものだから、この夢の意味を久しい間私は掴むことができなかつた。

終に大きすぎるほどの證據は次の事を何等疑ひなからしめるに至つた。卽ち、男子にあつては春機發動期の手淫慾情こそは是等の夢の原動力となるのである。私はかかる二つの夢を分析して

みよう。その中の一つは、同時に「飛行の夢」でもある。二つとも同一人の夢であるが、彼は强い併し實生活に於いては阻止されてをる同性性慾を有した、若い男である。

「彼は歌劇場の平土間に坐つて、フィデリォ劇を見てゐた。彼の傍には彼の心を惹きそしてその友情を得たいと彼が希つてをる人物、Lがゐた、突然彼は平土間を斜めに飛んでその端まで行つた。そして口に手を突き込んで齒を二本引き拔いた。」

この飛ぶのを彼自身は、自分はまるで空中へ「投げられた」かのやうだつた、と說明した。フィデリォ歌劇を見てゐたのであるから、その中の詩句が私にすぐ思ひ出される。「優しき女子を手に入れる者ならば――」。併し實は、それが世にも優しい女子であつても、女子を手に入れるのが、この夢をみた男の願望ではないのである。彼の願望にもつともよく合致するのは、他の二行の詩句の方だ。「男の友誼結ぶべき、大いなる飛躍の若し成りたるならば――」。果してこの夢には「大いなる飛躍」が含まれてをる、が併しそれだけが願望充實ではない。その背後には猶ほその上に、自分は友情を得ようと謀つて既に屢々失敗した、「投げ出された」ことがある、といふ苦痛的な考慮と、この失敗は今自分がその人の傍でフィデリォ歌劇を見物してをるこの若い男に對し

ても繰り返へされるかもしれないのだ、といふ懸念とが、匿れ潜んでゐる。更にそれに對して、この夢を見た元來感情の鋭い男にとつては耻かしい告白が、結びついてもゐるのである。卽ち、彼は嘗つて或る友人の方から拒絕を受けた後で、慕はしさからして情慾の昂奮のあまり、二度續けて手淫をやつたことがあつた。

第二の夢。「彼と知り合ひの大學教授が二人、私の代りに彼を診療した。一人は彼の陰莖に何かやつた。彼は手術をされるんぢやあないかと心配した。もう一人は鐵の棒で彼の口を突いた、そのために彼は齒を一本か二本失くしてしまつた。彼は四枚の絹の布で結びつけられてゐる。」

この夢の性的意味は確かに疑ひないものである。絹の布は彼と知り合ひの同性愛の相手との同一化作用に適應してゐる。一度も××を行つたことがなく、又、現實に於いては嘗つて決して男子との××を試みたこともないこの男は、××といふものを、嘗つて彼の春機發動期に於いて知つた手淫の如きものとして想像してをる。

類型的な齒の刺戟の夢が屢々その形を變ずる、例へば、誰か他人がその夢みてゐる當人の齒を拔く、とか、さういふ類似の變化の加へられるのも、同じ說明によつて理解される、と私は考へ

てゐる。（誰か他人が齒を引き拔くのは、大抵の場合、去勢の象徵と判斷される。シテーケルに據ると、理髮師が頭髮を刈るのも、それと似てゐる。齒の刺戟の夢と、例へばコリアトが報告してをるやうな齒醫者の夢一般との間には、區別を置かねばならない。）併し「齒の刺戟」がどうしてかかる判斷に達し得るのであるか、それが謎のやうに思はれるかもしれない。ここに私は、あの屢々現れる下から上への轉移作用を指摘する。これは性的抑壓に役立つものであり、そしてヒステリー症にあつてはこの作用のおかげで、生殖器を諷示すべき筈の凡ゆる感情や意向は、少くとも別な非難を蒙らない身體の局部に轉移されて、實現されることができるのである。無意識的思考の象徵作用に於いて生殖器が顏面によつて代理されるのも亦、かかる轉移の一例である。言葉の慣用もこの作用に對して貢獻してをる。といふのは、頰に對する竝行的な慣用語として「臀の頰」があり、口の裂目を包圍する唇と竝んで「陰唇」なる名稱がある。鼻は多數の諷刺的表現に於いて陰莖と同じものにされ兩方に附着して生える毛はこの類似を更に完全ならしめる。ただ一つのものだけは凡ゆる比較の可能性の以外に立つてゐる、卽ち、齒だ。そして一致と差異のこの併發こそは、齒をして性的抑壓の下にあつて表出する目的のためには適當なるものたらしめるのである。

私はその判斷論據の正しいのを疑ふことはできないのであるが、併しこれで以て、齒の刺戟の夢を手淫の夢なりとする判斷が、十分に明々白々となつた、とは主張するつもりでない。（ユンクの報告に據ると、齒の刺戟の夢は婦人にあつては出產の夢の意味を有してゐる。ヨーネスはこれに對する或る立派な實證を提出した。この判斷と、それから私がここに述べた判斷との共通點は、兩方の場合に於いて、（去勢——出產）身體からその或る一部が分離することが中心的問題である點だ。）私は私が說明のために知つてゐるだけを提供し、殘餘の事は未解決のままにしておくより外はない。併し私は言語の使ひ方に含まれてゐるもう一つの聯絡を指摘せねばならない。吾々の地方に手淫行爲に對する拙い言ひ方がある、卽ち、一本引き拔く、又は、一本×××××（sich einen ausreissen oder sich einen herunterreissen.——これについては、第五九九頁、「傳記的な」夢參照。）私はこの言ひ方が何から出てをるのか、いかなる形容化がその根柢となつてるのかを語ることはできない。併し二つの中の第一に對しては、「齒」は非常によく合致するであらう。

齒を拔く、又は齒の脫落の夢は、民間信仰では家族の誰かの死に關係して判斷されてをるが、精神分析はかかる判斷をせいぜい上に暗示したやうな戲弄的な意味に於いてのみ認めることがで

きるのであるから、私はここにオットー・ランクが使用してくれと提供した一つの「齒の刺戟の夢」を挿入してみよう。

「齒の刺戟の夢の題目について、次のやうな報告が、少し前から夢判斷の諸問題に對し盛んに興味を持ち始めてをる一人の同僚によつて、私に持ち出された。

「近頃彼はこんな夢をみた。彼は齒醫者のところにゐた。齒醫者は彼の下顎の奥の方の齒を剔つてゐる。長い間いぢくりまはしてをるので、その齒は役に立たなくなつてしまつた。その後で齒醫者はピンセットでその齒を挿み、彼を驚異せしめたほど、易々とそれを拔き出した。齒醫者が言つた、これぢやあどうにもなりませんね、だつて、これは元來の目的の齒ぢやあないんですから、と。そしてそれを卓子の上へ置いた。その齒は、(彼がそこで見てみると、上の門齒のやうだつた)、いくつもの層に分裂してゐた。彼は手術臺から立ちあがり、もの珍らしげに近寄り、興味を以て或る醫學上の質問を出した。醫者はその目立つて白い齒の箇々の部分を區分し、そして或る道具で粉碎し(粉末にし)ながら、彼に向つて、これは春機發動期と聯絡のあるものである、齒といふものはただ春機發動期の以前に於いてのみこんなに易々と拔けるものだ、婦人にあつては

それを決定する動機は子供の出産である、などと說明してくれた。」

彼はその後で、（半睡の狀態に於いてであつたと思ふが）、この夢は夢精を伴つてゐたのに氣がついた。併しそれが夢のどの部分に挿まるべきものであるのか、はつきりとは言ふことができない。どうも、齒を拔く間に行つたものであるらしい。

「彼はなほ續いて夢を見たが、その經過をもはや彼は覺えてゐない。併しその結末の方はかうであつた。彼は誰か後で着物を持つて來てくれるだらうと期待しながら、帽子と上着を何處かに（多分、齒醫者の携帶品預所にだつたらう）殘し、ただ外套を羽織つただけで、發車しつつある汽車に間に合はうと、急いだ。危ない瀨戸際にそれでも後部の客車へ飛び乘ることができた。其處には旣に誰かが立つてゐた。彼は併しもう客車の內部へ入ることができず、窮屈な姿勢のままで旅行を一緒にせねばならなかつたが、この窮屈な姿勢から逃れようと試みて、終に成功した。彼等は一つの大きなトンネルの中を走つてゐた。その時に反對の方向を取りながら二つの列車が彼等の乘つてる列車の中を、恰かもそれがトンネルであるかのやうに、突き拔けて走つて行つた。彼は外部から見るやうにして、自分の客車の一つの窓越しに中をのぞいた。」

この夢の判斷に對する材料としては、前日に於ける次のやうな體驗と思想とが擧げられる。

（一）。彼は少し前から實際に齒醫者の診察を受けつつあつた。そしてこの夢を見た頃には下顎の齒に斷えず痛みを感じてゐた。丁度その齒が夢の中でえぐられたのであるが、醫者がこの齒を彼が好ましく思ふ以上に長い間いぢくり廻してゐたのも、事實であつた。夢を見た日の午前に彼は痛みのため新しく醫者のところへ行つた。醫者は彼に向つて、治療中の齒と同じ顎だが併し別の齒から痛みが出て來るのであるらしいから、これを拔かしてくれろ、と說き聞かせた。問題は、丁度肉を破つて出ようとしてゐる、親知らず齒だつたのである。彼はこれに關しその機會に醫者としての良心に對して一つの質問を發してみた。

（二）。同じ日の午後に彼は、或る婦人に向ひ、自分は齒が痛むので氣分が惡い、勘辨してください、と辯解せねばならないことがあつた。その婦人はそれを聞いて彼に語つた。わたしは或る齒根を拔いて貰はねばならないかと恐れてます、それの齒冠は殆ど丸つきりかけてしまつてる、と。彼女はまた次のやうなことを述べた。拔くのは犬齒の場合に特別痛くて危險なんだが、併し彼女の知り合ひの女の人の言ふところでは、上顎の齒だと拔くのはもつと容易だ（彼女の拔かねば

ならない齒といふのは、その上顎の一本だつた)。この知り合ひの女はまた彼女に、自分は一度痲醉をかけられてゐて間違つた齒を一本拔かれたことがある、とも語つた。その話は、必要な手術に對する彼女の臆病を一層つのらせた。彼女はその後で、犬齒といふのは臼齒か、それとも隅齒か、どつちのことでせうか、そしてこの臼齒とか隅齒とかについて何かご存じなら敎へてください、と彼に訊いた。彼は一方、これ等のものについての凡ゆる意見の中に含まれてゐる迷信的な混入物を注意してやつたが、他方に於いて併し多くの民俗的な感想の中の正しい核心を力說することも怠らなかつた。これに對して彼女は、彼女の經驗によると非常に古くてそして一般的に知られてをる一つの民間信仰を報告することができた。それは、若し姙娠中の女が齒痛を感ずるなら、彼女は男の子を持つ、といふのであつた。

(三)。この諺は、フロイドがその著述「夢判斷」の中に報告してをる、かの齒の刺戟の夢が手淫を代理するといふ、類型的な意味を考慮してみると、やはりこの民間の諺の中でも、齒と男子生殖器(男の子)とが或る種の關係に置かれてあるものだから、ランクの同僚の興味を惹いた。そこで彼は同じ日の夕方に「夢判斷」の中の當該箇所を讀みかへしてみた。そして其處に、其他

の事柄の外に、次に引用する說明を見出したのである。その說明が彼の夢に對して與へた影響は、兩つの前記の體驗が與へた作用と同樣、容易に認められる。フロイドは齒の刺戟の夢について、「男子にあつては春機發動機の手淫慾情こそは是等の夢の原動力となるのである」、と書いてをる（第六六四頁）。更に、「類型的な齒の刺戟の夢が屢々その形を變ずる、例へば、誰か他人がその夢みてる當人の齒を拔く、とか、さういふ類似の變化を加へられるのも、同じ說明によつて理解される、と私は考へてゐる。併し齒の刺戟がどうしてかかる判斷に達し得るのであるか、それが謎のやうに思はれるかもしれない。ここに私は、あの屢々現れる下から上への轉移作用を指摘する、（今問題とする夢でも、やはり、下顎から上顎へ移つてをる）。これは性的抑壓に役立つものであり、そしてヒステリー症にあつてはこの作用のおかげで、生殖器を諷示すべき筈の凡ゆる感情や意向は、少くとも別な非難を蒙らない身體の局部に轉移されて、實現されることができるのである。」――「併し私は言語の使ひ方に含まれてゐるもう一つの聯絡を指摘せねばならない。吾々の地方に手淫行爲に對する拙い言ひ方がある、即ち一本引拔く、又は一本××××。」この句は彼には既に靑年初期の頃に手淫に對する稱呼として熟知であつた。それでこの點から進むならば、

熟練した夢判斷者はこの夢の根柢に橫たはつてるかもしれない小兒時代の材料への入口を見出すのに、難儀をしないであらう。彼はただ次のことを擧げるに止めてゐる、卽ち、拔いた後で上の門齒に變るところの齒が、夢の中でいかにも易々と拔けてくる、あの容易さは彼をして彼の小兒時代の或る出來事、彼が一本のぐらぐらする上の前齒を易々と且つ痛みもなく、自分の手で拔いたことがあつたのを、想起せしめた。この出來事は今日猶ほ凡ゆる細かな點に亙つて明瞭に彼の記憶に殘つてるものであるが、それの起つたのは、丁度、彼の最初の意識的手淫行爲が現れたのと同じ頃の昔であつた（記憶の合致）。

フロイドはユンクの報告に基いて、齒の刺戟の夢は婦人にあつては出産の夢の意味を持つことを指摘した。それと、姙娠中の婦人に於ける齒痛の意味についての民間信仰と、この二つの事が、夢の中で男子の（春機發動期）に對しこの女子的意味を對立せしめる動機を與へたのである。それに加へて、彼は或るもつと以前の夢の記憶をも持つてゐる。それは、彼が或る齒醫者の治療を受けて歸つた後で夢みたものであつて、夢の中で今嵌めて貰つたばかりの金冠が脫落した。そしてその金冠の費用は彼がその頃に念頭を離れることなく苦にしてゐたものだつたから、それの

著しい高價な費用の故に彼は夢の中でこれが脫落したのを非常に忌々しがつた。それで、彼にとつては、或る體驗を考へてみると、この夢は、凡ゆる形に於いて經濟的には一層不利益な相手のある情事よりも手淫の方が物質的にはましであることを推賞するものとして理解され、そして姙娠中の女子に於ける齒痛の意味に關するかの婦人の報告がこの考へを再び彼の心理に呼び起したのである、と彼は思つた。――」

以上はランクの同僚の夢とその人自身の判斷であつて、これに對しランクは、これはそのままで了解され得る、そして論難を挿むべき餘地のない判斷であり何等附け加へる必要はないが、ただ次の事を指摘したい、と言つてをる。卽ち、この夢の第二部の蓋然的な意味についてである。第二部は、(齒――を拔く――列車、引き拔く――旅行する、譯者註。譯語では全くこの關係は現されないが、獨逸語では、Zahn-ziehen-Zug; reissen-reisen と聯想的な語句になつてゐる)語句の橋を渡つて、夢みた本人の考への手淫から性交への過渡、それは外見からするといろいろな面倒を以て行はれた過渡(列車が相異つた方向を取つて入つたり出たりするかのトンネル)と、その性交の危險(姙娠、外套)を表示してゐる。

反之、私（ランク自身）にはこの場合は理論的に二つの方向に向つて興味あるものと思はれる。第一には、夢中の射精は齒を拔く行爲の際に起る、といふフロイドが發見した聯絡に對して、これは證明になる。なぜなら、夢精なるものは、假令いかなる形を以て現れるにしても、機械的な刺戟の助けを借りずに成立するところの、一種の手淫的な滿足である、と見做すより外ないからである。加之、この場合に於いてその手淫的滿足は、通常の如く、ただ想像されただけのものではあつてもとにかく或る相手があつて起るのではなくて、相手がない、言つて見れば、純粹に自動戀愛的なものである、そして精々のところで或る微かな同性愛的混合（齒醫者といふ）が認められるにすぎない。

特に力說に價すると思はれる第二の點は、次の如くである。ここにフロイド流の解釋を當てはめてみようとするのは全く餘計なことではないか、何故ならば夢をみた前日のいくつかの體驗だけで以て、夢の內容を理解せしめるのには完全に十分なのだから、といふ抗議が出さうである。齒醫者を訪ねたこと、婦人との會話、及び「夢判斷」を讀んだことは、その夜にも齒痛のため落ちついて眠れなかつたこの人がこの夢を作り出した事を、十分に說明してくれるであらう。それ

は、睡眠を妨げる痛みを除去しようとするものであつた、とも言つてよい、（一方では懸念された苦痛の感覺をリビドによつて打ち消しながら、他方ではその痛む齒を取り去るといふ表象を作ることによつて）。さて併しながらかく考へるのをいかに廣く認めようとしたところで、若しもこの夢をみた本人自らが告白したやうに（「一本拔いてやる」云々）、彼が既に以前からその知識を持つてゐなかつたのであつたならば、フロイド解說を讀んだことが齒を拔くのと手淫との間の聯絡を彼の心中に作り出した、乃至はそれがどうにか働きをなすやうになされ得た、といふ主張を眞面目に代表しようとはしなかつたであらう。寧ろ、婦人との會話の外に、何がこの聯絡の考へを生かし出したのであらうかを示すものは、夢をみた本人が「夢判斷」を讀んだ際に明らかな理由からして齒の刺戟の夢のかかる類型的な意味をば本當には信じたくはなかつた、そしてこれが凡ゆるこの種の夢に該當するものであるか、どうか知りたい願望を抱いた、といふ後に述べた本人の報告である。ところが、夢は少くとも彼自身のためにその事を實證し、そしてそれで、何故に彼がそれを疑はねばならなかつたかを、示してくれるのである。即ち、夢はこの意味に於いても亦、一つの願望、といふのは、このフロイドの解釋の妥當範圍と確實さを確信したいといふ願望の實現なのである。

類型的な夢の第二の類に、飛ぶ又は浮動する、落下し游泳する等の夢が屬してをる、是等の夢は、何を意味するか？　それは一般的には言へない。後で聞くであらう如く、是等の夢は各々の場合に於いて或る別のものを意味してをる、ただそれが含んでゐる情感の材料だけは凡ゆる場合に於いて同一の源から發するものである。

精神分析が與へる敎示に基いて吾々は次の事を推論せざるを得ない。是等の夢も亦小兒時代の印象を反復する、卽ち、小兒にとつて異常なる魅力を有する運動遊戲に關係してをるものである。小兒の伯父さんが兩腕を擴げながら彼と一緒に部屋の中を走つてみせては、彼をして飛ぶ思ひをさせたことがあつた。また伯父さんは彼を兩膝の上に乘せ突然に片方の足を伸ばすか、又は彼を高く持ち上げ突然に下の支へをはづしてしまはうとするかのやうにしてみせては、彼をして落下する思ひをさせて戯れたことがあつた。小兒は歡喜し飽くことなくその反復を要求した。少しばかり恐ろしく且つ眩暈がそれに伴ふ場合には、殊にさうであつた。やがて年月を經た後に、當年の小兒はその反復を自分で夢の中に於いてなし、そして夢の中であるから、自分の身體を支へる

兩手を離してしまひ、それで自由に浮動し落下する有様になる。凡ゆる小兒が上下左右に搖り動くかかる遊戲を特に好むことは、誰でも知つてゐる。やがてこの小兒がサーカスなどで體操の技藝を見たりすると、かの記憶が新しく蘇つてくる。多くの小兒にあつては、ヒステリー症の發作はいつもただかかる技藝の再現から成立つてをることがあり、それを彼等は非常に巧みにやつてみせるのである。是等の元來無邪氣な運動遊戲に際して、性的感覺も亦喚起されることが稀ではない。かういふことをやらせるのを吾々の國では普通に「噪しかける」と呼んでをるが、飛行や墜落や眩暈等の夢が繰り返へしてみせるものは、正に小兒時代のこの「噪しかけ」であつて、昔の快感は今は恐怖に倒錯されるのである。小兒の噪しかけでも實際は屢々喧嘩となり、泣き出すことに終るのは、凡ゆる母の知るところであらう。

かくて、睡眠中の吾々の皮膚の觸覺の狀況、吾々の肺臟や其他の運動の感覺が飛行と墜落の夢を惹起する、といふ說明を否定するのに、私は立派な理由を持つてるわけである。それ等の感覺そのものは夢が關係してをる記憶からして再現される、即ち、それ等は夢內容であつてそして夢の源ではない、といふ事を私は悟るのである。

運動感覺の同一源泉から發しそして同種的であるこの材料は、さて、實に多種多様なる夢思想の表出に利用される。飛行又は浮動の夢は大抵快感を强調するものであるが、この種の夢は、實に種々なる判斷を要求する。二三の人にあつては全然特殊的な判斷が必要であるし、他の人にあつては自明的に類型的な性質の判斷を必要とする。私の婦人患者の或る一人は非常に頻々と、自分が街路の上に、地に觸れることなく、或る高さのところに浮動してをる夢をみる習慣があつた。彼女は背が大變低かつた、そして人間との交際がもたらす凡ゆる不潔を嫌つてゐた。で、彼女のこの浮動の夢は、彼女の足を地面から離させ、彼女の頭を一層高い所に聳えさせて、それで以て彼女のために二つの願望を實現してくれたのである。或る幾人かの婦人にあつては、飛行の夢は、若し小鳥だつたら、といふ憧憬の意味を有してゐたが、他の婦人達は、中には天使などと言はれることがない不滿から、夜にその夢によつて天使となるのでもあつた。飛行と鳥の表象はかくも密接に結合するものだ、といふ事から考へると、男子にあつてはこの飛行の夢が大抵の場合に或る野蠻な意味を持つものである事は理解し得る。男子だと、夢の中で飛ぶことができたのをいつも自慢にする人がある、と聞いても、吾々は不思議に思はないであらう。

ドクトル・パウル・フェーデルン（維納の）は次のやうな魅惑的な推測を發表した。卽ち、飛行の夢の大部分は勃起の夢である。何故ならば勃起といふ著しいそして絶えず人間の空想を働かしめる現象は、重力の撤廢として、人の印象を深めるに相違ないからである。（古代の羽の生えた男根を參考せよ。）

謹嚴でそして元來は凡ゆる夢判斷に好意を持たない夢の實驗學者たるモウルリー・フォルトまでが、同じやうに、飛行（浮動）の夢の戀情的な判斷を代表してをるのは、注目に價する（「夢について、」第二卷、第七九一頁。Mourly Vold, Ueber den Traum, Bd. II, p. 791）。彼は戀情を以て「浮動の夢に對する最も重大なる動機」と呼び、この種の夢に伴ふ身體內の强い振動感と、この種の夢が勃起又は夢精と屢々結合してゐる事とをその證據に擧げてをる。

墜落の夢は一層屢々恐怖の性質を帶びる。婦人の墜落の夢の判斷は格別困難ではない。何故ならばこの種の夢は定まつて墜落の象徵的利用、卽ちそれは或る戀情的誘惑に對する應諾を書き換へたものを採りあげるのであるからだ。墜落の夢の幼兒時代源泉を未だ吾々は十分には汲み盡してゐない。が、殆どどんな子供でも、時として轉げ落ちたことはある、そしてその時に抱き起さ

れてはちやほやとあやされてをる。彼等が若し夜中に小さな自分の寢床から落ちた時には、彼等の世話をする人にその床に入れられたことがあつたのである。

屢々游泳の夢を見る人、大いに愉快に波を搔き分ける夢などを見る人は、嘗つて寢小便をやる人であつたのが、普通であつて、今やこの夢を見て彼等は長い間斷念せねばならなかつた一つの快感を繰り返へしてをるのである。游泳の夢がどういふ表出をなし易いかは、間もなく一二の實例によつて知るであらう。

火事の夢の判斷は、子供達が夜半に寢床を濡らすことのないために、子供達は「火をいぢつてはいけない。」と禁止する子供部屋の命令にまで、溯つてみると首肯される。卽ち、この種の夢にとつても亦、小兒時代の夜尿症の殘存記憶が基礎となつてゐる。「或るヒステリー症分析の斷片」の中に、私は一つのかかる火事の夢の完全なる分析と綜合を、その夢を見た婦人患者の病歷と關聯しつつ行ひ、そしてこの幼兒的材料がより成熟した年齡のいかなる昂奮の表出のために利用せられるかを示しておいた。

類型的の夢を以て、夢そのものは種々異つてもその顯在的夢內容の同一なるものが屢々繰り返

へされる事實と解するならば、かかる類型的の夢の多數をなほ吾々は引用することができるであらう。例へば、狹い小路を通つて行く夢、いくつもの部屋がずつと列つてるのを通つて行く夢、就眠前に神經過敏な人はその要心の手段まで講じた夜の盜賊の夢、野獸（牡牛、馬、）のため追ひかけられる夢、小刀や短劍や槍を以て威嚇される夢、等。最後の二種は、恐怖症患者の顯在的夢內容にとつては特性的である。特にこの材料を取扱ふ研究が出來たら、非常に感謝に價するであらう。私はさういふ研究の代りに、二つの注意を提出せねばならない。併しこれは必ずしも類型的な夢にだけ關係するものではない。

夢の解釋に從事すること多ければ多いだけ、成人の夢の多數は性的材料を取扱つてゐて、そして戀情的願望を表現するものである事を、愈々益々進んで認めざるを得ない。實際に夢を分析する人、と言ふのは、夢の顯在的內容から潛在的夢思想へと突き進む人のみが、これについて一つの批判を作ることができる。顯在的內容を記錄するだけで滿足する人は、決してできない（例へば、ベーネッケが性的夢に關するその研究に於いてなせる如きは、然り）。吾々をしてここに確定せしめよ、この事實は吾々に何等不意打ちの驚きをもたらすものではなくて、夢の說明についての

吾々の原則と全く一致するものである。小兒時代以來いかなる他の衝動も、性衝動がその多數の成分に於いて受けねばならないほど、ひどい壓迫を受けてゐるものはない。（フロイド、「性理論に關する三論文」參照、Freud, Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. 1905, 5. Aufl 1922）。いかなる他の衝動からも、あれほど多くの、あれほど強い、そして今や睡眠狀態に於いて夢を作るやうに働くところの、無意識的願望が殘つてをるものはない。夢判斷に際しては、性的錯綜のこの意味を決して忘れてはならない。併しまた、それを誇張して唯一無二のものにすることが不可なる事も勿論である。

細心な判斷を行つてみると、多くの夢について吾々は次の事を確定し得るであらう。夫等の夢は或る拒否し得ざる外被的判斷を成立せしめるが、その判斷では、同性的、と言ふのは、その夢を見る人物の常態的な性的行爲とは正反對的なる、昂奮の實現が認められるからである。併しながらシテーケルやアートレルが主張するやうに（W. Stekel, Die Sprache des Traumes, 1911; Alf. Adler, Der psychische Hermaphroditismus im Leben und in der Neurose, Fortschritte der Medizin 1910, Nr. 16, und spätere Arbeiten im Zentralblatt für Psychoanalyse I,

1910—11.)。凡ゆる夢が兩性的だと判斷される、と考へるのは、證明できないと共に誠らしからぬ一般化であると思はれ、私は殊に、極めて廣い意味での戀情的欲求——以外の欲求を滿足させる、例へば、饑餓の夢、渴の夢、便宜の夢等々の、多數の夢が存在するらしい、目前の現象を除外することはできない、と思ふからである。「凡ゆる夢の背後には死の保留條件が見出される」(シテーケル)とか、凡ゆる夢は「女性系統から男性系統への前進」を認めしめるとか、いふ類似の提示も亦、夢判斷に於いて許される程度をば、遙かに踏み越えるものだ、と私には思はれる。—―文獻の中に飽くことなき反對論を見出してをるかの主張、凡ゆる夢は一つの性的判斷を要求するものだ、といふ主張は、私の「夢判斷」にとつては無關係である。「夢判斷」の七つの版のいづれにもかかる主張は見出されないし、この書の他の內容と明瞭に矛盾してをる。

目立つて無邪氣な夢が徹頭徹尾甚だしい戀情的な願望を具現するものである事を、吾々は旣に他の箇所に於いて主張したのであつたが、多數の新しい實例によつて、猶ほそれを固めることができるかもしれない。併し、いかなる方面から見ても何か特別なものを認めることはないであらうやうな、無頓着に見える多くの夢でさへ、それを分析してみた後には、屢々案外なる種類の

疑ひもなく性的な願望昂奮へ溯らされるのである。例へば次に示すところの夢に於いては、それの判斷の仕事をしてみない前に、誰が或る性的願望を推測するやうな事があるだらうか？　夢をみた本人の語るところでは、「二つの堂々たる宮殿の間に、少しばかり引きこんで、一軒の小さな家があつて、その門は閉められてゐる。私の妻は私を街路の少しの間、その家のところまで案內して行き、扉を押しこんだ。そこで私は急いで且つ愉快に、一つの斜に勾配のついた內庭へ滑り入つた。」

夢の飜譯に多少練習を有してをる人は、無論直ぐに、狹い場所への侵入、閉ぢられた扉の開くことは最も屢々用ひられる性的象徵作用に屬する事を想起せしめられ、そしてこの夢の中に容易に、背後（女の身體の二つの堂々たる××の間）からの××の試みの表出を見出すであらう。狹い斜に勾配のついた通路は勿論×である。夢みた本人の妻に轉嫁されてをる助力はどうしても次のやうな判斷をなさしめる、即ち、實際に於いては正妻に對する遠慮があるばかりにかかる試みを思ひ止まつてをるのだ，と。そして訊きただしてみた結果によると、その夢を見た日の晝に、この男の家庭へ一人の若い娘が傭ひ入れられた。その娘は彼に好き心を起させ、こいつならかう

いふやうな接近に對しても大した抵抗はしないだらう、といふ印象を彼に與へたのであつた。二つの宮殿の間の小さな家はプラーグ市のウラジン區に關する殘存記憶から採り上げられ、そして從つてこの町出身のかの娘を指示するものである。

私が患者達に向つて、自分の母と性的に關係するかのオイディプス夢の頻々たる事を强調すると、私はその返事に、自分はそんな夢を思ひ出すことはできない、と答へるのを聞く。併しすぐその後に、彼等には或る別な、不明瞭なそして無頓着な夢の記憶が浮んでくる。その夢を彼等は各自に繰り返へし頻々と見たことがあるのである。そしてそれを分析してみると、それは同じ内容の夢、卽ちやはり一箇のオイディプス夢であることがわかる。母との××の覆面的な夢の方が、正直な夢よりは數倍頻々たるものである事を、私は斷言し得る。

（かかる覆面的なオイディプス夢の類型的な一例を私は「精神分析中央雜誌」第一號に發表した（後で紹介する）。詳しい判斷を添へた別の一例をランクが同誌第四號に發表した。眼の象徵的表示が特に現れる他の覆面的オイディプス夢に關しては、ランク（「精神分析國際雜誌」第一號）を見よ。同誌には又、エーデル、フェレンチー、ライトレルの「眼の夢」及び眼の象徵に關する硏究がある。オイディプス傳說に於けるかの眼を

剴る話は、他の場合と同じく、去勢の代理と解釋せられる。包み匿すところなきオイディプス夢の象徵的判斷も、古代の人々にとつて知られてゐなくはなかつた。(O. Rank, Jahrb. II, p, 534 參照)。「例へば、母との××の夢、それを夢判斷者達が土地の獲得に對するよき前兆(母なる大地)なりと解釋した夢の話は、ユリウス・ツェザールによつて傳へられてをる。同じく有名なるはタルクイニニ町の人々に與へられた神託であるが、それは、町の人々の中で母に接吻する者こそ羅馬の支配權を握るであらう、といふのであつた。そしてこれをプルータスは母なる大地への指示だと解釋した。これに加へて猶ほヘロドトス(Herodot VI, 107)が語るヒッピアスの夢を參考せよ。「然るにヒッピアスは夷狄をばマラトンに向つて案內せるが、その前夜彼は次の如き夢幻を見たるなりき。卽ち彼には、われわが母の傍に眠れり、と覺えぬ。さて彼はこの夢によつて結論して曰く、われは雅典に歸り行きて、昔日の如くに、再びその支配權を握り、而して祖國に於いて死するべし、と。」是等の神話と判斷とは一箇の正しい心理學的認識を示すものである。私は次のやうな事實を見出してをる、卽ち、自分が母から特に最屓にされてをる、特に優遇されてをると自覺してゐる人は、實生活に於いて、かの往々にして英雄的に見えそして實際上の成功を强奪するやうな、自己に對する特別なる確信と、搖り動かし難い樂天主義の人物である。)

(一種の覆面せるオイディプス夢の類型的な實例。或る男が次のやうな夢を見た。彼は或る婦人と祕密な關

係を持つてゐる。別の男がこの婦人と結婚しようとする。彼はこの男が自分等の關係を發見し、そのために結婚が駄目になることはあるまいかと心配し、それでこの男に對して非常に優しい態度をとり、すり寄つて接吻をする。――この夢を見た男の實生活に於ける事實は、この夢の內容に對してただ一點に於いてのみ觸れてゐる。彼は或る既婚の女と祕密な關係を結んでゐて、そして女の良人、それと彼は友人である、その良人の或る曖昧な言葉が、若しや何か氣がついてるのではあるまいか、といふ懸念を彼に呼び起したことがあつたのである。併し事實としては猶ほもつと別の事が働いてをるのであつて、それを夢の中に擧げることは避けられてゐる、にも拘らずそれこそはこの夢の理解にとつて鍵を與へるものだ。良人の生命は或る機質的病患のために威嚇されてゐた。妻は良人の突然の死の可能性に對し用意してゐる。それで夢を見た本人は、良人の死後にその若い未亡人を自分の妻にしようといふ目論見を意識的に抱いてをる。この外的な境遇のために夢の主人公はオイディプス夢の形勢へ移し置かれた。即ち彼の願望としては、かの婦人を自分の妻として獲得するためにはその良人を殺す、といふことであり得る。彼の見た夢はこの願望を僞善的な歪みを以て表現してをる。別の男と結婚してゐる代りに、これからやつと別の男が彼女と結婚しようとする、といふやうに入れかへたが、それは彼自身の祕密な目論見に適合することだ。良人に對する敵意的な願望はわざとらしい優しさの背後に匿れてゐる、そしてこのわざとらしい優しさは彼が小兒であつた時代に父に對してとつた態

度についての記憶に由來するものである。)

風景又は土地の夢であつて、その夢の中で、俺は既に一度そこに居つたことがあつた、といふ斷言が强調されるものがある。然るにこの「そこを見たぞ」といふのが、夢の中では或る特殊な意味を有してゐる。その場合にこの場所なるものは、常に母の生殖器である。實際に「既に一度そこに居つたことがあつた」と、これほどの斷言を以て主張し得る場所は、外には一つもない。たつた一回、或る强迫神經病患者が或る夢を報告してる時に、自分は既に二度行つたことのある住居を訪ねる、といふ文句を述べて、私を狼狽させたことがある。併しこの患者こそはかなり以前に私に向つて、自分は六歲の時に一度母の寢床に一緒に寢た、そしてその機會を惡用して眠つてる人の×××の中へ指をさし入れたことがあると、自分の六歲の時の出來事を語つたのであつた。

屢々恐怖に滿たされてゐて、狹い場所の通行か、又は水の中に留つてゐるかするのを內容とすることも時々あるやうな夢の大多數の根柢になつてるのは、子宮內生活について、母胎の中に居た間について、及び出產についての種々の想像である。以下に私は或る若い男の夢を採用するが、

この夢は空想の中に於いて兩親の間の××を盗み聞きするために子宮内生活中の機會を利用してをる。

「彼は或る深い坑道の中に居る。そこには丁度ゼメリンクのトンネルに於いてのやうに一つの窓がある。この窓を通して初めには空虚な風景が見える。そのうちに彼はその中へ一つの繪を組み入れてみると、すぐにそれがそこに現れてそして空虚を滿たした。その繪は道具によつて深く掘りかへされる一つの畠を現してゐる。そして美しい空氣、そこでやる十分な勞働の考へ、青黑い土くれが或る快い印象を與へる。その後で彼はもつと先へ行くと、一冊の教課書が開けてあるのを見た………そして（子供の）性的感情に對してこの教課書の中ではいかにも深い注意の拂はれてをるのを不思議に思つたが、その時彼は私のことを思ひ浮べざるを得なかつた。」

或る婦人患者の面白い水の夢は、私の精神分析的治療に於いて特別に利用されたものだが、次の如くである。

「某の湖畔に避暑滯在中に彼女は暗い水の中へ落ち込んだが、そこには青白い月が水中に映つてゐた。」

この種の夢は出産の夢である。顯在的夢の中で報告される事實を逆にしてみる、即ち水の中に落ちこむ、の代りに——水の中から出て來る、生れる、と解する時には、この夢の判斷がつく（水の誕生の神話的意味については、ランクの「英雄誕生の神話」を見よ、Rank, Der Mythus von der Geburt des Helden, 1909）。人がそこから生れる場所は、佛蘭西語の la lune（月——尻）のふざけた意味を思ひ浮べるなら、わかるだらう。してみると、青白い月は白いお臀であつて、子供はそこから出て來たんだと早くも想像してをるものだ。さて、この婦人患者がその避暑地に於いて「生れる」ことを願望する、それは何を意味したらよいか？　私は彼女に訊いてみた、彼女は躊躇なく答へた。わたしは治療のおかげで新しく生れたやうなもんぢあないですか？　かくてこの夢はあの避暑地に於いて診療を續ける、即ち彼女を其處に訪ねてくれ、といふ招待になる。恐らくまたこの夢は、みづから母となりたい、願望の一つの全く控へめな暗示をも含んでをる。（母胎の中に於ける生活についての空想と無意識的な思想の意味を私が評價する事を學んだのは、やつと後のことであつた。夫等の空想と思想とは、生きながら埋められるといふ、多くの人々の奇妙な恐怖に對する解説を含んでをると同時に、更に、死後の生の續きに對する信仰の最も深い無意識な根據をも含んでゐ

る。死後の生の續きとは、出生以前のこの不氣味な生の、未來への投影を現すにすぎない。ともあれ、出產行爲は最初の恐怖體驗であつて、從つて恐怖情念の源泉であり模範である。）

もう一つの出產の夢を私はその判斷と共に、ヨーネスの或る研究から借用しよう。「彼女は海岸に立つて、自分の子供であるらしい一人の小さな少年が水中を涉つてゐるのを眺めてゐた。少年は涉りつづけてゐたが、やがて水が彼を蔽ひ、その頭が水の表面で上へ下へ動くのしか彼女には見えなくなつた。その後でこの場面は或るホテルの人で一杯になつたホールに變つた。彼女の良人は彼女の傍から去つた。そして彼女は誰か見知らない男と會話を始めた。」

「この夢の後半は分析に際して譯なく、彼女の良人から脫れ或る第三者と結ぶ親密な關係の表出であることが暴露された。夢の第一部は明白なる出產想像であつた。夢に於いても神話に於いてと同じく、羊水からの小兒分娩は普通に倒錯によつて小兒が水中へ入ることとして表出される。澤山の他の例もあるが、アドニスやオシリスやモーゼやバッカスの誕生はよく知られたこれの實例を與へてくれる。少年の頭が水の中で浮びつ沈みつするのは、この婦人患者をして直ぐに、彼女が彼女のただ一回の姙娠中に覺えてゐた胎兒運動の感覺を思ひ出さしめた。水の中へ入つて行

く少年のことを考へるのは或る幻想の記憶を呼び起すものであつた。その幻想の中で彼女は、自分が少年を水中から引き出し、少年保護所へ伴れて行き、洗つてやつて着物をきせ、そして最後に自分の家へ伴れて行く、さういふ有様を見たことがあつた。――かるが故に、この夢の後半は蔽匿された夢思想の前半に對して關係を持つてゐるところの脱走と聯絡する思想を表示してをる。夢の前半は後半の潛在的内容即ち出産想像に適應してをる。前に擧げた倒錯の外に、この夢の前半と後半の各自に於いて、更にもつと倒錯が行はれてゐる。前半では子供が水の中へ入り、そして然る後にその頭をぶらぶら動かしてをるのであるが、その根柢に横たはる夢思想にあつては、先づ胎兒運動が浮び上り、そして然る後にその子供は水を離れるのである（一つの二重的倒錯）。後半では彼女の良人が彼女の傍を離れた、併し夢思想にあつては彼女が良人から離れるのである。」

更に、アブラハムは最初の分娩を控へてをる或る若い婦人の出産夢を物語つてをる。部屋の中の床板の或る箇所から一本の地下道が直接水へ通じてをる（出産の道――羊水）。彼女は床板にある一枚の揚げ板を持ちあげた、すると直ぐに褐色がかつた毛皮に包まれた、海豹とよく似た一つ

の生物が現れた。この物の正體は彼女の弟であつた、そして彼女は以前からこの弟に對しては母のやうな關係に立つてゐた。

ランクは一系聯の夢によつて、出產夢は尿刺戟夢と同一の象徵作用を利用することを示した。出產夢にあつては戀情的刺戟は尿刺戟として表出される。是等の夢に於ける意味の成層は小兒時代以來の象徵の意味の變化に相應するものである。

吾々はここで、前に（上卷第四一三頁）於いて中斷した本論へ、卽ち、夢形成に對して器官的睡眠妨害的刺戟の演ずる役目の考察へ歸つてもよい。この刺戟の影響の下に成立する夢は吾々に願望實現の傾向と便宜を選む性質とを全く明らかに示すばかりでなく、更にその上非常に屢々、十分に透明なる象徵作用をも示してくれる。何故なら、或る刺戟、それの滿足が象徵的な變裝を以て夢の中で旣に試みられても駄目であつたやうな或る刺戟は、遂に覺醒に至らしめることは稀ではないのである。この事は遺精の夢にも、並びに尿意や便通刺戟のために惹起される夢にも、あてはまる。遺精の夢の特色的な性質は、吾々をしてただに、或る種の旣に類型的だと認められてはゐるけれども併し猛烈に論議された性的象徵の假面を直接に剝ぎとつてみせしめるばかりで

なく、次の事を確信せしめることもできる。卽ち、多くの外見上は無邪氣な夢の局面は或るひどく性的な場面の象徵的前奏曲にすぎない。併しかかる場面は大抵ただ比較的稀な遺精の夢に於いてのみ直接表示される、のに反して實に屢々それは一つの恐怖夢に一變し、そしてそれがやはり覺醒に導くのである。

尿刺戟の夢の象徵作用は特別に透明であつて、昔から推測せられてをる。既にヒッポクラテスは、人が若し噴水や泉の夢を見るならばそれは膀胱の或る障害を意味するものだ、といふ解釋を持つてゐた（エッチ・エリスに據る）。シェルネルは尿刺戟の象徵作用の多種多様性を研究し、既に次の如く主張した。「比較的强い尿刺戟は形を變へて性器局部への刺戟となり、またそれの象徵的な形象となる………尿刺戟の夢は往々同時に性的夢の代表でもある。」

この問題については私はオットー・ランクの「覺醒の夢に於ける象徵重積」（O. Rank. Symbolschichtung im Weckfraum）に關する研究の中の說明に從つて來たのであるが、ランクは次の事を非常に眞實らしいものたらしめてをる。尿刺戟の夢の大多數は實は性的刺戟によつて惹起される、そしてこの刺戟は先づ逆行的方法を以て幼兒時代の尿道戀情感覺の形に於いて滿足を求める

ものである。次に特別に教示に富むものとしては、かくして作られた尿刺戟が覺醒に導き膀胱排泄に至らしめるが併しそれにも拘らずその後夢は猶ほ續けられ、そしてその欲求を今や赤裸々なる戀情的形象を以て現すやうな、いくつもの場合である。（幼兒時代的意味に於いては膀胱に關する夢の根柢となつてをると同じき象徴表出が、「最近時的の」意味に於いては專ら性的内容を以て現れる。水＝尿＝精液＝羊水。舟＝舟に乘る（排尿する）＝葫（箱）。濡れる＝漏尿＝交接＝姙娠。游ぐ＝尿の充滿＝未生兒の滯溜。雨＝排尿する＝繁殖の象徴。旅行する（乘物で行く＝乘物から降りる）＝寢床から起きる＝性的な交りをする（乘物で行く、新婚旅行）。排尿する＝性的排泄（遺精）。」ランクに據る。）

腸刺戟の夢は全く類似的な工合にそれに屬する象徴作用を暴露し、そしてその際に、民族的心理學的にも十分に證據立てられた黃金と糞との關聯を實證するのである。「例へば、或る婦人は腸疾患のために醫師の診療を受けてゐた時に、一人の寶掘りの夢を見た。彼は田舍の便所のやうな外觀の小さな木小舍の近くで寶を掘つてゐた。この夢の第二部の内容は、彼女の子供、體をよごした小さい娘のお尻を洗つてやることだつた。」

出產の夢に對して「救助」の夢が關聯する。救助、殊に水中からの救助は、若し婦人がそれを

夢みるのであるならば、出産と同意義である。併し夢みる當人が男子だつたら、その意味に變化が加へられる。（プフィステルの「精神分析の靈魂救濟と靈魂治療」に揚げられたかかる一つの夢を見よ。(Pfister, Ein Fall von psychoanalytischer Seelsorge und Seelenheilung. Evangelische Freiheit, 1909)。――「救助」の象徴については、私の講演、「精神分析治療學の將來の機會」、竝びに「戀愛生活の心理學資料。第1、男子に於ける相手選擇の或る特殊的なる型について。」Die zukünftigen Chancen der psychoanalytischen Therapie. Zentralblatt f. Psychoanalyse, Nr. I, 1910.—Beiträge zur Psychologie des Liebeslebens, I. Ueber einen besonderen Typus der Objektwahl beim Manne, Jahrb. f. Ps.-A. Bd. II, 1910 等々。）

寢床に就く前に吾々がそれを懸念し、そして時として睡眠中に吾々を見舞ふところの、盜賊や夜間の闖入者や幽靈は、同一の幼兒時代殘存記憶から發生してをる。それは、子供が寢床を濡らさないやうに小用をたさせるため眠つてるのを起すか、又は、眠つてゐて兩手をどうかしてをるかを注意深く見てやるために布團をあけるかする、夜中の訪問者なのである。是等の恐怖夢の二三を分析してみて、私はこの夜中の訪問者の人物を再認識せしめることができた。盜賊は必ず父親であり、幽靈は白い寢衣を着た女に相應するものであらう。

第六節　表出の實例——夢に於ける計算と説話

さて夢形成を支配する契點の第四をその適當な箇所に於いて記述するに先だち、私は私の夢蒐集の中から二三の實例を引き出してみようと思ふ。是等の實例は、一方では吾々に知られた三つの契機の共同作用を説明し、他方では未だ確證されない儘にして置いた主張に對する證明を追補するか、又はそれからして否定すべからざる推定を行ふことのできるものである。私にとつては夢仕事についての今迄の記述に於いて、私の得た結果をば實例によつて證明するのは眞に難しいことになつてしまつてをつた。箇々別々の命題に對する實例は一つの夢判斷の聯絡の中にあつてこそ證明力がある。その聯絡から引き離してしまつたなら、夫等の實例はそのよいところを失つてしまふ。そして少しでも深められる夢判斷はすぐに非常に廣範圍のものとなり、その結果、探求の緒を見失はしめる、その探求の解説にこそこの判斷は役立つべきであるのに。今私が、元來は今までの節の本文に對する關係によつて聯絡的に保たれるものをば、ここにいろいろと竝べ立てるとしても、その罪を上述の如き技術的理由が辯解してくれるかもしれない。

先づ、夢に於ける特別に異色あるか又は普通ではない表出法についての二三の實例。或る婦人の夢の內容はかうである。「女中が窓の掃除でもするかのやうに梯子の上に立つて、一匹の黑猖々と一匹のゴリラ猫（後に、アンゴラ猫と訂正された）を抱いてゐる。彼女はそれ等の獸をこの夢をみてる婦人に投げつける。黑猖々が婦人にからみつく、そしてそれは大變にいやな感じだ。」この夢は非常に簡單な一つの手段によつてその目的を達したものである。卽ち、一つの慣用句を文句通りに取りあげ、そしてその言葉の意味通りに表示してをる。「猿」は獸の名が一般にさうであるやうに惡口である、そしてこの夢の局面は正に「あたりに惡口を投げ散らす」といふより以外の何物をも意味しない。同一種の蒐集が夢仕事に於けるこの簡單な技巧の應用に對するもつと多くの實例を持ち出すことは容易であらう。

もう一つの夢もこれと全く類似した經過である。「或る婦人が目立つて畸形的な頭蓋をした小供をつれてゐる。この小供がこんなになつたのは母胎にゐた時の位置のためだつた、といふことを彼女は聞いてゐた。醫者が言つた、壓縮によつてこの頭蓋をもつとよい形にすることはできるだらう。併しそれは腦髓に害を與へるかもしれない、と。これは男の子だから、こんな畸形でも損

は少い、と彼女は思つた。」――この夢は、夢を見た婦人が精神分析治療に對する說明の中で聞いたことのあつた「小兒の印象」といふ抽象的な概念の彫塑的な表出を含むものである。
次の例では夢の仕事は少しばかり別な道を取つてをる。この夢はグラーツ郊外にあるヒルム池への遠足についての記憶を含む。「外は恐ろしい荒模樣だつた。貧弱なホテル、壁からは水が垂れる。寢臺は濕つてゐる。」(この內容の最後の部分は、私がここに紹介するよりも夢の中ではもつと直接的でなかつた)。この夢は「充溢――餘計なことを」意味する。夢思想に見出される抽象的意味は、先づ少しく無理に曖昧化されてをる。「溢れ流れる」、又は、「流動的な、そして充溢的な、」といつたやうなもので代表せられ、然る後に同種的な印象の重積によつて表出せられた。外でも水、內でも壁に水、寢臺の濕氣としての水、といふぐあひに、總てが流動的であり、餘計に充溢してをる。(夢の中に於ける表出の目的のためには、綴字法は言葉の響の陰に退いてしまふことは、例へば詩の脚韻がそれと同じやうな自由を敢てしてもよいのを考へると、奇異のことではないであらう。ランクが報告し非常に詳しく分析した或る長い夢によると、その夢の主人公たる若い娘が野原の中を散步しながら、美しい大麥や小麥の穗を切り取つてゐる、若い男の友達が彼女の方へやつて來る、そして彼女は彼に出會ふ

のを避けようとする。これを分析してみると、夢思想の中心は敬意のための接吻であることがわかつた。穗はもぎ取るべきでなく、切り取るべきである、(禮儀正しく處置すべきである)。さういふ穗がこの夢の中でさういふ意味で、そして敬意と結びついた壓縮を以て(穗——Aehren が敬意のため——in Ehren に、言葉の響から轉じて行き、語の綴りには注意されてゐない)、他の思想の或る長い系列の表出に役立つてをる。——他のいくつかの場合に於いては、言葉が夢思想の表出を非常に容易ならしめてをることもある。さういふ場合には、元來は形容的で具體的な意味のものであつたのが、現在では色褪せて抽象的な意味に使用されてをるやうな語がずつと連續して、この表出のために驅使されるのである。夢はさういふ語にそれの以前の十分な意味を再び與へるか、或ひはその語の意味を更に一歩進んで變更せしめるかするだけで足りる。例へば、誰かが自分の兄弟が一つの箱の中に匿れてをる夢を見たとする、それを判斷してみると、この箱の代りに一つの「棚」が出て來る。そして夢思想の內容は、この兄弟はみづからを「局限」せねばならない、自分の代りに、といふのである(獨逸語の棚 Schrank ——局限する sich einschränken)。もう一つの夢では、山へ登る、その山からは非常に廣い眺望を持つた。この夢を見た人は夢の中で自分を兄弟と同一化してしまつた、そしてその兄弟は極めて遠い東洋との關係を取扱ふ雜誌「展望」を發行してをる。——「綠衣のハインリヒ」(ゴットフリート・ケルレルの小說)の或る夢では、橫着な馬が非常に綺麗な燕麥の中で轉がつてゐる、その燕麥の粒が一

つ一つおいしい扁桃や乾葡萄や新しい小錢であつて、一緒に赤い絹に包まれ、一本の豚の毛の端で結びつけられてゐる。作者（又はその夢を見た本人）はすぐにこの夢表出の判斷を與へてくれた、といふのは、馬は擽ぐられて氣持よくなり、それでかう叫んだ、燕麥が私を刺す（それは一つの成句であつて、横着になる、を意味する）。――ヘンツェンに據ると、北歐古代の傳說文學は成句やひつかけ言葉の夢を特別豐富に利用してをり、そこには二樣の意味を持つ言葉や又は言葉の洒落を含まない夢の例は殆ど一つもない。）

かかる表出方法を蒐集し、それの根柢となつてをる原理を順序立てるのは、一箇の特別なる仕事であらう。

（表出の例。以下の表出の多くのものは、殆ど機智的であると言へる。若しその夢を見た本人がそれ等を報告できなかつたならば、吾々自身では決してそれ等を推量はしなかつたであらう、といふ印象を受ける。

―

一、或る男の夢。「彼は誰かの名前を訊かれた、併しそれを思ひ出すことができなかつた。」この男自身の說明によると、これは、そんなことは夢にも思ひつかないことだ、といふ意味である。

二、或る患者が一つの夢の話をした。その夢の中では、「總ての動作してる人物は特別に大きか

つた」彼女は附け加へて言つた。「これは私の未だ小兒時代の或る出來事が中心になつてるに相違ない。なぜなら、その頃には總ての大人は私にはとても恐ろしく大きく見えたのは當然だつたからです。」彼女自身はこの夢には現れなかつた。——小兒時代の轉移は他の夢にあつてはまた別に表現せられ、時間が空間に飜譯されることがある。その關係する人物や場面がずつと離れたやうに、或る長い道の端に見えるか、又は、逆さに向けたオペラグラスで眺めたかのやうに見えるのである。

三、覺醒時には抽象的でそして不定的な表現法を用ひる僻はあるが、其他では上手な機智の才能を持つてる或る男が、或る聯絡の下に次のやうな夢を見た。「彼は或る停車場へ行つた、丁度列車が到着したところだつた。然るにその時プラットフォームがその停つてる列車の方へ近寄せられた。」即ち、實際の出來事の途方もない倒錯である。この細部は、何か其他の事がこの夢內容の中で倒錯されることになつてをるぞ、と警告する一つの指標に外ならない。又、この夢を分析して行くと、逆立ちをして兩手で歩いてゐるところを描いた繪本についての記憶に達する。

四、同じ男が別の機會に或る短い夢の報告をした。それは殆ど判じ繪の技巧を想起せしめるも

のである。「彼の伯父が自動車の中で彼に接吻をした。」彼はすぐその後に判斷を附け加へて述べたが、私だつたらとてもこんな判斷を見出さなかつたであらう。曰く、あれは自動戀情であると。覺醒時の諧謔でもやはり同じやうなことを言つたかもしれない。

五、「二人の婦人を寢臺の背後から引き出した夢。」それは、夢を見た男はこの婦人を特に好んでをる、のを意味する。

六、「士官になつて或る食卓で皇帝の向側に對座してゐた夢。」それは、彼は父と對立するの意味。

七、「骨折をした或る人物を診療する夢。」分析によると、この骨折の破壞は結婚の破壞の表出である、云々。

八、時刻は夢內容に於いて非常に屢々小兒時代の年齡を代表する。例へば、或る夢において早朝の五時十五分は五歲三箇月の年齡、自分の弟が生れた重要な時期を意味してゐた。

九、夢に於ける年齡の表出の、もう一つの例。「或る婦人が二人の小さい娘を伴れて行く。娘達は一年三箇月だけ齡が違つてゐる。」――この夢を見た女は、自分の知つてゐる家庭で、これに該

當するやうなのを見出し得なかつた。で、彼女自身の判斷によると、二人の娘は彼女自身を表出してをる。そしてこの夢は彼女に、彼女の小兒時代に於ける二回の創傷性的出來事は丁度この期間だけ隔たり（三歳半と四歳九箇月）があつたのである事を、教へてくれたものであつた。

十、精神分析的治療を受けつつある人が、屡々この治療の事を夢み、そしてこの治療が惹起する一切の思想と期待をば夢の中に表現せずにゐられない、といふ事は怪しむに足りない。治療のために選まれる形象は定まつて旅行の形象であるが、大抵は、新しいそして複雜な道具として、自動車に乘つてのそれである。その場合、自動車の速度に對する指摘の中には診療を受けてゐる者の自己の計算に對する嘲笑が現れる。覺醒時思想の要素たる『無意識的」が夢の中で表出されることになると、それは、「地下の」場所によつて代理されるが、これは全く合目的なことであつて、若し精神分析的治療と全然關係のない場合であつたら、この地下の場所なるものは女子の腹か又は子宮を意味するものであつた。夢の中で「下」は非常に屡々生殖器に關係し、それの正反對の「上」は顏、口又は胸に關係する。猛獸を以て夢仕事は定まつて情熱的な衝動を象徴する。夢を見る本人のそれであることもあるし、本人が恐怖を感じてる他の人物のそれであることもあ

るが、つまりは、全然輕微なる轉移を加へたのみで、かかる情熱の所有者である人その人を象徴する。恐怖される父を怒れる獸、犬、亂暴な馬などで表出する作用、それはトテミズムを想起せしめるものであるが、かかる表出作用まで進むのには、ここからもう大したことでない。吾々はかう言ふことができるであらう、猛獸は自我によつて恐怖せられ壓縮によつて攻められてゐるリビドの表出に役立つのであると。患者の夢の中にあつては、神經病患者、即ち「病氣である方の人物」は自分から分裂せられ、そして獨立的人物として現されることも、往々ある。

十一、(ハンス・ザックスからの引用。)「夢判斷」によつて吾々は次の事を知つてをる。夢の仕事は或る語又は或る言ひ廻しをばありありと具體的に表出するための種々なる方法を心得てゐるものだ。例へば、表出すべき表現が二樣の意味を持つてゐる、といふ事情を利用して、その二重的意味を謂はば「轉轍器」として用ひながら、夢思想に現れる第一の意味の代りに、第二の意味を顯在的夢內容の中へ採用することが、夢の仕事にはできるのである。

次に報告する小さな夢に於いてはそれが行はれてゐる、しかもそれに役立つ最近時的日中印象をば巧みにも表出手段として利用しながら。

私はこの夢を見た日には風邪を引いてゐて、そのために夕方には、できるならば夜中に寢床を離れまいと決心をした。この夢はただ私の日中の仕事を續けさせたもののやうに見える。私は新聞の切拔を一つの本へ糊りつける仕事をやり、その際に私はその切拔の一つ一つを適當な場所へあてがふのに骨を折つた。さて、夢の內容はかうであつた。「私は切拔の一節を本の中へ貼らうと骨折つてゐる、然るにそれがその頁に合はない、そしてこの事が私に大きな苦痛の原因となる。」

私は目を醒ました、そして夢の苦痛は實際の腹痛としてその後も猶ほ續いてをるのを確めねばならなかつた。さうしてみると、この苦痛が私をして私の目論見に不忠實ならしめるやうに强ひたのであつた。この夢は「睡眠の番人」として、「然るにそれがその頁に合はない」といふ文句の表出によつて、私の寢床の中に留まつてゐたいといふ願望の實現を、私に對して欺いて見せたのである。(以上、ザックスから引用)。

吾々は正にかう言ふことができる、卽ち、夢の仕事は夢思想の視覺的表出のためには、それが覺醒時の批判にとつて許されるものと思はれようと、又は許されないものと思はれようと、自分の手に入るものならば凡ゆる手段を利用する。そしてそのために、夢判斷のことをただ聞いてを

るばかりで、それを自から練習したことのない人々から見ると、夢の仕事は疑はしいものであり、嘲笑すべきものであると言はれるのである。シテーケルの著書「夢の言葉」にはさういふ實例が澤山ある、併し私はこの本から證據を採用することを避ける、何故ならば、この著者の無批判と技術的放漫は臆斷に捕はれてゐない人をでさへも不安ならしめるからである。

十二、タウスクの研究「夢表出に役立つ衣服と色彩」(V. Tausk, Kleider und Farben im Dienste der Traumdarstellung. Int. Zeitschr. f. Ps.-A., II, 1914)から取つた例。

イ。Aなる男の夢。「彼は彼の昔の女家庭教師が黒い薄地木綿の着物(Lüsterkleid)を着てるのを見た。その着物は尻の上にぴつたりとくつついてゐた。」――この夢の意味は、彼はこの女を浮氣者(lüstern)だと聲明する、といふのである。

ロ。Cなる男が夢の中で、「X街道に於いて一人の娘を見た、娘は白い(weiss)光に包まれ、そして白い上張りを纏うてゐた。」――この夢を見た男はその街道でワイス(Weiss)といふ未婚の女と最初の親交を交したことがあつた。

ハ。D夫人の夢。「彼女は老ブラーゼル(Blasel――八十歳になるキーンの俳優)がすつかり

武裝して（in voller Rüstung）、安樂椅子の上に寢てをるのを見た。然る後彼は机や椅子を飛び越え、劍を拔き、鏡の中に姿をうつしてみて、そして敵がゐると空想してそれと戰ふかのやうに、劍を空中にぐるぐると振り廻した。

判斷。この夢を見た婦人は古い膀胱疾患を持つてゐる。彼女は精神分析治療の際に安樂椅子の上に横たはるし、そして彼女は自分で鏡を見ると、その年齡と病氣にも拘らず、まだ甚だがつちり（sehr rüstig）したものだ、とひそかに自分で思つてをるのである。

十三、「良結果」の夢。――夢を見た本人は男なのであるが、彼は「姙娠中の女として寢床に横たはつてをる。狀態が大變に辛くなつてきた。彼は叫び聲を擧げた、こんなことならいつそのこと……………（分析をしてる時に彼は或る看護の者についての記憶によつて、そのあとの言葉は、石を割つてやる、といふのだつたと補つた）。彼の寢床の背後に一枚の地圖が掛けてあつて、それの下の端は木の縁によつてぴんと抑へてあつた。彼はこの縁の兩端をぐいと摑んで、それを下の方へ剝がさうとしたが、併しその際にその縁は横に裂けないで、縱に半分づつに破け散つてしまつた。すると彼は輕快な氣持になり、そして出產をも片づけてしまつた。」――彼は助言も受けずに、縁

(Leiste) を下へ剝がすのは一つの良結果 (eine grosse Leistung) を表示するものだと判斷した。卽ち、彼は自分が女の地位に置かれてをる境遇から自分を剝がしてしまふ、といふ表示によつて、(治療中に於ける) 彼の不愉快なる境遇から脫がれ得る (治療上の) 良結果が意味されてをるのだ、と判斷した。………木の緣が裂けないで、縱に破けた、といふ何のことやら判らないやうな部分に對しては、彼は破壞といふことと結びついてをる重複は去勢に對する暗示を含むものであることを思ひ出したので、それで說明がついた。夢は非常に屢々、二つの陰莖象徵の存在によつて、反抗的な願望對立を以て、去勢を表示することがある。緣といふ語 Leiste はまた鼠蹊部を意味し、そしてそれは勿論生殖器に近い人體の部分である。その後に彼はこの夢の判斷を綜合して曰く、自分は自分を女の地位に置いてしまふ去勢の威嚇を征服したのである。

十四、私が佛蘭西語を使つて精神分析的治療をやつた或る時のこと、或る夢を判斷せねばならなかつた。その夢の中に私は象になつて出たのである。勿論私は、どうして私はそんなぐあひに表出されるに至つたのか、と訊かずにはゐられなかつた。すると、その夢を見た男は答へた、「貴方は私を欺してる」(Vous me trompez ――そして語音の通ずる trompe は長い鼻の意味であ

る。）

夢の仕事にとつて、例へば固有名詞の如き非常に索然たる材料の表出が、非常にかけ離れた關係を無理に利用することによつて、成功することも屢々ある。私の夢の或る一つに於いて、「老ブリュッケが私に一つの課題を與へた。私は實驗材料を整ひ、そして何か、皺くちやにした銀紙のやうに見えるものを選り出した。」（この夢については猶ほ後に述べるであらう）。これに對する容易に見つけ出せなかつた考へは、「銀箔」（Staniol）といふのであつた、そしてこの考へに思ひつくと、私の夢が意味したものは著述家の名前 Stannius であることがわかつた。この名は、私が昔畏敬の念を以て眺めた、魚類の神經組織に關する或る論文に署名されてゐた。私の先生が私に與へた最初の學術的課題は實際或る魚、即ち、Ammocoetes の神經組織に關係してゐたのであつた。この名の方は探し繪のやうな夢表出の中には明らかに全然使用されてゐなかつた。（私はここになほ一つの奇妙な内容を持つた夢を挿入せねばならない。これはその上に小兒の夢としても注目に價するものであるが、分析によつて非常に容易く明らかにせられた。或る婦人が物語つた。「私は子供であつた時に次のやうな夢を繰り返へし見たのを思ひ出すことができる。神さまが尖端のとがつた紙の帽子を頭に冠

つてる、といふ夢である。丁度こんな帽子を食卓に坐る時私はよく頭に乗せられたのであつたが、それは外の子供等がその時の御馳走をどれほど貰つてをるか、などと私が彼等の皿の上を覗いてみたりすることのできないやうにするためだつた、そして神は全智である、と私は聞いてをつたから、この夢の意味は、帽子なんか冠せられたつて私は何でも知つてるぞ、といふのである。)

夢の仕事の本質が何處にあるか、そして夢の仕事はその材料卽ち夢思想を如何に取扱ふか、これを會得せしめる手がかりとなるのは、夢の中に現れる數と計算とである。その上、夢に出る數は迷信にとつては特別に寓意深いものとなつてをる。それで私はこの種の若干の例を私の夢蒐集の中から探し出してみるであらう。

(一)。精神分析的治療の終了の少し前に於ける或る婦人の夢から。「彼女は何かの代金を拂はうとする、彼女の娘が彼女の財布から三フローリン六十五クロイツェルを取り出す。併し彼女は言ふ、お前何をするんだね? あれはたつた二十一クロイツェルなんだよ」。この小さな夢は彼女の方から何等の說明を聞かないでも、私が彼女の境遇について知つてをることだけで、私には理解のいくものであつた。この婦人は外國人で、娘をヰーンの或る學校へ入れて置いた、それで自

分は私の診療をこの娘がキーンに滯在する間は續けてをることができた。三週間の後には娘の修業年限が終り、從つて治療の方も亦終りになるのであつた。この夢を見た前日に學校の女校長が彼女に向つて、娘を猶ほもう一年預けるやうに決心ができないか、と勸めた。これが因で彼女は自分の心では、もしさうなつた場合には自分の診療をも一箇年だけ延長することができるであらう、といふ方へ考へを續けてみたことは明らかであつた。さて、夢はこれに關係してをる。何故ならば、一箇年は三百六十五日に等しいし、年限と治療の終了までの三週間は二十一日によつて換算されるからである（假令診療の時數の方はそれと丁度同じわけではないけれども）。夢思想の中では時間と關係してゐた數が、夢の中では金錢に附け加へられてをるが、併しそれがために何か一層深い意味が表現されてをるわけではない、蓋し「時は金なり」である。三百六十五クロイツェルは次に勿論三フローリンと六十五クロイツェルである。夢の中に現れる支拂金額の小さいのは、願望の明白なる實現であり、その願望は診療と學校の修業年限の費用を少くすることにあつた。

（二）。一に較べてもつと複雜なる關係へ導くものは、次の夢に於ける數である。或る若い併し

もう數年この方結婚してをる婦人が、彼女とほぼ同じ年配の知人エリゼ・エル某女が最近婚約をした事を聞いた。その後で彼女は夢を見た。「彼女は良人と一緒に劇場に坐つてゐる。平土間の一方の側は全然がら空であつた。彼女の良人は彼女に語つた、エリゼ・エルとその許婚も芝居に來たかつたんだが、彼等は一フローリン五十クロイツェルで三つの席といふ惡い座席しか手に入れることができなかつたので、彼等は無論それを取らなかつたのだ、と。彼女は思つた、それだつて、ちつとも損ぢやなかつた。」

一フローリン五十クロイツェルは何から出てゐるか？　夢の前の日のまるで無關係的な動機からである。彼女の義理の姉妹が良人から百五十フローリンの贈與を受けたが、それで或る裝飾品を買つて、消費してしまはうと急いでゐた。卽ち、百五十フローリンは一フローリン五十クロイツェルの百倍に當る事に留意せねばならない。劇場の座席に關係するかの三は何から出てゐるか？これについては、その婚約をしたエリゼは彼女自身よりも、それと同じ數の月——三箇月——だけ年下である、といふ關聯しか判らなかつた。次に、夢の中の特徴、平土間の一方が空であつたといふのは、何を意味し得るのか、と訊きただしてみると、この夢の解釋に達した。これは或る

小さな出來事へのその儘の暗示であつて、その出來事をよいことにして彼女の良人は彼女をからかつたのであつた。即ち、彼女はその週の發表された芝居の中の一つに行つてみようと計畫して、その數日前に切符を買ふほど周到であつたが、そのために彼女は豫約料を拂はねばならなかつた。然る後に劇場に行つてみると、小舍の一方の側は殆ど空であるのを見出した。彼女は何も、そのやうに急いでする必要はなかつたんだのに。

私は今この夢に代るべき夢思想を擧げてみよう。「そんなに早く結婚するのは何と言つても馬鹿なことだ、私はそんなに急いでする必要はなかつたんだのに。エリゼ・エルの例でもわかるやうに、私はまだ今からだつて一人の男を得るのだつた。しかも待つてさへゐたら（義妹が急いで裝飾品を買ふのに對する反對）、百倍も立派な人（良人、意中の人）を得るのだつたらうに。お金（持參金）を出せば、三人もそんな男を買ふことはできたんだつた！」この夢の中では、前に取扱つたのに於いてよりも、ずつと高い程度を以て數が意味との聯絡を變更してをるのに、氣がつく。この夢の轉換と歪みの仕事は前のよりも一層盛んであつたのだが、これを吾々は、これの夢思想はその表出に至るまでに內面的抵抗の特に高度なるものを征服しなければならなかつたの

である、と判斷する。吾々はまた、この夢には一つの理窟に合はない要素が含まれてをる、卽ち、二人が三つの座席を取る筈である、といふことを看過し度くない。夢內容のこの理窟に合はない細部は夢思想の中で最も力說された思想、卽ち、そんなに早く結婚するのは馬鹿なことだ、といふ思想を表出するつもりのものである、と言ひ出してしまつたら、もはや夢に於ける不合理性の判斷の方へ逸れてしまふことになるであらうが、併しさう考へれば、二人の婦人を比較する如き全く從屬的な一つの關係の中に含まれた三（卽ち年齡の相違三箇月）は、巧みにも、この夢にとつて必要なる馬鹿げたことの製作に流用されてをる。實際上の百五十フローリンをば一フローリン五十に縮少したのは、この夢を見た婦人の壓迫されてをる思想の中に存する良人（又は愛人）の輕視に相應するものである。

（三）。もう一つの例は夢の計算術を吾々に見せてくれるが、この計算術はいかにも夢を當にならぬものにして了ふものであつた。或る男の見た夢。「彼はB某（彼が昔知己であつた家族）のところに坐つてをる、そして言ふ、あなたが私にあのマリーをくれなかつたのは、馬鹿なことだつたですよ。その後ですぐ彼はその少女に訊く。あなたは一體おいくつですか？　答、私は一八八

二年に生れました。――ああ、それでは二十八におなりですね。」

この夢は一八九八年にあつたのであるから、かかる計算の拙劣なることは明らかである。そしてこの夢を見た人の計算力の無能は、若し外に何の説明の方法がなければ、痲痺症患者のそれと竝べてみてもよい。この夢を見たのも私の患者であつて、出會つた女の人の事を絶えず考へてゐなければならないやうな類の人間の一人であつた。私の診療所へ彼の後から入つて來たのは、二三箇月の間、きまつて一人の若い婦人であつたが、彼は彼女に出會ひ、屢々彼女のことを訊き、彼女に對して彼は徹頭徹尾鄭重に應待しようとしてゐた。それで、彼が二十八歳の年齢だと言つたのは、この婦人だつたのである。外見上のかの計算の結果についての説明となるのは、これだけしかない。一八八二年は併し、彼が結婚した年であつた。彼はまた、彼が私の診療所で出會ふ二人の他の女、即ち彼が出入する時に彼のために交る交る扉を開いてやるのを常としてゐた二人の決してもう若くはない娘たちとも、何か話を始めるのを怠つたことがなかつた。そしてこの娘たちが殆ど親しみを見せてはくれないのを見出した時に、彼は自分で、こいつ等は俺をきつと、かなり年とつた、「しつかりした」人だと思つてるんだ、と説明をつけてゐたのであつた。

（もう一つ、數の夢。これは、透明な限定或ひは寧ろ過度限定な特色としてなり、その判斷と共にベー・ダットネル氏の報告に據る。――「私の宿の主人である市廳勤務の警官が見た夢。彼は街路の部署についてゐた。これは一つの願望實現である。そこへ監督が彼をめがけてやつてきた。監督の襟章には二二と、それから六二だつたか、それとも二六だつたかの數字がついてゐた。いづれにしても二の數字が澤山あつたやうである。夢を後で語る時に二二六二といふ數を分離してをることが既に、その各部が或る分離的な意味を持つてる事を推定せしめる。彼等は昨日役所で彼等の奉職年限について語り合つた、それが後で思ひ出された。その話の因は、六十二歳で恩給を貰つて退職した或る監督だつた。この夢を見た本人はやつと二十二年勤續で、九十パーセントの恩給に達するには、まだ二年二箇月を必要としてゐた。さてこの夢は先づ最初には一つの長い間抱いてゐた願望の實現、即ち監督の地位となるのを、彼に映してみせたのである。二二、六二、といふ數字を襟章に持つてゐる夢の中の上官は彼自身であり、彼は街路の上で勤務してをる、これも亦彼の常に抱いてをる願望であつて、彼は今や二年二箇月の年限を勤め上げて、そして六十二歳のあの監督のやうに完全な恩給を貰つて退職することができるのである。」（數についての他の夢の分析は、ユンクやマルツィウスキー等の著述にもある。夫等の夢は屢々非常に複雜な數の取扱ひを前提としてをるが、併しその複雜な取扱ひをばその夢を見る者が實行する有樣は、實に吾々を呆然たらしめるほどに正確なものである。ヨーネスの「無

意識なる數の取扱ひについて」參照。Jones, Ueber unbewusste Zahlenbehandlung, Zentralbt. f. Ps.-A. II, 1912, p. 241 f.)

是等の及びこの後にも擧げられる實例を綜合するならば、吾々は次のやうに言ふことができる。夢の仕事は概して計算を立てるものではない、正しくも、又は誤謬的にも計算を行ふものではない。それはただ、夢思想の中に現れる數、そして表出し得ない或る材料に對する暗示として役立つことのできる數をば、一種の計算の形式を以て組合せるだけに留まる。その際に夢の仕事は、數を自己の目論見の表現に對する材料として、丁度凡ゆる他の表象、例へば名前とか、言語表象として知られてをる說語とか、と全然同樣の方法を以て、取扱ふのである。

と言ふのは、夢の仕事は說話をも亦決して新しく創造することはできないのである。假令夢の中にはいかに多くの話と答とが現れ、それがそれ自身では、意味あるもの、又は辻褄の合はないものである話と答とが現れるとしても、分析を加へてみると、いつも吾々に示されるのは、その際に夢はただ、實際に行はれたか、又は聞いたかしたところの、話の斷片をば夢思想の中から取り出して、そしてそれを非常にいい加減に處置してをるのだ、といふ事である。夢はそれ等の說

話をそれの聯絡から引きちぎつてしまひ、一部分は採用するが、一部分は放棄するばかりでなく、その上に時としては新しく組み合はせてしまふものだから、表面はいかにも聯絡してをるやうに見える夢中の說話でも、分析してみると、三つ乃至四つの破片に分裂する。かく新しく利用するに際して、夢は屢々、その文句が夢思想の中にあつて有してゐた意味を放擲して、その代り全然新しい別の意味をその語句から取つて用ひてをる。（夢と同じやうな工合に、神經病も亦振舞ふものである。私の知つてをる或る婦人患者は、歌謠や、その歌謠の部分部分を、知らず識らず、そして自分の意向とは反對に、聞く、卽ち錯覺的に聞く、といふ病氣を持つてをるが、その錯覺的なそして歌謠の自分の精神生活に對する意味を理解することは、彼女にはできない。それでゐて併し彼女は確かに痴呆症ではない。精神分析を施してみると、彼女はそれ等の歌謠の原文をば或る特殊な自由を以て濫用してをつたことがわかつた。「靜かな、靜かな、虔しき調べ」（leise, leise, fromme Weise）といふ歌謠がある、それが彼女の無意識界にとつては、敬虔な孤兒を意味し（fromme Waise-Weise も Waise も獨逸語の發音ではワイゼであるから、そこに彼女は知らず識らず錯覺を起したが、それは實は精神分析的にいふと、彼女自身が孤兒である故に、彼女が神經病症的自由を以て、無意識に歪めてしまつたのであつて）、その孤兒は彼女自身なのである。又、

「おお、わが幸なる、おお、わが樂しき」といふのは、或るクリスマス歌謠の冒頭なのであるが、彼女はその願望のあとを「クリスマスの頃」とまで續けることをせずして、彼女は自分でそれを轉じて一つの婚禮の歌としてしまふ、といふぐあひである。――ところがこれと同一の歪みのからくりは、錯覺などがなくとも、單なる思ひ付きの中にあつて行はれることもある。私の患者の一人が不圖、彼がその若い頃に習つたのに相違ない或る詩を思ひ出した。「夜にブーゼントーに囁くは……」といふ詩句であつたが、そんな詩句が何故不意に彼の記憶を襲うたのか？ それはこの引用詩句の中の一部分、「夜にブーゼンに（人の胸の中に）」といふ一部分だけで、彼の妄想は滿足するのであつたからだ。（Busento は伊太利の川の名であるが、語の最後の綴りを取り去ると、Busen 胸、懷を意味する獨逸語となるので、この患者はこの詩句を轉じて、自分が女の胸を慕ふ意慾の無意識的な表示に利用したのである。）――狂歌的機智がこの種の小さな技巧を利用せずにをられないことは、人も知るところである。「フリーゲンデ・ブレッテル誌」は嘗つて、獨逸古典作家の詩に對する戲畫的な挿繪のうちに、シルレルの「勝利の祝宴」に對して一つの繪を載せたが、その繪につけた原文引用句は尻切れとんぼになつてゐた。「アトレウスの子は新しく手に入れし女を見て悅び、からみつけたり、」併し原作ではその後になほ次のやうに續くのである。「あでやかに麗しきその體のまはりに、彼が腕をば、悅び極まりて。」）

——一層立ち入つて見ると、夢の中の說話には、比較的明瞭であつて間隙のない成分と、さうでない他の成分との區別がある。後者は結合の手段として役立ち、吾々が讀書の際に脫落した文字や綴りを補つて讀むのと同じに、恐らくは補充されてをるものである。それ故、夢の中の說話は角礫石のやうな構造を有してをる。この角礫石では、種々の材料の比較的大きな石片が或る中間的土壤の固まつたものによつて膠合されてをる。

この說話が十分な嚴格さを以て正しいのは、勿論、夢の中の說話のうち、說話といふ具體的な性質の何物かを有し、そして「說話」として說明されるものに對してのみである。その他の、謂はば耳で聞いた、又は口で述べたと感ぜられない（卽ち、何等音響的な又は動力的な强調を夢の中で伴つてゐない）やうなものは、單に、吾々の覺醒時の思考活動に於いて現れ、そして變更を加へられずに多くの夢へその儘入つてくるやうな思想でしかない。夢の中で無關心的に行はれる說話材料に對しては、讀書が、豐かに流れるそしてその跡を辿るのにむづかしい源泉を提供するらしい。併し夢の中で說話としていかやうにか目立つて現れるものは、總て、實際にあつた、自分でやつたか或ひは聞いた說話に還元され得るものである。

かやうな夢說話の源を探ることに對する實例を、吾々は既に、他の目的の爲に報告した夢の分析に際して、見出してしまつてをる。例へば、上卷第三一頁の「無邪氣な市場の夢」にそれがある。其處では、「そいつはもうありません」といふ說話は、私をその肉屋と同一化するために役立つてをり、もう一つの說話「そんなもの何だか知らない、そんなもの要らない」といふのは、正にその夢を無邪氣なものにする任務を實行してをるものであつた。この夢を見た婦人は前日に彼女の家の料理女の何等かの要求を退けて、そんなもの知らない、嗜みよくしなさいよ、と言つた。そして今や、この說話からしてかの無關心的に聞える最初の部分が夢の中へ採用せられたのであるが、それは、この夢の根柢となつてをつた空想に對しては非常によく合致してをるけれども、若しかすればその空想を暴露するかもしれないやうな、後の部分に對して、これを以て暗示するためであつたのである。

多くの例を出す代りに、もう一つ、似た實例を掲げよう。多くの例を出しても、皆、同一の結果を示すものであるから。

「大きな中庭、死骸が燒かれる場所だ。彼は言つた。さあ、あつちへ行かう、こんなもの見るこ

とはできない。(明瞭でない挿話である。)その後で彼は二人の肉屋の小僧に出會つて、訊いた、どうだ、旨かつたかい? その中の一人が答へた、ううん、旨くあなかつたよ、と。それが人間の肉ででもあつたかのやうに。」

この夢に對する無邪氣な動機は次の如くである。夢を見た本人が夕食の後で妻と一緒に隣家を訪ねた。隣家の人は立派な人だが、併し決して食指の動きさうな人達ではない。客好きな老婦人は丁度夕食中だつたが、彼に一口喰べるやうに促した(この促すといふ言葉の代りに、男同志の間では笑談に或る組合せた性的な意味を持つ言葉を使用することがある)。彼はもう食慾がありません、と言つて斷つた。「でも、少し歩いてごらんなさい、これ位はまだ頂けますでせう」、とか、さういつたやうなことを老婦人が言つた。それで彼は喰べてみねばならなかつた、そしてその頂いたものを彼女の前で賞めた。「ええ、おいしいんですがね。」妻と二人だけになつた時、彼は隣家の婦人の押しつけがましさについて、また、喰べてみたご馳走の味についても、惡口を言つた。夢の中に於いても實際の說話としては現れない、あの「こんなもの見ることはできない」といふのは、一つの思想であつて、そしてそれは、誘うてをる老婦人の身體の魅力に關係するものであり、彼は

こんな婦人を見ることを欲しない、と飜譯せられ得るものであらう。

もう一つ別の夢の分析は、前のよりももつと敎ゆるところが多いかもしれない。私はこの夢をその中心點を形づくる非常に明瞭な說話の爲にここに報告して置くのであるが、それの說明を、次の次の節、夢に於ける情念の評價に際して初めて與へるであらう。私は非常に明瞭に次の夢を見た。「私は夜中にブリュッケの實驗所へ行つてをつた。そして扉を靜かに叩く音がしたので開けると、（故人になつた）フライシュル、（Fleischl）敎授が四五人の見知らぬ人達と一緒に入つて來て、二言三言の後に彼の机のところへ坐つた。」その次にもう一つの夢が續いた。「私の友人が七月に人目に立たないやうにしてキーンへ來てをつた。私は街上で彼が私の（死んでしまつた）友人と話をしてをるのに出會ひ、彼等と一緒に何處かへ行つた。其處では彼等は一つの小さな机の傍のやうなところに、向ひ合つて坐つてをり、私はその机の細長い側の前方に坐つてゐた。Flは彼の妹の話をして、そして言つた、四十五分間で彼女は死んでをつた、と。それから、あれは閾だね、といつたやうなことを言つた。Pには彼の言ふことがわからなかつたから、Flは私の方を向いて、彼の事柄について一體どれだけ私がPに報告しておいたのか、と私に訊いた。ここに

於いて、私は一種妙な情念に襲はれて、Pは（勿論何事も知るわけはない、だつて彼は）生きてゐないのだ、と彼に語らうとした。併し私は、自分で誤謬に氣づきながらも、non vixit と言つた。その後で私はPを凝つと鋭く見つめた、Pは私の眼光の下に蒼白く朦朧となり、その眼は病的に青くなつた――そして終にその姿は消えて無くなつた。私はそれと知つて異常に悦んだ。今や私は、エルンスト・フライシュルも亦單に一箇の幻にすぎなかつた、一箇の亡靈にすぎなかつたのだ、とわかつて、そしてかやうな人物は人がそれを欲する間だけしか生存しない、そしてかやうな人物は他人の願望によつて取り除かれることもできる、さういふ事が全く可能であると思つた。」

この面白い夢は夢內容に含まれる謎のやうな性質のいかにも多くのものを結び合はせてをる――私が non vivit（生きてゐない）と言ふ代りに、non vixit（生きてなかつた）と言つた、その自分の誤謬に自分で氣がつくといふやうな、夢そのものの間に於ける批判や、夢自身がその人を死んでしまつてをると述べてゐる、さういふ故人との屈託なき交際や、結論の無謀や、その結論が私に與へたあの高い滿足や――いかにも多くの謎のやうな性質のものを結合してをる故に、私は

是等の謎の完全な解決をば「私の命を悦んで擲つても」報告したい位である。だが併し私は實際はそれをなす力がない——私が夢の中ではなしてをること、即ち——このやうな私にとつて大切な人々に對する考慮を私の野心の犧牲にする力はない。私にはよくわかつてをるこの夢の意味は、それを暴露する度毎に、私の耻となるであらう。それ故に私は先づここで、やがてまた後節に於いて、この夢の若干の要素だけの判斷に手を着けるので滿足したいのである。

この夢の中心を形づくるのは、私が一瞥によつてPを擊滅するあの一場面である。彼の眼はあの時いかにも妙に且つ氣味惡く青くなり、さうした後に彼は消えて無くなる。この場面は或る實際に體驗した場面の見まがふべからざる摸寫であつた。私は生理學研究所の說明係りであつて、朝早い勤務時間を持つてゐた。ブリュッケは私が二三度遲刻して學生の實驗室へ來たことがあるのを聞き知つてゐた。或る日彼は敎室を開ける定刻に來て、まだ來てゐない私を待つてゐた。彼が私に向つて言つた言葉は少かつたが、きつぱりしたものだつた。併しその文句なんかは問題でなかつた。壓倒的なのは、彼が私を凝つと見つめた恐ろしい青い眼だつた、私はその眼の前に參つてしまつた——それは丁度Pが夢のなかに於いてしたのと同じであつて、Pはその役を代つて勤

めてくれて、私の肩を輕くしたのである。偉大な先生ブリュッケ教授の、高齢に至つても驚くべく美しかつた、あの眼を思ひ出すことのできる人、嘗つて先生が怒つたのを見たことのある人には、その頃の若い私の罪におびえた情念を想像するのは容易であらう。

併しながら私が夢の中でそれを批判したかの non vixit の源を探ることは、久しい間どうしても私に成功しようとしなかつたが、終に私は思ひ出した。この二つの語は聞いたのでも述べたのでもなく、見たのであるから、夢の中であのやうな明瞭さを持つてゐたのだ、と。さう思ひ出すとすぐに、それが何から發してをつたかが、私にわかつた。ヰーンの宮城にあるヨゼフ皇帝記念像の臺石の上に、次の美しい句が讀まれる。*Saluti patriae vixit, non diu sed totus（これは正しくは、Saluti publicae vixit, non diu sed totus であつて、patriae の代りに publicae が間違つて置かれた動機については、キッテルスが肯綮を得た推定をなしてゐるやうである。）この碑銘から私は、私の夢思想の中にある敵意的な思想の一系列に適當するものを剝がし出したのであつて、そしてそれは、あんな奴は無論何も口出しをしちやいけないのだ．彼奴は丸で生きてゐないんぢやないか．といふ意味であるべきものだつたのである。そしてその次には私は次の事を思ひ出さざるを得なかつ

た。この夢は大學の拱廊（アーケード）に於けるフライシュル記念像の除幕式の後數日にして見たのであつた。その除幕式の際に私はブリュッケの記念像を再び見たかつたし、そして（無意識の中に）天禀に富み、全く學問に沒頭してゐた私の友人Pが、餘りにも早く死んだ爲に、この拱廊に一つの記念像を立てられるであらう未來の當然なる要求權を失つてしまつたのを、遺憾の念を以てその時考へたに相違なかつた。それで私は夢の中で彼の爲にこの記念碑を据ゑてやつたのである。私の友人Pの名はヨゼフといふのであつた。（超決定作用の一參考として擧げるが、私の遲刻して來ることに對する辯解は、私は夜遲く迄勉强した後、カイゼルヨゼフ街の私の家からウエーリンゲル街の研究所迄の遠い道を通はねばならなかつた、といふ點にあつた。）*「彼は祖國の幸福の爲に生きた、長い間ではないが、全的に。」）

夢判斷の法則に從ふならば、私は未だ以て、私が必要とする non vivit をば、ヨゼフ記念碑についての記憶が私をして使用せしめる non vixit によつて代用するの道理があるわけはない、といふことになるかもしれない。夢思想の中の或る別な要素が力を加へて、かやうなことを可能ならしめたのに相違ない。さて、私は次の事に注意を向けさせられる、卽ち、夢の場面には私の友人Pに對して一つの敵意的な思想の流れと、一つの友情的な優しい流れとが合流してをる、そし

て前者は表面的で、後者は蔽匿されてをる、そしてその二つが non vixit といふ同一の文句を以てその表示を遂げてをるのである。友人Pは學問の爲に功績があつたのだから、私は彼に一つの記念像を立てる。併し彼は一つの悪い願望の罪を行つてをるが故に、(その願望は夢の結果に表現されてゐる)、それ故に私は彼を撃滅するのである。その時に私は全く特別な響の一箇の文を形づくつたが、それには或る手本が影響を與へたに相違ない。だが、これと似た對立、同一の人物に對する二つの正反對的な態度、そのいづれもが十分に道理あることを要求し、しかも兩つが互ひに亂し合はうとはしないやうな、二つの態度の、かやうな竝存は、一體、何處に見出されるか？或るたつた一箇所に見出される。併しその箇所はそれを讀む者にとつて深く印象づけられるものだ。即ちシェークスピアの「ジュリアス・シーザー」のなかのブルータスの辯解演説に於いてである。「シーザーは私を愛してゐた故に、私は彼のために泣く。彼は幸福だつた故に、私は悦んでをる。彼は勇敢であつた故に、私は彼を尊敬する。併し彼には野心があつた故に、私は彼を打ち倒したのである。」これは、私が發見した夢思想の中に於けると同一の文章構造と思想對立ではないか？してみると、私は夢の中でこのブルータスを演じてをるのだ。この驚くべき案外なる

傍系的聯絡について、猶ほもう一つ他の實證的な痕跡を夢內容の中に見付け出すことができたなら！　私は考へるのに、それは次のやうなものだ、私の友人Flが七月（Juli）にヰーンへ來る、といふことだ。この一點は事實に於いては全く何等の支持を見出さない事柄である。私の友人Flは、私の知つてをるところでは、七月の月にヰーンへ來たことなどは嘗つて一度もなかつた。然るに Juli といふ月は Julius Cäsar の名に因つてつけられたものであつて、それ故に、私はブルータスを演じてをるのだ、といふ挿入的思想に對して私が求めてゐる暗示を、確かによく代表し得るものであらう。（加之、猶ほ、Cäsar と Kaiser との聯絡もある。）

著しいことには、ところが、私は實際的に一度ブルータスを演じたことがあるのである。シルレルの詩によつてブルータスとシーザーの間の場面を、私は子供等の見物人を前にして演じたことがある。私は十四歲であつたが、私より一つ年上の私の甥が相棒だつた。この甥はその頃英吉利から私の家へ來てをつたので――やはり、一つの幽靈だと言ふことができる――何故ならば、彼といふ人物と一緒に、私の小さかつた頃の遊び仲間が再び浮かび上がつて來たわけなのであつたから。私の滿三歲の齡までは、彼と私とは離れつこなしに一緒だつた。互ひに好き合つたし、

また互ひに掴み合ひもやつた。そしてこの子供時代の關係は、私が既に一度暗示した通り、同年配の友人との交際に於けるその後の私の凡ゆる感情を決定して來てをるのである。私の甥のジョーンはその後實にいろいろな姿に化けて夢に現れ、そして夫等の姿は、私の無意識的な記憶の中に消し難く固着してをる彼の性質の、或る時はこの方面、或る時にはあの方面を、といふぐあひに再現するものであつた。彼は時々私を非常にいぢめたことがあつたに相違ない、そして私はこの壓制者に對して私の勇氣を示してやつたことがあるに相違ない。なぜならば、父が——即ち彼の祖父が——なぜお前はジョーンを打つのだ？　と私を責めた時に、私が自分を辯護した一つの短かい辯明の文句を、私は後年に屢々語つて聞かされてをるからである。その文句はまだ滿二歳にならぬ私の言葉で以て、あれが僕をぶつたから、僕はあれをぶつたのだ、といふのであつた。この小兒時代の場面が non vivit は non vixit に轉ぜしめるものであるに相違ない。何故ならば、小兒時代の割合後期にあつては打つといふ言葉は——wichsen(靴墨を塗つてやる、ぶんなぐる)といふのである。夢の仕事はかやうな聯絡をも利用することを恥とはしない。私よりもいろいろな點で優秀であつて、そしてそれ故に小兒時代の遊び仲間の再現を誘致することにもなつた私の

友人Pに對する私の殆ど理由なき敵意は、確かに、ジョーンに對する複雜なる幼兒的關係へ溯るものである。

故に私は猶ほこの夢を再び考察するであらう。

第七節　不合理な夢——夢に於ける智的な成績

今までの吾々の夢判斷に際して吾々は夢內容に於ける不合理性の要素に實に屢々遭遇して來たので、この要素が何處から發してをるか、そして若しかしてそれに何等かの意味があるのか、についての吟味をもはやこれ以上長く延期したくはないのである。この夢の不合理性が夢尊重の反對者達に一大難點を與へた、そしてその難點のために彼等は、夢を以てただ或る貧弱にして零細なる精神活動の無意味なる產物に外ならずとするに至つてをることを、吾々は正に想起するのである。

私は先づここに二三の實例を掲げるが、夫等にあつては、夢內容の不合理はただ一箇の外觀にすぎず、夢の意味を一層深く究めてみるならば、直ちにその不合理は消滅するのである。この二

三の夢は――初めに一寸考へられるところでは、偶然的にも――死んだ父のことを取扱つてをる。

(一)。六年前に父を失つた患者の夢。

「大きな災難が父の身に起つた。父は夜行列車に乘つてゐたが、脫線事故が生じ、座席がぶつかり合つたので、父は頭を斜に壓しつけられた。彼は父が寢臺に橫臥してをるのを見た。左の眉毛の端の上に垂直に一つの傷があつた。彼は父が災難に出會つたのを不思議に思つた。(彼がこの夢の話をする時に補つて言つたところによると、父はとうに死んでをつたのだから)。父の眼はいかにもはつきりとしてゐた。」

夢について普通に行はれる批判に從ふならば、この夢の內容は下のやうに解釋されることであらう。夢を見た本人は最初に、父の不時の災難を表象してをる間に、この父は既に久しい前に墓に入つてをることを忘れてをつた、そして夢が猶ほ續くうちにその記憶がやつと目醒めて、その結果彼自身が自分の夢を夢みながら不思議がるのである、と。併しながら分析は、かやうな說明を取り上げることこそ、何よりも餘計なことであるのを、敎へてくれる。夢を見た本人は或る美

術家に父の胸像を依頼しておいたところ、夢の二日前にその胸像を實見したのであつた。この胸像が彼には災難に會つたと思はれるものなのである。彫刻家は一度も父を見たことはない、それで提出された寫眞によつて製作をした。夢の丁度前日にこの親孝行な息子は家の古い召使を彫刻家のアテリエにやつた、この召使もやはり大理石に刻まれた頭について自分の考へと同じ判斷を下すだらうか、即ち、この大理石の頭は顳顬から顳顬へかけて斜の方向に於いであまりに狹すぎるやうに出來上つた、といふ判斷を下すだらうか、どうだらうか、を知るためにだつた。さて、その次にはこの夢の構成に對して貢獻した記憶材料がある。父には、業務上の心配や家庭に於ける面倒などが彼を惱ますことがある場合には、兩手を顳顬に壓しあてる癖があつた。それはまるで、頭が擴がつてくるやうに思はれるのでそれを締めつけようとでもするかのやうに見えた。—彼が四歲の子供であつた時、彼は、偶然裝塡してあつたピストルが發射して父の眼を黑くした（眼がいかにもはつきりしてゐた，といふのに對照する）事件に居合はせたことがあつた。——夢の中で父の負傷を示す箇所に、生きてをつた時の父は、物思ひをしたり又は悲しい場合には、一本の深い橫の皺を見せるのであつた。この皺が夢の中では一つの傷によつて代理された、とい

ふ事は、この夢の第二の動因をも指示するものである。夢を見た本人は嘗つて彼の小さい娘の寫眞を撮つたことがあつた。その時種板が彼の手から落ちた、そして彼がそれを拾ひ上げてみると、一つの龜裂を示してゐて、それは一本の垂直な皺のやうに子供の額の上を走り、弓形の眉毛のところまで達してゐた。その時彼は迷信的な豫感を禁じ得なかつた、何故ならば彼の母の死の前日に母を寫した寫眞の種板が破れたことがあつたからである。

かく分析してみると、この夢の不合理性は單に、胸像と寫眞とをその原物から區別しようとはしない言語上の表現の放漫の結果であるに過ぎない。吾々は誰でも下のやうに言ふ習慣がある、父さんは似てると思ひませんか？　勿論、この夢に於ける不合理性の外見などは容易に避けられたかもしれない。たつた一回の經驗で旣に判斷を下してもかまはないならば、人はかう言ひたいくらゐであらう、不合理性のこの外見は、これは、許された、又は欲せられたものである、と。

(二)。第二の、上のと全く類似的な實例。私自身の夢の一つ。(私は一八九六年に父を失つた。)

「父はその死後にマジャール人の間に於いて或る政治的役割を演じた、彼等を政治的に結合させ

た、(これに對して私は一つの小さな不明瞭な畫面を見た、卽ち)、帝國議會の中に於けるやうな人の群。一つだつたか又は二つだつたかの椅子の上に立つてる一個の人物と、彼を取り卷いた他の人々。私は父はその死の床にあつてガリバルヂーに大變似てるやうに見えたことを思ひ出し、そしてこの期待が正に眞實になつたのを、夢の中で悦んだ。」

これはまことに不合理千萬である。この夢を見たのは、ホンガリア人が議會の議事妨害のために無法律狀態に陷り、危機を經驗したが、コロマン・スツエルが彼等をこの危機から救ひ出してくれた、あの頃に於いてであつた。この夢の中で見た場面がいかにも小さないくつもの畫面から成立つてをる、といふ些細な事情は、この要素の解明にとつて意義なきものではない。吾々の思想の普通の視覺的な夢表示は、吾々に等身大の印象を與へるやうに思はれる形象を生ずるのであるが、私の夢に出た形象は、或る繪入りの墺國史に挿入された木版畫で、プレスブルクの帝國議會に於けるマリア・テレシアを描いたものの再現であつた。それはあの有名な、moriamur pro rege nostro の場景である。(誰の著書にてあつたかは忘れたが、私は次のやうな一つの夢が擧げてあるのを見出したことがある。その夢の中では、普通でなく小さな姿の者がうようよと動いてゐて、それの源に

なつたのはジャック・キアローの銅版畫の一つであることがわかつた、そしてその銅版畫は夢を見たその日に眺めたものであつた。（キアローの銅版畫には勿論無數の甚だ小さい人物が描いてある、そして一組の銅版畫は三十年戰爭の慘事を取扱つてゐる。）さて、丁度マリア・テレシアが其處に立つてをるのと同じやうにして、父は夢の中で群衆に圍まれつつ立つてをつた。併し父は一つだつたか、或ひは二つだつたかの椅子の上に立つてゐる、卽ち、椅子に坐つてをる裁判長になつてをる。（父は彼等を結合させた――ここで媒介となつてるのは、吾々は裁判官なんか必要とはしないだらう、といふ歲月である。）父が死の床にあつてガリバルジーにいかにも似てるやうに見えた事實は、吾々その死の床のまはりに立つてゐた者全部が實際に氣づいたところであつた。彼は postmortal（死後）の體溫上昇を持つて、彼の兩頰は赤く、段々赤く、ほてつてゐた……ここで、思はずも吾々は言葉を續けるであらう、そして彼の背後には、架空的な輝きの中に、吾々凡ゆる者を繋縛するところのもの、平凡事が存してゐたのだ、と。

吾々の考へがかく高まつた後に來るものは、正にこの「平凡事」についての考へである。體溫上昇に關してをる「死後の」といふ部分は、夢內容の初めにある「彼の死後に於いて」といふ文

句に該當してをる。父の病苦のうちで一番苦痛であつたのは、最後の數週間の完全なる腸痲痺（便祕――議事妨害）であつた。これに凡ゆる不敬なる（平凡事と關係する）考へが結びつく。私と同年輩の或る男はまだ高等學校の生徒であつた時に父を失つた、その機會に私は深く感動して彼に友情を寄せたのであつたが、この男が或る時彼の親類の某女の苦痛について嘲りながら私に物語つた。彼女の父は街路上で死し、家へ運ばれた、其處で死骸の着物を脫がしてみると、死の瞬間か或ひは死後にか、排便してをつたことが見出された（排便――Stuhlentleerung Stuhl 椅子は便器、又は便通の意味を持つてをる）。娘たる彼女はこの厭な事件が父に對する彼女の記憶を亂さざるを得なかつたのを、深く不幸なことと思つたのである、と。ここまで辿つて來ると、吾吾は今やこの夢の中で具體化される願望にまで行き着いたものである。死後に於いてその子供等の前に純潔に且つ偉大に立つて見せる、誰かこれを願望しないものがあるだらうか？　してみると、この夢の不合理性はどうなつたか？　不合理性の外見はただ次の事實によつて成立したにすぎない、卽ち、ここに或る十分通用し得る成句がある、それを吾々が使用するときには、その成句の要素の間に存在してをるかも知れない不合理性を超越するのが普通である、さういふ成句が

夢の中に於いて忠實に表出される、といふ事實によつて、ただ不合理らしい外見を生じたにすぎないのである。この夢の場合にも吾々は、不合理性の外見は欲せられた、故意に呼び起されたものである、といふ印象を拒否することができない。

（夢の中に死んだ人物が生きて現れ、動作しそして吾々と交渉することとの屢々なる事は、不當なる驚異を喚起し、奇妙なる説明を生み出してをるが、かかる説明は夢に對する吾々の無理解を甚だしく目立たしめるものである。かかる夢の解説は併しながら隨分わかり切つたものでしかない。若し父がまだ生きてゐたなら、これについて何と言ふだらう？　といふ考へを起すことは、吾々に實に屢々ある。この若し——ならばを、夢は或る一定の境地に於ける現在によつてより以外には、表示することができない。それで例へば、祖父から大きな遺産を貰つた或る若い男は、著しくお金を支出するといふ非難を蒙つた或る時に、祖父がまだ生きてをつてそして自分から説明を求める夢を見るのである。吾々がその夢に對する抗議と見做すところのもの、即ち、だつてその人はとうに死んでしまつてゐるんぢやないか、といふ、吾々のより確實な知識からの反對は、實際に於いては、その死去してる者はその事を經驗しないですんだのだ、といふ慰藉の考へであるか、或ひは、彼はもう何も容喙することはない、といふ事についての滿足か、である。——死んだ緣者についての夢

の中に見出されるもう一つ別の種類の不合理性は、嘲弄や侮蔑を表現するのでなく、極端なる拒絶に使用される。人がそれを徹頭徹尾考へ得ないことであるかのやうに裝うてみせたく思つてゐる或る抑壓された思想の表示に使用される。この種の夢でも、若し夢は願望されたものと現實のものとの間に何の區別を立てるものでない、といふ事を想起するならば、たやすく解決がつくと思はれる。それで例へば、父が病中看護をしそしてその死のためにひどく惱んだことのあつた或る男は、少し經つた後に、次のやうな無意味な夢を見た。「父はまだ生きてゐた、そして平常と同じく彼と話をした、併し(注目に價することには)父はそれでも死んでしまつてゐたので、ただそれを知らないのであつた。」吾々は若し「父はそれでも死んでしまつてゐた」の後に、「この夢を見てゐる本人の願望の結果」を附け加へ、「それを知らないのであつた」に對して、「夢を見てゐる本人がこの願望を持つてる事を」と補つてみるならば、吾々はこの夢を理解する。息子は父の病氣看護の間繰り返へし父の死を願望した、といふのは、死が終にこの病苦の終りを與へてくれたら、といふ元來は愛憐の情に富んだ考へを抱いたことがあつた。父の死後の悲哀の中にあつては、同情のこの願望すらが、恰かもこの願望を持つたために實際彼は病人の命を縮めることに力添へをしたのだ、といふやうな無意識的な非難になつたのである。初期幼兒時代の父に對する反抗的感情が喚起せられ、それによつてこの非難をば夢として表現することは可能となつたが、併し夢のこの動因と夢思想との間の非常にかけ離れた對照性のために、この

夢はかくも不合理なものとならざるを得なかつた。（これについては、「心的經過の二つの原理に關する覺書」參照。Formulierungen über die zwei Prinzipien des psychischen Geschehens, Jahrbuch f. Ps.-A. III, 1911）。——死んだ戀人についての夢は夢判斷にとつて概して困難な問題を提供する。それの解決は必ずしも常に滿足に成功する事はない。その原因は何處にあるか。それは、夢を見る本人のその死者に對する關係を支配してをる特に強い特色を有する感情のアムビヷレンツに存する、とせられるかもしれない。この種の夢にあつては死去した者が先づ生きてをる者として取扱はれ、その後に突然、彼は死んでをるんだ、といふ表示があり、そしてしかも同一の夢の繼續に於いて彼は再び生きてゐる事が、非常に普通である。それが紛糾した作用をする。私は遂に、死と生のこの交替は夢みる本人の無關心を表出するつもりのものであるまいか、と推測をするに至つた。（「彼が生きてゐようと、死んでしまつてゐようと、私には同じことだ。」）勿論この無關心は何等現實的のものではなくして、一つの願望せられた無關心であつて、それは夢みる本人の非常に強度な、時として正反對的な感情狀態を否定するのに助力しようとするものであり、かくして彼のアムビヷレンツの夢表出となるのである。死者と交渉する他の夢にとつては、屢々次のやうな規則がその夢の方向を規定する作用をしてをることが多い。即ち、夢の中でその死者は——死んで居るのだといふ記憶を喚起されない場合には、夢見る本人は死者と同じ境遇に自分を置く、彼は自分自身の死を夢に見る。夢の中で突然に現れ

る思慮又は驚異、だが彼はとうに死んじまつてゐるんぢやないか、といふのは、この同一境遇化に對する一つの抗議であつて、夢見る本人にとつての死の意味を拒否するのである。併しながら私は、夢判斷がこの種の内容の夢に對し未だ一切のその祕密を嗅ぎ出してしまつてはゐない、といふ印象を承認せねばならない。）

（三）。ここに引用する實例に於いて、夢の仕事が夢の材料には全く何の因緣も存してゐないところの不合理をば、いかに故意的に作り出すものであるかを、私は捕捉することができるのである。これは、私が休暇中の旅行をする前にトゥーン伯と出會つたのが動機となつて見た夢であつた。「私は一頭立の馬車に乘つてゐて、或る停車場へ行くやうに賴んだ。線路そのものの上なんか勿論私は貴方と一緒に乘つて行くことはできませんよ、と私は言つたが、それは、馭者が私に向つて、まるで私が彼を過度に疲勞させでもしたかのやうな非難をした後にであつた。その際、私は人が普通ならば汽車で行くぐらゐの道程を旣にこの馭者と一緒に走つてしまつてをるかのやうな氣がした。」この紛糾した無意味な話に對し、分析は次のやうな解說を與へる。私はその日の晝に一頭立の馬車を傭つて、ドルンバハの方の或る邊鄙な街道へ行くやうに命じた。馭者は併しそ

の道を知つてゐなかつた、そしてこの階級の善良な人たちのいつもやるやうに、どんどん走らせるので、終に私もそれに氣がついて道を教へてやつたが、その時に私は二言三言皮肉を言はずにはゐなかつた。この馭者なる者から發して或る思想の聯絡が貴族階級へと結ばれてをるのであるが、その貴族に私はもつと後に出會ふであらう。今はただ、吾々平民どもには貴族階級は彼等が特に好んで馭者の代りになりたがるといふ事の爲に注目を惹く、と暗示をして置くにとどめる。トゥーン伯の如きも、墺太利の國家といふ馬車を馭してをるではないか。夢の中のその次の文は、併し私の兄弟に關係してをる。卽ち、私はこの兄弟を一頭立の馭者と同一化してるのである。私は今年彼に、一緒に伊太利旅行するのを斷つたことがあつた(「線路そのものの上なんか貴君と一緒に乘つて行くことはできませんよ。」)この拒絕は、私が急いで場所を替へ、一日のうちに餘りにも澤山の結構なものを見物するやうに彼に强ひるので、私は彼を今度の旅行中に過度に疲勞させるのが常である(これはその儘で夢に入つた)、と平素不平を述べるのに對する一種の罰であつた。私の兄弟はこの日の夕方に停車場へ私と伴れ立つて來たのであつたが、停車場の少し手前のところ、市街鐵道西驛の傍で、市内鐵道でプルケルスドルフへ行くために飛び出してしまつた。

市街鐵道でなく、西部線鐵道でプルケルスドルフへ行くやうにしたら、私と一緒にもう少し長く乘つてゐられるんだのに、と私は彼に言つた。その言葉のうちからして、私は普通ならば人が汽車で行くぐらゐの道程を馬車で走つて來てしまつた、といふ部分が夢の中に入つてゐるのである。事實に於いてはそれは逆であつた。（そして「來てしまつたといふのも逆である」）。私は私の兄弟に向つて、お前が市街鐵道で行くだけの道程をお前は私と一緒に西部線鐵道でも行けるんだ、と言つたのである。私がこの夢の混亂總てを起すに至つたのは、「市街鐵道」の代りに――「馬車」をこの夢の中へ入れたからであるのだが、それがまた勿論馭者と私の兄弟を一緒にしてしまふのに確かに役立つてをる。次に、私は夢の中に或る無意味なものが入つてをるのを見出す、それは說明をしてみても殆ど解きがたいやうに見え、私の前の說話（「線路そのものの上なんか私は貴君と一緒に乘つて行くことはできませんよ」）に對し一つの矛盾をなしてをるものである。併し私は市街鐵道と一頭立ての馬車とを取り替へる必要は先づないのであるから、私は夢の中でこの謎のやうな話を故意にかやうなぐあひに形づくつてしまつたのに相違ない。

併しいかなる故意を以てであるか？　これを知るには吾々は、夢に於ける不合理が何を意味す

るか、いかなる動機からして不合理が許容されるのか、又は創造されるのか、を知らねばならない。今の場合に於ける祕密の解決は次の如くである。私は夢思想の中に或る種の批判を抱いてゐて、それが表出を求めてゐたものであるから、それで、私は夢の中に於いて「乘つて行く」ことと關係する或る不合理と、或る理解し難いことを必要としたのであつた。或る夕方、やはりこの夢の別の場面に「主婦」として登場するお客好きで利口な某夫人の家で、私は二つの謎を出されたが、私はそれを解くことができなかつた。其處に居合せた他の人々にはその謎は知られてゐたものだつたから、それを解かうとして骨を折つてみても解けない私は少し滑稽な人物になつたわけだつた。その謎は、Nachkommen（後に來る——子孫）とVorfahren（前へ乘つて行く——先祖）といふ語にからんだ二つの曖昧な言ひ廻しであつた。それはかうだつたと思ふ。

「客は命ずるのだ、
馭者がやるのだ、
誰でも持つのだ、
墓の中にゐるのだ。」（前へ乘つて行く——先祖）

第二の謎の半分がこの第一のと同一だつたといふことは、頭を混亂させた。

「客は命ずるのだ、
駁者がやるのだ、
誰でもが持つのではないのだ、
搖籃の中にゐるのだ。」(後に來る——子孫)

さて私は、トゥーン伯がいかにも大官ぶつて前へ乘つて行くのを見た時に、ふとフィガロ的氣持になつたが、このフィガロ的氣持なるものは、貴族なんていふものの手柄はただ、生れ合はせる(子孫になつてゐる)だけの骨折をしたことにあるのみ、と考へる奴だ。私がこの氣持になつた時、この二つの謎が夢の仕事にとつての中間的思想となつたのである。貴族は駁者と取りちがへられがちであるし、又、吾々の國では昔駁者を呼ぶのに Herr Schwager(義理の兄弟と同意語)を使ふのが普通であつたのだから、夢の壓縮作用は私の兄弟を同一の表出の中へ引き入れることもできたのである。併しその背後に働いてゐた夢思想はかうだ。「自分の先祖を自慢するなんか、愚なことだ。それよりかいつそのこと、自分自身が前乘りだ、祖先になることとだ。」それは愚なこ

とだ、といふ批判のために、即ち夢の中のあの愚なこと、不合理が現れた。今やこの夢の曖昧な箇所の最後の謎、即ち、私は馭者と既に前に乘つて行つた (vorher gefahren, vorgefahren) ことがあつた、といふのも亦、解決されるであらう。

これによつて考へると、夢が不合理的になされるのは、夢思想の中に內容の一つとして、それは愚なことだ、無意味だ、といふ批判が現れる場合、及び一般に批評と嘲笑がその夢みる本人の無意識的な思想系列のどれか一つを動かす場合に於いてである。かるが故に、不合理的なものは、夢の仕事が、例へば夢思想と夢內容との間の材料的關係を倒錯するとか、機能的な障害感覺を使用するとかの如く、矛盾撞着を表出するための手段の一つとなるのである。併しながら夢の中の不合理的なものは、簡單に「否」を以て飜譯されるべきではなくして、矛盾撞着を表出すると同時に嘲弄するか又は笑はうとする夢思想の意向を、再現する筈のものである。ただこの意向に於いてのみ、夢の仕事は何か滑稽的のものを提供する。この場合でもやはり、夢の仕事は潛在的內容の一部を顯在的形式へ轉變せしめる。(即ち、夢の仕事は滑稽だと見做される思想があると、それに結びつけて新しく創造することによつて、その思想に對するパロディー(戲作)を作るのである。詩人ハイネ

がバヷリア王の拙い詩句を嘲笑しようとする時の態度は、これと似通つてゐる。彼は一層拙い詩句を戲作して、嘲笑するのである。「ルードキヒさんは大詩人だ、そして歌ふがアポロンは、彼の前にぱつたり膝まづいて嘆願するのだ、ああ止めてくれ——でないと俺は氣が狂ふ！」

吾々はこれで既に、一箇の不合理な夢のこの種の意味の確信的なる一例に、出會つたのだと言つてもよい。前に（第五八八頁に）、分析を加へずに判斷しておいたワーグネル歌劇の夢、この上演は朝の七時四十五分まで續き、塔の上から管絃樂の指揮をしてをつた、云々の夢は、明らかに、これは逆さまな世界だ、氣狂ひの社會だ、といふことを言はうとするものである。それに價する者の身にそれが起らずして、それをどうすることもしない者がそれを持つてをる、といふ思想を以て、夢を見た本人は自分の運命と從姉妹の運命との比較を意味するのであつた。——夢の不合理についての實例としては、さしあたり先づ、死んだ父に關する以上の夢が提供されたのは、決して偶然ではない。これ等の夢には、不合理な夢の創作に對する諸條件が、典型的に集合してをる。父に特有なる權威は早くから小兒の批評を喚起してをるものだ。父が持ち出した嚴格な要求は、子供をして自から氣持を輕快にする爲に父の凡ゆる弱點に鋭く注目せしめる。併し父なる人

物は殊にその死後に於いては、吾々の思考にとつて敬虔な氣持を以て包まれるものであるが、この敬虔は夢の檢閲を尖鋭化し、そして檢閲が如上の批評の發表を意識から排除するのである。

(四)。死んだ父についての不合理な夢のもう一つの例。

「私は生れ故郷の町の町會から、一八五一年に於ける入院料に關する一通の書面を受取る。私は或る發作のために是非入院せねばならなかつたのである。私はこれを受取つて滑稽に思つた。なぜならば、第一に一八五一年には私はまだこの世に生きてはゐなかつたのだし、第二にこれに關係し得る私の父は今は死んでをるのだからである。私は隣室の父の許へ行つた。其處に父は寢床に横になつてゐた。私は父にその話をした。すると私を驚かしたことには、父はその頃一八五一年に一度酒に醉うて、そして監禁されるか、又は保護されるかせねばならなかつたことがあつたことを、思ひ出したのである。それは、父がT家のために働いてゐた時であつた。私は訊いた、ではあなたはお酒を飲んだんですか？　その後直ぐに結婚をしたんですか？　私は計算をしてみる、私は一八五六年に生れてるんだ、と、そしてそれは、直ぐその後のことであつたやうに私に

は思はれた。」

この夢はいかにも露骨に不合理を現してみせてをる。吾々は究極的な探求をしてみた後に、この露骨さは夢思想に存する或る特別に辛辣で情熱的な反感の徴候に外ならない、と解釋するであらう。併しそれだけ一層大きな驚異の念を以て確める事實は、この夢の中ではその反感が公然と働いてをり、そして父は嘲笑の的とせられるところの人物として示されてをることである。かくも公然たることは、夢の仕事に際しての檢閲に關する吾々の前提とは矛盾すると思はれる。けれどもこれを解くのには次のことが役に立つ、即ち、ここでは父はただ看板だけの人物であつて、實は、夢の中に於いてただ一つの暗示によつて出現する他の人物との爭ひが行はれてをるのである。普通に夢は他の人物に對する反抗を取扱つてゐても、その人物の背後には父が匿れてをるのであるのに、この夢ではそれが逆であつた。父は他の人物を蔽匿するための藁人形となり、そして夢は、實際はこの父が意味されてるのではない、といふ或る確實な知識が一緒に働いてをるために、かやうにもむき出しに、普通には神聖化されてをる父といふ人物を取扱ふことができたのである。この事情はこの夢の動機からして知られ得る。即ち、この夢は——或る年長の同僚がゐ

て、この人の批判は侵すべからざるものと思はれてゐた——その同僚が、私の取扱つてをる患者の一人は私の手許で旣に今では五年目になるまで精神分析治療を續けてゐるのに對して、そいつはをかしい、そんなことでは駄目だ、と言つてると私が聞いた、その後でみた夢だつたのである。夢の緒口の文は、蔽匿はされてゐるが透明に次の事を指示してをる。この同僚は父がもはや果すことのできなかつた義務（費用の支拂、病院への入院）を、一時の間引き受けてをるのである。そして吾々の友情關係が解消し始めた時に、私は、父と子との間に何か不和を生じた場合に父の方の以前の仕草によつてどうしても抱かせられるのと同一の感情の葛藤に陷つたのであつた。私がもつと早く渉らないでゐる、といふ非難、これはあの患者の診療から發して次にはもつと別なことへまで及んでをる。その非難に對して、苦々しげに、夢思想は反抗した。一體彼は、もつと早くやることのできるやうな誰かを知つてるのか？　この種の病狀は普通一般には不治のものであつて、一生涯の間續くのである事を、彼は知らないのか？　一生涯の長きに較べたなら、四年や五年は何であるか？　況してその病人にとつては診療の間は生活が非常に氣易くされてをるに於いてをや！

不合理の刻印はこの夢にあつては、大部分次の事によつて、卽ち、夢思想の種々の領分に屬する部分部分が媒介的な橋渡しなくして互ひに列ねられてる、といふ事によつて作り出された。例へば、「私は隣室の父の許へ行つた、云々」の部分は、その前の部分部分が取り出されて來た主題から離れてしまつて、そして私が父に私の獨斷的にやつた婚約を報告した時の事情をその儘に再現してをる。してみるとこの部分は、その時に老父が示した高尙な非利己心を私に想起せしめ、そしてそれを或る他の、或る新しい人物の態度と對照せんとするのである。ここに於いて私は氣づくのであるが、父は夢思想の中に於いて十分に尊重せられて他人に對し模範とせられるのであるが故に、その故に夢は父を嘲笑してよいのである。許されてゐない事柄のうちでは、眞實を言ふよりも寧ろ眞實でない事を言つてよい、といふのは、凡ゆる檢閱の本性に存することなのだ。その次の部分、卽ち、父が「一度酒に醉うて、そのために監禁されたことがあつたのを思ひ出した、」云々は、實際には、もはや父に關係のある事柄の何物をも含んではゐない。父がその影武者となつてをる當の本人は、かの偉大なる——マイネルトに外ならない。私はこの人の進んだ道の跡に非常な尊敬を以て蹤いて來た、そしてこの人の私に對する態度は或る短い期間の間は私を拔擢

するものであつたのに、その後は明瞭なる敵意に變つてしまつた。あの夢は私に彼自身の話を思ひ出させる。彼は若い頃に一度クロロフォルムで自から痲醉を呼ぶ習慣になじんだ、そしてそのために治療所を訪れねばならないことがあつた、といふ彼自身の話と、それから彼の死のすぐ前に彼を相手に經驗した或る第二の事件とを、あの夢は私に思ひ出させる。私は男子のヒステリー症の事柄について彼と激烈なる著述上の論爭をやつてゐた。彼はかかる病症の存在を否定した。そして瀕死の病床にある彼を私が見舞つて、どんな工合ですかと訊ねた時、彼は自分の病症を詳しく說明し、次の文句を以て結んだ。「ねえ、君、僕は常に男子ヒステリー症の最もよい實例の一つだつたよ。」かくして彼は、私が滿足しそして吃驚したことには、あれほど長い間頑强に反對してゐたことを承認したのである。併しながら夢のあの場面に於いてマイネルトを私の父によつて代理せしめてをられるのは、マイネルトと父と兩個の人物の間に何等かの類似が見出されるがためではなくして、夢思想の中に存する或る條件文章の簡潔な、しかし完全に十分なる表示が、その原因なのである。その條件文章とは詳しく言へば次の如し。さうだ、若しも俺が誰か大學敎授又は宮內官の息子、第二世であつたなら、そしたら俺は勿論もつと早く出世して(涉つて)ゐたらう

に。さて夢の中では、私は私の父を宮內官兼教授にしてをる。この夢の最も粗大で妨害的な不合理は一八五一年といふ年號の取扱ひに存する。その年號は一八五六年とは全く異つてゐないやうに思はれ、まるで五年間の差異は全然何等の意味なきかの如くである。然るに正にこれこそは、夢思想の中から表現されんとするものだ。四年乃至五年、これは、最初に擧げた同僚の後援を私がその間受けてゐた年限であり、同時に併し、私が私の婚約をして結婚を待たせて置いた年限であり、また夢思想によつて悅んで利用された一つの偶然的な暗合のおかげで、私が今私の最も親しんでをる患者をして完全なる治療を待たしめてゐる年限でもある。「五年間が何だ?」と、一夢思想が訊く。「そんなものは、私にとつては何等の時間ぢやない。そんなものは眼中にない。私の前には十分の時間がある。貴君が信じようとはしなかつたあのことが、結局成立してをるのと同じに、私はこれをも成就することでせう。」併しその外に、百代の年數から切り離した數五一はなほ別なぐあひに、しかも正反對的な意味を以て決定されてをる。であるからこの數はまた度々夢に出てくる。五一は男子が特に危險に瀕するやうに見える年齡であつて、私はこの年齡に突然死んだ同僚を幾人も知つてゐる。その中には、長年の間待ち焦れた後、その死の二三日前に教授に

任命された一人の同僚もあつた。

（五）。數字を弄するもう一つの不合理な夢。

「私の知人の一人であるM氏は、余人ならぬ偉大なゲエテのために或る論文に於いて攻撃せられた。しかも、吾々皆が考へるところでは不當なほど甚だしく猛烈にである。無論M氏はこの攻撃によつて粉碎された。彼は或る會食の席上でその事をひどく嘆いた。だが、この箇人的な經驗の下にあつても彼のゲエテに對する尊敬は變るところなかつた。私にはその時間的關係がどうも本當らしくは思はれないので、それを自分でいくらか明らかにしようと試みた。ゲエテは一八三二年に死んでゐる。M氏に對する攻撃は無論その以前に起つてゐるに相違ないのであるから、M氏はその時まだほんの若者であつたのだ。彼は十八歳であつた、といふことが私には信じ得ることに思はれた。併し現在が何年に當るのか、それを私は確かには知つてゐない。それで、全體の計算は曖昧なままになつてゐる。それはとにかくとしても、かの攻撃はゲエテの有名な論文「自然」の中に含まれてゐるのである。」

この夢の馬鹿らしさを釋明すべき材料を、吾々は直ぐに手に持つであらう。M氏を私は或る會食で知つてゐる。少し前に彼は私に彼の兄弟を診斷してくれろと言つた。彼の兄弟には痲痺症狀精神錯亂の徴候が認められるやうだ、といふのであつた。その推測は當つてゐた。病人を見舞つた際に起つた厭なことは、この病人が何の因縁もないのに、自分の兄弟の若い頃の惡戲をほのめかして、兄弟のあらを曝すことであつた。私は病人にその誕生の事を訊いたり、また一寸した計算を幾度もやらして見て、彼の記憶力の衰退を確めようとした。だが、彼はこの試験をまだ立派に通過することができた。こゝまで考へてきて、私に早くも氣がつくのは、自分が夢の中で恰かも痲痺症患者のやうに振舞つてをることだ。(何年に當るのか、それを確かには知つてゐない、云々。)夢の別の材料は或る別の最近時的な源から發してをる。或る醫學雜誌の私の友人である編輯者が、やはり私の友人である伯林のFlの最近の著書について、非常に無慈悲な、「粉碎せんとする」批評をその雜誌に採用したが、その批評は或るほんの若いそして殆ど批評能力なき新刊紹介者の書いたものであつた。私は干渉すべき權利があると信じ、編輯者の辯明を求めた。編輯者はあの批評を採用した事には頻りに遺憾の意を表したが、しかし何等かの救濟策を講ずる約束は

しようともしなかつた。ここに於いて私はこの雜誌に對する關係を絶ち、そしてその絶緣狀の中に、吾々の箇人的關係はこの出來事の下にあつても變るところないであらう、といふ期待を力說したのであつた。更に、あの夢の第三の源は、或る婦人患者が丁度その頃に話してくれた。彼女の兄弟が「自然、自然」といふ叫びと共に躁狂に陷つた精神病症についての話である。醫師達の意見では、この叫びはゲエテのあの美しい論文を讀んだことに起因し、この病人が自然哲學上の研究に於いて過度に勉強した事を示すものであつた。私はそれよりも寧ろ、性的な意味を考へる方がよいと思つた。吾々の國の敎養の乏しい人達も「自然」を云々する時には性的の意味を以てすることがある。そしてこの不幸な病人はその後に陰部を切斷した、といふ事實は、少くとも私の考へが不當ではなかつたことを證するやうに思はれた。この病人にかの躁狂發作が現れた時の年齡は十八歲であつた。

更に猶ほ、私の友人のそのやうにひどく批評された書物（「著者が氣が狂つてるのか、それとも吾吾の方が氣が狂つてるのか、と訊きたくなる」といふのが、もう一人の批評家の意見だつた）は、生命の時間的關係を論じてゐて、そしてゲエテの生涯の長さをも生物學上有意義な或る數の幾倍に當ると

述べたものであつた、といふ事を附け加へたならば、私がこの夢の中では私の友人の代りになつてをる事は、容易に洞察される。(私はその時間的關係を……いくらか明らかにしようと試みた、云々。)併し私は精神麻痺症のやうに振舞ひ、夢は不合理だらけとなつてをる。それは即ち、夢思想は反語的に次の如く言ふのである「無論、彼は馬鹿だ、狂人だ、そしてお前さん達の方がもつとよく理解してをる天才的な人なんだ。だが併し、恐らくその逆かしら?」そしてこの逆がさて夢內容の中では豐富に現された、即ち、ゲエテが若い人を攻擊してをる、それは寧ろ逆であつて、今日ならばほんの若い人間が不滅のゲエテを攻擊することならありさうなのである。また私がゲエテの死んだ年代を數へるのも逆であつて、實は私が精神麻痺症患者をしてその誕生の年を數へさせたのであつた。

ところで私は、いかなる夢も主我的な心の動き以外のものによつて與へられることはない事を示す約束をしておいた。從つて私は、この夢に於いて友人の事柄を私自身の事柄となし、友人の代りに私がなつてをる、それについての辯明をせねばならない。覺醒時に於ける私の批判的な確信だけでは、その辯明をなすのに十分でない。さて併しながら、十八歲になる病人の話と、その

病人の「自然」といふ叫びについての相違的な判斷とは、私が精神病患者に對する性的治療の説を主張して大多數の醫師等と反對な立場に立つに至つた、その對立をほのめかしてをる。私は自分に向つてから言ふかもしれない、お前の友人に起つたと同じやうに、お前にもあんな批評が加へられるだらう、既に一部分加へられてしまつてをるぞ、と。そして私は夢思想の中の「彼」を「吾々」といふ言葉に取り換へてもよいのである。「さうだ、お前達は正しい、吾々二人は馬鹿だ。」mea res agitur ―― これを、ゲエテのあの小さい、比べるものもなく美しい論文の名が出てくるので、私は力強く思ひ出した。なぜならば、或る通俗講演に於いてこの論文の朗讀があつた、それが高等學校卒業期にあつて何をやらうかと迷つてゐた私をば、自然科學の研究へ向はしめたものであつたからである。

(六)。私はなほもう一つの夢、その中に私の我が現れては來ないのに、その夢は主我的であることを示すべき責任を果さねばならない。私は上卷第四六四頁に、M教授が、僕の息子がね、あの近眼な奴が……と言つた、一つの短い夢を擧げ、これはその中で私が一つの役割を演じて

をる別の夢の前驅的夢にすぎない事を言つて置いた。ここにそのまだ述べてない主要な夢を揭げる。それは一つの不合理でそして理解のいかない語の形成の說明を吾々に提供するものである。「何等かの事件のためにローマの町では子供達が逃走せねばならないことになり、またそれが行はれた。その場景は或る市門の前、古代風な二重門の前であつた（私が夢みながら知つてをつたところでは、シエナのポルタ・ロマナ門であつた）。私は或る噴水の端に腰かけて、大變憂鬱で泣かんばかりであつた。一人の女性が――娛母だつたか、尼僧だつたか――男の子二人を連れ出して、それを父に渡した。それは私にではなかつた。男の子の中の年上の方は明瞭に私の長男だつた。もう一人の男の子の顏は私に見えない。それを連れて來た婦人は別れにその子から接吻を要求した。その婦人は鼻が赤いので目立つてゐた。男の子は彼女に接吻を拒んだ、併し彼女の方へ別れのため手を伸ばしながら、Auf Geseres と言つた、そして吾々二人に（或ひは。吾々の中の一人に）Auf Ungeseres と言つた。私は後者は或る優先を意味するのだ、といふ考へを抱いた。」

この夢は、劇場で見た一つの芝居、「新しい猶太人町」によつて刺戟せられた思想の或る紛糾した縺れの上に築かれてをる。猶太人問題、祖國を與へてやることもできない子供達の未來につい

ての心配、子供達が移住權を持つことができるやうに敎育してやりたいといふ心配、それ等がこの夢に屬する思想の中に容易に認められる。

「吾等はバビロンの水邊に坐して、且つ泣きたりき。」――シエナは羅馬と同じく美しい噴水で有名である。羅馬に對しては私は夢の中で(上卷、第三三二頁參照)、自分が知つてる土地のうちから何等かの代理を探さねばならない。シエナのボルタ・ロマナ門の近くで吾々は一つの大きな、明るく照明された家を見た。聞いたところでは、それは精神病院マニコミオである。この夢をみた少し前に私は、猶太敎の或る信者が辛うじて得た或る國立精神病院の地位を放棄しなければならないことになつた話を聞いてゐた。

夢の中に於いて定められてゐる事情からすると、Auf Wiedersehen (さよなら!) が期待されねばならないところに、Auf Geseres と言つてるのと、その全く無意味な正反對 Auf Ungeseres とは、吾々の興味を喚起する。

Geseres は私がヘブライ學者に聞き合はせたところによると、純ヘブライ語であつて、動詞 goiser から轉用されたもので、「命ぜられたる受難、宿命」と譯すのが最も適當である。卑俗な

訛に於いてこの語の使用されてをるのに從へば、これは「悲嘆と呻吟」を意味する、と考へてもよい。Ungeseres の方は私の勝手な造語で、先づ私の注目を惹くが、併しさしあたり私を當惑させるものである。夢の終りにある小さな言葉・Ungeseres は Geseres に對し優先を意味する云々は、いろいろな思ひ付きに、從つて理解に門扉を開いてくれる。この種の關係は鰤にある、即ち、ungesalzen（鹽漬でない方）が gesalzen（鹽漬の方）よりも、一層高く尊重されるのだ。鰤は平民にとつては、「高尚な熱狂」なのだ。この考への中には私の家庭の或る人に對する諧謔的な諷刺がある。その人は私よりも若いから、私はその人が私の子供達の未來を見てくれるだらうと期待してをる人だ。これに對しては更に、私の家庭のもう一人の別な人、即ち私の家の子供附の女中が、かの夢の中の娛母（又は尼僧）のうちによく明らかに示されてをる、といふ事が合致するであらう。併しまだ、gesalzen-ungesalzen 及び Geseres-Ungeseres の組合せの間には、媒介的な過渡をなすものが缺けてをる。この過渡は、"gesäuert und ungesäuert"（酵母を入れたのと、酵母を入れないのと）の中に見出される。イスラエルの子等は埃及から逃ぐるが如く脫出した際に、酵母を、パンの揑粉を發酵させるだけの餘裕を持たなかつた、それでそれに對する記念

の爲に今日猶ほ復活祭の時に酵母を入れてないパンを食べる。ここにまた私はこの部分を分析してをる時に私の心に浮んだ突然の思ひ付きを持ち出すことができる。卽ち私は、最近の復活祭に伯林の友人と二人で未知のブレスラウ市をあちこち歩き廻つた時の事を思ひ浮べた。一人の少女が或る通りへ出る道を私に訊いた。知らないんですがねえ、と私は詫びねばならなかつた。そしてその後で友人に向つて言つた、「願はくばあの子供も後で世の中に出る時には、自分を導いて貰ふ人を選むのに、もつと烱眼であつてくれればよいがねえ。」すぐその後、一枚の看板が私の眼についた。「ドクトル・ヘロデス、診察時間……」。私は言つたものだ、「願はくばこの同業者は小兒科でなくつてくれればいいね。」譯者註、ユダヤの王ヘロデスは國內の小兒を皆殺しにしようとしたことがあつた、のに因んだ諧謔であらう。その間に私の友人は兩側均齊の生物學的意義について彼の意見を披瀝し、次のやうな文句で始まる論をやり出してをつた。「若し吾々が一つ目入道（Kyklop）のやうに額の眞中に一つの眼を持つてるのだつたら……。」さてこれが前置きの夢に於けるかの敎授の言葉を生むことになつた、「僕の息子がね、あの近眼の奴が（der Myop）、云々。」かくて今や私はかの geseres に對する主要源泉に到達してしまつた。何年か前のこと、今日では一

個の獨立的な思想家になつてをるM教授のこの息子が、まだ學校の腰掛に坐つてゐた頃に、眼の病氣にかかつて、醫者はこれは心配な病氣だと言つた。醫者の意見では、病氣が一方の眼だけに留まつてをる限りは、何ほどのことでもないが、併しそれが他方にまで及ぶやうにでもなると、事面倒であるかもしれん、といふことであつた。病苦は片方の眼だけで障りなく癒つた。然るに間もなく別の方の眼の疾患の徴候が實際に現れて來た。驚愕した母は彼等が滯在してゐた寂しい田舍へ直ぐに醫者を呼んだ。併し醫者の考へは別のものだつた。彼は子供の母に怒鳴りつけた。「何の geseres（苦しみ）をやつてるんですか？　一方が良くなつてきてるんなら、別の方だつて良くなつてくるでせうに。」そして果してその通りであつた。

さて、私と私の家族に對する關係は、どうであるか。M教授の息子がそれに腰かけていろはを習つた學校の腰掛は、そのお母さんから私の長男に贈られたが、私は夢の中でこの長男の口に別れの言葉を言はしめてをる。この譲渡に結びつけられる願望の中の一つは、容易に推量される。この學校用腰掛はその構造によつて、子供が近眼と偏頗になるのを防がうとするものであつた。夢の中に近眼（Myop――その背後には、一つ目入道 Kyklop）と兩側均齊についての說明が出て

くるのは、これに基く。偏頗性についての心配は多様な意味を持つ。それは身體の偏頗性の外に、智性的發達のそれをも意味し得る。だが、夢の場面はその亂暴さから考へるなら正にかかる心配とは矛盾するとは見えないか？　子供は一方の側に向つて別れの言葉を述べてしまつた後に、他方の側に向つて、恰かも平均を作り出さうとするかの様に、その正反對を叫ぶのである。だから、この子供は謂はば兩測均齊に注意しながら行動してをる！

かくして夢はそれが最も亂暴であると思はれる場合に於いて、屢々最も意味深長なのである。凡ゆる時代に於いて、何事かを言はねばならないのだが、それを危險なしには言ふことのできなかつた人は、好んで道化師の頭巾を冠るのが常であつた。言ふことを控へた言葉が實はその人に向けられてゐる。それを聞く本人は、それを聞いて笑ふことができれば、そしてその好ましからぬことが明らかに何か馬鹿げたやうなものであると判斷することができて自から意を安んじ得るならば、その言葉をむしろ我慢してやる。夢は實際に、芝居の中で馬鹿者の風を裝はなければならない王子と、全く同じ振舞をするのである、それであるからハムレットが本來の條件の代りに譯のわからない機智を口にしながら、自分について言つてをる文句は、夢に對しても亦當てはま

る。「俺は北北西の風の時にはただもう氣狂ひだ、風が南から吹くと、俺は蒼鷺と鷹を區別することができる。」(この夢はまた、かの一般に當てはまる命題に對する一つのよき實例ともなる。即ち、同一夜のいくつかの夢は、假令記憶の中では離ればなれであつても、同一の思想材料の地盤から發生してをるものだ、といふ命題だ。私が私の子供等をローマの町から逃がしてやる、といふ夢の局面は、併し私の小兒時代に屬する類似的な一つの出來事に對する關係のため歪められてをる。その意味は、既に數年前にその子供等を別の土地へ移住させる機會を持つことのできた親類の者を私が羨んでをる、といふにある。)

夢の不合理性の問題に對する私の解決はかくして次の如くである。夢思想は決して不合理ではないこと——少くとも、精神の健全な人間の夢の根柢たる夢思想は不合理ではない——及び夢の仕事は、夢思想の中に批評や嘲笑や嘲罵があつてそして夢の表現形式を以て表出を求める場合に、不合理な夢、及び箇々の不合理な要素を持つた夢を作り出すのであること。さて、私の次の關心事は、夢の仕事一般は三つの既に揭げた——及び猶ほこれから揭げる筈の第四の——契機の共働作用に盡きるものである、夢の仕事はその四つの規定された條件を守りながら夢思想を飜譯する以外の何事をもなすものではない、そして心靈は夢の中に於いてその凡ゆる精神的能力を以て働

くものであるか、或ひはただその能力の中の一部分を以て働くものであるか、そのいづれであるかなどの問題は、敢て要もなきものであつて、そして事實上の事情から逸れてをるものである事を、示すにある。然るに次のやうな夢が澤山にある、即ちその夢の中に於いて判斷が下され、批評がなされ、承認が行はれる、又、夢の箇々の要素についての不審が夢そのものの中に現れる、說明の試みがなされ、議論が行はれる、さういふ夢が澤山にあるのだから、かかる現象から導き出される抗議を、私は選擇された實例いくつかによつて片付けねばならない。

私の答辯は次の如くだ。一見するところでは判斷機能の實行の如きものとして夢の中に見出される總ては、萬が一にも夢の仕事の思考行爲と解釋すべきものではなくして、夢思想の材料に屬してゐて、そして其處からして既成的な形成體として顯在的夢內容の中へ出て來たものである。私は猶ほこれ以上のことをも言ふことはできる。吾々が覺醒後に思ひ出した夢について下すいろいろな判斷のうち、この夢の再現が吾々の心に呼び起すいろいろな感じのうち、大部分は潛在的夢內容に屬し、そしてその夢の判斷へ組み入れられるべきものである。

（一）。これに對する著しい一例を私は既に引用してをる。或る婦人患者が自分の見た夢はあん

まり不明瞭だからといつて、それを語らうとしない。彼女は夢の中で一箇の人物を見たが、それが良人であつたか、それとも父親であつたか、が彼女にわからない。その次に第二の夢が續き、それには一つの「肥料車」が出てくるが、これに對しては次のやうな記憶が結びついてゐた。年若い主婦であつた頃、彼女は一度、彼女の家に出入してゐた或る若い男に向つて、わたしのさし當つての心配は一つの新しい肥料車を手に入れることである、と語つたことがあつた。その翌朝彼女のところへ一つの肥料車が送り屆けられた。併しそれには鈴蘭が一杯入れてあつた。夢のこの部分は「わたし自身の肥料で育つたのではない」(わたし自身の力によるのではない、の意もある)成句の表出に役立つものである。それで分析を完全に行つてみると、夢思想の中心となつたものは、若い頃に聞いた話、即ち、或る娘が子供を生んだが、それの父親は一體誰であるのか不明瞭であつた、といふ話であることがわかつた。さうしてみると、ここでは夢の表出は覺醒思考にまで及び、そして夢思想の要素の一つをば、その夢全體に對して覺醒時に於いて下した一つの判斷によつて代表せしめてゐる。

(二)。第一のと似たもう一つの場合。私の患者の一人が彼自身に面白いと思はれた或る夢を見

た。なぜならば、彼は目が醒めた後直ぐにから言つた。これを俺は醫者に話さねばならぬと。その夢を分析して見ると、彼が診療を受けてをる間に作り始め、そしてそれについては何事も私に話をしまいと決めてゐた或る關係に對し極めて明瞭な暗示のあることが判つた。(「醫者に話なしなければならない」云々といふ、精神分析治療の最中に見る夢の中に出てくる警告又は計畫は、定まりきつて、夢の報告に對する大きな反抗に該當するものであつて、そしてその夢の忘却を伴ふことが稀ではない。)

(三)。私自身の經驗による第三の例。

「私はPと一緒に家屋や庭園の見える或る場所を通つて病院へ行きつつあつた。その時、この場所を旣に幾度も夢の中で見たことがあつた、といふ考へが浮んだ。私は大してよくはその土地に通じてゐなかつた。Pは私に一つの道を示した。その道は一つの角を通つて一軒の料亭へ通じてゐた(廣間が見えて、庭園ではなかつた)。其處で私はドニ夫人のことを訊ね、彼女は奥の小さな部屋に三人の子供と一緒に住んでをることを聞いた。私は行つてみた、そしてまだ其處まで行かぬうちに私の小さい娘二人を伴れた一人の不明瞭な人物に出會つた。私は彼等と一緒に一寸の間立つてゐた後に、娘達を受取つた。娘達をこんなところに放つておいてはいけないな、と私の

妻に對する一種の非難。」

目を醒ました時に私は大きな滿足を感じた。その滿足の動機は、今これから分析をしてみて、「私は既にそれを夢みたことがある」といふことが何を意味するかを知るであらう、といふ點にあるのだと考へた。（これは、「哲學評論」の最近數號に亙って詳細なる議論を惹起した題目であつた。「夢のパラムネジー」Paramnesie im Traume, Revue philosophique.）。然るに分析はそれについて何物をも私に教へるところがなかつた。分析が私に示したのはただ、その滿足は潛在的夢內容に屬し、そして夢についての判斷に屬するものではない事だけだつた。それは、私が私の結婚生活に於いて子供等を得てをる、その事についての滿足だつたのである。Pはその生涯の或る期間のあひだ私と同じ道を歩いてゐたが、その後に社會的に及び物質的に私を遙かに追ひ越してしまつた、けれどもその結婚生活に於いては子供を持たないでをつた人だつた。この夢の二つの動因が、一つの完全なる分析による證明の代りをなしてくれるだらう。前日に私は新聞で、Dona A:y 夫人（それから私は Doni なる名を夢の中で作つた）なる人の死亡廣告を讀んだ。この人は產褥で死んだのであつた。私の妻の話によると、この故人は私の妻が家の一番下の子二人の時賴んだのと同じ

産婆の世話を受けてゐた。Doña といふ名が私の注目を惹いた、なぜならば、私は少し前に或る英吉利の小說の中でこの名を初めて見つけてゐたのだつたから。もう一つの動因はこの夢の時日から生じてゐる。それは、私の一番上の、詩的才能を持つて生れてをるらしい男の子の誕生の前の晩だつたのである。

(四)。これと同一の滿足が、かの、父はその死後にマジャール人の間に於いて或る政治的役割を演じた、云々の不合理な夢から醒めた後にも、私に殘つてゐた。そしてそれはその夢の最後の部分に隨伴した感じの繼續に基くものと考へられた。「彼はその臨終の床に於いてガリバルヂにいかにも似たやうに見えたのを私は思ひ出した、そしてそれがしかも本當になつたので悅んだ……(その後の續きは忘れられてしまつた。)さて分析からして私はこの夢の關係に屬する部分を挿入することができる。それは私の二番目の男の子のことである。私はこの子に或る歷史上の偉人の呼名をつけてやつた。私は少年時代、殊に英吉利に滯在してをつた時以來、この偉人に力强く惹きつけられたのであつた。今度生れるのが男の子だつたら、正にこの名を使つてやらうといふ計畫のうちに、期待の一年間を過し、そして丁度生れた男の子を非常に滿足して、この名を以て

迎へたのである。父親の抑壓された出世慾がその思想の中に於いて子供の上へいかに移されるものかは、容易に心づかれるところであらう。さうだ、人は進んで信ずるであらう、人生に於いて止むを得ず出世慾を抑壓せねばならないときに、その抑壓の行はれるいくつかの道の一つがこれである、と。この子供がこの夢の關聯の中へ採用されるに至つたのは、その頃この子供に――子供に對しても、また死にかけてをる人にも、實に許すべきである――同一の不始末が、即ち下着を汚すことが起つてゐたためであつた。これについては、前に述べておいた「裁判官」といふ暗示、及び自分の子供等の前に偉大に且つ純潔に立つてみせる、といふ夢の願望を參照せよ。

(五)。さて夢そのものの中に含まれてゐる判斷表現をば覺醒時まで續けるとか、又は覺醒時へ移すとかのことをせずして、探し出さねばならないことになると、前に既に別の目的で報告しておいたやうな事を、そのために利用するならば、大變に氣安さを感ずるであらう。M氏を攻擊したゲエテの夢は、實に澤山の判斷行爲を含んでをるらしく見える。「眞實らしくないと思はれるこの夢の時間的關係を少しばかり明らかにしてみよう。」ゲエテが私の知人である若い男を文獻的に攻擊した、などといふのは無意味に對する批判心の動きとは見えないか? 「彼が十八歲であつ

た事は、私に信じ得ることに思はれた」。これはどうしても、明らかに遲鈍なる計算の結果のやうに聞える。そして「現在何年に當るのか、私には確かには判らない」といふのも、夢に於ける不確定又は疑惑の一例であらう。

然るに私はこの夢の分析からして、夢の中に於いて初めて行はれたらしいかの判斷行爲は、その文句通りに考へて、もつと別な解釋を許し、そしてその解釋によつてこの行爲は夢判斷にとり缺くべからざるものとなり、同時に凡ゆる不合理は回避されるのであることを、知るのである。「時間的關係を少しばかり明らかにしてみよう」といふ部分に於いて、私は私の友人の代りに立つてをる。その友人は實際に人生の時間的關係を明らかにしようとしてをる人であつた。かくしてこの部分は、先行のいくつかの部分の無意味に對して反抗するやうな一種の判斷たる意義を失つてしまう。「眞實らしくないと思はれる」云々の挿入部分は、後に出てくる「信じ得ることに思はれる」云々と相合して一體をなすものである。これとほぼ同じやうな文句を以て私は、その兄弟の病歷を話す婦人に答へたことがある、「自然、自然と叫ぶのが何かゲエテと關係を持つてゐたといふことは私には眞實らしくないやうに思はれる、それよりも、その叫びはあなたにも知られ

てをる性的意義を持つてゐたのだ、といふ方が、私にはずつと信じ得ることだ。」勿論この場合には一つの判斷が下された、とはいふものの、夢の中に於いてではなくして、現實に於いて、夢思想によつて記憶せられ且つ利用された一つの動因を考へてのことであつた。夢内容は夢思想の何等か他の斷片と同じに、この判斷をも抱合してをる。

十八といふ數は夢の中の判斷と無意味に結びつけられてをるが、これは實際の判斷が取り出された聯絡の痕跡を保留してをる。最後に、「現在は何年に當るのか、私には確かでない」云々は、精神麻痺患者と私とを同一化するものに外ならない、この患者の試験に際してこの一箇の支點は實際に生じてゐたのであつた。

夢の見かけだけの判斷行爲の解決に際しては、夢判斷の仕事の實施のために初めに揭げておいた規則に留意せねばならない。即ち、吾々は夢の中に於いて作られた夢の各成分聯絡を以て本質的ならざる外觀にすぎずとしてこれを除外し、夢の凡ゆる要素をばその源に溯つて探求するがよいのである。夢は一箇の寄せ集めであつて、吟味のためには再びそれを分解してみねばならない。併しそれと同時に注目すべきことは、夢の中には一箇の心的力が現れ、その力が、上の如き見か

けだけの聯絡を作り出す、從つて夢の仕事によつて獲得した材料に對し或る第二次的の加工を施す、といふ事である。これこそ卽ち、吾々が後に夢形成に際して參加する第四の契機として、考察するであらうところの力の現れに外ならない。

（六八）。既に報告してある夢の中に、判斷の仕事のもつと別の實例を、探してみよう。市會から來た書狀についてのあの不合理な夢の中で、「私は訊いた、すぐその後であなたは結婚したんですか？　私は計算をしてみた、私は一八五六年に生れてをるんだが、それはすぐその後のことであつたやうに思はれた。云々。」これは一種の推定の形を纏うてをる。父はかの發作のあつた後間もなく一八五三年に結婚した、私は長男であつて、一八五六年に生れてをる、卽ち、それはちやんと一致する。然るにこの推定は、夢思想を支配してをる部分、「そんな四年や五年はちつとも時日といふほどのものではない、そんなのは勘定にならない」云々の願望實現によつて、僞造されてをる事を、吾々は知るのである。この推定の各部は、內容から言つても形式から云つても、夢思想のために、別に決定されてをる。卽ち、私の同僚が患者の忍耐について苦情を言つた、そしてその患者は治療が終ると直ぐ結婚しようと考へてをるのであつた。私が夢の中で父と應待する

様子は、審問か又は試驗を想起せしめる、從つて或る大學の先生のことを想起せしめる、この人は、學生を自分の級へ登錄する時にすつかり身許調べをやるのが常であつた。いつ、生れた？一八五六年。——父さんは？　これに對し吾々は父の名を羅甸語の語尾をつけて言つたものだ。そして吾々學生達は、この宮內官を兼ねてゐる先生は父の名からして何か推定を下さうとするのだが、そんな推定は登錄された者の名だけで必ずしも許されるものではあるまいに、と考へたのであつた。これから考へると、かの夢の推定を下すのはこの敎師の推定を下すことの繰り返へしに外ならないので、それが材料の一片として夢思想の中に現れたのであるかもしれない。ここに吾々は或る新しいことを經驗することになる。夢內容の中に一つの推定が現れる時には、それは實に確かに夢思想から來るのである。併しこの夢思想の中にこの推定は記憶された材料の一片として含まれてをるかもしれないし、また、論理的な紐として夢思想の一系列を互ひに結びつけてをることもあるかもしれない。どつちにしても夢の中の推定は常に夢思想からの一箇の推定を表出するものである。（以上の考察の結果は前に揭げた（第五三九頁）論理的關係の表出に關する私の說明を二三の點に於いて訂正するであらう。あれは夢の仕事の一般的な態度を示しはするが、併し夢の仕事の極め

て微妙なそして極めて用意周到なる業績を考慮してゐなかつた。)

かの父についての夢の分析をここに續けてみよう。かの教師の審問と接續するのは、(私等の時代には羅甸語で綴られてあつた)大學生の名簿についての記憶、更に私の在學課程についての記憶である。醫學の勉强に豫定されてをる五箇年は私には餘りに短かすぎるものであつた。私は無頓着にそれ以上の年月に亘つて仕事をしてゐた、それで私の知己の間には私をぶらぶら怠けてゐると思ふ人もあり、私が學業を綛るだらうかを疑ふ人もあつた。そこで私は急に決心して試驗を受け、そして學業を綛つた、延期にも拘らず。私が批評家達に對して反抗的に抱いてをる夢思想は、これがために新しく一層强化されてをる、「君たちは僕が時間を急がないでをるものだから信じようとはしないのだらうがね、それでも僕は片づけるよ、きつと綛つてみせるよ、今まで幾度もその通りやつて來たんだからね。」

この夢の冒頭の部分には、どうしても一種の論證の性格を否定できない二三の文句がある。そしてこの論證的な文句は不合理的などはなくて、そのまま覺醒時の思考に屬せしめることもできるくらゐのものだつた。「僕は夢の中で市會から來たその書狀を可笑しく思つた、なぜなら、第一、

私は一八五一年にはまだこの世に生れて來てないのだし、第二、その事に關係があるかも知れない私の父は既に死んでをるからである。」兩つとも、ただにそれ自身で正しいばかりでなく、假に私がかやうな書狀を受取つた場合だつたら、實際に使用するだらうと思はれる本當の論證と完全に合致もするものである。前に試みた分析（第七五二頁）によつて知つたところでは、この夢はひどく憤慨し怒氣滿々たる夢思想を地盤として生長して來たのであつた。若しその外に猶ほ、この夢思想の檢閱に對する動機は眞に强度のものであつたと、認定することが許されるならば、吾吾は、その夢の仕事は夢思想の中に含まれてをる手本に從つて、無意味な强制に對する見事な反駁を作り出すべき凡ゆる動機を有するものである事を、理解するであらう。併しながら分析が吾吾に示すところによれば、この場合の夢の仕事には何等自由なる模倣制作が課せられたのではなくして、夢思想から發する材料がそのために利用されねばならなかつたのである。それは丁度、或る代數方程式の中に數字の外にプラスやマイナスの符號、指數や根の符號が出てをる、そしてこの方程式を書き寫す人がそれ等の運算符號を理解することなく、それ等をば數字と同じやうに書き寫すばかりでなく、兩方をごたまぜにしてしまふ、のと似通うてをる。かの二つの論證は次

の材料に還元されるものだ。私が精神病患者の心理的解決の基礎とする前提の多くは、それが人に知られたばかりの場合には、不信と哄笑を惹起するであらう、といふ事を考へるのは、私にとつて苦痛である。それで私は次の事を主張せざるを得ない、即ち、生後二年目頃の、否、時としては生後一年間のいろいろな印象が、後に疾患に陷る人々の情緒生活の中に或る持續的な痕跡を殘してをる。そしてそれが――假令、記憶のためにさまざまに歪められ且つ誇張されてをるにしても――或るヒステリー症的徵候に對する最初にして最も下にある基礎となつてをるのである、と。私は患者達にこの事を適當なところに於いて詳しく語つてやつた。然るに彼等は、彼等がまだ生れてゐなかつた時代の記憶を辿つてみませう、などと言つては、私の新しく立てた說明を愚弄するのが常であつた。私の期待するところでは、婦人患者に於いてその極めて初期的な性的昂奮の際にその父親が演ずる豫想もしなかつたやうなあの役割の發見なども（第四四一頁の解說を參照）、やはりそれを人に語るならば、同じやうな態度を以て迎へられることであらう。しかも私の十分根據ある確信によるならば、兩方ともに眞實であるのだ。この確信をなほ固めるために、私は、父親の死が子供の甚だ小さかつた年代に當るにも拘らず、その後の普通には說明のつけが

たいやうないろいろな出來事から推してみると、その子供はそのやうに早く自分の身邊から消え去つた人物に對する記憶をば、無意識的に保存してをつた事が明らかである、さういふ箇々の實例を考へてみた。私の二つの主張はその妥當性を人が論難するであらうところの推定の上に立つてをる、その事を私は承知してゐた。かく述べてくると、この推定、それへの抗議を私が懸念してをるこの推定の材料が、夢の仕事によつて、抗議の餘地なき推定を作り出すために利用せられてをる、のだとすれば、それは正に願望實現の一業績である。

（七）。私が今までにただ輕く觸れるだけにして置いた或る夢の中では、その冒頭に於いて、そこに浮び上りつつある題目に對する不審が明白に述べられてゐる。

「老ブリュッケ氏が私に何か課題を與へたのに相違ない。まことに奇妙なことには、その課題は私自身の身體の下部、骨盤と脚の解剖準備に關係してをる。私は解剖室に於いてのやうに私の身體の下部を私の目前に見てをるのだが、併し自分では自分の身體の脫落などを感じもしないし、戰慄を感じもしない。ルイゼ・エヌが傍に立ち、私と一緒に仕事をしてをる。骨盤から臟腑が拔き出された。骨盤の上部が見えたり、下部が見えたり、その兩方がまじり合つたりする。部厚な肉

色の塊が見える（それを見ながら私は夢のなかでなほ痔のことを考へた）。それ等の塊の上にあつて、皺くちやにした銀紙に似た何かが、まだ愼重にほじくり出されねばならなかつた。（錫箔Staniol――魚類の神經組織 Stannius に對する暗示、第七二二頁參照）。その後で私は自分の兩脚の所有を囘復し、町の中を歩いてゐたが、（疲勞のため）馬車を雇つた。その馬車は私が驚き呆れたことには或る家の門へ走りこんだ。その門は開いて、馬車をして一つの通路を通らしめたが、その通路はおしまひにばつたりと行き詰つた、そして馬車は終に屋外へと走り出た。私の住居の或る家の玄關口だ、其處には同じ家の他の借家人達の乳母車が置いてある。併しこれはその外に猶ほ幾通りもの意味を以て決定されてゐる。）最後に私は私の荷物を背負うたアルプス案內人を伴れて、變化して行く風景の間を逍遙してゐる。或る道程の間は私の疲れた脚を考へてくれてこの案內人は私をも背負うた。地面はじめじめしてゐた。私達はその端に添うて歩いた。人々が地面の上に腰かけてゐた。その中に一人の少女がゐた。彼等は西印度人か、又はジプシーかのやうだつた。その前に私はそのつるつる滑る地面の上を自分で動いてゐたが、その間いつも、解剖の後でも自分はこんなによくもできるものだなあ、と不審がつてゐたのだつた。終りに吾々は一軒の小さな木造

小屋のところへ來た。その家屋は一つの開いた窓で終つてゐた。案内人は私を其處におろして、二枚の用意してあつた木の板を窓の閾の上に置いてくれたが、窓から出て踏み越えて行かねばならない絶壁をそれで橋渡しするためだつた。今度は本當に私は自分の脚について心配し出した。併しその期待された通行の代りに私は木の腰掛に寢てをる二人の大人を見たのである。その腰掛は小屋の壁のところにあつて、そして彼等の傍には二人の子供が寢てゐるやうにも思はれた。まるで、木の板ではなくて、その子供等が、通行を可能ならしめるつもりででもあるかのやうであつた。私は恐怖の思ひで目を醒ました。」

一度でも夢の壓縮作用の潤澤なるについて正しい印象を得たことのある人ならば、この夢の詳細な分析はどれほど多くの紙數を占めねばならないかを、容易に想像することができるであらう。併し私は記述の聯絡のために、ただこの夢の中に於いて、「まことに奇妙なことには」といふ挿入句に現れてをる不審についての一例だけを、取りあげよう。私はこの夢の機會を反省してみる。それは、夢の中でも仕事の手助けをしてくれてゐる婦人ルイゼ・エヌの訪問であつた。「何か讀むものを借して頂戴」、と彼女が言つた。私は彼女にライダー・ハッガァドの「彼女」（"She", by

Rider Haggard) を提供した。「奇妙な本だけど、匿れた意味が一杯あるんだ」。私はもつとそれを詳しく彼女に說明しようとして言つた。「永遠に女性的なもの、吾々の情念の不滅、さういつたやうな——。」その時彼女は私の言葉を遮つた。「わたしはその本をもう知つてゐます。何かあなた自身のものがないの？」——「無いよ、俺自身の不滅の著作はまだ書いてないんだ。」——「そんなら、あなたが約束してゐるやうにわたし達にも讀める程度に書いた、あなたの所謂最後の解說は、一體、いつ出るの？」と彼女は少し厭味らしく訊いた。そこで私は、彼女でない、誰か別の人が彼女の口をかりて、私を促すのだ、と氣がついて、そして默つてしまつた。私は自分自身の內密な性質の多くのものを天下に曝さねばならない夢に關するあの研究をさへ、公表するためには、犧牲に拂ふところの、自己克服の努力を想ひ浮べたのであつた。私は自分で思つた。「お前が知り得るところのもののうちの最上のものを。お前は子供等に語つてはいけないのだ」この動機を考へ合はせてみると私が夢の中で與へられる自分の身體の解剖は卽ち私のいろいろな夢の報告と結びついてゐる自己分析なのである。老ブリュッケ氏がそこへ現れるのは道理がある。私の學問上の仕事のこの初期の時代に於いて旣に、私は或る發見をその儘に捨てて置いた。

そしてブリュッケ氏の熱心なる依頼あつて後漸くそれを發表した、といふやうな事があつた。ところで、ルイズ・エヌとの談話が緒口となつて生じたそれから先のいろいろな思想は、非常に深刻なところに及んでゐて、意識的にはなり得ないほどである。それ等の思想は、ライダー・ハッガァドの「彼女」を口にしたために序でに私の心の中で喚び起された材料が因で、傍道へ逸れて行つた。「まことに奇妙な」といふ判斷はこの本と、同作家のもう一つの本、「世界の心」(The Heart of the World) に溯り、そしてこの夢の多數の要素はこの二つの空想的な小說から採用されてをる。背負はれて通るじめじめした地面、携へて來た木の板によつて通り越す絕壁、これ等は小說「彼女」から出てをる。西印度人、少女、木造小屋は、「世界の心」から。兩方の小說に於いて一婦人が主人公であつて、危險な旅行が中心となつてをる。「彼女」では未發見、殆ど嘗つて人跡なかりし處への冒險的な道が中心となつてをる。疲勞した脚は、この夢を記錄した際の覺書によると、その頃の實感であつた。恐らく或る疲れた氣分と、「俺の脚はまだどれ位步けるだらうか?」といふ疑問とが、この疲勞した脚の表出に妥當したのであつたらう。小說「彼女」に於いては女主人公が自分と他の人とのために、不滅不死をもたらす代りに、地球の中心の神祕な火

の中で死を見出した、といふ事でその冒険が終つてゐる。それと似た恐怖が明らかに私の夢思想の中に生じてゐた。「木造小屋」は確かにまた棺であり、從つて墓である。それは凡ゆる思想の中の最も願望せられざるものであるのに、それを一つの願望實現によつて表出してをるところに、夢の仕事は正に傑作的の成績をなし果したのである。即ち、私は旣に一度或る墓の中に入つたことがあつた。併しそれはオルギエトオの傍の或る發掘整理されたエトルリア人の墓であつて、壁際に二つの石の腰掛が置いてある細長い部屋で、その腰掛の上には二人の大人の骸骨が寢かしてあつた。夢の中の木造家屋の內部は正しくその通りに見えた。ただ石の代りに木になつてるだけだ。夢はかう言つてをるやうだ、「假令お前は墓の中に居なければならないのであるにしても、それはエトルリア人の墓なのだよ」と。そしてこのすりかへを以て夢は最も哀しい期待をば眞に願はしい期待に改造してくれたのである。遺憾ながら夢は、後に述べる如く、情念を伴ふ表象をのみその正反對へ轉向させ得るにすぎない。必ずしも情念そのものを轉向させる事はできない。それであるから私は「恐怖の思ひで」目を覺まし、そしてその前に、父親に對しては拒絕されてゐた事を恐らくは子供等が到達するであらう、といふ私の考へが表出されねばならなかつたので

あるが、それは、かの奇妙な小說に對する新しい暗示であつた。小說の中には、或る人間の同一性がその一族代々を通じ二千年に亙つて保持されてをる話がある。

（八）。或る他の夢の聯絡の中に、同じく、夢の中で體驗したことについての不審の一表現が見出される。併しこれは、いかにも珍しい態とらしい、そして殆ど奇拔とも言へるほどの說明の試みと結びついてをるので、私はただそのためだけでもその夢全體を分析にかけてみねばならないと思ふのであるが、この夢には吾々の關心にとつての猶ほ他の二つの重點は含まれてゐない。七月十八日から十九日にかけての夜、私は南鐵道線に乘つてゐた。そして眠りながら「誰かが、ホルトゥルン Hollthurn まで十分、と叫ぶのを聞いた。私はすぐホロトゥリエン（Holothurien——海鼠）——或る自然科學博物館——のことを思ひ浮べた——ここは、勇敢な男子達が彼等の國主の優勢に對抗して成功しなかつた土地だ、と思ひ浮べた。——さうだ、オーストリアに於ける反宗敎改革運動だ！　——まるで、それがシタイエルマルクか、又はティロルにある土地ででもあるかのやうに。やがて私は不明瞭に一つの小さな博物館を見た。その中には、これ等の男子達の骸骨や所得物が保存されてゐる。私は汽車から降りたいと思つたが躊躇した。ブラットフォ

ームの上に果物を持つた女達が立つてゐる。彼等は地面に蹲まり、籠をいかにも氣を惹くやうにさし出してゐる。――私は果して時間があるかどうかを疑つて躊躇したのであつたが、今に依然として吾々は立つてゐる。――私は突然別の車室にゐた。其處では座席の敷革が非常に狹いので、背中がじかに腰掛の背にぶつつかつた。(この記述は私自身にも合點がいかない、併し私は、夢を書きつける時に思ひ浮んだその文句の儘で紹介する、といふ原則に從ふ。文面はそれ自身が夢表出の一部である。)私はそれを不思議に思つた、でも俺は眠つてをりながら乘り替へてしまつてゐたんだからなあ、と。數多の人々がゐた、その中に英吉利人の兄妹がゐた。一列の書籍が明白に壁際の一つの臺の上にあつた。「國民の富」、「物體と運動」(マックスウェルの)が見えた、厚い、鳶色のクロース裝釘であつた。兄が妹にシルレルの或る本のことを訊いた、お前あれを忘れはしないか、と訊いた。それ等の書籍は私のもののやうに見えたり、兄妹のもののやうに見えたりした。私はそれを確め又はその考へを支持しながら會話の中へまじらうと思つた。――――――私は全身に汗を出しながら目を覺ました、總ての窓が閉まつてゐたものだから。汽車はマルブルクに止まつた。

この夢を書きつけてる間に、記憶が看過しようとした一部分があつた、その部分が私の注目を惹いた。「私はその兄妹に向ひ或る著作について言つた、It is from ……併し私は言ひ直した、It is by ……と。兄が妹に注意した、あの人はちやんと言つたよ。」

この夢は停車場の名を以て始まつた。この名が私を不完全に目覺めさせたのであつたに相違ない。私はマルブルクといふべきその名をホルトゥルンに取りかへた。最初の叫び又は恐らくその後の叫びに於いてマルブルクといふ名を私が聞いてをつた。それを證明するのは、夢の中のシルレルの事が出てくることである。シルレルは、シタイエルマルク州のマルブルクではないが、別のマルブルクで生れたのだ。（シルレルがマルブルクでなく、マルバハに生れたのである事は、獨逸の高等中學の學生なら誰でも知つてゐるし、私も知つてゐた。これもやはりまた、或る故意的な變造の代用として他の箇所にこつそりと入り込んで來るあの錯誤、それについては私は「日常生活の異常心理」の中でも註解を試みておいたあの錯誤の一つである。）ところで、私の今度の旅行は、一等ではあつたが、非常に不愉快な事情のものだつた。汽車は滿員だつたし、私の車室に入つてみると、一人の紳士と淑女に出會つたが、彼等は大變高貴には見えたけれども、闖人者に對する不愉快をいかやうにか蔽ひか

くす、といふ禮儀を持つてゐないか、乃至はそんなことは骨折る價のないものと考へてる人達だつた。私の丁寧な挨拶は酬いられなかつた。夫婦は相竝んで（汽車の走る方向に背をむけて）坐つてゐたに拘らず、その妻女は急いで自分の向ひ側の窓際の座席を私の見てる前で傘を置いて塞いでしまつた。扉はすぐに閉められた、窓を開けるのを豫防するやうな言葉が彼等の間にとりかはされた。多分、私が窓外の空氣に餓ゑてるのだ、とすぐわかつたらしい。暑い夜だつた、そして四方八方閉め切つた車室の中の空氣は殆ど人を窒息せしめんばかりだつた。私の旅行の經驗によると、このやうに無遠慮な、人を侵すやうな態度は、無賃でか又は半分の料金で乘つてる人の特徴である。車掌が來て、私が自分の高い金で買つた切符を出してみせた時、かの淑女の口から近づき難い、そして威嚇するやうな口調の言葉が聞えた、良人はパスを持つてますよ。彼女は不滿げな容貌をした立派な容子の女で、年齢は女の美しさの凋落する年頃に近かつた。良人の方は大體言葉を口にせず、身動きもせず坐りこんでゐた。私は眠らうと試みた。夢の中で私はこの不愛想な同乘者に對して恐ろしい復讐をやつた。夢の前半の切れ切れな斷片の背後にいかなる惡口と誹謗とが匿れてをるか、人には察せられないかもしれない。先づこの欲求が滿たされてしま

つた後に、その車室を他と換へようとする第二の願望が持ち出された。夢はいかにも屢々場景を轉換するものであるが、しかもその變更のために極く僅かの感情も害されないのであるから、私がすぐさまに私の同乘者を私の記憶に存するもつと愉快な仲間と取り換へたとしても、それは毫も目立たしいことではなかつたであらう。のに、この夢では、何か或ることが場景の變更に對し抗議を申し出で、そしてその變更を說明する必要があると考へる、さういふ一つの場合が起つたのである。私はどんなにして突然に別の車室へ來たのであつたか？　だつて、私は乘り換へてることを思ひ出せなかつたではないか。そこでただ一つの說明があつた、卽ち、私は眠りながらその車を離れてしまつたのに相違なかつたのだ、それは一つの珍しい出來事ではあるが、併しそれに對して神經病理學者としての經驗がいくつかの實例を與へ得る。吾々はかういふ人々のことを知つてゐる、その人々はぼんやりした精神狀態で汽車の旅を企て、その異常な狀態の何等かの徵候を暴露もせずにをるが、やがて途中のどこかの驛に來た時にすつかり吾にかへり、そしてその時に自分の記憶に存する間隙を驚き怪しむのである。卽ち、私はまだ自から夢みつつある間に自分の場合をば、Automatisme ambulatoire の一例であると說明してをるのである。

分析は或る別の解釋を與へてくれる。かの說明の試み、それを夢の仕事に歸屬せしめねばならないとなると、私を甚だ驚かしめるところのあの試みは、實は獨創的ではなく、私の患者のうちの一人の神經病から複製されたものであつた。旣に別の處で私は、高い敎養を持つてゐるが實生活では情の脆い或る男が、その兩親の死後間もなく殺戮的な傾向を訴へ、そしてその傾向を妨止して安全でをるために講ぜねばならない用心の手段に惱んでをつた、そんな男の話を物語つた。あれは見識が十分保持されてをりながら生ずる重い强迫表象の一例であつた。最初には、街路を通行する際に出會ふ總ての人について、その人が何處へ消え去つたか、それを合點せずにはをられない强迫のために、彼は街路を步くのが煩はしくなつた。誰かが突然彼のその跡を追ふ眼から見えなくなると、彼には苦痛の感覺が殘り、自分がその人を取り除いてしまつたのかもしれない、といふ可能が彼の考への中に殘つた。その背後には、他のいろいろなものと一緖に、或るカイン的空想が匿れてゐた。蓋し「總ての人間は兄弟だからである。」この課題を片づけることが不可能なために、彼は散步するのを止め、自室に閉ぢ籠つて暮らしてゐた。それでも外で起きた殺人行爲の報告は絕えず彼の部屋の中へまで新聞を通じて入り込んで來た。そして彼の良心は、自分が

捜索中の下手人だ、といふ考へを疑問の形式でどうしても彼の心に湧き起させるのであつた。だつて自分は數週間この方自分の住家を離れたことはないぢやないか、といふ確證は、一時の間は、この訴へに對して彼を衞つてくれてゐたが、併し或る日のこと、彼の心に浮んで來たのは、次のやうな可能性であつた、即ち、自分は意識なき狀態に於いて自分の家を離れ、そして殺人を行つたのだが、それについて何も知らないでゐるのかもしれない。この時以來、彼は玄關の扉をしめ切つて、その鍵を年とつた家政婦に渡し、そして假令自分がそれを要求することがあつても、その鍵を自分の手へ入れさせることをしてはいけないぞ、と彼女に固く禁じた。

かくして私が意識なき狀態に於いて乘り換へてしまつたのだ、といふ說明の試みは、これから源を發してをる。——この試みは、夢思想の材料の中から完成したものとして夢の中へ運び入れられたのであつて、明らかに夢の中に於いて私をあの患者の人柄と同一化するのに役立つてをる。この患者についての記憶は自明的な聯想によつて私の心に呼び起された。この男と私は二三週間前に夜の旅行をやつたばかりだつた。彼は病氣が全快して、私を彼の親族のゐる田舍へ案內したのである。その親族は私の治療法を理解してゐた。吾々は一つの車室を占領し、夜ぢゆう總ての

窓を開け放ち、私が起きてゐた間面白く談笑した。この人の發病の根元は彼の小兒時代に存した性的關係に於ける父に對する敵意的な衝動であつた事を、私は知つてゐた。してみると、私は自分を彼と同一化して以て、みづから或る類似的のことを告白しようと欲したものであつたのである。實際にあの夢の第二の場面は不遜な空想、即ち、私の同乘者たる中年の夫婦は、折角夜中に情愛のやりとりをやらうと目論でゐたのに其處へ私が來たのでそれを邪魔されてしまつたものだから、それで、私に對してあのやうに排斥的な態度を取つたのである、といふ不遜なる空想の中へ溶け込んで行つてをる。然るにこの空想は昔の小兒時代の或る場面へと溯る。其處では、小兒が恐らく性的好奇心に馳られてであらう、兩親の寢室へ闖入し、そして父の恐ろしい言葉で其處から追ひ出されるのである。

もつと實例を積み重ねるのを私は無用だと思ふ、それ等は總てただ、吾々が旣に引用した實例によつて知り得た事、即ち、夢の中の判斷行爲は單に夢思想に存する或る先例の繰り返へしにすぎない事を、實證するのみであらう。大抵は拙く行はれ、不適當な聯絡を以て挿入された繰り返へしであるが、併し時としては、吾々の最後のいくつかの實例に於いてのやうに、いかにも巧み

に應用されてをるので、最初にはそれが夢の中の或る獨立的な思考活動であるといふ印象を受け得るくらゐである。ここからして吾々の關心をあの心的活動に向けることができるかもしれない、その活動は、なるほど夢形成に際して定規的には參與しないやうではあるが、併し參與する場面には、來歷を異にする夢要素をば矛盾を生ぜずに且つ意味深く融合しようと骨折るものである。けれどもその以前に猶ほ吾々は、夢の中に現れる情念の表現を研究し、それをば、分析が夢思想の中に發見するところの情念と比較してみるのが、急務であると感ずる。

第八節　夢の中の情念

シトリッケルの炯眼なる注意は吾々に、夢の情念表現は、吾々が目を覺ました後に、埒もなくその夢の內容を拂ひ捨ててしまふのが常であるやうな、輕い取扱ひを以てはすまされないものである事に、注目させてくれた。「私が夢の中で盜賊に對し恐怖を感ずるとすれば、その盜賊はなるほど空想的なものであるが、併しその恐怖は現實である、」そして私が夢の中で悅ぶ場合にも正にその通りである。吾々の感覺の證據立てるところによれば、夢の中で體驗された情念は、覺醒時

に於いて體驗された同等の強度の情念に較べて、決して價値劣れるものでなく、夢はその情念的内容を以て、その表象的内容を以てよりも、一層力強く、吾々の精神の現實的體驗として編入されることを要求するものである。ところで吾々は覺醒時に於いては、或る情念を心理的に評價することができるのはただ或る表象内容との結合に於いてのみなのであるから、かかる編入を成立せしめることをしない。情念と表象とがその種類と強度に於いて互ひに適合しない場合には、吾吾の覺醒時の判斷は混亂するのである。

いろいろな夢に於いて、吾々が覺醒時思考にあつては必然的に期待するであらうところの情念作用をば表象内容が伴はないために、いつも不審の念が起る。シトリュムペルは言つた、夢に於いては表象はその心理的價値を剝奪されてをるのだ、と。併しながら夢にはまた、情念の強度の表現がかかる情念の放出に對し何の因緣をも提供するとは思はれないやうな或る内容の場合に於いて現れる、といふ反對の現象も無くはないのである。私は夢の中で或る厭な危險な嘔吐を催すやうな境遇に居りながら、それでゐて、恐怖又は嫌惡の情の何物をも感じないことがある、それに反し別の場合には、無邪氣な事柄に出會つて度を失ふほど驚いたり、子供らしい事柄を悅んだ

りする。

若し吾々にして顯在的夢内容にのみ留まらずして、その潛在的内容へ入つて行くことをするならば、夢のこの謎は、夢についての恐らくいかなる他の謎の場合に於いてもない如く、忽ちに且つ完全に解消するのである。この謎の説明はもはや吾々をすこしも煩はすことがないであらう。なぜならばその謎はもはや存續しないのであるからだ。分析は吾々に、情念は搖がぬままでをるのに表象内容はいろいろな轉移と代理を作つてしまつてをるものである事を、敎へてくれる。夢の歪みのために變更された表象内容は、かかる場合にはもはや、その儘維持された情念に適應しない事も、何等不思議ではない。併しまた、分析が變更された内容をばその以前の正しい地位へ復歸せしめる事も、もはや何等怪しむべきことではない。（或る小兒の夢に於ける情念について。私の考へにして甚だしい誤りでなければ、私が二十箇月になる私の孫から聞くことを得た最初の夢は、夢の仕事がその材料を一つの願望實現に變更せしめることには成功したのに、それに附屬する情念の方は睡眠狀態に於いても變更されない儘で押し通したといふ事實を示してをる。この子供は父が戰場へ出發せねばならない日の前夜に、烈しく啜り泣きながら叫んだ、「パパ、パパーベビー。」それは「パパとベビーは一緒にゐませ

うよ」といふ意味に外ならないのであるに拘らず、泣くのは目前に控へた別れの止むを得ないのを認めた證據である。この子供は別離の概念を表現することが、その頃確かにできた。「去る」(fort)といふ概念は、(一種獨得なアクセントをつけて長く引いた oooh といふ言葉で代理されてはゐたが)、彼の一番早く口にした言葉の一つであつた、そしてこの最初の夢の數箇月前に、總ての彼の玩具の類を以てこの「去る」といふ表現をやつてゐたが、それは、母を自分の傍から去らしめる時の早くから彼に成功した克己の情に溯るところのものであつた。)

檢閲の抵抗を蒙つてその影響を受けた心的錯綜體にあつては、情念こそはこの抵抗と影響に譲歩することなき成分であつて、これのみが吾々にその正しい補充に對する指示を與へることができる。この關係は夢に於いてよりも猶ほ一層明瞭に精神神經病症に於いて暴露される。ここでは情念は、少くともその性質から言へば、常に本當の儘でをる、が勿論その強度は神經病的注意の轉移のために昂昇される。ヒステリー患者が自分で自分が小さな事柄に對して非常に恐怖を感じるのに驚くとか、又は、強迫表象を抱く男がやはり自分で自分に對し何でもない事柄からいかにも苦痛的非難を作り出すのに驚くとかする場合には、彼等はいづれも、表象內容を——その小さ

な事柄なり、またはその何でもない事柄なりを――本質的なものと解する點に於いて、誤りをなしてをるのであり、また彼等はこの表象內容を彼等の思考作業の出發點とするのであるから、自から否定してみても効果がないのである。然るに精神分析は、その反對に情念こそ根據あるものと認め、そしてその情念に附屬してをるが、或る代理物のために排斥されてしまつた表象を探し出して以て、彼等患者のために正しい道を示してやる。その際に於ける前提は次の如くである、即ち、情念の發生と表象內容とは、吾々がそれをかかるものとして取扱ふのに慣れてをる樣な、あの解き放つべからざる有機的統一體を形作つてるものではなくして、二つの部分は、分析によると互ひに引き離され得るやうなぐあひに、互ひに接合してをるものであらう、といふ事である。夢の判斷は、この前提が正しく實際の事實であるのを示してくれる。

私は先づ一つの實例を出してみる。そこでは、情念の發生を强制すべき筈である一つの表象內容があるに拘らず、その情念が外見上は現れて來てゐない所以を、分析が說明してくれるであらう。

（一）。「彼女は或る沙漠で三匹の獅子を見た。その中の一匹は笑つてゐる。彼女は獅子を恐い

とは思はなかつた。併し後でその前から逃げ出してしまつたに相違なかつた、なぜならば彼女は一本の木へ登らうとしてゐたのだから。然るに彼女の從姉妹で佛蘭西語の教師をしてをる女が既にその木の上にをつた、云々。」

これに對し分析は次のやうな材料を提供する。夢に對する無關係的な動因は、彼女の英語の課題の一文であつた、曰く、鬣は獅子の飾りである。彼女の父は丁度鬣のやうにその顏を包んでゐる髯を持つてゐた。彼女の英語の敎師はミス・ライオンスといふ名である。或る知人が彼女にリーヴェ（Loewe—獅子）といふ詩人の譯詩集を贈つてくれたことがある。してみると、そこに三つの獅子が居るわけだつた。彼女は彼等の前から何故に逃げねばならないのか？——彼女は或る物語を讀んだ、その中に、他人を煽動して騷動を起した一人の黑人が獵犬を以て追ひ立てられ、一本の木の上へ登つて助かる話があつた。次には、次のやうな記憶斷片が極めて放漫な氣分の中に現れて來た、例へば、滑稽雜誌「フリーゲンデ・ブレッテル」の中にあつた、いかにして獅子を捕へるか、についての指導、曰く、沙漠を手にとり篩をかけよ、然らば獅子があとに殘る。更に、或る官吏についての非常に面白い併し甚だ上品だとは言へない逸話。その官吏は何故もつと上官

のご機嫌を取らうと骨折らないのかと訊かれて、答へて言つたことには、俺は無論もぐり込まうと骨を折つたのだが、併し俺の上官殿はもう上の方にあがつてしまつてゐたのだ、と。全材料は、この夢を見た婦人はその日に良人の上官の訪問を受けてをつた、といふ事を聞くに於いて、合點がゆくものとなる。この上官は彼女に對して大變に丁寧だつた、彼女の手に接吻をした、そして彼女は彼の前で些しも恐怖を感じなかつた、假令この男は非常に「大變な獸」であり、彼女の國の都で「社交界の獅子」の役割を演じてをる男であつたのだが。即ち、この獅子男は、かの指物師のスナッグとして假面を脫いでみせる「眞夏の夜の夢」の中の獅子にも較べ得るものだ。かくして夢の中の獅子は全部、その前に於いて人が恐怖を感じはしないところの代物なのである。

(二)。第二の例として私は前にも揭げた少女の夢を引用しよう。少女は姉の小さな息子が死骸となつて棺の中に橫たはつてゐるのを見たが、併し私が今ここに附け加へる如く、その際に何の苦痛も何の悲しみも感じなかつたのである。それが何故であるかを吾々は分析によつて知る。あの夢はただ戀愛してる男と再會したい自分の願望を蔽匿してるにすぎない。情念はこの願望と調子を合せねばならないのであつて、その願望の蔽匿と調子を合せる必要はないのであつた。從つ

て悲しみに對しては全く何の因緣も存在しなかつたのである。

或るものにあつては、情念は元來その情念に適應すべき內容の代りを勤めてをる表象內容と、少くとも結びついたままになつてゐる。他の或るものにあつては、この複合がもつと緩慢になつてゐる。情念はそれに附屬する表象から全然分離してるやうに見える、そしてその情念が夢要素の新しい組合せの中へ適應するやうな、その夢の中のどこか別のところへ入れ込められてるのが見出される。その時には、吾々が夢の判斷行爲の吟味に際して知り得たやうな狀況と似たものとなる。夢思想の中に一つの有意義な結論がある場合には、夢自身も亦かかる結論を含有する。併し夢の中の結論は或る全く別の材料の上へ轉移されてゐるかもしれない。この轉移が相反性の原理に基いて生ずることは、稀でない。

この可能性を私は次の夢の例によつて說明しよう。私はこの例を一番遺漏なく分析にかけてみたのであつた。

(三)。「海邊の或る城。後には海のすぐ傍にでなく、海に通ずる或る細長い運河の傍にある。P氏なる人が司令官であつた。私は彼と一緖に窓が三つある大きな廣間に立つてゐた。その廣間

の前方には城塞の尖壁のやうな壁の突出部があつた。私は海軍の義勇士官として守備隊に配屬されてをるといふぐあひだつた。戰時狀態だつたので、吾々は敵の軍艦の來るのを懸念してゐた。P氏は其處を去る考へを持つてゐて、その懸念されたやうな事が起きた場合にはどんなことをなすべきかについて、私に指圖を與へた。彼の病中の妻は子供等と一緒にこの危險に瀕した城內にをつた。砲擊が始まつたらこの大きな廣間を片づけよ、と彼は言つた。彼は重く呼吸をした。そして去らうとした。私は彼を引き留めて、必要な場合に於いて彼に報告を屆けるにはどうしたらよいか、と訊いた。それに對し彼は何事かを言つたが、併しすぐその後に死んで倒れてしまつた。私がそんな問を出して彼に要らざる努力をさせたらしかつた。彼の死はそれ以上私に何の印象をも與へなかつたが、その後で浮んだ考へは、未亡人は城內に留まるだらうか、私はこの死を司令長官に報告し、命令を司る次席者として城の指揮を引受けねばならないのだらうか、といふことであつた。さて私は窓際に立ち、通過する船舶を監視してゐた。それ等は暗い水の上を急速度で走りすぎる商船だつた。二三のものは數本の煙突を持ち、他のものは膨れた甲板を持つてゐた（それはここに物語られてゐない前置きの夢の中に出た停車場の建物と全然類似のものであつた）。そ

の後、私の兄弟が私の傍に立つてゐて、吾々二人は窓から運河を眺めてゐた。或る船が來た時吾吾は驚いて叫んだ、そら、軍艦が來るぞ・と。併しそれは私が旣に見覺えてをるのと同一の船が戻つて來るのだとわかつた。ところが一つの小さな船が來た。それは滑稽なぐあひに切斷せられ、幅の眞中のところで切れてしまつてゐた。その甲板の上には奇妙な杯か又は鹽皿のやうな物が見受けられた。吾々は異口同音に叫んだ。あれは朝飯の船だぜ。」

船の急速な運動、水の濃紺の色、煙突の褐色がつた烟、それ等總てが寄り合つて非常に緊張した憂欝な印象を作つた。

この夢の中の地方色はアドリア海への數度の旅行から集成されてをる（ミラマレ、チュイノ、ヴェネチア、アキレヤなど）。夢の二三週間前に私の兄弟と一緒にやつたアキレヤへの短い、併し樂しかつた復活祭の旅は、私の記憶にまだ新しかつた。亞米利加と西班牙との間の海戰及びそれに結びついて、亞米利加に居る私の親族の運命についての心配も亦、この夢の成立に參加してゐる。情念の作用はこの夢では二箇所に現れる。その中の一つでは、期待されるべき情念が出て來ない、卽ち、司令官の死は私に何の印象をも與へないことが力強く現された。他のところでは、

私は軍艦が見えると思つた時に驚いた、そして睡眠中に驚愕の凡ゆる感じをおぼえた。情念の配置はこの巧みに構成された夢の中に於いて凡ゆる目立つほどの撞着で回避されてをるやうに行はれた。私が司令官の死に際して驚かねばならんといふ理由も勿論ないのだし、また、私が城の指揮官として軍艦を見た時に驚くのも旨い仕組みである。ところが併し、分析の立證するところでは、P氏は私自身の自我に對する代理人に外ならない（夢の中では私が彼の代理人になつてをる）。突然に死ぬ司令官は私なのである。夢思想は私の不時の死の後に於ける私の家族の將來を問題としてをる。夢思想の中には何等その外の苦痛的な思想は見出されない。夢の中では軍艦を見ることに接合されてをる驚きは、實はそこから解き放されてそして自分の死と關係するところへ置かれねばならないものである。分析は逆に、軍艦の源泉となつてをる夢思想の部分は極めて朗らかな記憶に滿たされてをる事を、示してくれた。それは一年前ヴェネチアに於いてであつた。或る實に驚くべく美しい日に吾々はリヴァ・シアヴォニに面する吾々の部屋の窓際に立つて、碧い潟を眺めてゐた。潟は今日は平素よりも一層賑やかであつた。花々しく歡迎せられる筈の英國船が待ち受けられてゐた。その時突然に私の妻が子供のやうに晴れやかに叫んだ。「そら、あすこ

に英吉利の軍艦が來ますよ！」夢の中で私は同じ言葉を聞いて驚いてをる。ここでまた吾々は、夢の中の說話は實生活の說話に起原を持つ事實を見るのである。この說話に於ける「英吉利の」といふ要素も亦、夢の仕事にとつて無駄になつてしまつてはゐない事を、私は間もなく示すであらう。かくしてみると、私はここで、夢思想と夢內容との間に於いて、愉快を驚きに變更してをる。そしてこの變更を以て私は潜在的夢內容の一部分をさへ表現してをるのであることは、詳しく言ふまでもない。この實例は併し、情念の動機をば夢思想に於けるその聯絡から解き放して、そして任意に夢內容のどこか他のところに挿入するのは、夢の仕事の自由に行ふものである事を證明してくれる。

かの「朝飯の船」なるものが夢の中に現れて、折角合理的に固められて來た境地をばあのやうに無意味な結末を以て終らしめてをるが、私はこの「朝飯の船」にもつと詳しい分析を加へる機會がここに序でに生じて來たのを幸ひに、それを捕へよう。夢に出た船體を一層よく眼に留めてみると、後で私の注目を引いたのは、それは黑色だつた、そしてその一番幅の廣いところで切斷せられてをるために、こちらの端に於いては、それは、エトルーリアの諸方の都市の博物館で吾

吾に興味を起させた一つの品物と大變に似てをつた事である。この品物といふのは、黒い陶土で作り二つの把手が附いてをる方形の皿で、その上に珈琲かお茶の茶碗が載せてあつて、現代吾々の朝飯の食卓のセットに似てないものではなかつた。訊いてみると、それはエトルーリアの婦人の化粧道具で、載せてあるのは白粉と髪粉の小箱だとわかつた。それで吾々は笑談に、こんなのを女房の土産に持つてつてやるのも惡くはないね、などと語り合つたのである。かくしてかの夢の中の船體は――黒い化粧（衣裳）――喪服を意味し、誰かの死亡を直接にほのめかすものである。船體のもう一つの端は「小舟」を想起せしめる。小舟（Nachen）は私の友人である言語學者が私に語つてくれたところによると、語根 νέκυς から發し、そしてこれは、太古時代に死骸をその上へ載せて埋葬の爲に海に流してやつたものである。夢の中で船舶が何故戻つて來るのか、それはこの事情と關聯してをる。

「靜かに救はれし小舟に乘りて、老いたる人は、港の中へ漂流す。」

それは難破の後の歸り路である。かの朝飯の船もやはりその横腹を破り切られたやうであつたではないか。併し、「朝飯の船」といふ名は何處から來てをるか？　ところでここには、前に私が

ヴェネチアで見た軍艦の話の時に殘しておいた、かの「英吉利の」といふ要素が使用されるに至つてをる。朝飯は英吉利の言葉では breakfast であつて、斷食を破る者の意である。破るといふ方はまたかの難破と關係し、斷食の方はかの黑い衣裳——喪服と聯絡する。

この朝飯の船については併しただその名だけが夢によつて新しく作られたにすぎない。その實體は存在してゐて、そして私をして最近の旅行の一番晴れやかな時間の一つを想起せしめる。アキレヤでは食事の世話は期待できないだらうと考へて、吾々はゲルツから食料品を携帶した。アキレヤで素敵なイストリア葡萄酒の一瓶を買入れた。そして小さな郵便蒸汽がデレ・メエ運河を通りゆつくりとグラドに向つて寂しい潟へと走つて行く間に、その蒸汽の唯一の乘客だつた吾々は、實に晴れやかな上機嫌で甲板の上で朝飯を喰べたのだつた。こんなおいしい朝飯を喰べたことは今まで稀にしかなかつた。即ちそれは「朝飯の船」だつたのである。そして實に愉快な人生の樂しみのこの愉快の陰にこそ、夢は或る未知のそして不氣味な未來に對する最も心を暗くする考へを匿してをる。

情念の發生を喚起してをる表象の塊、その塊からその情念が分離するのは、夢形成に於いて情

念に對し遭遇する最も著しいことではあるが、併しそれは、情念が夢思想からして顯在的な夢に移る途上にあつて蒙るところの、唯一の變化でなければ、また最も本質的な變化でもない。夢思想の中の情念を夢の中のそれと較べてみると、一つのことが直ちに明らかになる。即ち、夢の中に一つの情念が見出される場合には、その情念は夢思想の中にも見出される、併しその逆の事はない、といふ一事である。夢は一般に、その夢がそれの加工からして惹起されるのであるところの心的材料よりも、情念に乏しいものだ。夢思想を再建してみて私の眼に留まることは、その夢思想の中に於いては定まりきつて最も强度の精神昂奮が、大抵の場合、それに對して鋭く反抗する他の昂奮と爭ひ戰ひながら、表出を求めてをることであつた。その後で夢そのものを回顧すると、私はその夢が色彩のない、少しも比較的强度の感情的色調を持つてゐないのを見出すことは、稀でなかつた。夢の仕事によつて、啻に內容ばかりでなく、私の思考の感情的色調も亦屢々、無關係的の水準へ引き下されてしまつてる。夢の仕事によつて情念の或る抑壓が行はれるのだ、といつてもよいかもしれない。例へば、かの植物學の論著についての夢を參照せよ。あの夢に對しては思考の中にあつては、私が行動する通りに行動する、私にそれが唯一に正しいと思はれる通

りに私の生活を組立てる私の自由に對する、或る激情的な抗辯が想應してをるのに、それから出來上つた夢は無頓着な樣子のものであつた。私は一篇の論著を書いた、それが私の前にある、彩色した圖案を附錄にし、乾製した植物が各册に添へられてる、といつたぐあひであるにすぎない。それは戰後の野原の平安のやうなものだ、戰ひの騷ぎの何ものもそこにもはや感ぜられない。

またこれとは異つた結果で終ることもあり得る。夢そのものの中へ盛んな情念表現が入つて來ることもある。併し吾々はさし當り、いかにも多くの夢は無關係的に見えるのに、その夢思想の中へ入つてみるならば、深い感動を受けないことは決してない、といふ爭ふべからざる事實に局限してゐようと思ふ。

夢の仕事の間に於けるこの情念抑壓の完全なる理論的說明は、ここでは與へられない。それを與へるには、情念の理論及び抑壓排斥の機構についての極めて細心なる硏究が旣に與へることを、前提としなければならないであらう。で、私はただ二つの思想だけをここに指摘しよう。情念の發生を私は——他のいくつかの理由からして——運動及び分泌の神經感動の經過に類似した、或る遠心的な、身體內部に向ふ經過だ、と想像せざるを得なかつた。さて、睡眠狀態に於いては運

動神經衝動の外界への動向は中止されてしまつたやうに思はれるのと同じく、情念の遠心的な發動も亦、無意識な思考のために睡眠中は困難にされてをるかもしれない。夢思想の經過の間に成立するところの情念昂奮は、さうしてみると、それ自體弱い昂奮であり、そしてそれ故に夢の中へまで入つてくる昂奮はまた、より強くあることはないであらう。この考へ方によれば「情念の抑壓」一般は、夢の仕事の成果ではなくて、睡眠狀態の或る結果である。それはさうであるかもしれない。併しそれが總てではあり得ない。吾々はまた、凡ゆる比較的複雜な夢はいろいろな精神的力の爭鬪の妥協的結果として暴露されてをる事をも、想起せねばならない。願望を形作る思想は一方では檢閲を行ふ關門の抵抗と戰はねばならないし、他方では吾々が屢々見てきてをる通り、無意識的思考そのものに於いて凡ゆる思想のつながりはそれと相容れざる反對の思想と一緒につながれてをつたのである。總てのこれ等の思想のつながりは情念を喚起する力があるのであるから、情念の抑壓は相反するものが互ひに對して行ひ、また檢閲がそれによつて抑壓された努力に對して行ふところの妨害の結果である、と解釋しても、大雜束に言へば、殆ど誤りではなからう。然らば、情念の妨止は、夢の歪みが無檢閲の第一の成果である如く、それの第二の成果で

あらう。

私は次に一の例を挿入するが、その夢にあつては、夢內容の無關係的な感じの調子は夢思想に於ける相反性によつて說明せられ得る。私は次の短い夢を物語らねばならぬ。この夢を聞かされる讀者は誰でも不快を感ずるかもしれない。

(四)。「或る丘。その上に野外の便所のやうなもの。一つの大變に長い腰掛。その端に一つの大きな便所の穴。後方の端は全部、凡ゆる大きさと新舊いろいろの糞の小さな堆積を以て、びつちり埋められてゐる。腰掛の背後に叢。私はその腰掛に小便をした。長い小便の筋が總てを綺麗に洗ひ落し、汚物は容易に剝がれて穴の中へ落ちた。それでもまだその端には何かが殘つてるやうな氣がした。」

なぜ私はこの夢を見てゐて些しも嫌惡を感じなかつたか?

分析が示す如く、この夢の成立には極めて愉快で極めて滿足な思想が參加してをつたからである。分析をしてをる間に私に直ぐ思ひ付いたのは、ヘラクレスが掃除をするアウギアウスの厩のことであつた。私はこのヘラクレスである。丘と叢はその時私の子供達が滯在してゐたアウセー

のものだつた。私は神經病患者の小兒時代病原を發見し、そしてそのおかげで私自身の子供達を病氣に罹らせずにすむことができた。腰掛は（勿論、かの穴を除いてのことだが）、親切な婦人患者が私に贈物をしてくれた或る家具の忠實な摸寫だつた。そしてこの贈物は、いかに私の患者達が私を尊重してくれるかを、私に回想せしめた。人間の排泄物のあの博物館にすら、或る心からの悅びを與へるやうな判斷を加へることができる。現場のそんなものを見たならば、ひどく嫌惡を感ずることとであらうが、夢の中では、それは美しい國土伊太利についての一つの追憶であつた。伊太利の小さな町では便所は正にこの夢の通りであることは、人の知るところであらう。總てを綺麗に洗ふ、あの一條の小便は、偉大に對する疑ふべからざる諷示である。即ち例へば、ガリヴーは小人國に於いて大きな火事をさういふぐあひにして消した。そのために彼は世界の女王の中の一番小さい女王の不興を蒙つたことは勿論であつたのだが。併しラブレエ大人の物語にある超人ガルガントゥアも亦、パリの市民に腹癒せをしてやるとて、ノートル・ダムの上に跨り小便の筒先をパリの町の上へ向けたではなかつたか。私はこの夢の丁度前日、就眠の前に、ガルニーの描いたラブレエ物語の挿繪をめくつてみたのであつた。そして著しいことには、これも亦、私が

超人であることに對する一つの證明であらうとするのだ！　ノートル・ダムのプラットフォームはパリに居る時の私の好んで佇む處だ。用事のない午後にはいつも、このお寺の塔の上、あの怪獸や惡魔の面の間を攀ぢ登つて步き廻るのを私は常としてをつた。一切の汚物が一條の光の前にかくも早く消失する、これ卽ち、afflavit et dissipati sunt（彼等は吹き散らされたり）といふ羅甸語の標語であつて、私はいつか一度はこの標語をばヒステリー症の治療學に關する節に冠するであらうところのものである。

さて、この夢の動因について。夏の熱い午後のことであつた。私は夕方の講義にヒステリー症と顚倒の聯絡についても述べたのであつたが、私が言ふことのできた總ては、私には實に根本から氣に入らなかつたし、總ての價値を喪失したやうに思はれた。私は疲れてゐた、自分の難しい研究に何の滿足をも感ぜず、人間の汚さをかくも搔き廻す仕事から離れ、子供達のところへ行きたい、それから伊太利の美しい土地へ行きたいと憧れた。私はこんな氣分で講堂を出て、食慾もなくなつてゐたから、戶外で一寸したものでも食べようかと思つて、とあるカッフェーへ入つた。併し聽講者の一人が私と一緖にやつて來た。そして私が珈琲を飮み卷パンを嚙んでゐると、

彼は私のところへ來てそこへ坐らしてもらへないかと頼み、いろいろおべつかを言ひ始めた。どんなにかあなたから學ぶところが多いかとか、今や一切を今までとは別の眼で見るやうになつた、あなたは精神病學説に於ける誤謬と臆斷のアウギアウスの厩を掃除してくれた（ヘラクレスのやうな人である）とか、要するにあなたは一箇の非常に偉大なる男子である、と言つた。私の氣分はこの彼の謳歌にはぴたりとしてゐなかつた。私は嫌惡の情と戰つた、それから遁れたいために いつもより早く歸宅し、就眠の前にかのラブレエの本の頁をめくつてみたり、コンラード・マイエルの短篇小說「或る少年の苦惱」（C. F. Meyer, Dien Leide eines Knaben）を讀んだりした。

この材料からしてあの夢が生れ出たのであつた。マイエルの小說は小兒時代のいくつかの場面に於いての記憶を附け加へた（トゥーン伯の夢、最後の部參照）。嫌惡と倦怠の日中の氣分は、夢內容に對する殆ど全部の材料を調べることができた範圍では、その儘續いたのであつた。然るに夜中にそれとは正反對の、力強いそして誇張的でさへある自己肯定の氣分が動き出し、そして今までの氣分を止揚した。それで夢內容は、同一材料に於いて卑小の妄想と同時に自己の誇大的評價に對して表現を可能ならしめるやうなぐあひに、構成せられねばならなかつた。この妥協の形成

に際しては或る曖昧な夢内容を生じたが、併し對立せる氣分の相互の防害のためには或る無關係的な感じの調子が生じてをるのである。

願望實現の理論からすると、若しもかの正反對的な、成程抑壓はされたが併し愉快の念を以て力說された誇大妄想の思想のつながりが嫌惡の念のそれに加はることがなかつたであつたならば、この夢は出來上がらなかつたことになるであらう、何故ならば苦痛的なものは夢の中では表出されない筈である、吾々の夢思想の中の苦痛的なものは、それが同時に或る願望實現に假裝を與へる場合に於いてのみ、夢の中へ入り込むことができるのである。

夢の仕事は夢思想の情念に對して、それを許容するか、又はそれを零點まで引き下すかする外に、なほもつと別の事をすることができる。即ち、この情念をそれの正反對へ逆にすることができる。吾々は既に、夢の各要素はそれを判斷してみると自己自身を表出してをると同じやうに、自己の反對をも表出することができる、といふ判斷の規則を學び知つてをる。吾々は最初にはそのいづれをとるべきかを知らない、漸く全體の聯絡を知つて初めてこれを決定するのである。かかる事情の或る豫感は昔から民衆意識の中にも明らかに入り込んでゐた。民間の夢の書物が夢の

判斷に際してこの對照の原理に從つた處置を取つてをることは、非常に屢々である。かく反對へ轉換するのは、內心の聯想の連鎖によつて可能となり、そしてこの連鎖は吾々の思考に於いて或る事柄の表象をその表象の反對へ結びつけるものである。この轉換は、凡ゆる他の轉移と同じく、檢閱の目的に役立つのであるが、併しまた屢々願望實現の仕事でもある、と言ふのは、願望實現こそは正に或る好ましからざる事柄をそれの反對によつて代理させるものであるからだ。それ故、事柄の表象と同じやうに、夢思想の情念も亦、夢の中で、反對へ逆轉されて現れ得る。そしてこの情念逆轉は大抵の場合夢檢閱によつて成立するらしい。情念抑壓竝びに情念逆轉は、夢の檢閱に類似の作用をよく見せることのある社會生活に於いても、何よりも先づ假託の役に立つ。例へば、私が敵意あることを言ひたいのだけれども遠慮せねばならない人と何か口を利く場合に、私は私の思想の言葉の表現を緩和するよりも、私の情念の發現をその人の前に匿す方が、もつと大切であるかもしれない。若し私がその人に向ひ、叮嚀でなくはない言葉を使ふけれど、その言葉に憎惡と輕蔑の眼光なり表情なりを伴はせるならば、その人に與へる作用は、私が輕蔑を容赦なく面前へ投げつけてしまつたのと、大して異るところがない。であるから檢閱はなによりも先づ私

の情念を抑壓するやうに命ずる、そして私にして假託虛僞の風を裝ふ大象であつたら自分が怒りたいところでその反對の情念を僞裝し、微笑するであらうし、打ちのめしてやりたいところで優しい容子を裝ふであらう。

夢の檢閲に役立つために夢の中でかかる情念逆轉の行はれた、一つの傑出した實例を、吾々は既に知つてをる。「伯父の髯」についての夢の中で、私は友人Rを薄野呂と非難してをりながら、そして非難してをる故に、彼に對して大變に溫情を感ずる。情念の逆轉のこの實例からして吾々は前に、或る夢の檢閲なるものの存在に對する最初の指摘を得たのであつた。ここでも、夢の仕事はかかる種類の反對的情念をば全然に新しく創造する、といふやうなことを認定する必要はない。普通夢の仕事はその情念が夢思想の材料の中に用意されてをるのを見出し、ただ拒否動機の精神的力を以てその情念を高め、それが夢形成にとつて優勢となるに至らしめるのである。今擧げた伯父の夢に於いては、かの優しい反動的情念は多分幼兒時代的源泉から發してをるらしい(この夢の續きが示すごとく)。何故ならば、伯父と甥の關係は、私の極めて初期的な小兒體驗の特別な性質のために(第七三二頁の分析參照)、凡ゆる友愛の情と凡ゆる憎惡の源泉となつてゐたのだか

らである。

（この種の情念逆轉の秀逸なる一例をフェレンチィーの報告した夢が與へてゐる。『或るかなりの年齡の男が夜中妻のために呼び起された。妻はこの男が眠りながら大聲に且つ途方もなく笑ふので、不安になつたのであつた。この男が後でこんな夢を見たのだと語つた。「私は寢床に寢てゐた。一人の知人が入つて來た。私は燈光を摂ぢあげようとしたが、できない、繰り返へしてやつてみた――駄目だ。そこで私の妻が寢床から下りて私に手傳つた、併し彼女も亦何も成し得なかつた。彼女は寢間着のままなのでその紳士に對し氣がねがあつたものだから、終にそれを止めて、また寢たので、私は恐ろしく笑はずにはゐられなかつた。妻は言つた、何が可笑しいんですか、何が可笑しいんですか？　併し私は笑ひ續けるだけだつた、目を覺すまで。」――その翌日この男はひどく意氣消沈して、頭痛がした――あんまり笑つたもんで、打擊を受けたんだらうと思ふ、と彼は言つた。これを分析的に觀察すると、この夢はそんなに愉快なものではないやうである。入つて來た「知人」といふのは、潛在的夢思想にあつては、その前日に彼の心は喚起された、「偉大なる未知の客」としての死神の姿なのである。動脈硬化症に罹つてをるこの老人は、前日、死のことを考へる譯があつた。途方もない摂いかの笑ひは、自分は死なねばならぬ、といふ事を考へる時の號泣と、啜泣きの代りをなし、彼がもはや摂

ぢあげることのできないのは、それは生命の燈光なのだ。この悲しい考へは少し前に試みられたが併し失敗した同衾の意志と結びついてゐたかもしれない、その試みの時に寝間着をきた妻の助力も何の効がなかつたのだ。自分はもう老衰に向ひつつあるのだ、と彼は氣づいた。夢の仕事はこの陰萎と死の悲しい考へをば一つの滑稽な場面に、啜泣きを笑ひに轉換せしめることができたのである。』)

(ここに或る一群の夢がある。それは特に「僞善的」といふ稱呼に價し、願望實現の理論を難しい吟味にかけるものである。私がこれ等の夢に注目させられたのは、ドクトル・エム・ヒルフェルディンク夫人がキーン精神分析學協會に於いて以下に引用する詩人ロゼッゲルの夢報告を論議した時にであつた。ロゼッゲルは「森の故郷」第二巻「疎まれて」(Rosegger, Waldheimat, II. Bd., Fremd gemacht) といふ話のなかに物語つてゐる。「私はいつも健かな眠りを樂しむのであるが、併し時々夜の休息を失つたこともある。私は私の學生として、また文士としてささやかな生活の外に、本職の仕立屋生活の陰影を永年の間引き摺つて來た、亡靈のやうに、それから遁れることができずに。一日中頭の中で自分の過去をそんなに頻々且つ活々と考へてゐた、などと言つたら、それは眞實ぢやない。一俗人の殼を脱脚した天地の大改革者には、なすべきもつと別のことがある。だが、氣樂者の小僧時代の私は夜の夢のことなども殆ど考へてみなかつたかもしれない。やつと後になつて、總てのことについて瞑想する癖が出て來た時に、別に言へば、私の中の俗人氣分が再び少し動き

出し始めた時になつて、私の氣についたのは、一體どうして私が、——夢を見る度に——いつも仕立屋の職人であるんだらうか、そしてさういふ姿で既に長い間私の親方のところの仕事場にゐて、お金も貰はずに働いてゐた、といふことだつた。私が親方の傍に坐り裁縫したりアイロンをかけたりしてる時には、私は元來もはやこんなところに居るべき者ではない、都會の人となつてもつと別の仕事に從はねばならない者だ、と十分に意識してをつた。併し私はいつも休暇を持つてゐて、いつも避暑地にでかけてゐた、そしては親方のところに助手となつてゐた。時々とても不愉快になることがあつた、時間を失ふのが殘念で、これだけの時間があつたら、もつとよく、もつと有益な仕事ができたんだらうにと思つた。何かがどうしても寸法と型通りそつくりには出來上がらないやうな時には、時々、親方のお小言を甘受せねばならなかつた。一週の賃金については併し嘗つて決して話の出ることはないのであつた。背中を曲げて暗い仕事場に坐つてる時には、仕事を斷つて、緣を切らうか、と考へてみることも屢々あつた。一度私はそれをやつた。だが、親方はそれを少しも氣にとめない、そしてその後ではやはり私は彼の傍に坐つて、裁縫をしてゐるのだつた。——かういふ退屈な時間の後で目が覺めた時には、なんと嬉しかつたことであらう！　そして私は若しこの押しつけがましい夢が二度と現れるやうなことがあつたら、力強くこれを拂ひのけ、なんだ、そんなのは瞞着ぢやないか、俺は寢床にゐるんだ、そして眠りたいんだ、と聲高く叫んでやらう、と考へるのだつた。……そして次の

晩になると、やはり私は仕立屋の仕事場の中に坐つてゐた。——それが數年間といふもの、不氣味な規則正しさを以て續いた。或る時には私ども、親方と私は、アルペルホーフェルの家で働いてゐた。そこは私が初めて小僧に出た百姓の家だつた。親方は私の仕事に今日は全く特別に不滿足で、お前は何を考へこんでるのか知りたいものだなあ、と言つて、少し陰鬱に私を見つめた。私は思つた、この際なすべき一番尤もなことは、ここで立ち上つて、親方に向ひ、俺がお前のところに居るのはただ好意からなんだよ、と言ひ聞かせて、そして行つてしまふことだ、と。だが、私はそれをしなかつた。親方が弟子を一人迎へて、其奴を腰掛に坐らせてやれと私に言ひつけた時にも、私はそれを唯々諾々としてやつた。私は隅にずりさがつて、裁縫してゐた。同じ日に更にもう一人の職人が傭はれた。あの信心ぶつたボヘミヤ人で、此奴は十九年前に私達のところで働いてゐたが、その頃酒場の歸りに川へ落ちたことのある男だ。此奴が坐らうとした時、席がなかつた。私は親方にどうしようかと眼で訊いた。すると、親方が私に向つて言つた。お前は仕立屋の腕をもつちやゐないんだ、お前は行つちまつてもいい、お前には用はない（疎まれてしまつた）。——それを聞いた私の驚きは非常なものだつたので、私は目を覺したほどである。明け方の薄明りが透明な窓から私の親愛な部屋のなかへ入つてゐた。藝術品が私をとり圍んでゐる。豐かな樣式の本棚の中には、永久なるホーマーや、巨人のダンテや、比類なきシェークスピアや、輝かしきゲエテや、立派な人々、不滅の作品が、皆で、

私を待つてゐる。次の部屋からは、目を覺したばかりで母親ときやあきやあ騷いでる子供たちの明るい聲が聞えて來る。私はこの質朴で樂しい、この平和に穩かなそして詩に富んだ、明るい精神に滿たされた生活、その中に私は靜觀的な人生幸福を實に屢々且つ深く感じたことのある生活なぱ、今更めて見出した、かのやうな氣持がするのであつた。しかも私の氣持を憂鬱にするのは、自分が親方に先んじて申出をしないで親方の方から斷られてしまつたことであつた。――そしてなんと著しいことには、親方が私を疎んじてしまつたその夜以來、私は休息を樂しむことができ、二度ともはや、私の遠い過去に屬する仕立屋の時代を夢にみることはないのである。あの時代は何の要求もなくて、實に朗らかであつたのであるが、それでゐて、私のその後の生涯の中へ長い一つの陰影を投げこんでゐる。」)

若い頃に仕立屋の職人であつた詩人の、この夢の系列の中に、願望實現の支配を認識するのは困難である。日中の生活には凡ゆる悅ばしきものがあるのに、結局征服せられた悅ばしからぬ昔の生計の亡靈の如き陰影をば、夜の夢は猶ほ引き摺つてをるやうに見える。これと似た種類の私自身のいくつかの夢が、かかる夢について若干の解說を與へ得さしてくれた。私は若いドクトルであつた頃、長い間化學硏究所で働いてゐたが、其處で必要とせられてをる技術に於いては何の

上達も得ることはできなかつた、それで、覺醒時に於いては嘗つて決して、私の學習のこの實りなきそしてそれこそ恥かしい挿話時代をば、悦んで回想したことはない。然るに私が研究所で働き、分析をなし、種々の經驗をする等々が、繰り返へして見る夢となつてるのである。これ等の夢は試驗の夢と同じやうに不愉快で、そして嘗つて一度も甚だ明瞭であつたといふことはない。これ等の夢の一つを判斷してをつた時、終に私は「分析」といふ語に注意を惹かされた。この語が私に理解の鍵を與へたのだつた。その後、まことに私は「分析家」となつてしまひ、甚だ賞讃される分析を行つてるが、それは無論精神の分析である。今にして私はわかつた、即ち、私がこの種の分析を日中生活に於いては自慢するやうになつたと共に、私はどれほど上達したかを自分の心の中で自慢したく思ふと共に、夜間に夢は、私がそれを自慢すべき何の理由もなかつた、かの別の方の、失敗した(化學)分析のことを、私の前につきつけるのである。それは、その名を謳はれる詩人となつた仕立屋職人の夢と同じく、成上り者を罰する夢なのだ。だが併し、成上り者の自慢と自己判斷との間の葛藤に於いて、夢が後者の爲に働き、そして許されざる願望實現の代りに、合理的な警告を內容とする、などは如何にして可能なのであらうか？　私は前に既に、この

問題の解答はいろいろな面倒を與へるものだ、と言つて置いた。吾々は下のやうに推論することができる。卽ち、先づ或る思ひあがつた名譽心の空想が夢の基礎を形づくつたのだが、併しそれの代りにその空想の抑壓と慚愧とが夢內容の中へ入つて來たのである、と。精神生活の中には、マゾヒズム的傾向があつて、この場合のやうな逆轉はこの傾向に歸せられる、といふ事を想起しても宜しい。この種の夢を刑罰の夢として、願望實現の夢から區別するとしても、私はそれに反對すべき何ものをも持つてはゐないやうだ。私はこれを以て、從來私が背負つて來た夢の理論が局限されるものだとは考へないだらう、寧ろ、それは、相反的のものが合致するのを奇異なりと考へる解釋のための、一種言葉上の妥協にすぎないと見るだけである。これ等の夢の一つ一つにもつと正確に立ち入つてみるならば、猶ほ別のことを認識できる。私の研究所の夢の一つに現れた不明瞭な附屬內容に於いては、私は私の醫師としての經歷の中で最も陰欝でそして最も結果の擧がらなかつた時代にあたる年齡の私になつてゐた。私はまだ何の地位を持たず、どうして生活を維持したらよいのかわからなかつた、その時に、突然にも、私は自分が結婚すべき數人の婦人の中から選擇することになつた、といふ夢だつた！　卽ち、私はまた若くなつたのだし、殊に彼女

がまた若くなつたのだ。彼女卽ち、この苦しい數年間を私と一緒に苦しんだ私の妻が。これを以てみると、年をとりかけてゐる男の心を斷えず惱ましてをる願望の一つが、無意識的な夢の刺戟者であることがわかつた。虛榮と自己批判との間に於ける、精神の他の層の中に戰はれてをる爭鬪がなるほど夢內容を規定してしまつたのではある、が併しこの內容を夢として可能ならしめるに至つたものは、もつと深いところに根を有する靑春の願望、これのみであつたのである。吾々は覺醒時によく言ふではないか、それや、今はほんとに樂ださ。昔はつらい時代もあつたつけ。だが、あの頃はよかつたね、だつてお前はまだ若かつたからねえ。——私が自分で屢々見たもので、そして僞善的だと認めた他の一群の夢は、友情關係がとうの昔に消失してしまつてをる人々との和解を內容としてをる。かかる場合に分析は定まりきつて一つの動因を發見するのであるが、それが私をこの以前の友人に對する顧慮の最後の殘滓を捨て去り、そして彼等を知らぬ人若しくは敵の如くに、取扱ふやうに、促すことができたのであつた。然るに夢自身はその正反對的關係を細く描いて、面白がつてをる。——詩人などが報告する夢を判斷する際には、彼はかやうな防害的と感ぜられそして本質的ではないと見做される夢內容の細部をばその報告から取り除いてしま

つてをる、と假定してよいことが十分屢々ある。そんな場合には詩人などの夢は吾々に謎を與へるが、その夢内容を精密に再現してさへ貰へば、そんな謎はすぐに解決されるであらう。――オットー・ランクが私に注目させてくれたのであるが、グリムの童話、勇敢な仕立屋の小僧、「一撃ちで七つ」の話の中に、前のと全く類似した一人の成上り者の夢が物語られてをる。勇士で後に王の婿となつた仕立屋が、或る夜のこと、彼の奥方たる王女の傍に寢てをつて、自分の昔の稼業の夢を見た。王女は邪推を起して次の晩武裝した家來を立たせ、その夢の中で口にせられることを聞き、この男の人柄が何であるかを認めさせようとした。併し、仕立屋の小僧さんはそれと氣づいて警戒し、今度は夢を訂正することができた。）

中止、減少、逆轉の經過の錯綜によつて、夢思想の情念が變じて夢の情念となる。この錯綜は、完全に分析せられたいくつかの夢の適當な綜合に照すと、よく總覽せられる。私はここに猶ほ夢に於ける情念昂奮の二三の例を取扱つてみよう。それ等は若しかしたら、今まで論議した實例の二三のものを實證してくれるであらう。

（五）。老ブリュッケ氏が私に與へた仕事、私自身の骨盤を解剖するといふ奇妙な仕事についての

夢の中では、私は夢そのものの間にはそれに附屬すべき戰慄を感じなかつた。さて、これはいろいろな意味に於いて願望實現である。解剖は、謂はば私が夢についての著述の發表によつて行ふ自己分析を意味するのであつて、この自己分析は實際に於いては私にとつて非常に苦痛であつたから、私は出來上つてをる原稿の印刷を一箇年以上も延期したほどである。ところがこの遠慮の感じを超越したいものだ、といふ願望が起り、そのために私は夢の中で何等の戰慄（grauen）を感じない。別の意味での grauen（髮の毛が灰色になる）をも私は遁れたい。早くも私の髮の毛は大變に灰白となりつつある、そして毛髮のこの灰色はやはり同じく私にこれ以上長く遠慮してをるなと忠告する。であるからこそ吾々が既に前の記述で知る通りに、あの夢の終りには、難儀な旅をつづけて目的地に着くことを子供達に委ねねばならないかもしれない、といふ思想が表出されるに至つたのである。

滿足の表現を覺醒直後の瞬間まで延ばしてをる二つの夢に於いては、この滿足は第一の方では「私が既にそれを夢にみてしまつてをる」とは、どういふことであるか、それを今や知るであらうといふ期待によつて動機づけられ、そして實は一番目の子等の誕生に關係してをつたし、第二

の場合では、「一つの前徴によつて告知されてをることが」、今や起るであらうといふ確信によつて動機づけられ、そしてこの滿足はその頃次男を設けた時の滿足と同一であつた。是等の場合には、夢思想の中を支配してをる情念が夢の中にその儘殘つてをつた、併しこのやうに全く單純に經過することは、いかなる夢にも恐らくあるまい。若し少しでも兩方の分析に深入りしてみるならば、吾々は次の事を知る、卽ち、檢閲の支配を蒙らないこの滿足は、檢閲を恐れねばならない或る源泉からして或る附加を受けてをる、そしてこの源泉の情念は、若しもその許されてる方の源泉からの同種的な、喜んで表出を許されるやうな滿足情念によつて蔽匿されて、謂はばその背後になつてこつそりと出てくるのでなかつたならば、檢閲に對して確かに衝突を惹起したであらうところのものだ。私は遺憾ながらこれを夢の實例そのもので證明することはできないのだが、併し他の領分からの一例は私の意見を理解のできるものにしてくれるであらう。私は次のやうな場合を假定してみよう、私の身邊に一個の人物が居る、その人を私は、彼の身に何事かが起つたならば悅ばしいんだが、といふ旺んな昂奮が私の心内に生じるほどに、憎んでをる。然るに私に存する道德心はこの昂奮に讓步しない、私は不幸を祈る願望を口外するやうなことを敢てしない、

そして罪もない彼に何事か起つた後には、私はそれについての滿足を抑壓し、そしてお氣の毒に思ふことを口外するやうに自分に强ひる。誰でもかうした境地に居つたことがあるだらう。ところで若しその憎まれてをる人物が何等かの罪過によつて十分相當な迷惑を身に招ぐ、といふ事件でも生ずると、その時には、私は彼が正當な罰を蒙つたことに對する私の滿足を自由に流出せしめることができ、そして公平な他の多くの人々とその點では一致する意見を述べるのである。併し私は、私の滿足は他の人々のそれよりも一層深刻なものとなつてをる事を、觀察することができる。私の滿足は、その時までは情念を出してよこすのを内的檢閲のために妨害されてをつたが、今や事情が變つたのでもはや妨害されない、さういふ私の憎惡といふ源泉からして或る附加を蒙つてをる。かかる場合は、反感を抱かれてをる人物か、又は好まれてゐない少數黨の黨員が何等かの罪を已が身に招ぐ時、社會に於いて一般に起るものである。彼等の受ける刑罰はかかる場合に彼等の罪過に相應しない、寧ろ、彼等に對し向けられてをる今までは結果を現さなかつた惡意にその罪過を加へたものに相當するのである。罰する者達はその際疑ひもなく一つの不正を行ふ者だ、併し彼等は、長い間嚴守してゐた抑壓が今排除されるので彼等の内心に生ずる滿足のため

に、その不正を知覺するのを妨げられる。かかる場合にあつて情念はその性質からすればそれと是認されるものだが、併しその程度からすれば左樣ではない。そして第一の點で安心をする自己批評は、第二の點を閑却すること正に易々たるものである。扉が一旦開かれてしまふと、初めに入れてやらうと考へてゐたよりも、もつと澤山の人が押し入つて來がちのものだ。

神經病的性格の著しい點、情念を惹起し得る動因がこの性格に於いては質的にはそれと是認されるが量的には度を飛び越えるやうな結果を生む、といふ事は、大體この性格に心理學的說明の加へられ得る限りでは、上述のやうな方法で證明される。その過剩は併し、無意識のままでゐてその時までは抑壓されてゐた情念の源泉から發してくる、そしてこの源泉は現實的な動因と或る聯想的聯絡を作ることができ、その源泉の情念發生に對しては他の要求なき從つて許される情念源泉が望み通りの道を拓いてやるのである。かくして吾々は、抑壓されてをる精神的關門と抑壓しつつあるそれとの間に、ただ相互的妨害の關係があるのみではない、といふ事實に注目するやうになつた。兩つの關門が協同作用をなし、相互に强化することによつて、或る病理學的結果を成立せしめる。いろいろな場合も亦、同じく注目に價する。精神機構に關するこの暗示的な記述

を、さて讀者よ、夢の情念發現を理解するために、應用してみようではないか。夢の中に示され、そしてやがてまた夢思想の中に於いてもその當然な場所に見出されるべきであらうところの滿足は、この證明ばかりでは、必ずしも完全に解説されたものではない。普通に、この滿足に對しては夢思想の中に或る第二の源泉を探さねばならないであらう。その源泉のうへには檢閲の壓迫が加はつてをり、そしてその壓迫の下にあつて、滿足ではなく、寧ろ反對の情念を生ずるのであつたらうのに、第一の夢源泉があるために、滿足の情念を排斥作用から遁れしめ、そして他の源泉からの滿足を强化するやうに役立たしめることができるに至るのである。かくして夢の中の情念は、數多の流入物から組立てられてるもの、そして夢思想の材料に關して他から決定を蒙つてをるもので、あると、思はれる。同一の情念を生み得るいくつもの情念源泉は、夢の仕事に際してはその情念の形成のために協同する。(故意的な機智の異常に强い快感効果について、私はこれよ類似の說明をしておいた。)

かの non vixit が中心點をなしてをる美しい夢の分析を參照すると(第七二七頁)、この紛糾した事情を、少しは伺ひ知ることができる。あの夢では、顯在的夢內容の二箇所に、種々の質の

情念發現が凝集してゐる。私がかの對蹠的な友人を二つの言葉で倒す、彼處には、敵意の昂奮と苦痛のそれとが互ひに重なり合つてゐる（夢そのものの中に、「著しい情念によつて襲はれた」云云の文句がある）。又、夢の終りに於いては、私は非常に悦んで、そして覺醒時に於いてならば不合理と認められる一つの可能性、卽ち、單なる願望によつて排除され得る亡靈がある、といふ可能性について判斷を下してをる。

私はまだこの夢の動機を報告してゐなかつた。これは重要なもので、この夢の理解の中へ深く導き入れてくれる。伯林に居る私の友人（この人を私はFlと書いておいた）から、彼が或る手術を受けるであらう、そしてその容態についてはキーンに居る親族が私にその後のことを知らしてくれるだらう、といふ報知を受け取つてゐた。手術後初めの間の報告は悦ばしいものではなかつた、そして私を心配さした。私が自分で彼のところへ行つてみれば一番いいんだが、併し丁度その頃私は一寸でも動くのが苦しい難病にとりつかれてゐた。ところで夢思想によつて私の知るところでは、私はこの大切な友人の生命を懸念してゐたのである。私が一度も近づきになつたことのなかつた彼のただ一人の妹が若い時に、極めて短い間の病氣の後死んでしまつた、その事を私は

知つてゐた。（夢の中では、「Flは自分の妹の事を語り、そして言つた、四十五分間で彼女は死んでしまつた、と。」）彼自身の天性は妹よりも大して抵抗力が多くはあるまい、と私は想像してゐたのであつたに相違ないし、いよいよ惡い報告を受けて旅立つ——併しもう間に合はない、若しそんなことになつたら自分を自分で永遠に非難するやうになるかも知れんぞ、と空想したのであつたに相違ない。（non vixit の代りに non vivit な要求するものは、無意識的夢思想に基くこの空想である。「君は遲すぎて間に合はなかつた、彼はもう生きてゐない」。夢の顯在的局面も亦、non vivit を目がけてをるのである事は、第七三〇頁に示されてゐる。）後れて間に合はないためのこの非難は夢の中心點とはなつたが、それの表出されるのは、私の學生時代の尊敬する先生ブリュッケがその碧い眼の恐ろしい瞥見を以て私に非難を與へる、あの場面に於いてである。場面をかく傍へ逸れるに至らしめたのが何であるかは、間もなく提示されるであらう。夢は場面そのものを私が體驗してをる通りに再現することはできない。夢は碧い眼の方はその人にそのまま殘しておくが、私にはかの打ち倒す役目を與へる、これは、明らかに願望實現の仕事であるところの一つの逆轉である。友人の生命についての心配、私は彼のところへ出かけないといふ非難、私の慚愧（彼は目立たないやう

にしていゝ――私のところへ――キーンへ來てくれたのに）、私の病氣によつて辯解が立つものと考へたいといふ要求、それ等總てが寄り集まつて感情のあらしを作り、それが睡眠の間に明瞭に感ぜられるので、夢思想のあの部分に於いて烈しく動いてるのである。

夢の動機には併しまだもつと別の事があつて、それが私の心に或る全く正反對な影響を與へた。手術の最初の間の面白くない報知の中で、私はまた、この事柄全體について誰にも話をしてくれるなといふ注意をも受けたのだつた。それは私の沈默に對する要らざる不信用を前提とするものであつたから、私はそのために感情を害した。この賴みは私の友人自身から出たのではなくして、それを取り次ぐ人の不器用又は神經過敏に該當するものだとは勿論知つてをつたのだが、併しこの遠廻しの非難によつては非常に苦痛な感動を受けた。なぜならば、それは――全然には不當でないのだからだ。「その中には何かの意味がある」ところの非難以外の非難は、人の知る通りに、執着するものではない、昂奮させる何の力をも持ちはしない。この友人についてではなかつたが、併しずつと年の若かつた昔に一度、私のやうな者をも友人と呼んでくれるのを有難く思はねばならなかつたやうな二人の友人の間に立つて、私は一方か他方について言つた事を餘計なお喋りし

たことがあつたのである。その時聞かされた非難をも、私は忘れてゐない。その時・間に立つた私のため平和を亂された二人の友人の一方は、フライシュル教授だつた。他方は、夢に現れる私の友人で敵であるPも亦持つてをるヨゼフといふ名によつて代理され得る人であつた。

夢の中の要素、第一には目立たずにといふのと、第二に、私が一體Pに彼の事柄についてどれだけ報告したか、といふFlの問とは、私が何事をも自分だけに藏つてをることができないといふ非難の證據である。併しこの記憶の混合が、後れて間に合はない非難を現在から、私がブリュッケの研究所に働いてゐた時代の中へ移した。そして夢のあの打ち倒す場面に於ける第二の人物をヨゼフ某によつて代理せしめつつ、私はこの場面を以て、私が後れて間に合はない非難を表出せしめるばかりでなく、私が些しも祕密を守らない、といふ一層強い排斥を蒙つてをる非難をも表出せしめてをる。夢の壓縮と轉移の仕事、竝びにそれの動機はここに目立つて明らかとなる。

何事をも洩らしてくれるな、といふ注意についての現在に於いてはささやかな憤りは、深いところを流れてゐる源泉から強化を受け、そしてそれが氾濫して、實際は愛してをる人々に對する敵意ある昂奮の一つの河流とまでなつた。その強化を與へる源泉は、幼兒時代記憶の中に流れてをる。

既に物語つたことであるが、私の自分と同年輩の者に對する溫い友情も、また敵意も、一歲私より年上の甥との小兒時代の交友に溯るのであつて、この交友に於いては、彼の方が優越者であつたし、私は早くから自分を護ることを覺えたし、吾々は離れつこなしに一緒に暮らして互ひに愛し合つてゐたが、時々は、年上の人々の話が證明するところでは、互ひに摑み合ひをやつて、そして――お互ひを人に訴へた。總ての私の友人は或る意味に於いては、この「早くから私の憂鬱の眼の前に現れた」最初の姿の化身である、亡靈である。私の甥は青年の頃に再びやつて來た、そしてその時に吾々はシーザーとブルータスのやうな役目を演じたこともある。親密な友人と憎惡する友人とは私にとつて感情生活の常に必要な欲求であつた。私はこの二つを繰り返へし自分で作ることができた。そして友人と敵とが同一人物となるほどに、小兒時代理想がその儘復活することも稀ではなかつたが、勿論それはもはや本當の小兒時代に於いてさうであつたやうに、同時的であつたり、又はいろいろ繰り返へされる交替を以てであることはないのであるが。

かやうになつてをる關聯の下に於いて、情念に對する或る近時的な動因が、幼兒時代の動因へまで溯り、そして情念を起すためにこの幼兒時代の動因によつて自分の替りになつて貰ふのは、

いかなる方法でできるのであるか、その問題を私はここで辿つてみたくない。それは無意識的思考の心理學に屬し、神經病の心理學的解說の中にでも述べられるものであらう。夢判斷の目的のためには吾々はただ、或る小兒時代の記憶が現れる、又は例へば次のやうな内容の記憶が空想的に形づくられるのだ、といふ事を認定しよう。二人の子供が或る物について喧嘩を始める——その物が何であるかを問はずに置かう、假令記憶又は記憶の錯誤は或る全然一定的な物を認めるのであらうけれども——。二人の子供のどつちもが、俺の方が早く來たんだ、だから先取權を持つてると主張する。摑り合ひになる、力のある者が勝だ。夢の暗示によると私は自分が不正であることを知つてたかもしれない（間違を自分で認めながら、と夢が表出する）、併しその摑り合ひの時には私は强者であつて、戰場をわがものとしてをる、敗けた相手は父、乃至祖父のところへ馳けつけて、私のことを訴へる、そして私は父の物語によつて知つてゐた文句を以て辯解する。彼が私を打つたから、私は彼を打つたのだ、と。かくしてこの記憶、或ひは空想といつた方が一層然るべきかもしれないものが、夢を分析してる間に——それがどうしてであるかは、今の私の知る範圍では私自身にわからないのであるが——私の考へに强ひて浮んで來る、そしてそれが夢思

想の中心部分であつて、丁度噴水の水盤がそこへ導かれて來る水を集めるやうに、夢思想の中を支配してをる情念の昂奮を集めるのである。ここからして夢思想は次のやうな道を通つて流れる。お前が場所を空けねばならなかつたのは全く當然であるのに、なぜお前は私をその場所から追ひ拂はうと欲したのだ？　私はお前を必要としない、私はちやんと別の相手をこさへて、それと遊んでやる、等々。然る後に、この思想が再び夢表出の中へ注ぎ入る道が開ける。かかる ôte-toi que je my' mette（俺が坐るから其處退け、――他人の地位や所有物を奪はんとする者の標語）を私はその頃私の死んだ友人ヨゼフに非難せずにゐられなかつた。彼はブリュッケの研究所で副手として私の次の番の者であつた。併しこの研究所での進級は遲々たるものであつて、二人の助手のどれもがその地位を動かないので、若い人々は我慢し切れなかつた。ヨゼフは自分の生命が限られてるのを自覺してゐたし、それに上役の者に何の親密な關係をも結んでゐなかつたので、時々この辛棒し切れない心持を口に出して言つてをつた。彼の上役の者は重い病人だつたから、この人が自分の邪魔にならなくなつたらといふ願望は、この人の進級によつて、といふ意味の外に、猶ほ一つの不道徳な意味をも包藏することがあり得たのであつた。その二三年前に私には、空い

た一つの地位を占めたい、といふ同じ願望が、猶ほ一層旺盛であつたことがあつた。この世に於いて自分の等級と進級が存在してをるところにあつては、いづこに於いても、抑壓を必要とするやうな願望にとつて道が開いてをるものだ。シェークスピアの王子ハルは、病める父の寢床の傍にあつてすらも、一度王冠が自分にはどんなに似合ふかを試みてみる誘惑を斷念することができなかつた。然るに夢は、容易に理解される如く、この無遠慮なる願望の罰を私にでなく、彼に加へてをる。（ヨゼフといふ名が私のいろいろな夢の中でいかにも大きな役目を演じてをるのが、——伯父の夢を見よ——注目を惹いてるかもしれない。この名の幾人かの人物の背後に私の自我が匿れてゐることは、特別にありさうなことである。なぜならば、聖書で知られてゐる夢占師の名も亦ヨゼフといふのであつたから。）

「彼は野心家だつたから、それ故に私は彼を打ち殺した。」彼は他人が自分に場所を空けてくれるだらうと期待することができなかつた故に、それ故に彼は自分が追ひ拂はれてしまつたのだ。かういふ考へを私は、大學で他人のために立てられた記念碑の除幕式に列席した直後に、抱いてをる。夢の中で感ぜられる私の滿足の一部分はそれ故次の如く判斷される、卽ち、正當な罰だ、お

前がさうなるのは當り前だ、と。

この友人の葬儀の際に或る若い男が似合はしからぬことを言つた、あの演說家はまるでこの人一人居ないと世の中はもはや成立つことができないかのやうに喋つたね。誇張によつて苦痛を亂された眞實な人間の反抗心が彼の心に動いたのであつた。ところで夢思想はこの演說に結びついた。卽ち、實際いかなる人も補ふべからざる者であることはない、何と澤山の人を私は今まで旣に墓場へ見送つたことであらう、併し私はまだ生きてるぞ、私はそれ等の人のあとに生き殘つてゐる、私は私の立場を維持してゐる。私の友人のところへ出かけるにしても、もはや私は彼を生命ある人々の間に見出すことはあるまい、といふ懸念の生じてをる、その瞬間に於ける以上の如き思想は、容易に次の如く展開して行く――私はまたもや誰かの以上に長命をしたのが悅ばしい、死んだのは私でなく、彼だ、私は空想された小兒時代の場面に於けるあの頃と同じく、今度も私の立場を維持してをるのだ、といふぐあひに。私は私の立場を維持してをる、といふことについての、幼兒時代に源を發するこの悅びは、夢に採用された情念の主要部分を蔽うてをる。私は生き延びることを悅び、それをかの妻君に向つて次のやうなことを言ふ良人の素朴な利己主義を以

ない事は、私の期待にとつて十分に自明的なのである。

自己の夢を判斷し、それを報告するには、難儀な自己克服が必要であることは、否定できない。自分と生活を共にする凡ゆる高尙な人々の間にあつて、自分一人が惡人であると暴露されなければならないのだ。であるから、かの亡靈はその必要がある間だけしか存在することはできない、願望によつてかの亡靈は追ひ拂はれ得るものである事を、私は全然理解できることと思ふ。私の友人ヨゼフが罰せられたのも、そのためだ。然るにかの亡靈は、私の小兒時代の友人の次々に現れる化身である。であるから、私はこの友人を幾度も幾度も私の代りに立てたことについても、ちやんとそ悅んで居るのである。そして私が今失はんとしつつあるこの伯林の病友に對しても、の代りの者は見出されるだらう。いかなる人も補ふべからざる者であることはない。

併しその間に夢の檢閱はこの極めて粗野なる利己心の考への經路に對して激烈なる反對を起さないのか、そしてそれに附着してゐる滿足を甚だしい不快感に轉變せしめないのか？　私の思ふところでは、それは、同一の人物に對する非難點なき他の思想のつながりがやはり同じやうに滿

足を呼び起し、そしてその情念を以てかの禁止された幼兒時代的源泉に發する情念の力を蔽うてしまふからである。かの嚴かな記念碑除幕式の際に、私が次のやうなことを自分に向つて言つたのは、或るもつと別な思想の層に於いてであつた、私はいかにも澤山の大事な友人を失つてしまつた、その一部は死によつて、又、一部は友情の解消によつて。だが、その代りの者ができた、私は他の友人達が意味し得たよりももつと多くの意味を持ち、そしてもはや容易には新しい友人關係を結んだりしない年齢になつた今に於いては永遠に引き留めて置くであらうところの、さういふ一人の友人を得てをるのは、嬉しいことだ。失はれた友人達に對するこの代りの友人を見出したことについての悦びを、私は邪魔を受けずに夢の中へ採用することができる。併しながらその悦びの背後には幼兒時代的源泉に發する敵意的な滿足が、一緒に、こつそりと附いてくるのである。幼兒時代的溫情が今日の當然なる溫情を强める上に助力することも確かではあるが、併し幼兒時代的憎惡も亦夢表出への道を拓いてしまつてをる。

ところがその外に猶ほ、かの夢の中には、滿足に終るべき或る他の想像經過に對する明瞭な指圖が含まれてゐた。私の友人は少し前に、久しく待つた後で、一人の女の子を得た。早く死んだ

妹を彼がどんなに悲しんでゐたかを知つてゐる私は、彼に手紙を寄せて、君は妹に對して感じた愛をこの子の上へ移すであらう、この小さな娘は君をしてかの補ふべからざる損失を終に忘れしめるであらう、と書いてやつた。

それでこの系列も亦、潛在的夢内容の中間思想へ結びつくのであるが、中間思想からして道は反對的な方面へ二つに分れてついてをる——いかなる人も補ふべからざる者ではない、どうだ、亡靈だらけぢやないか、失つてしまつたものは、總てまた戻つてくる。そしてさて、夢思想の矛盾的な成分の間に於ける聯想の緣は、私の友人の娘が、私の一番年長の友人で敵手である人の私と同年齡の妹であつて、私自身の小さい時の女友達と同一の名を持つてをる、といふ偶然的な事情によつて、一層密接に結びつけられる。私はパウリーネといふ名を滿足を以て聞いた、そしてこの名の一致を暗示せんがために、夢の中に於いて私は或るヨゼフを別のヨゼフによつて補つたし、フライシュルとFlとこの二つの名に於ける同音を抑壓するのを不可能と思つた。次には、ここからまた、私自身の子供等に對する名前の付け方へも、一つの聯想が走つてをる。子供の名はその時代の流行に從つて選まれるべきでなく、大切な人々についての追憶によつて定められるべ

き事を、私は主張してゐた。子供等の名は子供等を「亡靈」にする。そして最後に、子供を持つことは、これ、吾々凡ゆる者にとつて、不滅に至る唯一の道ではないか？

夢の情念については、私はもう一つの觀點からして少しばかりの注意を附け加へるに止めよう。睡眠中の人の精神には或る情念的傾向——吾々が氣分と呼んでをるもの——が、支配的な要素として含まれてをつて、そして夢を決定するのに參加することがある。この氣分は日中の體驗と思想經過から生ずることができる、それは身體的源泉を持つこともある、いづれの場合にあつても、この氣力はそれに相應する思想經過を隨伴してをるであらう。夢思想のこの表象內容が一方では先づ第一に情念的傾向を左右し、次いで第二に他方では身體の事情に基く感情の素質によつて喚起されるものである、といふやうな事實は、夢形成にとつてはどうでもよいことである。夢形成はいついかなる場合にも、それはただ願望實現であるところのものだけを表出し得る。そしてただこの願望からのみ心的原動力を借り得る、といふ制限の下に立つてをる。現在に存在する氣分は、睡眠の間に現在的に浮び上つて來る氣持と同じ取扱ひを受け、閑却されるか又は願望實現の意味を以て別の意義に變更されるかするものである。睡眠中の苦痛な氣分は、夢が實現すべき激

烈な願望を喚起して以て、夢の原動力となる。氣分がそれに附着してゐる材料は、それが願望實現の表現に使用し得るものとなるまで、加工を續けられる。苦痛な氣分の要素が夢思想の中にあつて深刻であればあるだけ、支配的であればあるだけ、最も強く抑壓されてゐる願望の昂奮は表出に達する機會を益々確實に利用するであらう。何故ならば、その昂奮が普通には自分で作り出さねばならない不快感は現在に存してをるが故に、表出へと押し進むため仕事の一層難儀な部分は旣に片づいてしまつてるからである。そして吾々はここまで硏究を進めてみると、再び、夢の業績にとつての境界なることが明らかとなるであらうところの、恐怖の夢の問題に觸れることになる。

第九節　第二次の加工

最後に吾々は夢形成に參加する諸因の中の第四のものの摘出へと進まう。

夢內容に於ける著しい出來事をそれの夢思想內に存する起原に溯つて吟味する、といふ、前にその緖口をつけて置いた方法を以て、夢內容の調査を續けて行くならば、その時吾々は或る要素

に遭遇し、それの解說のためには或る全く新しい假定の必要が生ずる。讀者よ、夢の中で怪しみ、憤り、抵抗する、しかもそれが夢內容そのものの一部に對してである、あの實例を想起してみられよ。夢に於ける批判のかかる昂奮の大抵のものは、夢內容に向けられてはゐずに、寧ろ、私がいくつかの適宜な實例によつて說明しておいた如く、夢材料の中から襲用されそして適當に利用された部分である事がわかる。併しこの種の若干のものは必ずしもかくの如き系統には屬さない。それに對する相對物を夢材料の中に見出すことができない。例へば、夢の中で少しも稀ではない批判、だつてそれはただ夢ぢやないか、といふのは、何を意味するか？ これは、覺醒時に於いてでも行ひ得るだらうところの、夢の實際的な批判だ。これがまた夢から覺める時の前觸れにすぎないものであることも、決して稀ではない。その前觸れそのものの前に猶ほ、或る苦痛的な感情が先行し、そしてその感情は夢の狀態が確められた後には安靜にかへることも、一層頻々とある。夢を見てる間の「だつてこれはただ夢ぢやないか」といふ考へは、オッフェンバハの歌劇の美しいヘレナの口を籍りて公の舞臺の上で言ひ現される事と、同じことを意圖するものであつて、卽ち、今しも體驗した事の意義を引き下ろし，それから以後の事の忍耐を可能ならしめようとす

るのである。かの考へは、與へられた瞬間に於いて直ちに動き出しそして夢の——又は場面の——繼續を直ぐにも禁止するかもしれない或る檢閲機能を眠り込ませるのに役立つ。もつと眠りつづけ、そして夢を我慢する方が、一層樂だ、「なぜなら、ほんの夢にすぎないんだから。」私は想像するのに、それはほんの夢にすぎないのだ、といふ輕視的な批評が夢に現れるのは、決して眠る事なき檢閲が既に許してやつた夢によつて思はぬ襲撃を受けたと感ずる時にである。その夢を抑壓するにはもう間に合はない、それで檢閲はかかる批評を以て、その夢のために起る恐怖又は苦痛的な感じに對し對應する。それは精神的檢閲機能の側に於ける所謂出し後れの智惠(esprit d'escalier)の一現象である。

上記の實例によつて吾々は、夢が含んでをる一切が必ずしも夢思想に發するものではない、吾吾の覺醒時思考から區別する事のできない或る精神的機能が夢內容に對し寄與することがある、といふ事實にとつての非難點なき一證據を有してをる。さてここで問題は次のやうになる、これはただ除外例的に起るのか、それとも、普通はただ檢閲としてのみ働いてをる關門が夢形成に對する正規的な參加をなすのであるか?

吾々は躊躇なく後者に贊成せねばならない。吾々は檢閲機能の影響を從來ただ夢內容に於ける制限と許容の中にのみ認めたのであるが、それは夢內容のいろいろの挿入や增加に對しても亦責任を有するものであることは、疑ひない。これ等の挿入部分は屢々容易に認知される。それ等は遠慮勝ちに報告され、「恰かも――であるかの如く」といふ言葉を以て緒口をつけられてゐて、それ自身としては何等特別なる活氣を持たず、夢內容の二つの部分の結合、夢の二つの部分の間の聯絡づけに役立ち得るやうな、さういふ箇所にいつも挿入されてをる。それ等は夢材料の純然たる派生物に較べると、記憶の中に於ける持續性を示すことは一層微弱である。夢が忘却に陷らんとする時には、この部分が先づ第一に脫落する。そして私の抱いてをる強い推測によれば、吾々は大變澤山に夢を見たんだのに、その大部分を忘れてしまつて、ただ斷片しか記憶に留めてゐない、といふ屢々聞くところの嘆聲は、正にこの接合の役目をしてをる思想が直ぐに脫却するのに基く。十分なる分析をしてみると、これ等の挿入物は、それに對して夢思想の中には何等の材料が見出されない、といふ事によつて、正體が暴露するものだ。だが私は細心なる吟味の後に、かかる場合は比較的稀なものであると言はざるを得ない。大抵の場合、挿入思想はとにかく夢思想の

中の材料へ還元せられるのだが、併しこの材料は自身の價値性によつても、また超決定によつても、夢への採用を要求し得ないもののやうである。吾々が今觀察してをる夢形成に際しての精神的機能は、ただ極端なる場合に於いてのみ、新しい獨創に達し得るものらしい。間に合つてる限りは、この機能は夢材料の中から役に立つものとして選み出すことのできるものを利用してをる。

夢の仕事のこの部分を特色づけるものはそれの傾向であつて、この傾向によつてこの部分の存在が暴露される。この機能は、丁度詩人が意地惡く指摘する哲學者の處置に似たやうな處置をやる。卽ち、そのぼろ屑を以て夢の構造に於ける間隙を埋めるものである。その骨折りの結果、夢は不合理的と支離滅裂の外觀を失ひ、そして何か或る合理的なる體驗といふ樣なものに近いものとなる。併しその骨折りは必ずしも完全な成功を以て惠まれてゐない。かくして皮相な觀察にとつては缺點なく論理的で、そして正確であると思はれるかもしれない夢が出來上る。それ等の夢は或る可能的な境遇から出發し、それを矛盾なき變更によつて繼續し、そしてそんなことは最も稀なのであるが、をかしくは思はれない結果を作るに至つてをる。それ等の夢は覺醒時思考に類

似した心的機能によつて極めて深刻なる加工を受けたものであつて、何等かの意味を有してるやうに見える。併しながらこの意味たるや夢の實際の意義からは最も遠く離れてるものである。それ等の夢を分析してみると、吾々は次の確信を得る、即ち、ここでは夢の第二次的加工作用が甚だ自由にその材料を取扱ひ、材料の關係を保留することは甚だ僅少であつたのだ、と。先づ、謂はば、吾々がそれを覺醒時に於いて判斷にかける以前に於いて、既に一度利用されてしまつてをる、といつたやうな夢がある。次に、他の夢にあつては、この故意的傾向の加工はほんの一部しか成功してゐない。その一部にあつては聯絡がまだ支配してるやうに見える。併しそれから先のその夢は無意味となるか、或ひは紛糾したものになるか、猶ほそれから後には、恐らく再び合理的の外觀を呈するに至るかもしれない。猶ほまた他の夢にあつては、かかる加工は大體拒絶されてをる。さういふ夢に際しては吾々は、內容斷片の意味なき集積を前にして途方にくれて立つのである。

夢を構成するこの第四の力、それは間もなく周知のものとして現れるであらう――實際に於いて、この力はかの四つの夢形成力の中でその他の點からも吾々に親しみある唯一の力である――

この第四の動因に對して、夢のために獨創的な新しい寄與をなす能力あることを、私は決定的には否認したくない。併しながらこの力の影響は、確かに、他の力のそれと同じく、夢思想の中に、既に形成されてしまつてをる材料を特別に選び出す點に、專ら現れる。さて、かういふ一つの場合がある。その場合に於いては、夢に對して謂はば一つの正面景を建てる仕事の大部分は、夢思想の中の材料のうちに既に一つのかかる構成物が出來上つてゐて、そしてその使用を待ち構へてをるために、かの第四の力を煩はさないでもすむのである。私が今考へてをる夢思想の要素を、私はいつも「空想」といふ名稱で呼んでをる。覺醒時からのそれの類似として白日の夢といふ名を擧げて置くならば、恐らく誤解を免かれるかもしれない。吾々の精神生活に於けるこの要素の役目は、精神病學者達によつてまだ遺漏なきまでには知られも、發見もされてゐない。エム・ベネディクトはこの要素の尊重に、私の思ふところでは、有望なる先鞭をつけてをる。白日の夢の意義は、詩人達の誤らざる烱眼から遁れることはできなかつた。アルフォンス・ドゥデーが小說「ナバブ」の中に、傍系的人物のうちの或る一人の白日の夢についてなしてをる描寫は、廣く有名である。精神病患者の研究は次のやうな驚くべき認識に導く、卽ち、この空想又は白日の夢はヒス

テリー症的徴候の——少くとも、それ等徴候の或る全系列の——直接的前提である。記憶そのものにではなく、その記憶の土臺の上に築かれた空想に、ヒステリー症的徴候は附着するのである。意識的な白日の空想の頻々たる出現を考へてみると、かかる形成も、吾々の知り得るものとなるであらう。併し、意識的なかかる空想が存在すると同様に、無意識的のも澤山すぎるほど出現し、そしてそれが無意識に止まらねばならないのは、その內容の爲、そしてそれが排斥された材料から出て來たためにである。これ等の白日の空想の性質をもう一層立ち入つて究めるならば、かかる空想形式に對して、吾々の夜中の思考産物が有してをるのと、同一の名が、卽ち夢、といふ名が與へられるのも、いかに立派に道理あるかを知るのである。白日の夢と夜の夢とは、その特性の本質的な或る部分を共通に有してをる。白日の夢、日中の空想の調査は、それこそ、夜の夢の理解への最も手近なそして最上の通路を開いてくれることができるかもしれないのである。

白日の空想は夜の夢と同じに願望實現であり、大部分が幼兒時代體驗の印象に基くことも夢と同じ。又、夢と同じにそれは、その創作に對し檢閲が或る程度の緩和を與へたのを悅ぶ。その構成の跡を辿つてみると、空想成立の間に活動する願望動機が、空想を築き上げてをる材料をば、

いかに搔き廻し、順序を變更し、そして或る全く新しい全體に綜合したかを知る。空想は小兒時代の記憶へと溯るものであるが、空想がその記憶に對して立つ關係は、丁度、ローマの數多のバロック風な宮殿が古代廢墟に對するそれと同一であつて、其處ではその癈墟の切石や圓柱がより近代風な形式のバロック建築に對して材料を與へてをるのである。

夢内容と對照して夢を形成する第四の動因に認め與へた所謂「第二次加工作用」の中には、白日の夢の創作に際し他の影響によつて妨害されずに現れることのできる働きと同一の働きが再び見出される。吾々は簡單にかう言つてもよいであらう。この第四の動因は提供された材料からして、白日の夢の如き或るものを構成しようとするのだ、と。併し若しも夢思想の聯絡の中に既に一つのかかる白日の夢が形成されてをる場合だつたら、その時には夢の仕事のこの動因はその夢を好んでわがものとなし、そしてそれが夢内容の中へ入つてくるやうに仕事をする。單に一つの白日の空想、一つの恐らくは無意識の儘でをつた空想の反復にすぎないやうな、そんな夢もある。例へば、トロイ戰爭の勇士達と一緒に自分が軍車に乘つてる、少年の夢の如し。私の Autodidasker 夢では少くともその第二の部分は、N教授と私の交際についての、それ自體としては

無邪氣な白日の空想の忠實なる反復である。前以て存在する空想が一層屢々夢の一部を形成するのか、それとも又、その空想の一部分のみが夢內容へまで到達するのであるかは、夢が成立する際に滿たさねばならないいろいろな條件の錯綜に由來してをる。一般的に言ふと空想は潛在的材料の凡ゆる他の成分と同じ取扱ひを受けるものであるが、併し時々空想は夢の中で或る一つの全體的のものとして認められる。私の見た夢の中には、屢々、他の部分とは異つた印象のために際立つてをる部分が現れることがある。さういふ部分は、すらすらと流れ、同じ夢の他の部分よりは一層よく聯絡がとれてをり、そしてそれでゐて一層刹那的であるやうに、私には思はれる。これは聯想上夢の中へ入り込んで來た無意識的な空想であることを私は承知してるが、併しかかる空想を固定しようとしても、私は嘗つてそれに成功したことがない。とにかくこれ等の空想は、夢思想の凡ゆる他の成分と同じく、互ひに寄り合ひ、壓縮せられ、互ひに蔽匿し合つてゐたりする。併し、これ等の空想が殆ど變更を受けないでその夢內容、少くとも夢の正面景を形づくつてるやうな場合から、更にその正反對な場合、即ちそれ等の空想が、ただその要素の中の一つによつてのみか、又はかかる要素に對する或る緣遠い暗示によつて、夢內容の中で代理されてるにす

ぎないやうな場合に至るまでの、いろいろな推移が存してゐる。空想が檢閲と壓縮强制の要求に對して如何なる利益を提供し得るか、これが、夢思想の中にあつて遭遇する空想の運命にとつてもやはり、明らかに標準となつてゐる。

夢判斷のための實例を選び出すに當り、私は無意識的な空想が何か著しい役目をその中で勤めてるやうな夢をできるだけ避けてきたが、それは、この空想といふ心理的要素を持ち出すには、無意識的思考の心理に基く廣汎な研究が必要となるであらうからであつた。併しながらこの關聯に於いても「空想」を全然に回避することはできない。なぜなら、これは屢々全く夢の中へ入り込んで居り、そして夢を通してその存在をありありと見せることは猶ほ一層屢々であるからだ。私はここになほ一つの夢を引用して見るつもりである。その夢は二つの相違した正反對的な、そして處々に於いては互ひに蔽ひ合つてゐる空想から組み立てられてをるやうに見え、そのうちの一方は表面的なものであり、他方は謂はばそれの判斷となるものである。（數多の空想が互ひに重なり合ふことによつて生ずるかかる夢のよい一例を、私は「或るヒステリー症分析の斷片」の中で分析したことがある。しかし私は專ら自分自身の夢、それの根柢となつてるものは稀には自白の夢であり、大概は論爭

や思想的葛藤であるやうな、自分自身の夢を取扱つてをつた間は、夢形成に對するかかる空想の意義を相當以下に評價してゐたのであつた。他人についてだと、白日の夢に對する夜の夢の十分なる類似が、屢々、ずつと容易に證明される。ヒステリー患者に對しては往々にして夢によつて發作の代理をなさしめることが成功する。その場合に吾々は容易に、この二つの心理的形成にとつては白日夢の空想が一番直接的な前提であるのを確信することができる。）

その夢は――私がそれについて何等の注意深い記錄を有してゐないただ一つのものであるが――凡そ次の如し。夢を見た當人は未婚の若い男であつて、行きつけの酒場に坐つてゐる。その酒場の様子はちやんと見えた。そこへ彼を迎へに數多の人が現れた、そのうちには彼を逮捕しようとする一人が居つた。彼は同じ卓に坐つてた人々に向ひ、俺はあとで拂ふ、また戻つてくるから、と言つた。併し彼等は嘲笑しながら叫んだ、その手はよく知つてるよ、誰でもさう言ふもんさ。一人のお客はなほ彼の背後から叫んだ、そら、また一人行くぜ。その後で或る狹いホールへ連れて行かれた。其處には手に一人の小兒を抱いた一人の婦人がゐた。彼の同伴者の一人が言つた、これはミュレルさんだ、と。主計か、それともその外の役人であつたかが、紙片又は書類の一

束をめくりながら、ミュレル、シュレル、ミュレルと繰り返へし言つてゐる。最後にその人は彼に何か訊いたが、彼はそれに、然り、と答へた。然る後彼はかの婦人の方へ振り向いた。そして彼女が大きな髯を生やしてるのに氣がついた。

この夢では二つの成分が容易に區別される。表面的な方は逮捕の空想であつて、これは夢の仕事によつて新しく形成されたもののやうに思はれる。併しそれの背後に、夢の仕事によつて或る輕度の改造を受けた材料として、結婚の空想が目につくのである。そしてこの兩者に共通であり得るいくつかの特徴が、丁度ガルトンの複合寫眞に於いてのやうに、特に明瞭に現れてくる。馴染みの酒場の卓をまた訪ねてくるといふ今までの獨身者の約束、幾度も經驗をしてをるので皮肉になつた飲仲間のそれに對する不信用、そら、また一人結婚して行くぜ、といふ背後からの叫び、これ等は他の判斷にとつても容易に理解され得る特徴である。役人に與へた然りといふ返答も同じ。積み重ねた紙片をめくりながら同じ名を繰り返へすのは、結婚式に屬する或る附屬的なしかしよく認められる特徴、即ち、堆高く到着した、總てが同じ名を指してをる祝賀電報の朗讀に、相應する。この夢の中に花嫁が親しく現れる點に於いて、結婚空想の方が、それを蔽うてを

る逮捕空想に對して勝利を收めたものである。この花嫁が最後に髯を生やして見せることについては――直接の分析はできないので――問合せをしてみた後、説明がついた。夢を見た當人がその前日、彼と同樣結婚生活に反感を持つ一人の友人と一緒に街路をよぎる時、向ふからやつて來た髪の毛の黑いブリュネットの美人を友人に注意してやつた。併しその友人はから言つた、さうだね、この連中が年をとるとその爺さん達みたいに髯が生えだしさへしなけれあね。

勿論この夢にも、夢の歪みの作用が比較的深刻な仕事を行つてをる要素が無いことはない。例へば、「俺はあとで拂ふよ」といふ説話は、持參金についての先方の父親の、どうかとあやぶまれる態度に、關係するものかもしれない。凡ゆる種類の躊躇が夢みるこの男の愉々快々として結婚空想に耽るのを妨げてをることは、明らかである。それ等の一つ、卽ち、結婚と同時に自由が失はれる、といふ躊躇は、逮捕の場面へと轉換することによつて、具現されてをる。

若し吾々がここでもう一度、夢の仕事は夢思想の材料によつて何事かの空想を先づ組立てる、といふことをする代りに、既に出來上がつて存在してゐる空想を好んで利用するものである、といふ考へに立ち歸らうとするならば、この見解を以て吾々は恐らく夢の最も興味ある謎の一つを

解くであらう。私は前に（上巻、第四八頁參照）モーリの夢を語つた。モーリは一枚の小さな板のために頸すぢを打たれ、長い一つの夢、大革命時代の話全體にもあたるほどの長い夢を見て、そして目を覺ました。あの夢は聯絡のとれてるものだと言ふべく、且つ全然、眠つてる彼自身はさういふ刺戟の出現については何の豫想を有し得なかつたやうな、覺醒刺戟を知らせるために作られたものであるから、あれだけ豐富な夢全體は、木の板がモーリの頸椎の上へ落ちたのと、その打擊によつて强制された覺醒との間の、短い時間に於いて作りあげられ、そして夢となつて現れたのに相違ないと、認定するより外ない。覺醒時の思考作用に對してならば吾々はこれほどの敏速があるとは認めてやる事を敢てし得ないであらう。かくして吾々は、その經過の注目に價する速さこそは夢の仕事の特權である、と承認せんとするのである。

急に評判となつたこの推定に對して、（ル・ロレーン、エッゲル等の）その後の著述家達は盛んに異議を申立てた。彼等は、或ひはモーリの夢報告の正確さを疑ひ、或ひは吾々の覺醒時思考の成績の敏速は、夢の成績に何の縮少も加へずに許し得るものに較べて劣ることがないのである、と說明せんとしてゐる。その論爭は原理的な諸問題を展開してをるが、それを片付けるのは私の

闘知すべきところではないやうだ。併し例へばモーリの斷頭臺の夢に對するエッゲルの議論などは、私に何等確信的な印象を與へなかつたことを、私は告白せねばならない。私ならばこの夢を次のやうに說明したらどうか、と提議するだらう。モーリの夢は彼の記憶の中に數年以來出來上つて貯へられてゐて、そして彼が覺醒刺戟を認めたその瞬間に於いて目ざめさせられた——私は寧ろから言ひたい、暗示を與へられた——一つの空想を表出するのである、さう考へるのが一體そんなにまことらしからぬことだらうか？　かく考へる時には先づ、この夢を見た當人の自由にできた非常に短い時間の間に、凡ゆる細部を含んだあんなに長い話を作る、といふ難問がすつかり無くなる。その話は既に作られてゐたのだから。若し假りに、覺醒狀態に於いてあの木片がモーリの頸に打ちあたつたのであつたなら、そしたらこいつあ、まるで斷頭臺で首を切られるのと、同じやうだぞ、と考へる餘裕も或ひはあつたであらう。然るに彼は睡眠中に木片に打たれるのだから、夢の仕事はそこへ入つて來るその刺戟をば、恰かも（これは全然比喩的に解すべきであるが）「今こそ、私がこれこれの時に本を讀んでる間に作つた願望空想を眞實化するのには、一つのよい機會だ」と考へでもするかのやうに、敏速に一つの願望實現の成立に利用するのである。そ

の夢みられた話は、青年が強い昂奮的印象の下に形づくるのを常とする、さういふ話であることは、議論ないことと思はれる。貴族、即ち國民の精華たる男女が、いかに朗らかな心で人は死ねるものかを示し、そしてその遁れがたい最後に至るまで機智の爽かさと生活の優美さとを保持してみせた、あの恐怖時代の描寫によつて、誰が――殊に佛國人でありそして文化史の學徒である者ならば――魅了せられた感じをしない者があらうか？　自分も、淑女の手に別離の接吻をした後、從容として斷頭臺にのぼつたあの若人達のうちの一人だと、空想をあの時代の眞中へ走らせるのは、どんなにか魅惑的なことであらう！　或ひは又、野心がその空想の主要動機であつたかもしれない――自身をかの强大なる人物の一人として考へてみる野心が――あの時そこでは人類の心臟が痙攣的に皷動しつつあつたパリの町を、ただ彼等の思想と彼等の燃ゆる熱辯の力によつてのみ支配し、數千の人間を確信からして死に就かしめ、そしてヨーロッパ改造の途を拓いたが、その際彼等自身の首も不安となり、そして或る日斷頭臺の刄の下にその首を横たへたあの强大なる人物、例へばジロンド黨員乃至は英雄ダントンの役を自身で背負はうとする野心が主要動機であつたかもしれない？　モーリの空想がかくの如き野心的のものであつた事は、記憶の中に

維持されてるかの一點、「見渡せないほどの人間の群に導かれながら」云々が、これを指示してをると思はれる。

久しい前から出來上がつてゐるこの空想全體が併しながら睡眠の間に再び全部繰り返へされる必要はない。それは謂はば「輕く指で觸れられる」ならば、澤山なのである。私の言ふ意味は次のやうなことである、卽ち、二三の拍子が打たれ出して、そして「ドン・ファン」に於いてのやうに誰かがそれに對して、これはモツァルトの「フィガロの結婚」の中のものだ、とでも言ふならば、私の心には一擧にして記憶の波が湧き立つてくる。けれどもその記憶からして次の瞬間に何等か箇々的のものが意識にまで高まることはできない。特色的な一語は丁度破裂點の役目をなし、そこからして或る全部のものが同時に動き出すのである。無意識的思考にあつてもこれと變つてはゐない筈だ。かの覺醒刺戟によつて、斷頭臺空想への入口を開く心的一點が昂奮させられた。併しこの空想はまだ眠つてる間に全局面を展開するのではなく、それは漸く覺醒後の記憶の中に於いてである。覺醒後に今やかの空想は箇々の細かな點に亙つて思ひ出されるのであつて、夢の中ではこの空想は全體的のものとして觸れられただけであつた。ところが、夢に見た事を吾々が實

際に記憶してる、といふことを確めるべき手段は一つもない。覺醒刺戟によつて全部的のものとして昂奮させられた既成的な空想が問題の中心である、といふ說明を吾々は、なほ他の、覺醒刺戟によつてあらはれた夢、例へば地雷火の爆發を聞いたナポレオンの戰鬪の夢などにも、應用できる。(ユスティネ・トボヲルスカがその夢に於ける外觀的時間繼續に關する論文の中に集めたいろいろな夢の中で、マカリオがカシミル・ボンジュールといふ劇作家について報告した夢が、一番證據となり得るもののやうに思はれる。この人は或る晚自分の作品の一つの初演を見てみようとしたが、非常に疲れてゐたので、書割の背後の自分の席で、幕が今上がつた丁度その瞬間に居眠りをした。ところで彼はその睡眠中に彼の芝居の全五幕をすつかり見た上に、箇々の場面に於いて見物が現した感動の種々さまざまな徵候を總て眺めたのであつた。やがてその上演の終了後に、自分の名が實に盛んな喝采の下に宣傳されるのをば、彼はすつかり幸福な氣持で聞いた。突然彼は目を覺した。然るに彼は自分の眼をも耳をも信じようとしなかつた、本物の芝居はまだ最初の場面の最初の白以上に進んでゐなかつたのである。從つて彼は二分以上長く眠つた、といふことはあり得なかつた。この夢に對して、脚本の五幕全體を見た上に、箇々の箇所に於ける見物の態度をも注意したのは、睡眠中の新しい制作から發したわけではなく、上に述べた意味に於いて既に完成されて

ゐた空想の仕事の結果を繰り返へしたのである、と主張しても、それは恐らく大膽すぎるものではなからう。トボヲルスカ女史は他の著述家達と一緒に、急速な表象經過を有する夢の共通的な性質として、それ等の夢は、到底他の夢にはないほど、特別に纏まりあるものに見えること、及び、その夢に對する記憶は細部的であるといふよりも、ずつと寧ろ全體的のものであることを指摘してをる。然るにこれこそは、上述の如き既成であつて、夢の仕事そのものによつてはただ觸れられただけの空想に歸屬せねばならない特徴であらうのに、かかる推論をかの著述家達は無論引き出してはゐない。）私は凡ゆる覺醒夢がこの説明を許容するとか、或ひは、夢に於ける急速なる表象經過の問題がかやうな方法で大體片づけられる、などと主張するつもりではない。

さてここで吾々はいかにするも、夢内容のこの第二次加工作用と夢の仕事の其他の動因との關係がどうであるかを、考へてみねばならない。それは若しかして、夢形成上の動因、壓縮の努力、檢閲に對する讓歩の強制、及び夢の心的手段を以てする表出可能性についての顧慮、これ等のものが先づ第一に材料から或る暫定的な夢内容を形づくり、そしてこの内容がその後で追補的に改造せられて、終にその改造された内容が或る第二の檢閲關門をできるだけ滿足させる、といふや

うなぐあひに行はれるのであるか？　これは殆どありさうなことでない。吾々は寧ろ次のやうに假定せねばならない、即ち、この第二の關門の要求は全然最初からして、夢がそれを滿足させねばならない諸條件の中の一つをなしてをる、そしてこの條件は、壓縮や抵抗的檢閲や表出性の條件と丁度同じに、夢思想の全材料に對して同時的に、誘發的で選擇的な影響を與へるのである。併し夢形成の四つの條件の中で、最後に認められた條件（第二次加工作用）は、夢に對するその要求が一番强制的でないと思はれるものであるに相違ない。夢內容の所謂第二次加工を行ふところの心的機能と吾々の覺睡時思考の仕事とかが同一であるといふ事とは、次の點を考量してみるとまことにありさうなことであるとわかる。即ち、吾々の覺醒時の（前意識的な）思考は或る任意の知覺材料に對して、丁度、今問題となつてをる機能が夢內容に對するのと全然同じ態度をとるのである。或る知覺材料の中に順序を作り、諸關係を結び、或る知的聯絡の期待の下へこの材料を置いてみるのは、覺醒時思考にとつて自然であるばかりでなく、寧ろ吾々はそれをやりすぎることもある。手品師のトリックは吾々のこの知的慣性を利用して吾々を愚弄するものだ。提供された感覺的印象を合理的に組合せんとする努力に於いて、吾々は時々極めて奇妙な誤謬を犯す、

又は吾々の前にある材料の眞實をさへ變造することがある。これに關する證據は甚だ一般的に知られてるものだから、ここに詳しく引用する必要はあるまい。吾々はイリュージョンで正しいものを思ひ浮べながら、理解を妨げる誤植を讀み飛ばすことがある。廣く讀まれる或る佛蘭西の新聞の編輯者が、一つの長い論文の文章一つ一つに「前から」とか又は「後から」とかの語を印刷で挿入せしめて、それで讀者の誰も氣がつかないやうにしてみせる、といふ賭をしたさうだが、彼はその賭に勝つた。間違つた聯想の或る滑稽な實例が數年前新聞を讀んでゐて私の注目を惹いた。佛蘭西議會の會議中或る無政府主義者が議場へ爆裂彈を投げ、それが爆發して滿場驚愕した時、デュピエイは大膽に la séance continue（會議を繼續して）と叫んでその騷ぎを制止したことがあつた、その後で、傍聽席の人々が證人としてこの暗殺計畫についての印象を聽取された。その人々の中に田舍から出て來た二人が居た。そしてその一人は、或る演說の終了後直ぐ、なる程爆發のやうなものを聞いたけれども、國會では一人の演說者が終る每に一發撃つのが慣例なのであらうと考へた、と語つた。もう一人は、多分旣に幾人かの演說を聞いたことがあつたのであるらしいが、やはり同じやうな判斷に陷つた。しかし前のと異るのは、かかる發砲はただ特別に

成功した演說の後にのみ行はれる一種の賞讃なのである、と言うたのであつた。

かくして夢內容に對し合理的であらねばならないと要求し、それに第一回目の判斷を加へ、そしてそれによつて却つてその內容の完全なる誤解を招致するものは正に、吾々の常態的な思考以外の、何等心的批判機能ではない。吾々が夢の正しい判斷をするためには、夢の中の外觀的な聯絡などを、その來歷からすると疑はしきものであるとなして、凡ゆる場合に無視し、そして明瞭な部分からも、紛糾した部分からと同じく、夢材料そのものへ向つて溯る探求の道を取る、といふことが規定であらねばならない。

かくする時に吾々は、紛糾から明瞭へ至る前に揭げた夢の量的段階が本質的に何によつて左右されてをるかに、心づく。吾々に明瞭だと思はれるのは、かの第二次加工作用がそこに何等かの細工を施した部分であり、紛糾してをるのは、この仕事の力が利き目を出さなかつた他の部分である。夢の紛糾した部分はまたいかにも屢々、潑剌たる表烈の度合ひの少いものであるから、吾吾は、夢のかの第二次仕事はまた、夢の箇々の形象の彫塑的强度に對しても何等かの參與をなしてをるものだ、といふ推論を下すことができる。

常態的思考の影響下に生ずる如き夢の決定的構成に對し比較されるやうなものを何處からか探してみせろ、と言はれるとしたら、私には、かの滑稽雜誌「フリーゲンデ・ブレッテル」が多年その讀者を面白がらせて來てをるあの謎の銘文以外、何ものをも持ち合せない。對照のため方言を用ひそしてできるだけ滑稽な意味に作つてある、一つの或る文章を與へ、それで讀者に、この文は羅甸の或る銘文を含んでをるのだ、といふ期待を抱かしめようとする。この目的のためには語句の文字はその組織から切り離されて綴りとなり、そして新しく組合されてをる。ここかしこに一つの純粹な羅甸語が成立し、別の箇所ではさういふ羅甸語の省略かと思はれるものが現れ、そして銘文のなほ別の箇所では、風雨に曝された部分又は缺目かのやうな外觀のために、ばらばらに置いてある文字の無意味さを看過せしめられるのである。若し吾々にしてこの諧謔の手に乘せられたくないならば、吾々は銘文の凡ゆる道具を超越して、その文字を眼中に留め、そしてそこに與へられてゐる順序などには無頓着に、その文字を吾々の母國語に組合せなければならないのである。

補遺。第二次加工作用と機能的現象

第二次加工作用は大抵の著述家によつて注目せられ、そしてその意義を評價されてをる夢の仕事の動因である。エッチ・エリスはこれの業績を朗らかなる比喩を以て説明した。「吾々はこの事柄を事實次のやうに想像することができる、即ち、睡眠意識は獨語をいふ、ここへ俺達の親方覺醒意識がやつて來るぞ、こいつは理性とか論理とか、さういつたものにとても價値を置いてるんだ、こいつがこの現場を占領しようとして來る前に――早く――、纏めて順序を立てろ、どんなでも整理さへついてれやいいんだ。」

この仕事の方法が覺醒思考のそれと同一なることとは、ドラクロアによつて特別明瞭に主張されてをる。「この判斷の機能は夢にのみ固有なものではなく、同様な論理的整理の仕事を吾々は覺醒中の感覺に對しても爲すのである。」

スーリーも同一の解釋を主張する。トボヲルスカも同じ。「幻覺のそれ等の聯絡なき繼起に對して、精神は、覺醒中に感覺に對して爲すのと同樣な論理的整理の仕事を、爲さうと努める。精神

は一つの想像的連繫を以て、それ等總ての無縫合なる形象を互ひに聯絡させ、それ等の間に存した餘りに大きな乖離を塞ぐ。」

二三の著述家はこの整理と判斷の働きを猶ほ夢みてる間に始まり、そして覺醒時に繼續されるものとしてをる。ポーラン然り。「それでも私は、夢の一種の變形が、否むしろ改造が、記憶の中にあるやうに、屢々考へたのである………。想像力の組織的傾向は、睡眠中に素描したものを覺醒後に仕上げるといふことも、極めてあり得るだらう。斯くて思惟の實際の速度は、覺醒した想像に依る完成のために、外見上增大されるだらう。」ルロアとトボチルスカは曰く、「之に反して夢の中では、判斷と整理とは、唯に夢の與件の助けにより爲さるるばかりでなく、また不眠時の與件の助けによつても爲される。」

その後、夢形成のこのただ一つだけ認識された動因の意義が過重に評價され、その結果夢を創造する全業績がそれに歸せられることも、生ぜずにはゐなかつた。この創造は、ゴブロー及び猶ほ廣くフーコーが假定するところでは、目が覺める瞬間に行はれる筈だとのことである。この二人は、睡眠中に浮んでくる思想から夢を形づくる能力を覺醒思考に歸してをる。ルロアとトボチ

ルスカはこの解釋に對して次の如く言ふ。「彼等は夢を覺醒の瞬間に置き得るものと思つた、そして睡眠時の思考の中に現存する形象を以て夢を取り上げる機能を、不眠時の思考に歸屬させた。」

第二次加工作用の評價に因んで、私はここに、ジルベレルの敏感なる觀察が提示した夢の仕事に關する一つの新しい寄與を尊重しておきたい。前に揭げたやうに、ジルベレルは疲勞と嗜眠の狀態に於いて强ひて精神的活動をなさうと試みながら、思想を形象へ置換へる働きを、謂はばその現行のところで捕へてみせた。その時に、加工された思想は消失して、そしてそれの代りに一つのヴィジョンが現れたが、このヴィジョンは大抵は抽象的である思想の代理であることが判然した。(第五九三頁參照)。さてこの試みの際に生じたのは、そこに浮びあがつてくる、そして夢の或る要素に對應されるべき形象は、加工を待つてをる思想以外の或るもの、即ち疲勞そのもの、この仕事に對する煩はしさ又は不快、從つてその骨折りの對象物の代りに、骨折りつつある人物の主觀的狀態とその樣子を表示する、といふ事であつた。ジルベレルは自分の夢に眞に屢々現れる、かかる場合をば、期待されるべき「材料的現象」と區別して、「機能的現象」と名づけた。

「例へば、或る日の午後、私は非常に眠い氣持でソファの上に橫になつてをつたが、それでも或

る哲學上の問題について思索しようと努めた。卽ち、私は時間に關するカントとショーペンハウエルの見解を比較しようとしたのだつた。頻りに睡氣を催すために、比較に必要である兩者の思想聯絡を互ひに竝置してみることが、私にできない。幾度か無駄な試みの後、私はもう一度、凡ゆる意力を働かして、カントの結論を自分の心に刻みつけ、そして後それをショーペンハウエルの問題設定の上へあてはめてみる。この後で私は注意を後者に移したが、再びカントに歸らうとすると、そのカントはもはや私の頭から消失してしまひ、それを新しく取出すのに骨折つたが、駄目である。ところが、私の頭の中で何處かへ行つてしまつたカント文獻を卽座に取り戻さうとする、この無益な骨折りは、眼を閉ぢると、突然夢の形象に於いてのやうに、ありありとした彫塑的な象徵となつて表出された、卽ち、私は一人の無愛想な事務員から何かの說明を求めてゐる、事務員は事務机の上に屈んだまま、私がせついても仕事の手を止めない、彼は半分ほど身を起して、不機嫌さうに且つ彼方へ行けといふやうに私を見つめる。」

睡眠と覺醒との中間動搖に關係する他の例。ジルベレルに據る。

「例、第二。――條件、朝の目覺め際、或る深さの眠りの朦朧狀態の中で、前の夢について反省

しながら、謂はばそれの後を終りまで夢みつづけながら、私は覺醒意識へ近づきつつあるのを感じたが、併し依然この朦朧狀態のままに留まりたいと思つた。場景、私は片方の足で小川を跨いだが、併しその足をすぐに引きこめ、そのままその上に留まらうと努めてゐる。」

「例、第六。――第四例の如き條件、(寢込まずに、もう少し横になつてゐたいと思ふ)。私はもう少し眠つてゐたいと思ふ。場景、私は誰かと別れる、そしてその人(又は彼女)とすぐまた會ふために、その人(又は彼女)と一緒になる。」

「機械的」現象、「對象的なものの代りに狀態的なものの表示」を、ジルベレルは主として睡眠に入るのと目が覺めるのと二つの事情の下に觀察した。夢判斷にとつては後者のみが考慮されることは、容易に理解されることである。ジルベレルは適當な例によつて覺醒がそれに直接結びついてをる多くの夢の顯在的內容の最後の部分は、正に覺醒そのものの目論見か又は經過をば表出するものである事を示した。この意圖に役立つ象徵は、閾を跨ぐこと、別の場所へ入るために或る場所を離れ去ること、出發、歸宅、案內人から別れること、水中へ沈むこと、其他である。私はここに、かの閾の象徵に關係する夢の要素は、私自身の夢に於いても、及び私が分析した人達の

夢に於いても、ジルベレルの報告によつて正に期待される筈であるのとは比較にならぬほど稀にしか起らなかつた、といふ事を注意しておかざるを得ない。

この「閾の象徴」が、或る夢の聯絡の眞中にある數多の要素にとつても亦、例へば、深い睡眠とそれから夢を破らうとする傾向との動搖が重要點となつてをる箇所に於いて、それを說明するものとなるだらうといふ事は、決して考へ得られないこと、又はありさうでないことではない。併しこの現象に對する大丈夫な實例は未だ提示されてゐない。それよりも一層頻々と存在するやうに思はれるのは、材料的內容を夢思想の組織から受取つてをる夢の或る箇所は、その上に、精神的活動に於ける或る狀態的のものの表出のために利用されたのである、といふ超決定の場合の方である。

ジルベレルの甚だ興味ある機能的現象は、發見者たる彼の責任あることなくして、ひどく濫用されるに至つた。と言ふのは、夢に對し古くからある抽象的象徵的判斷の傾向がこの現象に支持を見出したのである。「機能的種類」の力說は多くの論者にあつて甚だしきを極め、彼等は夢思想の內容の中に智的活動又は感情經過が現れる場合には常にその機能的現象を云々するのである

が、しかも實はこの材料は、凡ゆる他のものに較べて、日中經驗の殘餘として夢の中へ入り込む權利を、より多くも、又、より少くも有してはゐないのである。

ジルベレルの提示した現象は夢形成に對し覺醒思考からの或る第二の寄與を意味するものである事を、吾々は承認しようと思ふ。この寄與は勿論「第二次加工作用」といふ名目の下に持ち出されたかの第一の寄與に較べると、恒常性も劣り、意義も少い。日中に活動する注意力の一部が睡眠狀態の間に於いても夢に向けられたままでをり、夢を統制し批評し、そして夢を中斷すべき力を保留してをることは、既に前に示された。この覺醒のままでをる精神的關門を以て、夢の構成に對し實に強い阻止的な影響を與へるのが役目である檢閲者なりと認めるのは、もはや一步のところであつた。これについてジルベレルの觀察が貢獻するものは、事情の如何によつては一種の自己考察がその際に働いてそして夢內容に對して寄與する、といふ事實である。哲學的頭腦の人々にあつては特に勢を揮ふかもしれないこの自己考察的な關門の、內部心靈的知覺、注意妄想、良心、及び夢檢閲者に對する蓋然性的關係については、別の箇所で論ずるのが、適當である。(「ナルツィスムスの設定」參照。Zur Einführung des Narzissmus. Jahrbuch der Ps.-A. VI.

1914.)

さて私は夢の仕事に關する是等廣汎なる探求を摘要してみよう。吾々は、果して精神はその一切の能力をば阻止されることなく展開して夢形成に使用するものであるか、それともその業績を阻止された一部分のみを使用するものであるか、どつちであるかといふ質問を、吾々の前に持つたのであつた。吾々の調査は、かかる質問を以つて大體事情に想應せざるところのものとして排斥せしめる。併し若し吾々にしてその解答に際しその質問が吾々をそこに立たしめると同じ地盤の上に留まらねばならないならば、吾々は二つの、外觀上は互ひに對立して相容れない解釋を肯定するより外ない。夢形成に於ける精神的仕事は二つの業績に分解される、即ち、夢思想の成立と、その夢思想の夢內容への變更とである。夢思想は全然正確で、そして吾々が使用し得る凡ゆる精神的力を用ひて作られてをる。夢思想は意識的にはならなかつた吾々の思考に屬し、この無意識的思考からして或る轉置によつて意識的思想も發生してくる。これ等の思想のいかに多くの部分が知るに價し、そして謎のやうであらうとも、併しかかる謎は夢に對し何等特別の關係を有

することなく、夢の問題の中へ入れて論ぜられる價はない。（私は嘗つて以前には、讀者をして顯在的夢內容と潛在的夢思想との區別に慣れ親ませるのに、異常に難儀をせねばならなかつた。記憶に保存されたままの未判斷の夢に基いた議論と抗議が繰り返へし行はれ、そして夢判斷の必要を說いても耳を借されなかつた。ところが少くとも精神分析學徒だけでもが、顯在的夢のため判斷によつて見出されたその意味を附加することに親しむに至りはしたけれども、彼等の多くは今度は別の混同を犯し、そしてそれに前と同じく頑固に執着するのである。彼等は夢の本質をかの潛在的內容に求め探し、そして潛在的夢思想と夢の仕事との間の區別をその際に看過してをる。夢は所詮、睡眠狀態の諸條件によつて可能ならしめられる吾々の思考の或る特殊なる形式に外ならない。この形式を作るのが夢の仕事である。そしてこの夢の仕事のみが夢の本質的なものであり、夢の特殊性の說明の鍵である。私はこの事を、夢のかの惡評高き「先見的傾向」の尊重のために言つて置く。夢が吾々の精神生活の前に横たはる課題の解決の試みに從事する、といふ事は、吾々の意識的覺醒生活が同じ事に從事する、といふ事に較べて、何も變つて目立つ事ではないのであつて、ただその上に、既に吾々に知られてるやうに、夢の仕事は前意識に於いても起り得るといふ事が附加されてをるだけである。）　無意識的思想を變形して夢內容となすところの、他の仕事の部分は、反之夢の生活に特

有でありそして特色發揮的である。ところでこの特殊的なる夢の仕事は、夢形成に際しての心理的業績を斷然微少なものと評價する人々すらが考へて來たよりも、更に遙かに、覺醒時思考の手本からは遠ざかつてをる。夢の仕事は覺醒時思考に較べて、もつと投げやりである、不正確である、健忘である、不完全である、といふやうなものではない。夢の仕事は覺醒時思考とは質的に全く相違した或るものであつて、それ故に先づこれと比較すべきものではない。夢の仕事は大體思考し計算し判斷することをしない、ただ變形することに限定されてゐる。夢の仕事の產物がそれを滿足させねばならない諸條件をば眼中に留めるならば、夢の仕事の記述は遺漏なくなされる。この所產卽ち夢は何よりも先づ檢閱の目を遁れねばならない、そしてこの目的のために夢の仕事は、凡ゆる心的價値の轉換を生ずるまでに心的強度の轉移作用を使用するのである。思想は專ら又は主として、視覺及び聽覺の記憶痕跡の材料の中に再現されねばならない、そしてこの要求から して夢の仕事にとつては表出性に對する顧慮が生じ、夢の仕事は新しい轉移によつてこれに順應するのである。（恐らくは）、夜中に夢思想の中に於いて使用するよりかもつと大きな強度が作り出されねばならない、そしてこの目的にかの夥しい壓縮作用が役に立ち、この作用は夢思想

のいろいろな成分の上に加へられるのである。思想材料の論理的關係は殆ど顧みられない、この關係は結局夢の形式的特色の中に一種の蔽匿された表出を見出すのである。夢思想の情念はその表出内容に較べると變更を蒙ることは少い。情念は普通抑壓される、若し維持されてをる場合だつたら、表象から分離せられ、その同種性に從つて組合せられる。いろいろな著述家達が夢形成の全體的活動に對して通用せしめんと欲した解釋などに當てはまるのは、ただ夢の仕事の一部、即ち部分的に目を覺した覺醒思考による、その及ぶ範圍の不定なる加工だけであるにすぎない。

第七章　夢經過の心理學

私が他人の報告によつて知つた夢の中に、今吾々の注意を全く特別に要求する一つの夢がある。それは或る婦人患者が私に物語つたもので、この婦人自身はその夢を夢に關する或る講演で聞き知つたのである。その夢の源泉は今まで私にわかつてゐない。然るにその夢の內容はかの婦人に印象を與へた。何故なら彼女は時を移さずその夢に「從つて夢を見た」からである、といふのは、その夢の諸要素を一つの自分の夢の中で繰り返へし、そしてこの移植によつて或る一定の點に於ける一致を表現しようとしたのである。

この模範的な夢の先行條件は次の如くであつた。或る父親が幾日も幾夜もその子供の病床に番をしてゐた。その子供が死んだ後で、彼は次の部屋で休息したが、自分の寢てる處から、子供の死骸が大きな蠟燭をぐるりに立てて棺にのせてある部屋を見るために、扉を開けたままにしておいた。一人の老人が番を頼まれ、祈りをぶつぶつ口にしながら死骸の傍に坐つてゐた。二三時間

眠つた後で，父親は夢を見た。「その子供は彼の寢床のところに立ち、彼の腕を掴み、そして非難をこめて彼に囁いた。お父さん，あたいが火傷してるのが見えないんですか？」父親は目を覺した。死骸のある部屋から來る明るい光を認め，急いで行つてみると，番をしてる老人は眠り込んでゐた，燃えながら倒れた一本の蠟燭のために被覆が燃え，その大切な死骸の片方の腕が火傷をしてゐた。

この感動的な夢の說明は簡單で、私の患者の語るところによると、その講演者によつても正しい說明が與へられた。明るい光が開いたままになつてゐる扉を通つて睡眠中の人の眼に傳はり、彼が覺醒してをつても下すであらうと同一の推定を彼の心に刺戟した、卽ち，一本の蠟燭が倒れたために死骸の近傍に火事が起つたのだ、と。恐らく父親は、あの番をしてをる老人はとてもその任務をやり了せまい、といふ懸念を抱きながら眠りに入つたのであつたかもしれない。

吾々も亦この判斷に何等の變更を加ふべきを見出さない。併し吾々は次のやうな要求を附け足さねばならない、夢の內容は超決定を受けて居り，子供の言葉は生きてをつた時に實際に口にした、そして父親の心に重大な結果を結びつける話から組立てられてるのに相違ないのである。例

へば、私は火傷をする云々の訴へはその子供がその狀態で死んだ高熱へ結びつき、お父さん、あなたに見えないんですか云々の言葉は、他の吾々に知られてゐないが併し情念を含む場合へ結びついてをる。

併しながら夢とは一つの意味に富み、心的出來事の聯絡の中へ組入れ得る經過である、と認識してしまつた後に於いては、かやうな早速の覺醒を必要としたやうな事情の下に、とにかく一つの夢が成立した事は、吾々に不審の念を起さしめるであらう。次に、この夢も亦一つの願望實現を缺いてゐない事に注意を向ける。夢の中で死んだ子供は生ける者の如くに振舞ひ、みづから父に警告し、その寢床のところへ來て、その腕をひいてをるが、それは恐らくこの夢の中で子供が述べる言葉の初めの方の部分の源泉たる記憶の中に於いて、この子供が行つた通りであつたかもしれない。父親がその眠りを一瞬間だけ延ばしたのはこの願望實現のためだつた。夢は覺醒時に於ける熟慮に較べて優先權を持たされた、なぜならばこの夢は子供をもう一度生きてる者として示すことができたからだ。若しも父親が先づ目を覺し、そして然る後に推定を下して死骸の部屋へ行くのだつたならば、父親は謂はば子供の生命をこの一瞬間だけ縮めたことになつたであらう。

この小さな夢が如何なる特色によつて吾々の興味をつなぐのであるかについては、些しの疑ひもあり得ない。吾々は今まで主として、夢の祕密な意味は何處にあるか、その意味は如何なる方法で發見されるか、この意味を蔽匿する爲に夢の仕事は如何なる手段を利用するか、それ等のことを念頭に置いてきた。夢判斷の課題が今までは吾々の視野の中心點に立つてゐた。今や吾々はこの夢に遭遇した。これは判斷に對し何の課題をも與へない。その意味は蔽匿されずに與へられてゐる。しかも吾々はこの夢はやはり、一箇の夢をして吾々の覺醒的思考から目立つて離反せしめ、そして說明の要望を吾々に起さしめるところの、本質的な性質を依然保有してをるのに、氣づくのである。判斷の仕事に關係する一切の事を除去した後に、初めて吾々はやつと、夢の心理學が如何に不完全なままに留まつてるかを、認め得る。

併し吾々の思想を抱きながらこの新しい道を辿る前に、足を停めて、今までの逍遙に於いて吾吾は何等か重要なことを不問にして置いたやうなことはなかつたか、どうかを回顧してみよう。何故ならば吾々は吾々の歩いて來た道程は氣易いそして愉快なものであつたことを明瞭にする必要があるからである。吾々の今まで歩いた道は總て、私にして甚だ思ひ違ひをしてをるのでなか

つたなら、光明へ、開明へ、そして十分なる理解へ導くものであつた。夢に於ける精神的經過の中へ一層深く押し入らうと欲する、その瞬間からして、凡ゆる徑は暗闇へ入つて行くであらう。夢を心理的經過として解說するのは、どうしても不可能である。といふのは、說明するとは既知の事へ還ることを意味する、そして夢の心理學的吟味からして說明の根據たることが明らかとなるものをそれに配屬せしめ得ると思はれるやうな、心理學的知識は先づ今のところ存在してゐないからである。寧ろその反對に吾々は止むなく一列の新しい假說を提示せねばならないであらう。この假說は精神といふ道具の構造とその中に働いてる力の運轉とに推測を以て觸れる、そして吾々はこの假說を最初の論理的連續以上にまで敷衍しては用ひないやうに用心しなければならない、若しそれ以上に用ひたりするならば、その價値は不定的のものとなつてしまう。吾々が推論に於いて何の過失をも犯さず、そして凡ゆる論理的に生ずる可能性を計算の中へ引き入れる場合であつてすらも、吾々は猶ほ且つ、吾々の要素を設定するのが多分は不完全であるために計算の完全なる失敗に陷る危險に脅かされるのである。精神といふ道具の構造と働き方についての或る解決を、吾々は夢又は何か他の孤立的な業績の愼重なる調査によつては、獲ることも、少くと

も根據づけることもできないであらう。寧ろ、心的業績の或る全系列の比較研究に際して恒久的に必要であると判然するものをば、吾々はこの目的のために協力して集めねばならないであらう。かくして、吾々が夢經過の分析から汲み出すところの心理學的假說も、謂はば或る停車場に立ち止まり、或る別の着手點からして同一の問題の核心へ向つて進まうと欲する、他の調査の結果へ接續し得るだらうまで、待つてゐねばならないであらう。

第一節　夢の忘却

私は先づ一つの題目へ向はうと思ふ。この題目から一つの今まで注意を拂はれなかつた抗議が導き出されるのであるが、その抗議は夢判斷の爲の吾々の辛勞からその地盤を引き去るに適してをる。吾々は吾々が判斷しようとする夢を實は全く知つてゐないのだ、もつと正しく言へば、その夢が實際に起つた通りにその夢を知つてをる、といふ何等の證明をも吾々は持つてゐないのだ、といふ抗議が、ただに一部の人々からばかりでなく吾々の前に持ち出された。(上卷第八一頁參照)。

吾々が夢について想起しそしてそれによつて吾々の判斷の技術を行ふところのものは、第一に、

夢を保持するのに全然特別なほど高程度に於いて無能である吾々の記憶力の不誠實によつて破壞されてをり、そして恐らくはその內容のそれこそ最も有意義な部分を消失してしまつてゐる。吾々の夢に注意を拂はうとする度毎に、吾々は、それの記憶そのものが異常に不確實であると思はれる斷片よりも、もつとずつと多量の夢を見たんだのに、遺憾ながらその斷片以上にはもはや何ものをも知つてゐないのを嘆かずにはゐられない。更に第二には、吾々の記憶は夢を啻に不完全にばかりでなく、不誠實に且つ虛僞にさへ再現するのであることについては、凡ゆる證據がある。一方では、夢みられたものが果して吾々の記憶にあるやうにそのやうに聯絡を缺き朦朧たるものであつたのか、を疑ひ得ると同じく、他方では、一つの夢は吾々がそれを語る如くにそのやうに聯絡あるものであつたのか、吾々は再現の試みの際に、既存の又は忘却によつて生じた缺陷をば勝手に選んだ新しい材料を以て充足し、その夢を裝飾し全體を整へて組立てる結果、吾々の夢の實際の內容が何であつたのかを判斷するのが全く不可能となるのではないか、と疑はれもする。實に吾々は或る著述家（ヰルヘルム・シピッタ）が次のやうな臆測をなしてるのを見出した。即ち秩序と聯絡の一切は、夢を思ひ出さうとする試みの際に初めてそれに附け加へられたもので

ある、と。かくして吾々は、吾々がその價値を決定しようと企てた對象卽ち夢そのものを吾々の手から取りあげられるかもしれない危險の中にゐるのである。

吾々は吾々の夢判斷に於いて今まではこの警告を聞き流して來た。それどころではない、吾々は寧ろ夢の極めて小さな、極めて目立たないそして極めて不正確な內容成分の中に、夢の明瞭に且つ正確に保存された成分に較べて劣ることなく、判斷にとつての要求が認められると考へて來た。イルマの注射の夢の中にこんな文句がある、私はドクトル・Mを急いで呼び寄せる。そして吾々は假定した、若しもこの附加成分も何か特別なる源泉から出てゐるのでなかつたなら、夢の中へは入つて來なかつたらう、と。かくて吾々は、私が急いで年長の同僚をその寢床の傍へ招いだ、あの不幸な婦人患者の話に到達したのであつた。五十一と五十六との區別を顧慮する要なき量として取扱つたあの外觀的には不合理な夢の中で、五十一といふ數は數度持ち出されてゐた。これを自明的なことと又は無頓着なことと考へる代りに、吾々はそれを土臺にして、五十一なる數へと導く潛在的夢內容の中の或る第二の思考經過を推定した。そして吾々が更に辿つてみた痕跡は、五十一歲を命の境と考へる恐怖を吾々に發見せしめたが、それは生命に境は無いと誇大に構

へてゐる中心的な思考の働きとは極めて鋭い對照をなすものであつた。"Non vixit" の夢では、私が最初には見落した目立たない小さな挿入として、「Pが彼を理解しなかつたから、Flは私に訊いた、」云々の一節が見出された。やがて判斷が行きづまつた時に、私は振り返つてこの文句を摑んだ、そしてそれから出發して、夢思想の中に媒介的な結合點として現れる小兒時代空想への道を見出したのであつた。それは詩人の句の助けで行はれた。

君が僕を理解したのは稀だつた、
僕が君を理解したのも稀だつた、
ただお互ひが泥土(苦境)に陷つた時だけ、
僕たちはすぐお互ひに理解し合つた!

凡ゆる分析は、夢の極めて些細な點こそは判斷にとつて缺くべからざるものである事、そしてかかるものに對しては注意がやつと後になつてから向けられるものだから、判斷の仕事を果すのが遲延される事、それを色々な實例を以て證明することができるであらう。吾々は夢の判斷に際して、それと同樣の尊重を、吾々にその夢が紹介された時の言葉の表現の凡ゆるニュアンスに對

して拂つてきた。のみならず、その夢を正しい纒りに飜譯することはどう骨折つても成功しないかのやうに、或る無意味な又は不十分な語句が吾々の前に置かれた場合には、吾々はこの表現の缺陷をまでも尊重したのだつた。要するに、著述家達の意見によれば、一箇の勝手氣儘な、そして狼狽のうちに急いで作りあげられた卽興製作であるとせられるもの、それを吾々は一箇の神聖なテクストの如くに取扱つて來た。この矛盾は解說を必要とする。

その解說は吾々に味方する、さうかと言うてかの著述家達を不當なりとはしない。夢の成立に關する吾々の新しく得た洞察の立場からすると、色々な矛盾は殘りなく融合する。吾々が再現の試みの際に夢を歪める、といふのは正しい。そしてこの點にまた吾々は、常態的な思考の關門によるかの第二次的な、そして屢々誤解される夢の加工作用と名づけた働きを見出すのである。併しこの歪曲は元來、夢思想が夢檢閱の結果定まりきつて蒙るところの加工の一部に外ならない。かの著述家達はここに夢の歪曲作用の顯然と働いてる部分があると想像し、又は認めた。吾々にはそれは殆ど何でもないことだ。何故なら吾々は、それよりもずつと豐富な、そしてもつと摑むのに容易でない歪曲の仕事が、既に匿れてゐた夢思想の時からして、この夢を對象に選んでをつ

たのである事を、知つてるからである。かの著述家達はただ次の點に於いて誤つてゐる、即ち彼等は、夢が後で想ひ出されて言葉に纒められる際に蒙る變更を、勝手我儘な、從つてそれ以上は解決されない、そして從つて吾々をしてその夢の認識に於いて迷はしむるのに適したものだ、と考へるのである。彼等は精神心理に於ける決定をその價値以下に評價してをる。そこには何一つ勝手氣儘なものはない。第一の思想の動きによつては不定の儘に捨てられた要素の決定をば第二の思想の動きが直ぐに引き受ける、といふ事は、全く一般的に示され得る。例へば、私が全く任意に或る數を思ひつかうとする、それは不可能である、私に思ひつく數は、私の中にある色々な思想、それが私のその瞬間の目論見からは遠く離れてをつてもかまはない、その思想によつて明白且つ必然的に決定されてをるのである。（決定については、「日常生活の異常心理」參照）。夢が覺醒の校訂の際に蒙る變更も亦、同じく任意放恣のものではない。それ等の變更は内容と聯想的な結合をなしてをり、その内容の代りに自からが現れ、そしてこの内容への道を吾々に示すのに役立つのであり、内容自身はまた或る他の内容の代理となつてをるかもしれないものである。

私は患者を相手の夢分析に際してこの主張に對し次のやうな試驗をしてみるのであるが、必ず

成功してをる。或る夢の報告が最初私に理解しにくく思はれる場合、私は話手にそれを繰り返へすやうに頼む。ところが、これが同じ文句を以て行はれるのは稀である。併し話手が言ひ方を變へた箇所、それは夢の變裝の弱點だと、私にはわかつた。そしてそれは、丁度ニーベルンゲン傳說のハーゲンにとつてジークフリートの着物に縫ひつけた印のやうな役目を、私に對して勤めてくれる。ここに夢判斷の着手點があり得る。話手は私の要求によつて、私がその夢の解決に對し特別なる骨折りをする考へであるのに心づき、抵抗の衝動に動かされて、その夢の變裝の弱い箇所をば、祕密漏洩的な言ひ方を捨てその代りにもつと離れた言ひ方をして以て、急いで掩護する。その結果却つて私をして彼の省略したその言ひ方に注意せしめるのである。夢の解決を妨止しようとするその努力からして、私は、その夢を包みかくす着物を織り出してをる顧慮をも推論し得るわけなのである。

かの著述家達が、夢を語る判斷に加へられる疑ひに對し、あのやうに價値を置いてをる方が、寧ろ道理を持つこと少い。即ち、この疑ひは智的な保證を缺いてをる。吾々の記憶力は概して何等保證なるものを知らない、それでゐて吾々は、客觀的に當然と思はれるよりもずつと屢々、記

憶の提示するものに信用を拂ふ強制に從つてをる。夢の又はその箇々の事柄の正しい再現に對する疑ひといふものもまた、夢檢閲の、卽ち夢思想が意識へと浸透し來るのに對する抵抗の一派生物である。この抵抗は轉移や代理などの作用をやり終つただけで必ずしも完了するのではなく、その後も、その抵抗を通り拔けて來たものに、なほ疑ひとして附着してをる。この疑ひは用心深く、決して夢の深い程度にある要素には觸れないで、ただ微弱なそして不明瞭な要素にのみ觸れるものだから、吾々はこの疑ひをそれだけ見誤り易いのである。併し今では吾々は旣に、夢思想と夢との間には凡ゆる心的價値の完全なる轉倒が起つてをるものだ事を、承知してをる。歪曲は價値の剝奪によつてのみ可能であり、必ずこの方法で現れ、そして時によつてはそれだけで滿足する。夢內容の或る不明瞭な要素に猶ほかの疑ひが附け加はる時には、吾々はその暗示に從つて、この疑ひの中に、放逐された夢思想のうちの或る一つの一層直接的な派生物を認識することができる。その狀、恰かも古代又はルネサンスの共和國の一つに於ける大變革の後の如し。以前に勢を揮つてゐた威勢のよい家族は今や追放された。凡ゆる高い地位は成上り者によつて占められた。都會に殘ることを許されてるのは辛うじて、倒された者の緣遠い一派か、今は全く零落して無力

な市民だけである。是等の人々と雖も十分なる市民權を享有してはゐないし、不信の眼を以て監視されてゐる。この比喩の不信に相當するものは、吾々の場合ではかの疑ひである。であるから私は或る夢の分析に際して、確實性の評價などからは全然離れ、かういつたこと、又はああいつたことが夢の中に現れたやうだ、といふ極めてかすかな可能性をでも、完全なる確實の如くに取扱ふことを、要求するのである。或る夢要素の跡を辿る時に、若しこの決心をなしてゐなかつたならば、分析はそこで行きづまつてしまう。その當面の要素に對して若し輕視の態度を示すならば、分析される相手の心理には、その要素の背後に潛むところの、望ましからぬ表象は彼に些しも思ひ浮んで來まい、といふ結果を招ぐ。かかる結果は實は自明的ではない。若し人が、夢の中にこれが含まれてゐたのだつたか、それともあれだつたか、それを私は確實には知らない、だがそれについては次のやうなことが私に思ひ浮んでくる、とでも言ふならば、それは矛盾ではないだらう。然るに人は決して左樣には言はない。そして分析を妨害する疑ひのこの結果こそは、その疑ひが心的抵抗の派生物であり、一つの道具であることを暴露せしめるものである。精神分析が不信的であるのは道理を持つてゐる。精神分析の規則の一つはかうだ、何であらうが仕事の繼

續を妨害するものは、常に一つの抵抗である。（ここに斷々乎として提示せられたこの一文は、誤解され易いかもしれない。これは勿論ただ一つの技術上の規則、分析家にとつての一つの警告の意味しか持つてゐない。分析の間にその分析されてをる人の故意に基くものとはすることのできない種々の出來事が起る事は、否定されない。患者の父が死ぬこともあらうが、それはその患者が父を殺したからではないし、戰爭が突發して分析の仕事を中止せしめることもあり得るだらう。併し上掲の一文をかう明らさまに誇張するについては、その背後に新しいそして立派な意味が匿れてゐるのである。かの妨害的な出來事が假令現實的であるにしても、それでも併しどれだけ妨害的結果がその患者に許容されるかは、ただその患者自身にのみ依ることは屢々である、そしてかの抵抗はかかる機會の自發的なそして過度の利用といふ點に、見誤ることができないほど現れる。）

夢の忘却も、心的檢閱の力をその說明のために參考としない限りは、どこまでも究め難いものに留まつてをる。一夜の間にうんと夢を見たのだが、それのただ僅かしか覺えてゐない、といふ感じは、或る數々の場合に於いては或る別の意味を、例へば、夢の仕事はその夜を通して働いてゐるのが感ぜられた、そしてただその覺えてゐる短い夢だけを殘したのである、といつた意味を

持つかもしれない。併しその他の場合に於いては、夢は覺醒後になつて益々忘れられるのだ、といふ事實を疑ふことはできない。夢を心に留めようと神經過敏な骨折りをするにも拘らず、夢を忘れることは屢々である。併し私の考へるところでは、この忘却の範圍が普通に誇大視されると同じに、夢に存する脫漏の爲に夢についての知識の消失を誇大視することもある。夢內容のうちで忘却のために失はれてしまつたもの總てを、吾々は分析によつて再び取りかへすことも、屢々できる。少くともかなり多くの場合に吾々は、孤立して殘つてをる一破片からして、勿論その夢をではないが――夢そのものなどは重要ではない、却つて――夢思想總てを見つけ出すことができる。この分析の際には注意力と自己克服とがかなり必要である。それが總てだ、併しそれがまた、夢の忘却には或る敵意ある目論見が缺けてゐないのである事を示してをる。（夢內容が或る孤立的な一要素に萎縮すると同時に夢に存する疑ひと不確定の意味の實例として、私は私の「精神分析入門講義」の中から次の夢を取つてみるが、これの分析は短い猶豫を置いたあとでとにかく成功したものであつた。「或る懷疑的な婦人患者が一寸長い夢を見た。その夢には、或る人達が私の「洒落」に關する著書について彼女に話をし、そしてそれを大變に賞める、といふ事柄があつた。その後或る「運河」について何事かが述べ

られたが、恐らく運河がその中に出てくる別の書物だつたか、それとも運河と關係ある其他の何事かであつたか……彼女にはそれがわからない……それは全く不明瞭である。」さて諸君はきつと、「運河」なる要素そのものはいかにも不定的なものであるから、それは判斷から引き離されるだらうと、考へる方に傾くであらう。諸君がこの面倒を推測したのは尤もである。併しそれは不明瞭であるが故に、その故に面倒なのではなくて、それは或る別な理由からして不明瞭なのであり、その理由がまた判斷をも面倒ならしめるのである。夢をみた婦人にはその運河について何も思ひつかない、私は勿論何も言ふことはできない。暫くした後、實は翌日になつて、彼女は、或ること、恐らくはその運河に關係するかもしれない或ることが思ひついた、と語つた。それは即ち、人が話してるのを彼女が聞いた一つの洒落である。ドーヴアーとカレーの間の船上で或る有名な文士が或る英吉利人と談笑してゐた。英吉利人が何等かの聯絡から次の文を引用した。Sublime au ridicule il n'y a qu'un pas.（壯嚴から滑稽へはただの一歩にすぎない）。すると、その文士は、Oui, le pas de Calais（全くカレー海峽だよ）と答へたが、これを以て彼は、佛蘭西は雄大だが英吉利は可笑しな國だと思ふと、言はうとしたのだつた。カレー海峽はところが一つの運河である、即ちカナル・ラ・マンシュといふ海峽運河である。この思ひ付きがこの夢と何等かの關係があると、私は考へるのが？　確かに、私は考へるのに、この思ひ付きは實際その謎のやうな夢要素の解決を與へてくれる。それとも諸君は、若しこの洒落が夢の以前に

既に運河といふ要素の無意識のものとして存在してゐたのだといふ事を疑はうとするならば、この洒落が後に補充的に見つけられたものだと認定することができるだらうか？　この思ひ付きこそは、この患者に於いて無理な嘆賞の背後に匿れてをる懷疑を證據立てるものであり、そして抵抗は次の兩つの事に對して確かに共通的な原因となつてをる。即ち、この思ひ付きがかやうに躊躇的に出て來た事、竝びに、それに相應する夢要素がいかにも不決定なものとなり終つてゐた事に對して。諸君よ、ここに、夢要素のその無意識的なものに對する關係があることを注意して下さい。諸要素はこの無意識的なものの一小部分、それの一つの暗示のやうなものである。夢要素をこれから孤立さしてしまつたら、全く理解できないものとなつてしまう。

夢の忘却の故意的な（忘却の際の目論見一般については、私の「健忘症の心理的機構」に關する小論文を參照。これは「日常生活の異常心理」の第一章となつてをる）、そして抵抗作用の役に立つ性質についての確定的一證據は、分析の際に、その忘却の或る前提を考量することによつて得られる。夢判斷の仕事をしてゐる最中に突然、今まで忘れられたと見做されてゐた夢の脫落部分が浮び上つて來るのは、少しも珍しいことではない。さて忘却の中から取りかへされたこの部分は必ず一番重要な部分である。この部分はその夢の解決に至る一番近い道の上にあるものであつて、そして

それがために一番多く抵抗作用の被害を受けた。私がこの論著の組織の中へ散在せしめてをる夢實例の中に、一度、さういふ夢內容の一部を追補的に挿入せねばならないものがあつた。それは二人の無愛想な同乘者に對する復讐をやつた旅行の夢であるが、その內容の一部分は粗野猥雜なものであつたから私はそれを殆ど判斷を加へずに捨てて置いた。その省略された部分はかういふのである。「私はシルレルの或る本に對して言つた、(英語で) it is from ………併し間違に自分で氣がついて私は訂正した、it is by………。それを聞いてその男は妹に向つて注意した。この方の言つたのは正しいんだよ、と。」(外國語の使用のかかる訂正は夢の中で珍しくないが、併しその訂正が他人に押しつけられる方が、もつと屢々である。モーリは英語を學んでゐた頃に一度、彼が或る人を昨日訪問したことを次の文句でその人に知らせた夢を見た。I called for you yesterday, 相手の人は正しく言葉を返した、I called from you yesterday と。)

多くの著述家にはあのやうに不思議に思はれてをる夢の中の自己訂正は、吾々の問題とするには價しないものである。私は寧ろ夢の中の言葉の間違に對し、私の記憶から一範例を提示しよう。私は十九歲の時初めて英吉利へ行つた、そしてアイルランド海の濱邊に一日の間居たことが

ある。私は潮流によつて打ち寄せられた海棲動物を捕へるのに夢中になつてゐて、丁度一匹のひいとでをいぢくり廻してゐた時（あの夢は Hollthurn-Holothurien で始まる）、一人のチャーミングな少女が私のところへ來て、私に訊いた、それはひとでですの？　生きてますか？　私は答へた、え、生きてます（Is it a starfish? Is it alive? —yes, he is alive.）。併しその後で不正確に氣がついて耻ぢ、その返答を正しく繰り返へした。この時に犯した言葉の誤りの代りに、今やかの夢はもう一つの別の誤りを入れたが、この誤りには獨逸人が同じく陷り易いものである。「その本はシルレルのである」（Das Buch ist von Schiller）を from……で譯してはいけない、by……を以て譯さねばならない。from は獨逸語の形容詞 fromm（敬虔なる）と同音なので或る大規模な壓縮作用を可能ならしめ得るものだから、それで夢の仕事がこれを代用するにいたつたのは、夢の仕事の目論見や、手段を選ぶのに夢の仕事は無遠慮である事やについて知つてをる總てから考へてみると、それはもはや吾々を怪しましむるものではない。併し海濱の無邪氣な追憶がこの夢に關聯して何を意味しようとするのであるか？　その追憶はできるだけ罪のない一例を以て、私が性の區別の言葉を正しくない場所に使用する、即ち彼（he）と言ふ性的意味のものを、

それが屬してゐないところに持つて來てゐる事を説明するのである。これは確かに夢の解決の鍵の中の一つである。この場合にかの「物質と運動」（Matter and Motion）といふ本の題目の由來を聞いたことのある人は（モリエールの「空想の病人」の中に「物質は賞むべきであるか？」といふ句がある。Molierè, Malade Imaginaire : La matière est-elle laudable?—a motion of the bowels)、その人はここに缺けてるものを容易に補ひ得るであらう。

更に私は、夢の忘却は大部分抵抗の業績である事を、顯然たる證據によつて證明することができる。或る患者が語つた。自分は夢をみた、併しその夢を跡方なく忘れてしまつた、だから後になれば夢は生じなかつたのと同じことだ、と。私達は分析の仕事を續けた、私は或る抵抗に衝き當つた、患者に或る事を明瞭にしてやつた、勵ましたり迫つたりして彼が何等かの不愉快な思想と妥協を遂げるのに力をかしてやつた。そしてこれが成功するや否や、彼は叫んだ、今度は自分が何を夢みたのだつたかも、判つてきました、と。その日の精神分析の仕事の時に彼を妨害してゐたのと同一の抵抗が、彼をしてその夢をも忘れしめたのであつた。この抵抗を征服してやることによつて私はその夢の記憶を取りかへさせてやつたのである。

これと同じく、患者は分析の仕事の或る箇所へ達すると、三日四日乃至もつと以前に生じたのだが今まで忘却の中に休息してゐた一つの夢を想起することができる。（エ・ヨーネスがこれと類似の屢々起る場合、即ち、或る夢の分析の間に同じ夜の他の夢であつて、今まで忘れられてゐた、のみならず推測さへされてなかつたのが、思ひ出されることがあるのを記述してをる。）――（夢の忘却は、著述家達が考へる如く覺醒狀態と睡眠狀態との間の無關係に左右されるよりは、遙かにより多く抵抗に左右されるものである、といふ事に對する猶ほもう一つの證據を、精神分析上の經驗が吾々に與へてくれた。私やその外の精神分析者と、それからかかる診療を受けつつある患者とに、次のやうなことが起るのは、稀でない、即ち、吾々は、一つの夢によつて眠りから目覺まされて、（と、言ひたい、實はまだ覺醒してゐないのだが）、その直後吾々の思考活動を十分に所有しながらその夢の判斷を始めるのである。かういふ場合に私は屢々、その夢の十分な理解が得られるまでは止めなかつた、しかもその覺醒後には、自分が夢を見たことも、又、自分がその夢を判斷したことも知つてなつたに拘らず、その夢內容も、その判斷の仕事をも、完全に忘れてしまつた、といふことが起り得たのであつた。その夢を記憶のために保持することが精神的活動にとつて成功した時には、その夢は既にかの判斷の仕事の結果をば、他の部分と一緒に忘却の中へ拉し去つてしまつてをることは、

更にずつと屢々であつた。この判斷の仕事と覺醒思考との間には併し、著述家達が專らそれによつてのみ夢の忘却を説明せんと欲するやうな、あの精神的力なるものは存在してゐない。——モルトン・プリンスは私の夢忘却の説明に反對し、あれは分裂した精神狀態に對する健忘性の特殊な一場合にすぎない、この特殊な健忘性に對する私の説明を他の型式の健忘性の上へ移すことは不可能なのであるから、この説明は今の夢忘却を説明する目的にとつても亦無價値となる、云々と言つてをるが、彼の論文を讀んだ人は、こんなことを言ふ彼がかかる分裂した狀態を記述する時に嘗つて一度も、これ等の現象に對する動因上の解説を見出さうと試みたことがないのを思ひ起すであらう。若し彼にしてこれを試みたのであつたならば、抑壓作用（乃至は、この作用によつて作られた抵抗）が、この分裂の原因であり、その心的内容に對する健忘の原因であることを、發見せざるを得なかつたであらう。）

夢は他の精神的行爲と同じく忘却せられないものであること、記憶の中に附着してをる點から言つても夢は他の精神的業績と全然同等に置かるべきものであることを、この著述の原稿を纏める際に得た經驗が、私に示してをる。私は手帳の中に自分の夢を澤山書き留めておいたが、その當時にそれ等を何等かの理由からして、ただ甚だ、不完全に判斷しておいたか、又は大體判斷にかけ

ることができないでゐたのであつた。その中の二三に對して一二年後にそれを判斷しようと試みてみた、それは私の主張の說明のため材料を作らうとする目論見からだつた。この試みは例外無しに成功した。のみならず、私はかう主張したい、それ等の夢が新しい體驗であつた當時よりも、ずつと久しい後に於いての方が、判斷は一層容易に行はれた。そしてこの事實に對しては私は、その當時に私を妨害してをつた多くの抵抗をばその後私は私の內心に於いて飛び越してしまつてをるのだ、といふ事を以て可能的な說明なりとしたい。かやうな追補的な判斷の時に私は、夢思想に關係するその當時の體驗をば今日の大抵はずつと一層豐富な體驗と比較し、そしてその今日のものの中にその當時のものをその儘變更されずに見出したのである。これには私も驚異した、併し直ぐ次のことを熟考してみると、その驚きも吹き拂はれてしまつた。卽ち、私は私の患者に對して彼等が事の序でに私に語るずつと昔の夢をば、恰かもそれが昨夜の夢であるかのやうに判斷せしめる練習をして、いつも同じ處置の下に同じ成功を收めてゐるのである。恐怖の夢を論ずる際にかかる後ればせの夢判斷の例を二つ報告するであらう。私がこの試みを初めて行つた時には、私は、夢はこの點に於いても丁度神經病的徵候と同じやうな關係のものにすぎないだらう、

といふ正當な期待によつて導かれたのだつた。といふのは、或る神經病者、例へばヒステリー症などを精神分析によつて診療する場合に、私はその患者の病苦の初期のとうの昔に征服されてしまつてる徵候に對して、今日猶ほ存してる徵候に對すると同一の解釋を作らねばならない、そして今日焦眉の仕事よりもかの前の方の仕事を解決するのがずつと一層容易であるのを見出すのである。既に一八九五年に發行した「ヒステリーの研究」の中に私は、四十歲を越えた婦人がその十五歲の時起つたヒステリー症的發作の解釋を報告することができた。（初期小兒時代に生じ、そして數十年を通じて記憶の中に屢々十分なる感覺的新鮮さを以て保持されてをる夢が、その夢を見た本人の經驗と神經病の理解にとつて、大きな意義を有するに至るのは、殆ど常に然りである。それ等の夢の分析は醫師を誤謬や不確定に對して護つてくれる。若しこれがなかつたなら、醫師は誤謬と不確定の爲に理論的にも迷路に入つたかもしれない。）

前後の順序は正確でないが、以下に猶ほ夢の判斷について注意せねばならない若干のことを提示しよう。恐らくこれは、自己の夢によつて判斷の仕事を試みて私の主張を檢討しようとする讀者に、方針を與へるものであらう。

自分の夢の判斷が骨折りもせずに棚からぼた餅のやうに落ちてくる、などと期待する事は許されない。內部發生的現象や其他の、普通に注意から脫落した感覺などを知覺するのですら、これ等の知覺群に對しては何等の心的動機が抵抗してゐないのに拘らず、練習の必要がある。それに比べると、かの「欲せられざる表象」を摑むのは、著しくより困難である。これを摑まんと望む人は、この論文の中に提出された要求を心に充たしてゐねばならない、そしてこの論文の中に與へられた規則を遵奉しながらその判斷の仕事の間は、凡ゆる批評、凡ゆる先入見、凡ゆる感情的な又は智的な黨派心を抑制すべく努めるであらう。その人はかのクロード・ベルナアルが心理學研究所に於いて實驗者に與へた規定を念頭に刻んでおくであらう、それは、travailler comme une bête（獸のやうに――無感情に――働く）といふのである、即ち、そのやうに辛棒強く、併しまた出來た結果についてはそのやうに無頓着に、といふのである。これ等の忠告を遵奉する人は、その人はこの課題を勿論もはや困難だとは思はないであらう。或る夢の判斷は必ずしも一氣に完行されるものではない。いろいろな聯想の鎖を辿つてる時に、自分の能率はもはや盡きてしまつたと感ずることも稀でない、その夢はその日の間にはもはや何の手がかりをも與へない、さ

ういふ時にはそこで中止し、そして次の日に再び仕事にかかるがよい。さうすると、夢内容の或る別な部分が注意を惹く、そして夢思想の或る新しい層への通路が見出される。吾々はこれを「分離的」夢判斷と名づけることができる。

一番困難なのは、夢判斷の初心者をして、假令彼が意味に富んだ、聯絡の通じたそして夢内容の凡ゆる要素について解説を與へるやうな、さういふ夢の完全なる一判斷を掌中にしたとしても、それで彼の課題が十分には果されたのではない、といふ事實を承認せしめることである。その他に、その夢のもつと別な判斷、彼の注意を逸したもう一つ上層の判斷が可能であり得る。吾々の思考には無意識的な、そして表現を求めつつある思想經過が澤山にあることに思ひ及び、そして曖昧な表現法によつて、丁度かの童話の中の仕立屋の職人のやうに、常に謂はば一打ちを以て七匹の蠅を打つところの、夢の仕事の巧智を信ずるのは、實際容易なことではない。讀者はきつと、著者たる私が餘計な機智を振り撒くといつて非難したい氣がするであらう。だが、自から經驗を積んでしまつた人ならば、考へを直さねばならないと自覺するであらう。（併し他方に於いて私は、ジルベレルによつて最初に提示せられた主張、即ち、凡ゆる夢は——凡ゆるとまでは言へないにしても、多

數の、そして或る群の夢は——互ひに確固たる關係に立つてをる二つの異れる判斷を要求するものである、といふ主張に贊成することはできない。この二つの判斷の一つをジルベレルは精神分析的のと呼んでゐるが、これは夢に或る任意的な、大抵は幼兒時代的性的意味を與へる。他方の、一層有意味なのを彼は神祕的（アナゴーギッシュ）のと名づけたが、これは夢の仕事が材料として襲用してをる一層眞面目らしい、時としては深奥な思想を出してみせる。ジルベレルは一系列の夢をその兩つの方向に從つて分析して、そしてそれの報告によつてこの主張を證明すべきであらうのに、それをしてゐない。私は彼の主張に反對し、かかる事實は存在してゐないことを抗議せねばならない。蓋し大多數の夢は何等の一層上の判斷を要求せず、殊に神祕的な判斷などを受ける力はないからである。夢形成の基礎をなしてをる事情を蔽ひかくしそして興味をその衝動根元から逸らさしめたがるところの或る成心の協力は、ジルベレルの理論にあつては、輓近の他の理論的努力に於いてと同じやうに、認められる。いくつかの場合にたいしては、私はジルベレルの提示を實地に確めることができた。その時に分析は私に、夢の仕事は覺醒生活に發してゐる非常に抽象的でそして直接の表示に至る力のない思想の多くをば一つの夢に變形する任務を負はされてをつたのである事を、示してくれた。夢の仕事はその場合、その抽象的な思想に對し比較的散漫な、屢々比喩的と名づけられるべき關係に立つてをり、そして表出するのに比較的困難を與へることの少い或る他の思想材料をわがものとして自由に使ふことによつて、

この任務を解かうとつとめた。かくして成立した夢の抽象的な判斷はその夢をみた本人によつて直接に與へられる。併しその挿入された材料の正しい判斷の方は、既に知られたかの技術的手段を以て探されねばならない。)

どの夢でも皆判斷せられ得るや否やの問は、否を以て答へられる。吾々は判斷の仕事に際してその夢を歪ましめてをる心的力が吾々に反抗してをることを忘れてはならない。吾々が吾々の智的興味により、吾々の自己克服の能力により、及び夢判斷に於ける吾々の練習によつて、その内的抵抗を支配し得るや否やは、力の比例狀態の問題となる。若干の進歩をなす、といふことは常に可能である。少くとも、夢は一つの意味深い形成であるとの信念を得るところまでは、進むことができる。そしてまた大抵は、この意味の或る豫感を得るところまでは、進み得る。一つの夢をみてそれに對して與へた判斷が、その夢に續いてみられたもう一つの夢によつて確められ、且つ判斷の續行を可能ならしめられることは、眞に屢々ある。數週または數箇月を通じて連續する一系列の夢は、屢々、共通な地盤の上に立ち、そしてかかる場合には、互ひに聯絡を保つて判斷を加へられる。互ひに續き合つてる夢について吾々は屢々、その一方が、他方にあつてはただそ

の一隅に於いて暗示されてゐるにすぎないものを、取つて以て己れの中心點となしてをる、乃至その逆となつてをつて、その結果二つは互ひに補ひ合つて判斷されるのを、見受けることがある。同一夜の種々な夢は判斷の仕事にとつては一體の如くに取扱はれるのが、全く一般的であることを、私は既にいくつかの實例によつて證明しておいた。

非常によく判斷された夢に於いて吾々は或る一箇所を曖昧な儘に捨てて置かねばならないことが、時々ある。それは、その箇所に於いて夢思想の或る縺れが始まつてゐる、その縺れはどうしても解けない、が併し夢内容に對してはそれ以上何の關係をもなしてゐないものであることを、判斷の際に氣づくからである。これは夢の要石だ。判斷の際に吾々が行き當る夢思想は、極く普通に、総結の無いままでゐるより外はない、そしてそれは凡ゆる方向へ向つて吾々の思考の世界の網のやうな迷路へ走りこんでゐるに相違ない。かかる織物の比較的緻密な箇所から、丁度菌が菌絲から頭を出すやうに、夢の願望が頭を出してをる。

吾々は夢忘却の事實へ立ち歸らう。この事實から一つの重大な結論を引き出すのを吾々は怠つてゐた。覺醒生活が若し、夜中に形成された夢をば覺醒直後に全體としてか、又は日中の間に部

分部分的にか忘却する、見誤るべからざる目論見を示すものだとすれば、そして吾々はこの忘却作用に主として參與する者として、既に夜中にもその夢に對して仕事をしてしまつてをる、その夢に對する精神的抵抗を認めるとすれば、そこに生ずる問題は、抑もこの抵抗に逆らうて夢形成を可能ならしめたものこそは、何物であるか、である。覺醒生活が夢をば、恰かもその夢は全く生じなかつたものであるかのやうに、無視する極端な場合をとりあげてみよう。ここで若し吾々がかの心的力の運轉を考察の中へ入れるならば、吾々は下のやうに言ひ切らざるを得ない、萬一かの抵抗が日中と同じく夜間に支配してゐたのであつたなら、その夢は大體成立するには至らなかつたであらう。吾々の結論は、この抵抗は夜間にはその力の一部を失つてしまつたのだ、といふのである。吾々はこの抵抗が中止されはしなかつたことを知つてをる。何故ならば、夢形成に對してこの力の參加するのをかの夢の歪みの作用の中に證明することができたからである。然るにこの抵抗が後には減退した、抵抗の減少によつて夢形成はあり得たのだ、といふ可能性をどうしても認めざるを得ない、そしてそれが覺醒と共にその全力に立ち歸へり、弱かつた間は許すより外なかつたところのものを忽ちに排斥するのである事を、吾々は容易に理解するのである。記

載的心理學は、夢形成の主要條件は精神の睡眠狀態である、と吾々に教へる。吾々はそれに加へて次のやうに說明することができるであらう、睡眠狀態は中樞精神の檢閱を低下せしめて以て夢形成を可能ならしめる、と。

吾々は確かに、この結論をば夢忘却の事實から導き出す唯一的に可能なるものと見做し、そして睡眠と覺醒のエネルギー比例に關する猶ほもつと先の推定をこの結論から展開させたい氣になる。併し當分のところ吾々はここで中止して置かうと思ふ。若し吾々にして夢の心理學へ更にもう少し深入りしてしまふならば、吾々は、夢形成の成就は猶ほもつと別なぐあひにも考へ得られることを知るであらう。夢思想が意識に上るのに對する抵抗は、それ自體が低下されることなどがなくとも、恐らくは回避せられ得るかも知れない。夢形成にとつて好都合なる二つの動機、即ち抵抗の低下と回避とは、睡眠狀態によつて同時的に動かされ得ることは、信じてよい。吾々はここで一旦この論述を打ち切り、少し後に再び續けるであらう。

夢判斷の際の吾々の處置に反對する猶ほ他の一群の抗議がある。吾々はこれからそれを考へてみねばならない。吾々の判斷の方法は、反省思考を支配してをる他の目的表象を總て捨て去り、吾

吾の注意を或る箇的な夢要素に向け、そして然る後その要素に關する欲せられざる思想の中で吾吾に想起されるものを記錄する。然る後、夢內容の次の或る一つの要素を摑み上げ、それに對して同一の仕事を繰り返へし、そしてそれ等の思想が動いてる方向には頓着なく、その思想に蹤いて行く、それは謂はば順序もなくごたごたに進んで行くのである。それにも拘らず吾々は、結局は吾吾の方では全然何物をも加へることなくして、その夢がそれから發生した夢思想に行き當る、といふ確信的な期待を抱いてをる。これに對して、ところが、批評は例へば次のやうに口を挿むかもしれない。夢の或る箇的な要素からして何處かへ到達する、などといふのは、何等變つたことではないぢやないか、どんな表象にでも何かの事が聯想的に結びつけられるものだ、ただ著しいのは、彼等分析者のかやうな目標のない放漫な考への經過に於いて丁度夢思想に行き當たる筈だ、といふことである。それは多分一種の自己僞瞞ではあるまいか。彼等はかの一つの要素から出發して聯想の鎖を辿つて行くと、終に何等かの理由のためにその鎖がぶつりと切れるのに氣がつく。然る後次の要素を取り上げても、聯想といふものの元來の無制限が今や或る限定を蒙るのは、自然のことであるとする。そしてその時まだ前の聯想が記憶の中にある、それ故に夢の第二表象・

の分析によると、第一の聯想に屬する思ひ付きとも何等かの共通點を有するところの箇々の思ひ付きに行き當ることは、一層容易であるかもしれない。さうすると、夢の二つの要素の間の結合點となつてをる或る思想が見付けられたのだ、と彼等は想像するのである。更に彼等分析者は思想結合の凡ゆる自由を敢てしながら、實は常態的な思考にあつては力を發揮するところの、表象から他の表象への過渡だけは除外するのであるから、彼等にとつては結局、或る數の「中間思想」からして、次のやうな或るものをでつち上げるのは困難ではないであらう、それを彼等は夢思想と名づけるけれども、かかるものは彼等以外には知られてゐないのであるから、それを夢の心的代表者であるなどと稱しても、全然何の保證もないのである。それ等總ては獨斷であり、加之、奇拔らしくも偶然を利用したものにすぎない。そしてかかる無益な骨折りを敢てする人は皆、さういふ方法を以て或る任意な夢に自分の勝手な判斷をこぢつけて作り出す者である。

若しもかかる非難が實際に吾々の前に投げ出されることがあるならば、その時には吾々はそれを防ぐために、吾々の夢判斷の印象を引例し、箇々の表象を辿つてみる間に生ずるところの他の要素との驚くべき關聯や、吾々の夢判斷の一つの如くそのやうに遺漏なく夢を清算し說明するも

のが、前以て作られてをる心的關係の跡を辿るより以外の方法で得られることなどは、蓋しあり得ないだらうといふ事やを、引き合ひに出して辯ずることができる。その上また吾々には、吾々の辯明のために、夢判斷に於ける處置はヒステリー症の徴候の解決に於ける處置と同一である事實を持ち出すこともできるであらう。後者にあつては、その處置の正しさはそれ等の徴候の出現及び消滅によつて證明される、即ち、本文の解釋が挿入された圖解に一つの支柱點を見出すのである。更に吾々は、どうしてかの分析者達は一つの勝手氣儘に且つ目標もなく編まれて行く聯想の鎖を辿ることによつて一つの以前から存する目標に到達することなどができるのか、といふ非難の問題を回避すべき理由は一つも持たない。なぜならば吾々はこの問題をなるほど解決することはできないが、併し全く除外することはできるのだからである。

吾々は夢判斷の仕事の際のやうに吾々の反省を捨て、そして欲せられない表象を浮び上がらしめるやうなことをするのは、目標のない表象經過に頼る者である、との非難は、かるが故に、歴然として不當である。吾々が斷念することができるのは常にただ吾々に既知の目的表象のみである事、及びこの目的表象の中止と共に直ちに未知の――不正確に言へば、無意識の――目的表象

が勢力を得て、そして今や欲せられざる表象の經過を決定してをる事は、指示され得ることである。目的表象なき思考といふやうなものは大體、吾々が自身で吾々の精神生活に與へる影響によつては作られるものでない。又、さういふ思考が精神混亂の如何なる狀態に於いて作られるものかは私に判つてゐない。（私はやつと後になつてから、エドゥアルト・フォン・ハルトマンがこの心理學上有意義な點について同見解を抱いてをる事に、注目させられた。「藝術的制作に於ける無意識の役目を檢討する序でに、（「無意識の哲學」Philosophie des Unbewussten. Bd. I, Abschn. B, Kap. V）、ハルトマンは無意識的目的表象に導かれた觀念聯想の法則を明瞭な言葉を以て言明してをる、併しその時彼はこの法則の效力範圍を意識することはなかつた。であるから彼の仕事は、感覺的表象の凡ゆる結合はただ單に偶然に委ねられてをるのでなく、或る一定の目標へと達すべきものである場合には、無意識なものの助力を必要とする事、或る一定の思想結合に對する意識的興味は、無數の可能的な表象の中から目的に適應した表象を見つけ出さうとして無意識なものを動かす一つの刺戟である事、それを證明するにあつた。『興味の目的に適應して選擇するのは、無意識である。そしてこの事は、抽象的思考並びに感覺的表象又は藝術的結合に際し及び機智的な思ひ付きに際しての觀念聯想にとつて妥當である。』それ故に、純粹なる聯想心理

學の意味を以て觀念聯想をば誘發的な及び誘發された表象に局限するのは、維持され難い主張である。かやうな局限は、『人間が啻に凡ゆる意識的な目的からばかりでなく、更に凡ゆる無意識的な興味、凡ゆる氣分の支配又は協力からも脫離してをるやうな、さういふ狀態が人間生活に現れる場合に於いてのみ、事實的に是認されるであらう。併しながらかくの如きは殆ど嘗つて現れることなき狀態である。何故ならば、吾々が吾々の思想の經過を外觀的には全く偶然に委ねるか、或ひは吾々が空想の自然的な夢に身を任せるかする場合にあつても、常に、或る時間に於いては他の時間に於けるとは異つた主要興味、異つた標準的な感情と氣分とが、吾々の心情に於いて支配し、そしてこれ等のものは必ずや概念聯想に對して或る影響を及ぼすであらうからである。』(Phil. d. Unbew., I, 246) 半無意識的な夢の中では常に、その瞬間の(無意識的な)主要興味に適應する、さういふ表象だけが現れる。さて今や、自由な思想經過に對する感情と氣分の影響の力說は、ハントマンの心理學の立場からも亦、精神分析の方法的處置をば徹頭徹尾是認されたものと思はしめるのである。」(N. E. Pohorilles in Internat. Zeitschr. f. ärztl. Ps.-A. I. 1913, p. 605 f.) ――吾々が考へ出さうとしても考へ出せない一つの名前が時々卒然に何の媒介もなし

に吾々に思ひつくことがある、といふ事實からデュ・プレルは推論して曰く、無意識的な、そしてそれにも拘らず目標に向つた或る思考が存在してゐる、そしてそれの結果はやがて意識の中へ入り込むのである、と。(Du Prel, Philos. d. Mystik, p.107)——精神病學者はこの點に於いては餘りにも早く心理組織の堅固さの認識を斷念してをる。ヒステリー症及びパラノイア症の範圍内では、夢の形成又はその解決に際してと同樣に、或る不規則な、そして目的表象を缺いた思想經過は現れることがない、といふ事實を私は知つてゐる。かかる經過は大體、内部發生的な心理的情念の場合には恐らく現れることがないのである。精神錯亂者の譫言ですら、リューレーの巧智なる推測に從へば、意味を含んでをり、そしてただ脫落があるために吾々には理解できなくなるにすぎない。それを觀察する機會が私に與へられた時、私も同一の確信を得たことがある。譫言は次のやうな一種の檢閱のなすところである、その檢閱は自己の勢力を匿す骨折りをもはやなすことなく、又、既に意に反するものではなくなつてをる加工に對して協力する事をもせず、自己の意に適せざるものを遠慮なく抹殺するのであつて、その結果殘存したものは聯絡のないものとなる。この檢閱のやり方は、外國の新聞を唯々、眞黑な鉛筆の線を引いたものだけにして自國の

讀者の手に渡すところのロシア國境の新聞檢閲のそれと全く似てをる。

聯想の任意な連鎖のまにまに表象が放漫な動き方をするのは、恐らく破壞された器官的な腦作用の場合には現れるものであらう。精神神經病に於いてかかる表象の動き方だと思はれてをるものは、匿れた儘になつてる目的表象のために前方へ押しだされる或る思想系列に對する檢閲の影響によつて必ず說明される。これについては、ユンクが早發性精神錯亂の分析によつて提示したことの主張の見事な實證を參考せよ。(C. G. Jung, Zur Psychologie der Dementia praecox. 1907)

若し浮動する表象(又は映像)が所謂表面的な聯想の關聯、卽ち類音や二樣の意味ある語や、內的な意味の關係なき時間的暗合や、吾々が洒落や言葉の戲れに於いて敢て使用する凡ゆる聯想によつて、相互に結びつけられてるやうに見えることがあると、人はそれを、目的表象から脫離した聯想の疑ひなき徵しであると見做して來た。この特徵は、吾々を夢內容の諸要素からその傍系へ導き、そしてそれから本來の夢思想へ導くところの思想聯絡に該當する。吾々は多くの夢分析に際してそれの數例を見出したが、それは吾々に怪訝の念を喚起せざるを得ないものであつた。其處に見出されるいかなる結合も、又、いかなる洒落も、一つの思想から別の思想への橋を形づく

り得ない程放漫にすぎたるものであることもなく、又、排斥すべきであることもなかつた。併しかやうな寛大を正しく理解するのは、さしたる困難事ではない。或る一つの精神的要素が他の一つの同要素と或る不快なそして表面的な聯想によつて結合されてをる場合には、いつでも、兩者の間にはその上に或る一つの正確で一層深く立入つてをる結合が存在し、そしてそれは檢閲の抵抗に抑へられてをるのである。

表面的な聯想が優勢を占める本當の根據は、檢閲の壓迫であつて、目的表象の排棄ではない。檢閲がそれこそ常態的である結合の道を通らせなくする時に、その深い道をば、表出の上では、表面的な聯想が代理するのである。それは丁度、或る一般的な通行妨害、例へば川の氾濫が、山中に於いて大きな廣い街道を通行できなくするのと、同じである。その時には通行は、嘗つてただ獵師しか歩いたことがない、そして嶮しい小徑を以て維持される。

ここで二つの場合が區別される、その二つは本質に於いては一つであるのだが。第一の場合に檢閲はただ二つの思想の聯絡にだけ反對する、二つの思想は互ひに離れ合つてその抗議を免れる。かかる時にはその二つの思想は次々に意識に上つて來る。その間の聯絡は蔽匿された儘である。

併しその代り、その間の或る表面的な結合が吾々の眼に入る。それは吾々が嘗つて考へてみたこともないやうなものであり、そして普通に、表象複合體の一端であつて其處からかの抑壓された併し本質的な結合が發してをるのとは異つた別の一端に開始されるやうな結合である。然るに第二の場合では、二つの思想それ自體がその內容の故を以て檢閲を蒙る。かかる時には二つの思想は正しい形を以てでなく、變容された代理的な形を以て現れる、そしてその二つの代理思想は、それ等が代理してをる本來の思想の間の本質的な結合をば、或る表面的な聯想によつて再現するやうなものとして、選び出されてをる。この二つの場合に於いて檢閲の壓迫の下に、或る常態的な眞面目な聯想から、或る表面的なそして不合理に見える聯想への轉移作用が起つてゐるのである。

吾々はかかる轉移については知るところがある故に、吾々は夢判斷に際して全然躊躇することなくかの表面的聯想にも信頼を置くのである。（これと同一の考慮は勿論次のやうな場合、即ち例へば上卷第一〇四頁に掲げたモーリの報告に據る二つの夢に於ける如く、表面的聯想が夢內容の中に露出される場合にも、當てはまる。神經病患者による研究からして私は、如何なる殘存記憶がこのやうな工合に表出さ

れるのかを知つてゐる。大多數の人がその思春期の好奇心時代に於いて性的謎の說明を求める欲求を充たしたのは、百科辭典を調べることである。）

意識的な目的表象の放棄と共に表象經過に對する支配權は蔽匿された目的表象へ移るといふ公理と、表面的聯想はただ抑壓された一層深く立入つてをる聯想に對する一箇の轉移的代理にすぎないといふ公理とを、神經病患者に對する精神分析は極めて有益に利用してをる。のみならず、精神分析はこの二つの公理を自分の技術の根本の柱たる地位にまで高めてをる。私が一人の患者に向つて、凡ゆる反省を止めてそして後に何事であらうが思ひ浮かんでくるものを私に報告せよ、と依賴する時、この患者は診療の目的表象を捨て去ることはできない、といふ前提を私は固持してをる。そして彼が私に報告するところの外見上は極めて無邪氣でそして極めて任意的であるものが後の病態と聯絡する、と推定するのは當然だと私は考へるのである。この二つを明らかにする說明を十分に尊重すると共に詳しく證據立てるのは、それ故、治療的方法としての精神分析技術の記載に屬するのである。ここまで來て吾々はいろいろな學問技術の關聯の一つへ到着した。この關聯のところ

ろまで來れば吾々は夢判斷の主題を離れようと思ふのである。（上掲の公理は發表した當時には甚だ眞實らしからぬものに聞えたが、その後ユンクとその門弟等の「診斷學上の聯想研究」によつて實驗的是認と利用を受けてをる。）

いろいろな抗議の中でただ一つだけは正しい、そして現に存してをる。卽ち、吾々は判斷の仕事の凡ゆる思ひ付きをば夜間の夢の仕事に歸するの必要はない、といふのである。覺醒中の判斷に際しては吾々に、夢要素から夢思想へと溯るところの一つの道を歩く。夢の仕事はその逆の道を取つたのである。そしてその二つの道が逆な方向であるのに、同じやうに歩ける、といふのは全くありさうにもない。寧ろ、吾々は日中にあつては新しい思想結合を作つて、中間思想と夢思想とに相異つた箇所で出會ふやうな道を穿つ、といふ事が證明される。日中の新しい思想材料が如何に判斷の系列の中へ挿入されるか、そして恐らくは、夜間以來に現れてをる抵抗昂進を促して新しいそして一層遠い迂回をなさしめてゐるかもしれないことを、なるほど吾々は悟ることはできる。しかしながら吾々がさういふ工合にして日中に編み出すそれ等傍系的なものの數又は種類などは、それ等が吾々をば、探してをる夢思想への道を導いてさへくれるならば、心理學的には

全く意味のないものである。

第二節　逆　行

さて、吾々はいろいろな抗議を辯駁し、或ひは少くとも吾々は何處まで行つたら防禦の武器を休ませるのかを示してしまつたのであるから、今や吾々は、吾々が久しい前からその準備をなしてをつた心理學的吟味へ入つて行くのを、これ以上延期することはできない。吾々の今までの吟味の主要結果を總括してみよう。夢は十分に重大な精神的行爲である。夢の原動力は常に實現せられんとする一箇の願望である。その願望たることが不明瞭であつたり、多くの奇妙な點、不合理な點を持つたりするのは、夢が形成される際に蒙つた心的檢閲の影響に起因してをる。この檢閲を遁れようとする要求の外に、心的材料の壓縮の要求や、感覺的形象を以て表出せんとする配慮や、それから——假令定まりきつてではないが——出來上がつた夢の外觀を合理的で知的であらしめようとする配慮などが、夢形成の際に、協力してをつた。これ等の命題のどれからでも、心理學的假定や推測への道は更に通じてをる。願望動機とかの四つの條件との相互的關係、並び

に四つの條件同志の間の相互的關係が吟味すべきである。夢は精神生活の關聯の中へ組み入れられるべきである。

この章の冒頭に私は一つの夢を掲げたが、それは、それの解決が未だ得られてゐない、いろいろな謎を想起して貰ふためであつた。火傷をしつつある子供についてのこの夢の判斷は、吾々の考へるが如き意味に於いては完全に與へられたのでなかつたにせよ、何等の困難を生じなかつた。この場合に一體どういふ譯で目を覺す代りに夢を見るにいたつたのであるか、を吾々は問題にして、そしてその子供を生きてをる者と考へたい願望がこの夢をみた父親の一つの動機だと認識したのであつた。猶ほもう一つの願望がここで一つの役割を演じてをる事實を、吾々は後の檢討によつて洞察し得るであらう。先づ今さし當つては、睡眠の思考經過がそれのために一つの夢に變形される源は、願望實現である、として置く。

この願望實現を後退せしめてみると、跡には辛うじて或る一つの性質だけが殘る。この性質は心理的出來事の二つの種類を互ひに區別立たせるものである。夢思想は下のやうな内容であつたらう、死骸が置いてある部屋から光が見える、多分蠟燭が倒れたのかもしれない、そして子供が

燒けてるぞ！　すると、夢はこの反省の結果をそのまま再現するのであるが、併し現在そこにある、そして感覺を以て丁度覺醒時の一體驗のやうに摑める一つの局面に作つて表出する。併しこれは夢みる作用の最も一般的で且つ最も目立つ心理學的性質である。卽ち、或る一つの思想、普通に願望せられた思想が、夢の中では客觀化せられ、場景として表出せられる、或ひは吾々の思惟する如く言へば、體驗せられるのである。

ところで夢の仕事のかかる性格的な特色を如何に說明したらよいか――もつと謙遜的に言つて――如何にして心理的經過の關聯の中へ組み入れたらよいか？

一層詳しく見てみるならば、夢の現出形式には二つの相互に殆ど無關係的な性質が現れてをるのに、氣がつく。その中の一つは、「恐らくは」といふものを脫出した現前的な局面としての表出であり、他は、目に見える形象と說話に思想が置き換へられることである。

その中に現される期待が現在形を以て述べられる、といふことの爲に夢思想が蒙るところの變化は、恐らくこの夢の例にあつてはさほど目立つてゐないやうに思はれるだらう。これはこの夢に於ける願望實現の特別的な、實は第二義的な役割と關聯してをる。もつと別な夢、例へばイル

マの注射の夢のやうな、其處では夢の願望と覺醒思想の睡眠の中への連續とが隔離されてゐない夢を例に取りあげてみよう。この夢では、表出に至る夢思想は願望形である。どうかオットーがイルマの病氣について罪があるのであつてくれれば！　夢はこの願望形を排斥し、そしてそれをば簡單な現在形で代らせてをる、さうとも、オットーがイルマの病氣については罪があるのだ。即ちこれは、この歪みのない夢ですらが夢思想に對して行ふ變更の第一である。吾々は夢のこの第一の特色に長くは引きかかつてゐないことにしよう。意識的な空想、即ち自己の表象內容に對して同じやうな處置をする白日の夢を指示することで、この特色の問題を片づけておかう。ドゥデーの小說の主人公ジュジョースが、娘達は彼が職を持ち事務所に坐つてをると信ぜずにはをられないでをる間に、失業してパリの街路をさ迷ひ步いてゐる時には、彼は自分を保護し自分に何か職を與へる緣ともなるべきやうな出來事を夢みてをる、謂はば現在形を以て。夢はかやうに白日の夢と同一方法で且つ同一權利を以て現在形を使用する。現在形は、願望が實現されたものとして表出される時稱形である。

しかるに白日の夢と異り夢にだけ特色的なるは、第二の性質、卽ち、表象內容は思考されるの

でなく、感覺的な形象へ變形せられる、そしてその形象に吾々は信用を置き、それを體驗するのだと考へる、この一事である。併しこれに對し吾々は直ぐに附け加へたい、凡ゆる夢が皆、感覺形象への表象の變形を示しはしない、と。ただ思考からだけ成立つ夢もある、であるからといつて吾々はこれに對しその夢の本質性をとや角言ふことはないであらう。私の夢、「Autodidasker——N教授についての白日の空想」(上卷第五一一頁參照)は、恰かも私がその內容を日中に考へてをつたのでもあるかの如く、その中へもはや殆ど感覺的要求が混入してはゐなかつた一つの夢である。又、比較的長い夢にはどれにでも次のやうな要素がある、その要素は感覺的への變化を行はなかつた。吾々が覺醒時以來習慣になつてをる如く單にそれを考へるかまたは意識するかするばかりである。更に吾々は直ぐここに、感覺的形象への表象のかかる變形は夢にだけ附隨するのでなく、かの健康體にあつては獨立的に現れ、精神神經論にあつては徵候として現れるところの錯覺や幻覺にも附隨してをる。要するにここに吟味してゐる關係は、いかなる方向に向つても、獨占的のものではない。併し夢のこの性質は、それが現れる場合には、最も注目に價する性質と思はれるのであるから、吾々はこれを夢生活から引き離しては考へることができない、といふ事

は變更できない。だが、この性質の理解にはずつと廣汎なる探求が必要である。

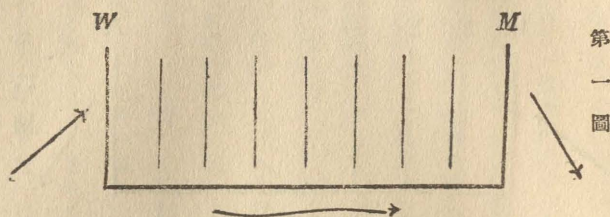
著述家達に見出され得る夢作用の理論に就いての凡ゆる考察の中で、私は一つを吾々の關聯に於いて擧げる價値あるものとして强調しておきたい。かの偉大なるフェヒネルは彼の「精神物理學」(G. Th. Fechner, Psychophysik, II. Teil, P. 520)の中で、夢に向けた若干の檢討の聯絡內に於いて、夢の舞臺は覺醒時表象生活の舞臺とは別箇のものであらう、といふ推測を述べてをる。其他のいかなる假說も吾々をして夢生活の特別なる特色を把握せしめてはくれない。

かくて吾々の利用に委ねられる觀念は、心理的位置のそれである。ここで問題の中心となる精神といふ道具は解剖學の材料としても吾々の知るところである、といふやうな事は全然放棄して、心理的位置を解剖學的になど決定しようとする誘惑からは愼重に免れようと思ふ。吾々は心理學的地盤の上に留まり、そして精神の仕事に役立つこの道具をば、例へば一つの組立てられた顯微鏡、一つの寫眞機械等の如きものと想像せよ・といふ要求に從ふつもりである。しかる時には心理的位置は、一つの斯かる機械の內部にあつて其處で形象の前提の一つが成立する或る場所に、相當する。顯微鏡や望遠鏡にあつては、それは、周知の如く、その道具の何等摑み得る成分が置

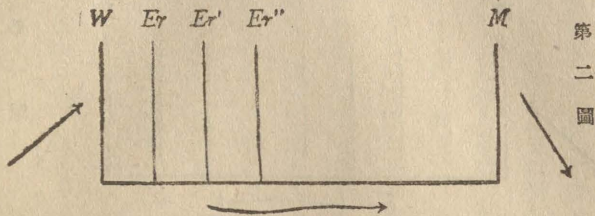
かれてゐない一部分觀念的なる場所である。これ等の道具及びそれに類似の凡ゆる道具が與へる映像の不完全に就いて辯解を試みることは、餘計なことだと私は思ふ。これ等の譬喩を擧げたのはただ、精神的業績を分解しそしてその箇々の業績をその道具の箇々の成分に適歸せしめつつ、以て精神的業績の複雜なるを了解の行くやうにしようとする、一つの試みの助けにせんとするにすぎない。精神といふ道具の組立てを斯かる分解から推測するこの試みは、私の知るところでは、未だ敢てなされてゐない。私にはこの試みに何の害もないと思はれる。若し吾々にしてその際に吾々の冷靜な批判を保留し、骨組みを以て建築だと考へたりすることさへしなければ、吾々は吾の推測を自由に走らしめてもよい、と私は考へるのである。吾々は或る未知のものへの最初の接近のために正にただ補助的表象のみを必要としてをるのであるから、さしあたり最も粗いそして最も把握し得る假定を、凡ゆる其他のものを捨てて、取りあげるであらう。

かくして吾々は精神といふ道具を一つの組立てられた機械だと想像し、それの成分を吾々は關門(インスタンツエン)、又は明瞭さのために。組織(ジステーメ)と呼ばうと思ふ。次に吾々は、これ等の組織は、例へば望遠鏡の種々なるレンズ組織が次々に竝んでをるやうに、恐らく一つの一定せる空間的方向づけを

相互に對して有してをる、といふ期待を抱く。嚴格に言ふならば、吾々は精神的組織の實際に空間的なる配列などの假定を必要とはしない。或る精神的經過に於いて一定の時間の連續を以て昂奮がその組織を通過する、といふ事によつて一つの確固たる順序が作られるのであるならば、吾吾にはそれで澤山である。この順序は他の經過に於いては或る變化を蒙るかもしれない、併しそのやうな可能性を吾々は未解決のままにして置かう。この精神といふ道具の構成成分を吾々はこれから先、言葉を簡單にするために、心的組織と呼ぶことにする。

さて、吾々の注目を惹く第一の事は、心的組織から組み立てられたこの道具が一つの方向を持つ事である。一切の吾々の精神的活動は（內部又は外部の）刺戟から發し、そして神經感應に終る。それ故、吾々はこの道具に對し感覺的一端と運動的一端とを歸屬せしめる。感覺的一端には知覺を受取る組織が見出され、運動的一端にはそれとは別の組織があつて運動力の水門を開くのである。精神的經過は一般に知覺端（W）から運動端（M）へ向つて走る。精神的道具の最も通俗な圖表は卽ち次のやうなものであるかもしれない。（第一圖）

第一圖

これは併し、精神の道具は一つの反射装置のやうな構造であるに相違ない、といふ既に久しい前から吾々の熟知してをる要求に順應したのにすぎない。反射經過はやはり凡ゆる精神的業績にとつても規準である。

ところでその感覺的一端に於いて或る第一次的分化が生ずるものと考へることができる。吾々に近づいてくる知覺は、吾々が「記憶の痕跡」と名付け得るところの一種の痕跡を吾々の精神的道具の中に殘す。この記憶の痕跡と關係する機能を吾々は「記憶力」と名づける。精神的經過をいろいろな組織に結びつけようとする計畫を眞面目に行ふことになると、記憶の痕跡はただそれ等の組織の要素に於ける持續的な變化を本性とすることになる。ところで、若し同一の組織が自己の要素に於ける變化をその儘忠實に保留し、しかも變化を生ずる新しい動因に對して常に新鮮に且つ受納的に迎合しければならないことになる

第二圖

と、既に別の方面から述べておいた如く、それには明らかに困難が伴ふ。吾々の試みを指導する原理に從つて、吾々はこの二つの業績を相異る二つの組織に配合するであらう。吾々は次のことを假定する。精神的道具の一番先の組織は知覺の刺戟を取り上げるが、併しその刺戟の一つをも保留しない、卽ち何等の記憶力を持たない事、及び、この組織の背後に或る第二の組織があつて、それが第一の組織の瞬間的な昂奮を持續的痕跡に置換へる事、を吾々は假定する。さうすると、第二圖が吾々の精神的道具の形であるかもしれない。(Erは記憶)。

組織W(知覺組織)に影響する知覺のうちからそれの內容以外の猶ほ何物かを持續的のものとして吾々が保留する事は、知られてゐる。又、吾々の知覺は記憶力の中に於いて互ひに結び合つてをる、しかもそれ等の知覺が結び合ふのは何よりも先づそれ等が嘗つて同時的に出會はしたのに據るのである事も、證明される。吾々はこれを聯想の事實

と稱する。ところで、若しも組織Wにして一般に何の記憶力をも持つてゐないとすれば、その組織は又、聯想に對する痕跡をも保存する事ができない事は、明らかである。若しも一つの新しい知覺に向つて以前の知覺結合の或る殘物が勢を揮ふことでもあるならば、箇々の知覺組織要素はその機能をば堪へ得られないほど妨害されるであらう、であるから寧ろ吾々は聯想の根柢として記憶組織（Er組織）を假定せねばならない。然る時には聯想の事實は、抵抗減少の結果、及び記憶組織要素の或る一つの進路開拓の結果、昂奮は或る第三記憶要素に向つてよりも寧ろ或る第二の記憶要素の方へ移つて行く、といふ點に存するのである。

一層詳しく立入るならば、斯かる記憶の一つでなく數多を假定する必要がどうしても生ずる。それ等の組織に於いて知覺組織の要素を通じて移植される同一の昂奮が種々樣々の定着を持つに至る。これ等の記憶組織の第一のものは必ずや同時性による聯想の固着を含んでをるのであらうが、それ以外の離れた記憶の中にあつては、同一の記憶材料が會合の方法を異にするに從つて配置されてをるであらうその結果、類似其他の關係はこれ等第二以後の組織によつて表示されるであらう。かやうな一つの組織の心理的意味を言葉で示さうなどとするのは、勿論無用の事である

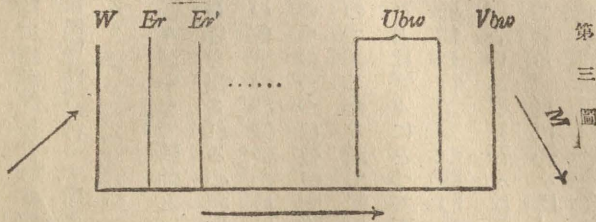
と思はれる。この組織の特性は記憶素材の諸要素に對するその關係の親密に存する、といふのは、一層深刻なる理論に賴らうとするならば、これ等の要素に向ふ指導に對する抵抗の度合に存するのである。

ここに一般的な性質の注意を一つ挿んでおきたい。それは恐らく有意義なものを指示するかもしれない。變化を保留する何の能力をも持たない、從つて記憶力を持たないかの知覺組織は、吾吾の意識にとつては、感覺的性質の多種多樣相を提示する。それの逆に、吾々の記憶は、最も深く刻みつけられられたものを含めても、それ自體無意識である。それは意識的になることはできる、然し無意識の狀態に於いてその凡ゆる作用を展開するものである事は、少しの疑ひもない。吾々の性格と呼ばれるものは、吾々の印象の記憶痕跡に立脚してをる、そしてしかも吾々に最も強く作用した印象こそは、吾々の初期少年期のそれである、卽ち殆ど決して意識されない印象である。然るに記憶が再び意識されると、その記憶は何の感覺的性質を示さないか、又は、知覺に較べると非常に微少な感覺的性質を示すのみである。さて若しも記憶と性質とは心的組織に於ける意識に關係する限りは、互ひに排除し合ふものである、といふ事が實證されたならば、そ

の時には神經昂奮の條件についての多望なる考察の道が開かれるであらう。（私はその後、意識は正に記憶痕跡に代つて發生するものである、といふ意見を述べてをる。Vgl. Notiz über den Wunderblock, 1925)。

吾々が今まで精神といふ道具の感覺一端に於ける組立てに就いて假定して來たものは、夢と夢から導き出される心理學的解說とに對する反省なしに、行はれたのであつた。この道具のもう一つの部分の認識のためには併し、夢は證據の源になる。若しも吾々が二つの精神的關門を假定し、その中の一つは他の關門の活動に批判を加へる、そしてその批判の結果として意識化が行はれないのである事を敢て假定しようとしなかつたならば、既に吾々が觀察した如く、夢判斷を說明することは吾々にとつて不可能となるのである。

批判を行ふ方の關門は批判を行はれる方の關門よりも一層密接な關係を意識に對して結んでをる、といふ事を吾々は既に推定してしまつた。前者は後者と意識との間に一つの屛風のやうに立つてをる。更に吾々は、この批判を行ふ關門をば、吾々の覺醒生活を指導しそして吾々の隨意的な意識的な行動を決定するものと同一視すべき、いくつかの支持點をも見出してしまつた。さて

第三圖

今これ等の關門の代りに吾々の假定の意味に於いて組織を持つてくるならば、その時には、唯今指摘した認識によつて、批判を行ふ組織はかの運動的一端にあるものとせられる。この二つの組織を吾々の圖表の中へ入れてみる、そしてそれ等に與へた名稱を以て意識に對するそれ等の關係を現してみる(第三圖)。

運動的一端のところの組織の最後のものを吾々は前意識(Vbw)と名づけるが、それは、若しも或る條件が實行される、例へば或る强度の成立とか、注意と呼ばれるあの機能の或る配分とか、其他の條件が實行されるならば、その組織の中の昂奮の經過はより以上の停頓なくして意識に達することができるのを、暗示せんがためである。この組織はそれと同時に隨意的な運動力に對する鍵を所持するところの組織である。その背後の組織を吾々は無意識(Ubw)と名づける。それは、前意識を通らざる限り意識への通路を持つてゐない、そして前意識を通

過する際には甘んじて變更を受けねばならないものだからである。（この線を以て展開された圖表をもつと詳しく描くとすれば、前意識 Vbw に續く組織は、吾々が意識をそれに歸屬せしめねばならないところの組織である。即ち W=Bw である、といふ假定を念頭に置かねばならないであらう。）

これ等の組織の中のいづれに吾々は夢形成に對する刺戟を含めるのであるか？ 簡單に言へば、組織 Ubw（無意識）にである。なるほどこれから後の檢討に於いて吾々は、かく言ふのは全然には正しくない、夢形成は前意識の組織に屬する夢思想に結ぶべく强制されてをる事實を聞くであらう。併しながら吾々は又、別の箇所に於いて、即ち吾々が夢の願望を論ずる時に、夢に對する原動力は無意識によつて與へられる事實を知るであらう。そしてこの後者の重大な理由のために吾々は、無意識の組織を以て夢形成の出發點なりと假定しようと思ふのである。夢の刺戟は凡ゆる他の思想形成と同じく、前意識の中へ連續し、そしてここからして意識への通路を得ようとする努力を現すであらう。

經驗が吾々に教へるところでは、日中の夢思想にとつては、前意識を通つて意識に導く道は抵抗の檢閲のために塞がれてをる。夜になると、夢思想は意識への通路を自から作る。併し如何な

る道を通り、如何なる變更を以てであるか、といふ問題が生ずる。若しも夢思想にとつてこの事は、無意識と前意識との間の境に見張りをしてをる抵抗が夜間には減退する、といふ事實によつて、可能とならしめられるのであるならば、吾々は吾々の表象、それは吾々が今興味を感じてをるやうな錯覺的な性質を示さないところの表象の材料を以て、夢を得るに至るものでもあらう。が併し、検閲が無意識と前意識の兩組織の間に減退する事實は、かの Autodidasker の如き夢形成を説明することができるにすぎない、そしてそれは、かの燒けつつある子供の夢の如き夢を説明することはできない。この子供の夢は吾々がこの章の吟味の冒頭に於いて問題として提出しておいたものである。

錯覺的な夢に於いて起る經過を吾々は、昂奮が逆行的な道を取る、と言つて説明するより外はない。昂奮は精神の運動的一端へ向ふことをせずして感覺的一端へ連續し、そして結局知覺の組織に到着する。精進的經過が覺醒時に無意識から連續する方向を前進的と名づけるならば、夢に就いては、夢は逆行的性質を持つ、と言つてよいであらう。（逆行といふ重要點の最初の暗示は、既にアルベルトゥス・マグヌスに見出される。彼に據ると、空想力が感覺の捕へる對象の保存された映像を以て

夢を構成し、その經過は覺醒時に於けるとは逆に行はれる。――ホッブスは次のやうに言つた、「要するに、吾々の夢は吾々の覺醒時空想の逆である。吾々が覺醒してをる時には一方の端で始まり、吾々が夢みてる時には別の端に始まる運動がそれである。」

次に、この逆行は確かに、夢經過の最も重要なる心理學的特色の一つである。併し吾々はこの逆行が夢にだけ起るものではない事を忘れてはいけない。故意的な追想や、吾々の常態的な思考の其他の部分的經過も亦、精神といふ道具の中に於いて何等かの或る複雜な表象行爲から、その行爲の根柢となつてをる記憶痕跡の素材への逆行に相應してをる。けれども覺醒の間には、かかる逆行作用は決して記憶映像を飛び越えて行くことはない。この作用は知覺映像を錯覺的に再生させることはできない。それが何故に夢の中では別であるか？　前に吾々は夢の壓縮の仕事に就いて述べた時に、表象に固着する强度は夢の仕事のために次から次へと交付される、といふ假定を避けることができなかつた。組織Wを思想から出發する逆の方向に於いて十分なる感覺的活潑さを持つに至らしめることができるのは、恐らく精神的經過のかかる變化であるかも知れない。

以上の檢討の有効範圍に就いては、私は思ひ違ひをしたくないものだと思ふ。吾々は或る說明

しがたい現象に對して一つの名稱を與へることをしたにすぎない。夢の中に於いて表象が、嘗つて其處から出て來たのであつたところの感覺的映像の中へ逆行して戻る、この作用を吾々は逆行と呼ぶのであるが、かく一歩を進めるに就いても辯明が要る。名を與へたところで何一つ新しいことが吾々に教へられないのならば、何の爲にそんな名を與へたりするのか？　ところで、私は思ふに、「逆行」(Regression) といふ名稱は、それがかの吾々には既知の事實をば、一つの方向を備へた精神的道具の圖表へ結びつける限りに於いては、吾々に役立つのである。ここまで來て、あのやうな圖表を掲げて置いた事が初めて甲斐あることとなる。何故ならば夢形成のもう一つの特色は、新しく熟考をすることなくとも、この圖表の助けを以てするのみで、吾々に洞察できるものとなるからである。夢の經過をば吾々によつて假定せられた精神的道具の以内に於ける一種の逆行作用だと見做す時には、夢思想の凡ゆる思考關係は夢の仕事の間に失はれ行くか、或ひはただ辛うじて表現されるかである、といふ經驗的に確定された事實は、兎角の事なしに、吾吾にとつて說明がつくのである。これ等の思考關係は吾々の圖表に據ると、最初の記憶組織の中にでなく、更にもつと前方に存する組織の中に含まれてをり、そして逆行の際には自己の表現を

失つて知覺映像のみを殘すのである。夢思想の構造は逆行の際に解體してその素材に還る。

併し如何なる變更のために、日中には不可能なる逆行が可能となるのであるか？　ここでは吾吾は推測を以て滿足しようと思ふ。箇々の組織の含有するエネルギーに於いて變化があり、そのためにそれ等組織が昂奮の進行にとつて通路を作り得るか、作り得ないかになるのには相違ない。が併し、精神といふこのやうな道具にあつては、昂奮の通路のための上の如き効果は、かかる變化の一種以上のものによつて成立せられるのかも知れないのである。この事は勿論直ぐに、睡眠狀態と、睡眠狀態が精神の感覺的一端に於いて誘發する含有エネルギーの變化を思はしめる。日中には知覺の精神組織からして運動力へ向つて繼續的に走る或る流れがある。この流れは夜間に停止し、そして昂奮の逆流に對して何の妨害をももはや與へることはできないであらう。これが、かの二三の著述家達の理論に於いて夢の心理學的性質を解說すべき所謂「外界からの隔離」であるかもしれない（上卷第八九頁參照）。併し夢の逆行作用の說明に際しては、病的な覺醒狀態に於いて成立するところの、他の逆行作用が反省されねばならないだらう。この他の逆行作用に對しては、今吾々が與へた說明は勿論行き詰る。前進的方向の間斷なき感覺的流れがあるに拘らず、

逆行が生ずるのである。

ヒステリーやパラノイアの錯覺、常態精神の人々の幻覺に對しては、私は次のやうな解說を與へることができる、即ち、それ等は事實上逆行に該當する、言ひ換へると、映像に變形した思想である、そして抑壓されるか、又は無意識の儘でゐるかした記憶と親密なる關係に立つてをるやうな、さういふ思想だけがかゝる變形をなすのである、と。例へば、私のヒステリー患者の中で一番年少者の一人、十二歲の兒童は「赤い眼をした綠色の顏の人々」が現れるので驚かされ、眠り込むのを妨害される。この幻の源は或る少年に對する抑壓された、併し嘗つては意識的であつた記憶であつて、その少年を彼は四年前に屢々見た、そしてこの少年から彼は數多の小兒の惡戲の厭な手本を見せられ、その中には手淫のもあつたが、彼は今になつて自身に對しその手淫のために後ればせの非難を加へるのである。彼の母はその當時に、この行儀の惡い子供は綠色がかつた顏色で、赤い（といふのは、赤い緣をした）眼を持つてる事に、氣がついて、さう語つたことがあつた。それからこの恐怖の幻が發してをる。そして併しそれは今ではただ、彼をして母のもう一つの豫言、即ちこんな子供は白痴になり、學校では何も覺えることができず、そして早く

死ぬ．といふ母の豫言を想起せしめるのに、役立つのである。私のこの小さな患者はその豫言の第一の部分を實現せしめる、彼は高等中學校で進級せず、彼の欲せられざる記憶の審問が示す如く、豫言の後半の實現に對して恐怖してをる。診療は短い時間の後に勿論成功し、彼は眠り、彼の恐怖症は去り、そして彼の學年は優等の證明を以て終つたのである。

ここに私は或る幻覺の分析を附け加へることができる。この幻覺は四十歳になるヒステリー婦人患者がその健康な時代に見たのを私に物語つたのである。或る朝彼女は眼を開けると、部屋の中に彼女の兄弟が居る。併し彼は今精神病院にゐる事を、彼女は承知してゐた。彼女の小さい男の子が寢臺に彼女と竝んで眠つてゐる。子供が伯父を見たら驚愕して痙攣を起すかもしれない、そんな事のないためにと、彼女は子供の上に蒲團を引きかぶせた。するとその時にその幻は消えた。この幻覺は婦人の小兒時代記憶の改造である。その記憶は勿論意識的であつたけれども、併し彼女の內心にある凡ゆる無意識材料と極めて密接な關係を結んでゐたのである。彼女の姆母が彼女に語つたことがあつた、非常に早く死去した彼女の母は（その死の時に彼女は一歳半であつた）、癲癇か又はヒステリーの痙攣に惱んでをつた、そしてそれはしかも、母の兄弟（私の患者の

伯父）が蒲團を頭の上にかぶつて幽靈のやうにしてみせて、彼女を驚愕させてから以來の事であつた、と。幻覺はこの記憶と同一の要素を含有してをる、即ち兄弟の出現、蒲團、驚愕とその結果、等。併し是等の要素は新しい聯絡に整へられ、そして別の人物へ移された。幻覺の明瞭な動機、幻覺によつて代理された思想は、彼女の小さな男の子はその伯父に身體上の素質がいかにも似てゐて、伯父と同じ運命に會ふかもしれない、といふ心配である。

以上引用した二つの實例は、睡眠狀態に對する關係を全然には離れてゐない、それ故恐らくは、私が必要とするやうな證據としては不適當であるかもしれない。であるから私は或る錯覺的なパラノイア患者に試みた私の分析と、私の未だ發表してゐない精神神經病の心理學に關する研究の成果を參考して貰ひたい。それは、逆行的思想變形の是等の場合に於いて或る抑壓された又は無意識の儘に留まつた記憶、大抵は幼兒時代の記憶の影響を看過してならない事を、强調せんがためにである。この記憶は、謂はば自分と結合してをるそして檢閱の爲に表現を妨げられてをる思想をば逆行作用の中へ、卽ち、この記憶自身が心的に存在してゐる表出の形式へ引き入れるのである。私はここにヒステリーに關する研究の一成果として、幼兒時代の場景は、（それが記憶であ

らうと、又は空想であらうと)、それを意識的にすることが成功すれば、錯覺的に見られ、そしてそれを報告する時になつて初めて錯覺的といふこの性質を拂拭するのである、といふ事實を引用することができる。普通にその人の記憶作用が視覺的ではない人々にあつてすらも、極めて古い小兒時代記憶は感覺的潑剌さの性質を晩年まで保存する事實も亦、周知である。

さて、夢思想に於いては幼兒時代體驗又はそれに基く空想にとつて如何なる役目が配當されるか、それ等のものの部分が如何に屢々夢內容の中に再び浮び上がつてくるか、夢の願望自身が屢ばそれ等のものから導き出される事等を想起するならば、夢に對しても亦、次のやうな蓋然性は拒否せられないだらう。卽ち、思想が視覺的映像に變形するのは、復活を求め視覺的に表出された記憶が、表現を得んと力めながら意識から切斷されてをる思想へ及ぼすところの、吸引の結果であるかもしれない。この解決に從へば、夢は最近時的のものへの交付によつて變化された幼兒時代場景の代理物である、とも說明され得るであらう。幼兒時代場景はその更新をやり通すことはできない。夢として再現されるので滿足するより外ない。

夢內容にとつての幼兒時代場景(又はそれの空想的反復)の謂はば模範的意味を指摘すれば、

シェルネルとその一派の假定の中、內的刺戟源泉に就いての假定は無用となる。夢がその視覺的要素の特別なる潑剌さ、又はその特別なる豐富さを認めしめる場合に對して、シェルネルは「視覺刺戟」の、視覺器官に於ける內的昂奮の、或る狀態を假定した。吾々はこの假定に對し反抗する必要はない。かかる昂奮狀態をただ視覺器官の心的知覺組織のために認定するので滿足すればよい。併し吾々は、この昂奮狀態は記憶によつて作られたものであつて、その時に活動してゐた視覺昂奮の更新である、といふ事を主張するであらう。私は或る幼兒時代記憶の斯かる影響に就いてのよい實例を一つも、自分の經驗から持ち合はしてゐない。私の夢は大體、他人の夢がさうだと考へるのよりも、一層に感覺的要素に乏しい。併しこの最近數箇年のうちでの一番美しいそして一番潑剌とした夢に於いて私は、夢內容の錯覺的明瞭さをば最近時のそして短い間に生じた印象の感覺的性質に還元することが容易にできた。私は前に(第八〇五頁)、水の深碧の色、船の煙突から出る煙の赤褐色、私の目に入つた建物の陰鬱な赤褐色と赤色が、その夢の中で私に深い印象を殘した、一つの夢を擧げておいた。視覺刺戟によつて判斷される何等かの夢があるとすれば、これはそれであらねばならなかつた。そして私の視覺狀態へ移して置いたものは、何であつ

たか？　それは、もつと以前の多くの印象と結び合つてゐた一つの最近時的な印象であつた。私が見たいろいろな色彩は、先づ、玩具の積木のそれであつた。あの夢の前日に子供達が私に見せて感心させようとして、その積木で大規模な建築を作りあげたのである。大きな積木には夢のと同一の陰鬱な赤色があり、小さなのにはあの碧色と赤褐色とがあつた。その印象に、最近の伊太利旅行に於ける色の印象が、イソンツォー河や潟の美しい碧色、アルプス岩山の赤褐色が、結びついた。夢の色彩の美しさは、ただ、記憶の中で見られたそれの反復にすぎなかつたのである。

夢が表象内容を感覺的映像に改鑄するといふ特色に就いて知り得たところを、總括してみよう。吾々は夢の仕事のこの性質をば說明したわけではない、心理學の既知の法則へ還元したわけではない。吾々はそれを未知の事情を暗示するものとして摑み出し、そして「逆行作用的の」性質、といふ名稱によつてそれを顯現させたのである。この逆行は、それが現れる場合には、いかなる時でも抵抗とそれから同時的な吸引の一作用である、そしてその抵抗は、思想が常態的な道を通つて意識へと進出するのに反抗するものであり、その同時的の吸引は、強い感覺として存在する記憶が思想の上へ及ぼすところのものである。（排斥の說を述べる場合には、一つの思想はそれに影

響する二つの動因の協力によつて排斥されるものである事が、詳述されるべきであらう。その思想は一方からは（意識の檢閲からは）突きのけられるが、他方からは（無意識からは）吸引される、かくて丁度大きなピラミッドの尖端に達するやうなものだ。論文「排斥作用」參照。Die Verdängung.）夢に於いては恐らく逆行作用を容易ならしめる爲にであらうか、日中の感覺器官からの前進的流れの中止がこれに加はる。そしてこれは、逆行の他の形式にあつては、他の逆行動機の强化によつて相殺せられねばならない補助的な動因である。又、夢に於ける如き逆行作用のこの病理學的場合にあつては、エネルギー交付の經過は、常態的な精神生活の逆行作用に於けるとは別箇のものであるかもしれない、何故ならばこの經過の爲に知覺組織は全く錯覺的とならしめられるからである事を、吾々は記憶して置くことを忘れまい。夢の仕事の分析に際して吾々が「表出性の顧慮」として說明したものは、夢思想によつて接觸せられた、視覺的に記憶せられた場景の選擇的な吸引と關係させられるべきものであらう。

（逆行について猶ほ吾々が注意したいのは、この作用は神經病的徵候形成の理論に於いて、夢の理論に於いてと較べて、劣らず重要な役割を演ずる、といふ事である。吾々は逆行の三樣の種類を區別する。一、前に

展開された心的組織の圖表の意味に於ける場所的逆行。二、一層古い心的形成に溯るのが主である、といふ限りに於いて、時間的逆行。三、原始的な表現法及び表出法が通常のそれの代理をする場合には、形式的逆行。逆行のこの三つの種類は總て、併し詮ずるに一つであつて、大抵の場合に一緒になつてゐる。何故ならば、時間的に一層古いものは同時に形式的に原始的のものであり、そして心的場所の點では知覺一端に一層近いものであるからである。——吾々は夢に於ける逆行の題目を離れるに先だち、既に繰り返へし吾々の上に押しつけられたが、併し精神神經病の研究に深く立ち入る場合には新しく強められて再び生ずるであらうところの一つの印象に説明を及ぼさねばならない。即ち、夢を見るのは全體に於いてその夢みる人の極めて初期の事情への部分的逆行であり、その小兒時代の復活、小兒時代に支配の力を揮つてゐた衝動昂奮と使用せられてゐた表現法との復活である、といふ印象である。この箇人的小兒時代の背後に到達し得る時には、種族的小兒時代を、人類の發達を、洞見し得るであらう。箇々の人間の發達は、事實上、人類の發達を短縮しそして偶然的な生活事情によつて影響されつつ反復するものに外ならない。ニイチェは夢の中には「太古的な人間性の一片が働きを續けてをる。直接的な道を通るのでは吾々はもはやそこへは到達し得ないのである」云々と言つてをるが、いかにこの語の適切なるかを、吾々は豫感し得る。そして夢の分析によつて、人間の古代的な遺產を知り、人間の中にある精神的天賦を認識せんとする期待を抱かしめられる。夢と神經病とは吾々

が推測し得る以上にかの精神的古代を保存して來てをると思はれる。それ故に精神分析は、人類原始の最古のそして最も曖昧なる面を再建せんと骨折る學問の間に於いて、一つの高い等級を要求し得るものである。）

夢を心理學的に利用せんとした試みのこの最初の部分が、吾々自身を格別に滿足せしめない事は、あたり前である。吾々は曖昧な領域の中へ建設して行くことを促されてをる、それで滿足しようと思ふ。吾々にして若しも全然に迷路に踏み入つてをるのでなかつたなら、吾々は或る他の着手點からして略同一の領域へ入り込むに相違ない、そしてその領域に入つたならば、吾々は恐らく一層よく吾々の方針を定め得るであらう。

第三節　願望實現について

前に掲げた燃えてゐる子供の夢は、願望實現の說が遭遇する困難を考へてみるのに、丁度よい機會を吾々に與へる。夢は一つの願望實現以外の何物でもない筈である、といふ事は吾々總てに怪訝の念を抱かしめたが、それは恐怖の夢によつて示される矛盾などのためばかりではない。夢の背後には意味と心的價値とが匿れてをるものだ、と分析による最初の說明が吾々に敎へてくれ

た後の今では、この意味を左樣に簡單に決定し得べしとは、吾々は決して期待できないであらう。アリストテレスの正確ではあるが併し言ひ足らぬ定義に據ると、夢は睡眠狀態へ——人が眠つてる限り——續けられた思考である。さて吾々の思考は日中に於いては、批判、推定、反駁、期待、計畫等々の種々樣々なる心理行爲をなすものであるならば、何の爲にその思考が夜中にはただ單に願望の作成にのみ制限されねばならないのであるか？ 寧ろ、例へば心配といふやうな別種の心理行爲を夢の形に變形して現す夢が澤山に存在し、そして前に揭げた全く特別に透明であるあの父の夢などこそは、正にそれではないか？ 父親は眠りながらも目に入つた光に基いて、蠟燭が一本倒れて死骸に火が附いたかもしれない、といふ心配の推定をなし、この推定を彼は、一つの感覺的な局面と現在時稱の着物を着せて、一つの夢に變形したのである。その際に願望實現はいかなる役割を演ずるか？ そして一體、覺醒時からして續けられてゐる思想か、それとも新しい感覺印象によつて刺戟された思想か、そのいづれがこの際に優勢を占めると考へるべきであるか？

これ等の反省は總て正しい、そして夢に於ける願望實現の役割と、睡眠時へまで續けられる覺醒時思想の意義を、一層立ち寄つて究めるやうに、吾々を促すものである。

願望實現の問題こそは、前に既に、夢を二つの群に分割する機緣を吾々に與へた。明らかに願望の實現なりとわかつた夢を吾々は見出したし、又、その願望實現は不明瞭であり、屢々凡ゆる手段を以て蔽匿されてをる夢をも見出した。後者に於いては吾々は夢檢閱のなした仕事を認めた。歪みのない願望の夢を吾々は主として子供の間に見出した。短い、率直なる願望夢は成人した者の間にも現れるらしかつた――私はこの留保に特に力を入れて置く。

今や吾々は、夢に於いて實現される願望はその度に何處から發生するか、を問題とすることができる。ところが、この「何處から」を吾々は如何なる對立、又は如何なる種々相と關係させるか？　私の意見では、それ故、意識的となつた日中生活と、夜間に初めて認め得られるものとなる無意識の儘でゐた心的活動と、その二つの間の對立に關係させるべきである。かくする時には、私は或る願望の由來に對する三通りの可能性を見出す。願望は、(一)日中に刺戟せられ、そして外部的事情の結果その滿足を得ることができずにゐた、然る時には一つの承認せられそして果されなかつた願望が夜のために殘ることになる。(二)それは日中に浮んでゐたのだが、しかし排斥せられた、しかる時には一つの果されなかつたそして抑壓された願望が殘ることになる。(三)そ

れは日中生活とは關係を持たない、そして漸く夜に抑壓作用を免かれて吾々の中に動くところの願望の一つである。かの精神といふ道具の吾々の圖表を取りあげてみると、吾々は第一種の願望を組織Vbw（前意識）の中へ置く。第二種の願望については吾々は、それは組織Vbwから組織Ubw（無意識）の中へ押し戻されてしまつてをる、そして何處かに保留されてるものとすれば、ただ其處にだけである、と假定する。第三種の願望の動きについては吾々は、それは組織Ubwを踏み越える力を大體持つてゐないものだ、と信ずる。ところで、かかる種々の源から出て來る願望は、夢にとつて同等の價値を有するのであるか、一つの夢を刺戟して作る同等の力を有するのであるか？

この問題の解答のために吾々に提供される夢を總覽してみると、先づ吾々は、夢願望の第四の源泉として、夜間に起る實際上の願望の動き（例へば、渇の刺戟や性的欲求などに基く）を附け加へねばならないではないか、と考へさせられる。しかする時に吾々には、夢願望の由來は一つの夢を刺戟して作るその力に於いて何の變化をも生じない事は、ありさうな事柄に思はれてくる。日中に中止された船の旅を續けて夢にみた子供の夢や、それに近いいろいろな子供の夢を、私は想起する。それ等の夢は、日中の實現されなかつた、併し抑壓はされてゐない願望から說明され

る。

日中に抑壓された願望は夢の中で寛ぎを作るものだ、といふことに對する實例は、非常に豐富に提示せられる。その種類の最も單純なる一例をここに補充して置かう。或る少しばかり口の惡い婦人が、その年下の女友達が婚約をしたので、晝の間にいろいろな知人から、その婚約の男を知つてをるか、そしてその男のことをどう思ふかと訊かれた。それに對して彼女は口を極めた賞讚の言葉を以て答へたのであつたが、その際に彼女は自分の本心の批判には沈默を命じたのである。と言ふのは、眞實としてはかう言ひたかつたのであるから。あの人はざらに居る平凡人ですわ、と。（譯者註、ざらに居る平凡人といふところにこの婦人は Dutzendmensch ダースで數へられるやうな人間、といふ語を用ひた。その平凡な商品、及び數字の意味がやがて夢の中に表出された。）夜に彼女は同じ質問が向けられる夢をみて、次のやうな極り文句で答へた、追注文の際には番號を示すのみにて、十分に有之候、と。最後に、歪みの作用を蒙つてをる凡ゆる夢に於いては、願望は無意識から發生する、そして日中には認知され得ないものであつた事を、吾々は多數の分析の成果として知つてをる。かくてさし當り、凡ゆる願望は夢形成にとつては同等の價値と同等の力のものであ

る、と思はれるのである。

併しながら實はそれはもつと別の事情のものである、といふ事を私はここに證明することはできない。けれどもが私は夢願望の或るもつと嚴格なる制約を假定する方に、甚だ心が傾いてをるのである。子供の夢はなる程、日中に果されなかつた願望が夢の刺戟者であり得る事について、些しも疑ひをあらしめない。併しながらその場合に於いてはそれが子供の願望である事、幼兒的性質に特有なる强度の願望の動きである事を忘れてはならない。日中に實現されなかつた一つの願望が果して成人した者にあつても一つの夢を作るのに足るか、どうかは、私には全然疑はしいのである。寧ろ私にはかう思はれる、即ち、吾々は思考の働きによつて吾々の本能生活を統御することが進むに從つて、子供が知つてをるやうな、あのやうに强い願望の形式又は維持をば無用のものとして、益々斷念するのである、と。その際に、或る人は別の人よりももつと長く精神的經過の幼兒時代的型を保留する、といふやうな箇人的相違が勿論發揮されるかもしれないのは、起原的には明瞭に視覺的であつた表象作用の減退にとつても亦さういふ差異が存在するのと同じであらう。が併し一般には、成人した者にあつては日中から實現されないで殘つてをる願望は一

つの夢を作るのに十分ではないであらう、と私は思ふのである。意識されたものから發生する願望の働きが夢の昂奮に或る貢獻をなすであらう、といふことを私は承認する、併し恐らくはそれだけで、それ以上ではない。夢は若しも前意識的願望が何處か別の處からして或る强化を受け來ることができなかつたならば、成立しないであらう。

それは卽ち、無意識からである。意識的な願望は、同じやうな内容の無意識的な或る願望を呼び起し、そしてそれによつて强化されることができる場合に於いてのみ、夢の刺戟者となるのである、と私は想像する。神經病の精神分析から得た暗示に基いて、私はこれ等の無意識的な願望は、常に動いてゐる、そして彼等が意識から出て來る或る動きと結び合ひ、それのより輕度の强さに對し彼等の大きな强度を交付すべき機會が與へられれば、彼等は表現の道を講じようと、何時いかなる時にでも用意してをるものであると考へる。（それ等の無意識的願望はこの破壞し難き性質を、凡ゆる他の實際に無意識的な、と言ふのは組織 Ubw にのみ屬する精神的行爲と共通に有してをる。これ等の精神的行爲は必ず常に通路を持ち、そしてその通路は決して荒廢することなく、無意識的な昂奮が襲ふ度毎に、その昂奮の經過をば繰り返へして通行せしめる。一つの比喩を使用するならば、彼等にとつての撲滅

は、丁度ホーマーの「オデッセー物語」の中にある地下の世界の亡靈にとつての撲滅のやうなのしか存在してゐない。かの亡靈は血を呑めばすぐに新しく生きかへるのである。前意識の組織に屬する經過は、これとは全然別の意味に於いて破壞され得るものである。神經病の精神治療術はこの相違に基礎を置いてをる。）

であるから、夢の中では意識的な願望のみが實現されるのであるかのやうに見えねばならないのである。併し夢の構成に於ける或る一つの小さな目に立つ點が、吾々にとつて無意識から出て來る強力なる補助者の痕跡を見つける一つの指標となるであらう。これ等の常に動いてゐる謂はば不滅の無意識的願望は、嘗つて勝ち誇れる神々から重い山嶽のやうな岩石の塊を太古以來その背の上に載せられ、そして今猶ほ手足を痙攣させつつ時々その岩石の塊を持ち上げる、傳說の巨人を想起せしめる——これ等の迫害の中にある願望は、併しそれ自身、吾々が神經病の心理學的探究によつて知り得たところでは、幼兒時代的由來のものである、と敢て私は言ふ。それ故に私は前に述べた說、夢願望の由來は無關係的である、といふを排棄して、別の說、夢の中に表出される願望は一つの幼兒時代的願望である、といふのをその代りに置きたいのである。成人した者にあつてはその願望はUbw（無意識）から發してくる。前意識と無意識との間に區別も檢閱も未だ存

在してゐないか、又はそれがやつと徐々に作られつつあるかしてをる子供にあつては、それは、覺醒時の實現されなかつた、迫害されない願望である。この見解は一般に證明されない、その事を私は知つてをる。併し私は主張する、この見解は、人々がさうとは推測もしなかつたやうなところに於いてさへ、屢々證明され得るし、そして一般に反駁されないものである、と。

意識的覺醒生活から殘存した願望の動きをば、かくして私は夢形成の爲には背景に退かしめる。私はかかる動きに對しては、例へば夢内容にとつて睡眠中に於ける事實的感觸の材料に對して認める役割以外、何等他の役割を認めてやるつもりはない(上卷、第三九一頁參照)。今、日中生活から殘存し、そして願望ではないところの他の精神的刺戟を觀察する際に、私は上述の思考法が規定する方向の上に留まつてゐる。眠らうと心を決める時、吾々の覺醒思考のエネルギー活動に一時的の終りを與へることが吾々に成功する。それをよくやり得る人は、よく眠る人だ。ナポレオン一世はこの種の模範であつたさうだ。だが吾々にはそれが必ずしも成功しない、又、必ずしも完全には成功しない。未解決の問題、心を惱ます心配、壓倒的な印象等は睡眠の間にも思考活動を繼續し、そして吾々が前意識と名づけたあの組織の中に精神的經過を宿らせて置く。睡眠

の中へ繼續されるかかる思考の動きを分類してみることになると、次のやうな類を列擧することができる。（一）、日中に偶然の妨害の爲に最後までは思考されなかつたもの。（二）、吾々の思考力の弛緩の爲に果されなかつた、解決されなかつたもの。（三）、日中に擊退されそして抑壓されたもの。以上に對し一つの强力な類が第四として加へられる、それは、晝の間に前意識の仕事によつて吾々の無意識の中に動かされたものである。そして最後に、吾々は第五の類として、日中の無關心的な、それ故に片づけられずに殘つてゐた印象を附加することができる。

晝の生活のかかる殘存物によつて、殊にかの未解決のものの類から、睡眠狀態へ導き入れられる精神的强度を、吾々は侮ってはいけない。これ等の昂奮は確かに夜間に於いても表現を求める。そして又同じく確實に吾々は、睡眠狀態は前意識に於ける昂奮經過の普通的な繼續とそれの終結とをば、意識化することによつて不可能ならしめる事を、假定し得る。吾々が常態的な道で行はれる吾々の思考經過を意識し得る限りは、それが夜間に於いてであつても、その限りは吾々は眠つてをるのではない。睡眠狀態が組織Vbw（前意識）の中に於いて如何なる變化を惹起するか、それを示すことは私にできない。（睡眠狀態の事情と錯覺の條件についての知識にもう一層立ち入る事を、

私は論文「夢學說に對する超心理學的補充」の中で試みて置いた。(Metapsychologische Ergänzung zur Traumlehre.1916—18)併し、睡眠の心理學的特性は主として、睡眠中に痲痺された運動力への通路をも支配するところの、正にこの組織Vbw(無意識)に於けるエネルギー含量の變化の中に求められるべきである事は、疑ひがない。それの反對に、夢の心理學には、睡眠は組織Ubwの諸條件の何物かをば第二次的以外に變更するものだ、と假定せしめ得るやうな、何の根據もないやうである。かくして前意識に於ける夜間の昂奮にとつては、無意識から出て來る願望昂奮が步む道より以外の何等の道も殘つてはゐない。あの昂奮は、無意識から强化を探し、そして無意識的昂奮の迂回の道を共に步まねばならないのである。併し前意識的日中殘存物は夢に對して如何なる位置を取るか? この殘存物が豐富に夢の中へ押し入る事、殘存物は夜間に於いても意識に現れんとして夢內容を利用する事は、何の疑ひもない。のみならず、この殘存物は時としては夢內容を支配する、日中の仕事を續けるやうに夢內容を强制することもある。日中の殘存物は願望の性質を持ち得ると同じく、凡ゆる其他の性質をも持ち得る事も亦、確實である。併しそれに關聯して、それ等の日中殘存物は夢の中へ採用される爲に如何なる條件に從はねばならないか、を見てみる事は、

非常に敎ゆるところ多く、且つ願望實現の學說にとつては正に決定的のことである。

前に掲げた實例の中の一つの夢、例へば、友人オットーがバードゼトゥ病の徵候を持つて現れる私の夢を取り上げてみよう（上卷、第四六五頁參照）。その日の晝の間にオットーの樣子が動機となつて私は或る心配を抱いた、そしてその心配は、この人に關する總てのことと同じく、私の氣にかかつた。それが睡眠の中へまでも蹤いて來たのだ、と私は假定してもよい。多分私は彼は何處が惡いんだらうかを究めようとしたらしい。夜の間にこの心配が夢の中に表現された。私はその夢を報告して置いたのだが、その內容は第一無意味であつたし、第二に何等の願望實現に適應するものではなかつた。併し私は、日中に感じた心配に對して不適當なあの表現が何から起因してをるかを、探求し始め、分析によつて、私は彼を某男爵と同一化し、私自身をR敎授と同一化した爲に生じた或る一つの聯絡を見出したのだつた。日中思想の正にかやうな代理物を何故私が選ばねばならなかつたのか、それに對してはただ一つの說明しかなかつた。R敎授との同一化に對しては私は無意識に於いて常に用意してをつたに相違なかつた。何故ならば、その同一化によつて、不滅なる小兒時代願望の一つ、卽ち偉くならうとする願望が實現されたのであるから。友人

オットーに對する忌むべき、日中だつたら確かに排斥されるべき思想は、この機會を利用して、こつそりと表出されるに至つた。併し日中のあの心配も亦、夢内容に於ける一つの代理によつて一種の表現に到達した。それ自體は何等の願望ではない、寧ろ一つの心配であつたところの日中思想は、如何やうかの方法で、或る幼兒時代的な、今では無意識でそして抑壓されてる一つの願望へ關係を結び、そしてその願望が然る後にその日中思想をば、假令適當に整理してではあるが、意識のために「成立せしめたのである。」あの心配が支配的であればあるだけ、作り出されるべき關係の結合は益々猛烈であることができた。願望の內容と心配の內容との間には、聯絡は全然無くともよかつたし、事實この實例に於いてはそんな聯絡は一つも無かつた。

(若しも夢思想の中に、或る願望實現に全然矛盾する材料が、即ち根據ある心配や、苦痛的な考慮や、心を勞する見解などが、與へられる場合には、夢は如何なる態度を取るか、それに就いての一研究の形式を以て、上述の問題を取扱ふのも、恐らく合目的的であるかもしれない。その際に生じ得る結果は多樣であるが、次のやうに分類される。(一)、凡ゆる苦痛的な表象をばその反對の表象によつて代理せしめ、そしてそれに屬する不快なる情念を抑壓することが、夢の仕事に成功する。その時には、純粹なる滿足の夢、明白なる「願望實現」

が生じ、それ以上何の檢討すべきものは無いやうに見える。(二)、その苦痛的な表象は多かれ少かれ變更せられたが併しよく見分けのつく狀態で、顯在的夢內容の中へ入り込んでくる。これは、夢の願望理論について疑惑を起さしめそしてもつと進んだ吟味を必要とする場合である。苦痛的內容のかかる夢は、無關心的に感ぜられるか、又はその表象內容によつて是認せられると思はれる全的な苦痛的情念を携へて現れるか、又は恐怖の展開の下に覺醒に導くか、そのいづれかである。——これ等の不快夢も亦願望實現である事を、分析は證明する。それの實現が夢を見た人の自我によつて苦痛であるとしか感ぜられ得ないやうな、一つの無意識的で迫害を受けた願望は、苦痛的な日中殘存物の蟠居によつて提供される機會を利用し、その殘存物に保護を與へて、そしてこの保護によつてそれを夢となる力あらしめたのである。然るに、一つの場合には無意識的願望は意識的のと合致してをつたのに反し、この場合にあつては無意識と意識との——迫害と自我の——間の分裂は露出されてをり、魔女が夫婦の者に自由に選ませた三つの願望についての童話の局面が實地に行はれるのである(後の第一〇〇四頁參照)。迫害された願望の實現を得た滿足は非常に大きなものであつて、それが日中殘存物に附着する苦痛的な情念に對して平均力を保つ程である。その際その夢は、一方では或る願望の實現であり、他方では或る懸念の實現であるに拘らず、その感情の調子に於いては無關心的である。又は、眠りつつある自我が夢形成に對して猶ほ一層潤澤なる參與をなす、その自我が迫害された願望の成し就

げられた滿足に對して烈しい憤りを以て反應し、そして恐怖の下にその夢をさへ中絶せしめる事も、起り得る。かくして不快夢や恐怖夢は、理論から言へば、圓滑なる滿足の夢と同じく、願望實現である事實を認識するのは、困難でない。――「刑罰の夢」も亦不快夢であり得る。これを認知することによつて夢の理論に對し或る意味に於いて何等かの新事實を附加すると認められる。刑罰の夢によつて實現されるものは、やはり同じく、無意識的な願望、或る迫害されて許されなかつた願望の動きに對し夢見た本人の刑罰を求める願望である。その限りに於いては、夢は、夢形成の原動力が無意識に屬する或る願望によつて動かされねばならない、といふ、ここに述べられた要求に從つてをる。併し一層精緻なる心理學的分析は、刑罰の夢の、其他の願望夢に對する相違を認識せしめてくれる。前出第二類の場合に於ては、無意識的な夢形成の願望は迫害されたものに屬してゐた。刑罰の夢に於いても同じくそれは無意識的な願望ではあるけれども、吾々はそれを迫害されたものではなく、「自我」に歸屬させねばならない。かくして刑罰の夢は、自我の夢形成に對する猶ほ一層廣汎に亙る參與の可能性を指示するのである。夢形成の機構は大體、若しも「意識的」と「無意識的」との對立の代りに、「自我」と「迫害されたもの」との對立を置いてみるならば、遙かに見透し得るものとなる。それは、精神神經病者に於ける經過を顧慮することなくしては、行はれ得ず、それ故にこの著述の中では實行されなかつた。私はただ、刑罰の夢は一般的には苦痛的な日中殘存物の條件に結びつけられてゐないのであ

る、事だけを、注意して置く。刑罰の夢は寧ろ、その日中殘存物は滿足を與へる性質の思想であるが、併し許されざる滿足を表現する思想である、といふ正反對的な前提の下に於いて、最も容易に成立する。かかる思想のうちから顯在的な夢へ入り込んで來るものは、丁度第一類の正反對のみである。であるから刑罰夢の本質的性質はやはり、その夢にあつては迫害されたもの（組識Ubw）から來る無意識的願望が夢形成者となるのではなく、それは、その願望に反動する、そして假令無意識的（といふのは前意識的）ではあるにしても、自我に屬する刑罰願望である、といふ事であるらしい。

私はここに述べられた考への若干を、就中夢の仕事は苦痛的期待の或る日中殘存物を如何に取扱ふか、その樣子を、私自身の夢の一例によつて說明してみよう。

「冒頭は不明瞭。私は妻に言つた、お前に知らせる事がある、或る全く特別な事だ、と。彼女は驚愕した、そして聞かうとしなかつた。私は彼女に向つて、さうぢやないよ、お前を非常に悅ばせる事なんだ、と斷言して、語り始めた。私たちの息子が屬する將校團から或る金額を送つてよこしたのだ（五〇〇〇K？）……何か表彰のやうなもの……分配……。その時私は彼女と一緒に、何かを探し出すために、貯藏室のやうな小さな部屋へ入つて行つた。突然私は息子が現れるのを見た。彼は軍服を着てないで、却つてぴつたり體についたスポーツ服を着て（海豹のやうに？）、小さな帽子をかぶつてゐた。彼は一つの箱の側面に置いて

あつた一つの籠の上へ、この箱の上に何かを置かうとするかのやうに、上がつた。私は彼を呼んだ。返事をしなかつた。彼は顔か又は額を繃帶してをつたやうに思はれた。彼は口の中で何かを直してゐた、何かを中へ押し込んだ。又、彼の頭髮は灰色に光つてゐた。彼はそんなに疲れ切つてるんだらうか？そして義齒を入れてるんだらうか？と私は考へた。もう一度彼を呼ばうとするまへに、私は目を覺した。恐怖はなかつたが、心臟が動悸を打つてゐた。私の時計を見ると、二時半だつた。」

完全な分析の報告は今回も不可能である。私は二三の決定的な點を特に指摘するに止める。この夢に對する動機を日中の苦痛的な期待が與へた。戰線で戰つてゐる息子からはまたしても一週間以上に亙つて通信が來なかつた。彼は負傷したか、それとも戰死したか、どつちかであるといふ確信が夢內容の中で表現される事は、容易に見てとられる。夢の初めの方に於いて、かの苦痛的な思想をその反對によつて代理させようとする力强い骨折りが認められる。或る非常に悅ばしい事、金の送附、表彰、分配、などの事を私は報告せねばならない。（かの金高は私の醫師としての仕事に於ける或る愉快な出來事から發してゐて、從つて大體元來のテーマから離れようとするものである。）然るにこの骨折りは失敗した。母は何か恐ろしい事を豫想し、私の話を聞かうとしない。修飾もあまりに薄すぎる、抑壓されるべきものに對する關係が至るところに光を洩らしてゐる。息子が戰死をしたら、彼の同僚達は彼の所持品を送り還へすだらう、私は彼の遺したものを兄弟

姉妹や其他の人々へ分配せねばならないであらう。表彰が士官に與へられるのは、屢々、その「勇ましい死」の後に於いてである。かくして夢は、それが先づ否定しようと欲したものを、直接に表現することに取りかかつた。その際に、願望實現的傾向はいろいろな歪みによつて猶ほ目につくものとなつた。（夢に於ける場所的事情の變更はジルベレルに從つて闘の象徵と解すべきである。）この夢に對してさういふことをするに必要な原動力を何が與へたのか、吾々には勿論豫想はつかない。息子は併し「倒れる（戰死する）」人としてでなく、「上がる」人として現れる。彼は實際に大膽な登山家でもあつた。彼は軍服でなく、スポーツ服を着てをる。それは卽ち、今懸念されてをる不幸の代りに、もつと昔にスポーツで遭遇した不幸が現れたのである。彼はスキー旅行の途で倒れそして太腿を挫いたことがあつた。だが、彼が海豹に似たやうなぐあひに服裝してをる事は、忽ちに一人のもつと若い子供、吾々の小さいおどけた孫を想起せしめる。灰色の毛髮は、戰爭の爲に酷い目に會はされたこの孫の父、吾々の婿を想起せしめる。それがどういふ意味だらうか？　併しまあこれだけで澤山にしておかう。食堂、何か取らうとする（夢の中では何かをその上へ置かうとする）箱、さういふ場所的事情は、これは、私が二歳を過ぎたが、まだ三歳を越えなかつた頃に、自分で身に招いだ或る不幸に對する見紛ふべからざる暗示である。私は食堂で、一つの箱か又は食卓だつたかの上にある何かおいしいものを取らうとして、低い椅子の上へあがつた。椅子が傾斜して、その角が[illegible]ぶつつかつた。

惡くすると、齒がみんな拔け落ちてしまつたかもしれないところだつた。ここは一つの警告が表出されてをる、さうなるのはお前にとつて當り前だ、丁度勇敢な軍人に對する敬意が心に動いたりする場合と同じに。分析を深めてみると私は、息子の懸念された不幸に滿足を感ずるやうな蔽匿された心の動きを見出したのである。それは、若い者に對する嫉みだ。齡を取つた人は、實生活に於いてそんな嫉みを根本的に窒息させてしまつた、と信じてをる。そして現實にかかる不幸が起つた時には、その苦痛的な感動の强みこそは、それを緩和するために、かかる迫害された願望實現を探し出してくるのである事は、見誤るべくもない。）

さて今や私は、無意識的な願望が夢にとつて何を意味するかを、鋭く擧げ示すことができる。その刺戟が主として、又は專らにさへ、日中生活の殘存物から發してをる夢の大きな一群がある事を、私は認めよう。そして結局一度は員外教授になるといふ私の願望ですら、若し私の友人の健康についての心配が日中以來猶ほ動いてゐなかつたならば、その夜私をして安らかに眠らしめたであらう、とも私は考へるのである。併しこの心配を以てしては未だ夢は出來上がらなかつたであらう。夢が必要としてゐた原動力は或る願望によつて與へられねばならなかつた。一つのさやうな願望を夢の原動力として手に入れるのが、かの心配の仕事であつたのである。一つの比喩

を以て言へば、或る日中思想が夢のために企業家の役割を演ずる、といふのは非常にあり得る事である。だがしかし、世間で言つてるやうに、考案を有し、そしてそれを實行に移さんとする衝動を持つその企業家は、資本無くしては、何事をも爲すことはできない。彼は費用を拂つてくれる資本家を必要とする。そして夢のために心理的費用を提供するこの資本家は、いつでも、そしてその日中思想が假令如何なるものであらうとも、拒み難く、無意識からの或る願望である。

他の場合には資本家自身が企業家である。この場合の方が夢にとつては一層普通でさへある。この日中の仕事によつて或る無意識的な願望が刺戟せられた、そしてその願望が今や夢を作る。ここに例として利用した經濟的事情の凡ゆる其他の可能性に對しても亦、夢の經過は平行するに相違ない。即ち、企業家が自から或る小額を資本の一部に提供することもあるし、數人の資本家が數人の企業家にとつて必要なものを協同して出資することもある。かくして一つ以上の願望によつて支持されてをる夢もあり、それに類似のいろいろな變化ももつとあるが、それ等は容易に看過せられ、そして吾々にもはや何の興味をも與へない。夢の願望に就いてのこの檢討に於いて猶ほ不十分なるものを、私は後にでなければ補充することはできないであらう。

上に用ひられた比喩の比較中心點、即ち、適宜の配分量を以て自由なる使用に提供される量は、夢構造を照明するのに、一層巧妙なる利用を許すものである。大抵の夢に於いては、第五二一頁に詳述せる如く、特別なる感覺的強度を賦與されてをる一つの中心が認められる。それは普通に願望實現の直接的表出である。何故ならば、夢の仕事の轉移作用を逆行的に辿ると、夢思想に於ける諸要素の心的强度は夢內容の中の諸要素の感覺的强度によつて代理されてるのを見出すからである。願望實現に密接なる諸要素は往々それの意味とは何の關係をも持たない、却つてその願望に反抗する苦痛的思想の派生物であると證明される。併し中心的要素に對し屢々技巧的に作り出される聯絡のおかげで、それ等の要素は、表出に至り得るだけの强度を持つやうになつたのである。かくして願望實現の表出的力は聯絡の或る一定の範圍に撒布せられ、その範圍の以內に於いては一切の要素が、それ自體では手段を持たぬ要素までもが、引き上げられて表出に達する。數多の原動力的願望を含む夢に對しては、その箇々の願望實現の範圍を互ひに限界し、時として夢の中の缺目をもその境界地帶として理解することは、容易に成功する。

夢にとつての日中殘存物の意義に對し吾々は上述せる說明によつて制限を加へることはした

が、併し猶ほ若干の注意をこれに向けることは、それだけの骨折甲斐がある。何故かと言へば、凡ゆる夢は、往々にして最も無關心的な種類のものであることもあるが、とにかく或る一つの最近時的な日中印象に對する結合をその內容の中に認めしめる、といふ限りに於いて、日中殘存物は夢形成の一箇必然的なる成分であるに相違ないからである。夢の混成の爲のこの附加の必然性を吾々は前に未だ洞察することはできなかつた。（上卷、第三一一頁參照）。この必然性は、無意識的願望の役目を確信し、そしてその次に神經病心理學に解説を求めてみる時にのみ、その存在が理解される。神經病心理學からして知り得るのは、無意識的表象は大體その儘では前意識の中へ入つて來る力はないものである事、及び、無意識的表象は或る無邪氣な、そして既に前意識に屬してる表象と結合し、それに自己の强度を交付し、それをして自己を蔽はしめて以てのみ、前意識界に於いて或る作用を現すことができる事である。これが交付作用（Uebertragung）の事實であつて、神經病患者の精神生活に於ける實に多くの著しい出來事に對して說明を含むものである。交付作用は、前意識に屬する、從つて不當なほど大きな强度に到達する表象を變更を加へずに置くか、又はその表象そのものに交付作用をなしつつある方の表象の內容によつて或る變容を

强ゆるか、することができる。私がよく日常生活から比喩を取りたがる癖を許して貰ひたい。ここでも私はかう言つてみたいのである。迫害された表象にとつての事情は、吾々の國に於けるアメリカ人の齒科醫の事情と似てをる。アメリカ人である齒醫者はオーストリア人で正規の免狀を持つてをる醫者の名を看板に揭げて、そして法律の眼を免れるに非ざれば、業を營んではならないのである。アメリカの齒科技工師とかかる同盟を結ぶのは、正に一番繁昌する醫者ではないと、丁度同じに、心理生活に於いても或る迫害された表象を蔽匿するために選み出されるのは、前意識の中に働いてをる注意を十分に自己の上には惹いたことのないやうな、前意識的又は意識的表象ばかりである。無意識はそのいろいろな聯絡を以て特に、無關心のものとして注目されないでゐたか、又は注目されてゐたのが間もなく非難のために注目から逸せられてしまつたかしたやうな前意識の印象や表象を聯絡する。一方の側に對して非常に親密な結合をしてしまつてをる或る表象は、新しい結合の全群に對しては拒否的の態度を取るものである、といふのは、聯想學說の著名な一定理であつて、凡ゆる經驗によつて保證されてをる。私は嘗つて一度、ヒステリー症麻痺の一理論をこの定理の上に基礎づけようとする試みをなしたことがある。

神經病の分析が吾々に教へ知らせたのと同一の、迫害された表象から發する交付作用への欲求が、夢に於いても發揮されるものだ、と假定する時には、一擧にして夢の謎の中の二つ、即ち、凡ゆる夢分析は或る近時的印象の織り交ぜあるを證明すること、及び、この近時的要素は往々極めて無關心的な種類のものであること、この二つは說明がつく。これに對して吾々は、旣に別の箇所で學び知つた事、即ち、これ等の近時的にして無關心的なる要素は、夢思想に屬する極めて古い要素の代理物として、それ等は同時に抵抗檢閲に對して懸念すべきことが最も少いが故に、それ故に、實に頻々として夢內容へ入つて來るのである事を、附け加へる。併しながら檢閲の自由とは單に平凡なる要素の特權であるにすぎないし、近時的要素の恒に存在するのは交付への必要を指示するものである。迫害されたものが聯想の自由な材料へ向ふ要素に對して、無關心的な印象と近時的な印象との二群が滿足を與へるが、それは前者は豐富な結合をなすのに何の動機をも與へなかつたからであり、後者はその結合をなすのに未だ時間を持たなかつたのである。

かくして吾々は日中殘存物が、今では吾々はかの無關心的印象をその中に數へてよいのである、その日中殘存物が夢形成に參加する場合には、啻に無意識から何物かを、即ち、迫害された願望

が使用する原動力を借りるばかりでなく、更に、彼等はその無意識に對して或る缺くべからざるもの卽ち、交付のために必要なる附着物を提供する事を、了解するのである。ここで精神的經過の中へ一層深く押し入つて行かうと欲するならば、吾々はどうしても前意識と無意識との間に於ける昂奮の動きを一層鋭く照らしてみなければならないのであらうが、精神神經病の研究は實にそれを必要とするのであるけれども、併し夢はそれに對しては何の手がかりをも與へてはくれない。

日中殘存物に就いて猶ほもう一つだけ注意を書きたい。睡眠の元來の擾亂者はその日中殘存物であつて、夢ではない、夢は寧ろ睡眠を保護しようと骨折るものである事は、疑ひない。この事には猶ほもつと後に論及するであらう。

吾々は今まで夢の願望を追跡し、それを無意識の領分から導き出し、そして日中殘存物に對するその關係を分析してみた。その日中殘存物はそれ自身が願望であることもあり得るし、又は何等か他の種類の心的動きであるか、乃至は單に近時的印象でもあり得る。覺醒時思考の仕事の夢形成に對する重要性を說かうとして種々樣々に提出され得る要求のために、吾々はかくもその餘地

を作つてやつた。吾々の述べた一聯の思想に基いて、夢が日中の仕事の繼續者として覺醒時には解決してない或る任務を無事に終らしめるやうな、さういふ極端な場合をさへ説明することすら、不可能ではないかもしれない。ただ吾々には、かかる種類の夢であつて、そしてそれを分析してみると、幼兒時代的又は迫害された願望の源が見出され、その源を引き出すのには、前意識的活動の骨折りが强化作用によつて成功してをる、さういふ實例が缺けてるのである。何故に無意識が睡眠中に於いて或る願望實現に對する原動力以外の何物をも提供する事はできないのか、といふ謎の解決には、併し吾々は一歩もより近く近づいてはゐない。この疑問の解答は願望作用の心的性質に對して一つの光明を投ずるに相違ない。その解答はかの精神の道具に就いての圖表を手がかりとして與へられる筈である。

この道具も亦或る長い進化の道を經て初めて今日の完全に達したのである事を、吾々は疑はない。この道具をしてその仕事の能力のもつと以前の段階へ溯らしてみようではないか。他の研究によつて確められるべき假説が吾々に次の事を敎へる、即ち、この道具は先づ最初にはできるだけ自己を刺戟のない狀態に維持せんとする努力に導かれ、それがためにその最初の構造に於いて

は反射道具の型式を用ひ、そしてその型式の結果、外部から自己のところへ到着する感覺的昂奮をば直ちに運動の道を走らせて他へ送らさせることができた。然るに生活の必要はこの簡單な機能を擾亂した。この道具がより以上の發達への衝擊を得たのは、これらのお蔭である。その生活の必要は初め肉體上の大きな欲求の形を以てこの道具に近づいた。內的欲求によつて起される昂奮は運動力の中への一つの支流を求めるであらう。それを「內的變化」又は「情緒運動の表現」と名づけてよい。腹の空いた小兒は困つて叫ぶか、又は手足をばたばたさせる。併し狀況は變化されない、何故ならば、內的欲求から發するその昂奮は、時間的に激動する力に適應するものでなくして、或る連續的に作用しつつある力に適應するからである。何等かの方法で、小兒だつたら他人の世話によつて、その內的刺戟を止揚するところの滿足の體驗の味が與へられる時に、初めて或る轉向が現れ得る。この體驗の本質的なる一要素は或る知覺の（小兒の場合には榮養の）出現であつて、それの記憶映像はこれから先欲求昂奮の記憶痕跡と結び合つた儘で殘る。この欲求が第二回に現れるや否や、その作られてをる結合のお蔭で、或る心的動きが生じ、その動きは、かの知覺の記憶映像を再び生々とさせ、そしてその知覺そのものを再び呼び起す、從つて實際上

は第一回目の滿足の狀態を再び作らうとするものである。かかる動きが吾々の願望と呼ぶものである。知覺の再出現は願望實現である。そして知覺が欲求昂奮からして十分に生々とさせられることは、願望實現への最短の道である。この道がさういふ工合に步かれる、といふのは、願望作用が或る錯覺作用に終るやうな、精神道具の或る原始的な狀態を假定して、毫も差支ひはない。この最初の精神的活動は或る知覺同一性、卽ち、欲求のかの滿足と結び付いてしまつてゐるあの知覺の反復を、目標としてをるのである。

人生の何か或る苦い經驗はこの原始的な思考行爲をば、もつと目的に適合した第二次的の思考行爲に變化せしめてしまつてるに相違ない。他方に於いて、精神道具の內部に於ける短い逆行的の道を以てこの知覺同一性を作る事は、外部からの同一の知覺の刺戟を必ず生ずる結果を持つものではない。滿足は得られず、欲求は持續する。內的エネルギーの力を外的のそれと同價値にするためには、前者は絕えずきちんと維持されてゐなければならない、それは丁度、錯覺性精神病や饑餓空想に於いて現實に起つてをるのと同じであつて、是等は願望された對象物を固持するだけがその心的仕事である。心的力のもつと目的に適應した利用を遂げるがためには、十分なる

逆行作用を保持し、その結果、その力は記憶映像以上に出でず、そしてこの映像からして、結局外界からによつての願望された同一性の成立に導くやうな、他の道を探し得る事が、必要である。（言ひ換へると、或る「現實の吟味」の挿入が必要だと認識されるのである。）この阻止並びにそれに次いで起る昂奮の轉向は或る第二の組織、それは任意的な運動力を統御してをる、と言ふのは、運動力が前に記憶されてをる目的のために利用されるのはこの組織の仕事があつて初めて出來る、さういふ第二の組織の任務とせられる。然るに、記憶映像からして外界による知覺同一性の成立に至るまでの、一切の複雜なる思考行爲は、畢竟、欲望實現に至るべき、經驗によつて必要となつた、一つの迂回の道を示すにすぎない。（夢の願望實現をル・ロレーンが次のやうに賞揚してをるのは道理である。「由々しき疲勞もなしに、即ち、追求せる快樂を磨滅し腐蝕するところのかの執拗な長い闘爭に訴へるのを余儀なくされる事もなしに」、それが行はれる、云々）蓋し思考は錯覺的な願望の代理物以外の何物でもない、そして若し夢にして願望實現であるとするならば、それこそ解り切つたことである、何故ならば一つの願望以外の何物も吾々の精神といふ道具を驅つて働かしめることはできないのであるから。願望を短い逆行的な道に於いて實現するところの夢は、この點

からすれば、精神といふ道具の第一次的な、そして目的には適應しないものとしてその後見捨てられた働き方の一つの見本を、吾々のために保存してくれたに外ならない。嘗つて精神生活がまだ若くそして無能であつた頃、覺醒時に於いて支配してゐたものが、今は夜間の生活の中へ繫縛せられて現れるのである、それは例へば丁度、吾々が子供の部屋の中に、成人した人類の癈棄せられた原始的な武器、卽ち弓と矢を見出すのと同じであらう。夢みるのは征服された小兒精神生活の一部である。精神病にあつては、普通人の覺醒時には抑壓されてをる精神道具のこの働き方が、再び自己を發揮しようとし、そしてその際に吾々の欲求を滿足させるのにそれが外界に對しては無能力であるのを暴露するのである。（私はこの私の考への展開をば別の箇所に更に詳述を續け、そして兩つの原則として快感原則及び現實原則を擧げておいた。「精神的經過の二原則に關する覺書」參照。Formulierungen über die zwei Prinzipien des Psychischen Geschehens.）

無意識の願望の動きは、明らかに、日中にも自己を發揮しようと努める。そしてかの交付作用の事實並びに精神病は、この動きが前意識の組織を通ずる道を意識へと、及び運動力の支配へと押し進まんとするのである事を、吾々に敎へてをる。無意識と前意識との間の檢閱、これの假定を

夢が吾々に正に强ゆるのであるが、その檢閲を以て、吾々は吾々の精神的健康の番人であると認め、且つ敬はねばならない。さうしたらば、その番人が夜間に活動を減少し、無意識界の抑壓された動きをして表現に至らしめ、錯覺的逆行作用を再び可能ならしめるのは、彼の不用意ではなからうか？　私はさうは考へない。何故かといふと、若しこの批判的な番人が休息に就くとすれば——彼が深く眠ることなどのない事に對しては、吾々はいくつもの證據を持つてゐる——その時には、彼はまた運動力への門をも閉ぢてをるのだからである。普通には阻止されてゐる無意識から出る如何なる動きがその舞臺の上で馳け廻らうとも、それを捨てて置いてよい、それ等の動きは運動の道具を動かすことはできず、そしてこの道具のみが外界に對し變化的な影響を與へ得るのであるから、如何なる動きでも無害でしある。睡眠狀態はその監視せられるべき城塞の安全を保證してくれる。若し力の轉移が批判的な檢閲の力の消費に於ける夜間の殘存のためにでなく、その檢閲の病理的な衰弱のためか、又は無意識的昂奮の病理的昂進のためかによつて行はれるのであれば、そして前意識が力を貯へてをり、運動力への門戶が開いてをる限りは、かの動きは、前の場合に較べて、無害の程度が少い情勢となる。然る時にはかの番人は壓倒せられる。無意識

的昂奮は前意識を征服し、その前意識を通じて吾々の説話や行動を支配するか、又は錯覺的逆行作用を强行し、知覺が吾々の精神的エネルギーの分布に對して及ぼす吸引力を籍りて、自己の爲にと定められたのではない道具を導くかするのである。この狀態を吾々は精神病と呼ぶ。

さて今や吾々は、無意識と前意識と二つの組織に言及すると共にそれを離れてしまつた、あの心理學的構造を續けて組み立ててみるのに、最もよい途上に居るのだが、併しまだ、夢にとつての唯一の精神的原動力としての願望を、もう少し續けて評價しなければならない動機が、十分にある。願望實現より以外何等他の仕事の目標を知らず、願望の動き以外何等他の力を驅使することなき組織無意識の一つの業績が夢なのであるが故に、それ故に夢はいつでも一つの願望實現である、といふ説明を吾々は受け納れた。ところで若し一寸の間でも吾々が夢判斷からして非常に廣くまで及ぶ心理學的思索を引き出す權利を固守する氣があるならば、吾々は次の事を示すべき義務を負ふことになる、卽ち、吾々はかくして夢をば、他の精神的形成物をも包含し得る或る關聯の中へ列せしめるのである、と。無意識といふ一組織が——或ひは吾々の檢討にとつてそれと類似的のものが——存在するとして、夢はそれの唯一の表出ではあり得ない。どの夢でも皆、一

つの願望實現ではあるかもしれないが、併し夢の外に猶ほ他の異常的な願望實現の形式が存在するに相違ない。そして實際上凡ゆる精神神經病的徵候の理論の頂點をなすのは、夫等の徵候も亦無意識のものの願望實現なりと解釋せられねばならない、といふ一つの定理である。(もつと正確に言へば、徵候の一部分は無意識的願望實現に適應し、他の部分はそれに對する反動形式に適應するのである。) 夢は吾々の與へる說明によつては、精神病醫にとつて痛切なる意義を持つ一系列のただ最初の一箇となるにすぎない。そしてこの系列の理解は、精神病醫學的任務の中の純心理學部分の解決を意味するものである。(ヒューリングス・ジャツクソンはかう言つてをつた、夢の本質を發見せよ、然らば諸君は精神錯亂について知り得る一切を見出してしまつたものであらう、と。) 願望實現のこの系列の他の箇々、例へばヒステリー性の徵候に就いて、夢にはまだ見つけられない或る重要な性質があるのを、私は知つてゐる。即ち、この論著の中に屢々揭げられたいろいろな研究からして、一つのヒステリー性の徵候形成の爲には吾々の精神生活の二つの流れが會合しなければならない事を、私は知つてゐるのである。その徵候はただ單に或る現實化された無意識的願望の表現であるばかりでない、猶ほ前意識からの或る願望が加はらねばならない。そしてこの後の

願望は、前のと同一の徴候によつて實現されるのであるから、その徴候たるや少くとも二様に限定されてゐる、互ひに軋轢してをる二つの組織の各々一つ一つによつて。更にそれ以上の超限定には——夢の場合と同じく——何の制限も置かれてゐない。無意識から發生したのでない限定は、私の知る限りでは、定まりきつて、無意識的願望に對する反動の思想の動きである、例へば自己刑罰のやうに。かくして私は全く一般的に下の如く言ふことができる、一つのヒステリー性徴候は、各々が別々の精神的組織を源としてをる二つの相反的な願望實現が會合して一つの表現となり得るやうな場合にのみ生ずるのであると。（これに就いては、「ヒステリー性の空想と雌雄兩性に對するその關係」といふ論文に於けるヒステリー性徴候の成立に關する私の最近の覺書を參考せよ。Hysterische Phantasien und ihre Beziehung zur Bisexualität. 1908）ここに存する複雜さを完全に暴露するのでなければ確信を呼ぶことはできないのであるから、例を擧げても殆ど効はあるまい。であるから私はこの主張だけで止めて置く。そして一つの例を、その證明となる力の故にでなく、ただその直觀的な力の故に、持ち出してみる。或る婦人患者のヒステリー性の嘔吐は、一面に於いては、破瓜期に發する或る無意識的な空想、即ち、絶えず姙娠してゐたい、無數に澤山の子供を持ちた

い、それが後には擴大されてできるだけ澤山の男によつて、子供を持ちたい、といふ願望の實現である、と判つた。この亂暴な願望に對して力强い妨止の動きが起つてをつた。嘔吐によつて患者は身體が痩せ、美しさを失つて、その結果もはや一人の男子も彼女を見て快感を感じないだらうから、その徵候は刑罰的な思想の動きに對しても妥當なわけで、それで兩方の側から承認されて現實となり得たのだつた。バルティエンの女王が羅馬執政官クラッススのために選んだのも、これと同じ願望實現助長の方法である。クラッススは黃金が欲しいために遠征を企てたのだ、と女王は考へた。それで彼女は彼の死骸の口腔へ溶かした黃金を流し込ませた。「さあ、お前の願つたものを、吳れてやるぞ。」夢に就いて吾々は今までただ、それは無意識の願望實現である事を知つてゐるだけである。勢力ある前意識の組織はその願望實現に或るいくつかの歪みを强ひた後に、それを許してやるものであるらしい。夢願望に正反對であつてそして夢の中でそれの反對者の如くに現實化するところの、或る思想の動きを一般的に立證することは、實際上出來ない。ただ夢分析のここかしこに於いて、反動的結果の徵候に吾々は出會つた、例へば伯父の夢に於ける友人Rに對する溫情の如きはそれだ（上卷、第二三六頁參照。）然るにここでは見失はれてをる前意識か

らの附加を、吾々は別の箇所に於いて見出すことができる。勢力ある前意識の組織は眠らうとする願望へ引返し、そしてこの願望をば、精神的道具として自己に可能なるエネルギー量の變更を行ふことによつて實現し、終にそれを睡眠の間ぢゆう固持してをるのに、夢は無意識から發する一つの願望をば凡ゆる歪みを加へた後に表現することができるのである。（この考へを私は現代に於ける催眠術研究の覺醒者たるリエボーの睡眠論から借りた。Liébault, Du sommeil provoqué etc., Paris 1889）

さて、前意識が固持するこの眠らんとする願望は、一般に夢形成を容易ならしめるやうに影響を與へる。死骸を置いた部屋から差す光の影に刺戟されて、死骸は燒け出したかもしれん、といふ推定を行つた．あの父親の夢を思ひ出してみよう。光の影によつて目を覺まさずに、却つて夢のなかでこの推定を下すに至らしめた精神力の一つとして、吾々は、夢の中に描かれた子供の生命をこの一瞬間だけ延長させる、といふ願望を指摘したのであつた。この夢の分析を吾々はなすことができないのであるから、迫害されたものの中から發生してをる他のいろいろな願望が恐らく吾々の眼に入らないでをるかもしれない。しかし吾々はこの夢の第二の原動力としてこの父親の睡眠欲求を附け加へてよい。夢によつて子供の生命が延長させられると同じく、父親の睡

眠も亦一瞬間だけ延長される。この動機が命令する、夢をその儘許しておけ、でないと俺は目を覺まさなければならない、と。この夢と同じに、凡ゆる他の夢に於いても、睡眠願望が無意識的願望に支持を與へてをる。吾々は上卷第四一二頁に、明らかに便宜の夢たることが判る夢について報告しておいた。實を言へば、總ての夢はこの便宜の夢といふ稱呼を要求するものである。外部の刺戟を加工してそれが睡眠の繼續と妥協し得るものとなし、外部の刺戟が外界への警告として持ち出し得る要求を捥ぎ取つてしまふために、それを一つの夢の中へ織り込むことをする、かの目覺しの夢の中にあつては、もつと眠り續けたい願望の働きは最も容易に認められる。併しただ內部からだけ睡眠狀態を搖り動かして目を覺まさせようとする凡ゆる他の夢の許容に對しても、同一の睡眠願望が同じやうに參加してをるに相違ない。夢があまり亂暴になると、前意識が時々意識に向つて言つてやること、だが打つちやつておけよ、そしてもつと眠つてをれ、なあにほんの夢なんだ、といふのは、あれは假令默々たる儘に留まつてるにもせよ、夢をみる作用に對する吾々の主要精神活動の態度を、全く一般的に言ひ現すものである。私は次の如き推論を下さねばならない、吾々は睡眠狀態の間全部を通じて吾々が眠つてをる事を自から知つてをるのと同じく

確かに吾々が夢みてる事を自から知つてをるのである、と。この推論に反對する抗議、即ち、吾々の意識は夢を見てる事を知る方へは決して導かれない、そして眠つてる事を知る方へ導かれるのは、檢閲が奇襲を受けたやうに感ずるやうな一定の機會に於いてのみである、といふ抗議はどうしても輕視せられねばならない。(この抗議に向つて吾々は下の事を言つてやる事ができる。自分が眠つてゐてそして夢を見てゐる自覺が夜の間固く維持されてをる事が全く明らかである人々がをる、從つてその人々には夢生活を導く或る意識的な能力が固有である樣に思はれるのである。かやうな人が夢を見てゐて、例へばその夢が取る轉向に不滿であると、彼は目を覺すことなくして、その夢を中斷し、そしてそれを別な工合に續けるために新しく始める、その狀全く、或る人氣作者が要求に應じてその芝居に一層お芽出度い終りを與へる、と同じである。或ひはまた、別の場合に、例へば夢が彼を或る性的昂奮の境遇に置いたりすると、彼は眠りながら考へる、「こんな夢を續けてみて、夢精をやつて身體を疲れさせたくない、そんなことは止めて、いつそ本當の場合のために貯へておいた方がよい。」――デルヴェー公爵は夢の經過を思ふ儘に早めさせ、そしてそれに自分の好きな通りの方向を與へることができるほど、自分の夢を支配する力を得てをる、と主張した。彼にあつては眠らうとする願望は或る他の前意識的な願望、即ち自分の夢を觀察しそしてそれ

を以て娛しまうとする願望に、餘地を與へてをつたらしい。睡眠はかやうな願望計畫に對しては、丁度覺醒の條件としての或る留保に對してと同じく、妥協するものである。又、夢についての興味は凡ゆる人間に於いて覺醒後に思ひ出す夢の數を著しく高めてる事も、周知である。——夢の指導についての他の觀察に關してフェレンチィはかう言つてをる。「夢は精神生活をその時煩はしてをる思想をば凡ゆる方面からして加工する。願望實現が失敗しさうな危險に瀕すると夢映像の一つを捨て、或る新しい種類の解決を試み、そして終には、精神生活の兩つの關門を妥協的に滿足させるやうな一つの願望實現を作り出すのに成功する。」

第四節　夢による覺醒——夢の機能——恐怖の夢

前意識は夜の間を通じて眠らうとする願望を心がけてをる事實を知つてから、吾々は夢の經過を理解を以てもつと先へと追跡することができる。併し先づ吾々はこの經過についての吾々の今までの知識を總括してみよう。覺醒時仕事のうちから日中殘存物が殘つた儘になつてをつて、それのエルギー含量は全然には拔け切つてゐない。或ひは、日中の覺醒仕事のために無意識願望の或る一つが動き出してをる。又は、この二つの事情が一緒になることもあらう。そのいろいろ

な可能性を吾々は既に檢討してみた。早くも日中の間にか、又は睡眠の狀態が成立して漸くか、かの無意識的願望はかの日中殘存物へ向ふ道を拓いてしまひ、自己の力をそれへ交付することを成し遂げてしまつた。すると今や、近時的材料へ移された一つの願望か、または、抑壓された近時的願望かが、無意識からの强化によつて、新しく活氣づいて來た。その願望は、何か或る要素の關係でそれに附屬してをる意識界を通過する思想經過の常態的な道を經て意識へと押し進まうとする。けれども彼は、既に近時的への移行によつて始められてゐた歪みの作用を受ける。ここまでは、願望は或る恐迫表象、或る妄想觀念等のものと似た或るものに、即ち、交付作用によつて强化せられ、檢閱によつて表現を歪められた一つの思想にならうとする途上にある。然るに今や、前意識の睡眠狀態はそれから先への侵入を許さない。恐らくはこの組織は自己の昂奮を低下することによつてこの侵入に對して防禦したのかもしれない。かくして夢の經過は、丁度睡眠狀態の特色によつて開かれた逆行の道を歩み出し、そしてその際、記憶の諸群がその經過に對して及ぼすところの吸引に應ずるのであるが、これ等の記憶群の一部分はそれ自からがただ視覺的エネルギー量としてのみ存在し、これから後のいろいろな組織の徴候へ飜譯されたものとしては存

在してゐない。逆行への途上に於いて夢經過は表出可能性を獲得する。壓縮については後に論ずるであらう。これで夢經過は再々折り曲げられた經路の第二の部分を後にしてしまつた。その第一の部分は無意識的場面又は空想から前意識へと前進的に織りなされたが、第二の部分は檢閲の關所のところから以來再び知覺に達しようと努める。しかし若し夢經過が知覺內容となつてしまつたなら、それは檢閲と睡眠狀態によつて前意識のなかに置かれてあつた障礙を、謂はば迂回して避けてしまつたのである。注意を自己の方へ引き、そして意識によつて認められることが、夢經過に成功する。意識とは吾々にとつては精神的性質の理解のための一感覺器官を意味するものであるが、この意識は覺醒時に於いては二箇所からして昻奮を受け得る。第一には、精神といふ道具全體の周邊、卽ち知覺組織から。その他には、この道具の內部に於けるエネルギーの動きの際に生ずる唯一の精神的性質たるべき快不快の昻奮から。其他の精神組織に於ける一部の經過は、前意識界に於けるそれすらも、凡ゆる精神的性質を缺くものである。そしてそれ故にそれ等は、快又は不快を知覺に提供しないといふ限りに於いては、意識の對象ではない。この快と不快の放出はエネルギーの動きの經過を自動的に統制してをる、といふ假定を吾々は立てねばならないの

であらう。だのに、一層微妙なる機能を可能ならしめるためには、表象經過を不快徴候からは獨立して構成させる必要ある事が、後になつて發見されたのである。その目的のためには、前意識組織は、意識を吸引することができるやうな自己の性質を必要とし、そしてそれを、前意識的經過が言語符號のやはり有性質的な記憶組織と結合することによつて、有するに至つたらしい。記憶組織のいろいろな性質のおかげで、以前にはただ知覺に對する感覺器官にすぎなかつた意識が、今や吾々の思考經過の一部分にとつての感覺器官となる。今や謂はば二つの感覺表面が生じ、一方は知覺に、他方は前意識的經過に向いてをることになる。

前意識に向けられた意識の感覺表面は、知覺組織の方を向いてをるそれよりも、睡眠狀態のために遙かにより多く非昂奮的となる、といふ假定を私は立てねばならない。夜間の思考經過に對する興味が中止するのも、眞に合目的的なわけである。思考作用に何事も起つてならない、前意識は眠る事を望んでをる。然るに若し夢が一旦知覺となつてしまふならば、夢は今獲得したその性質のために意識を昂奮させることができる。感覺の昂奮はその元來の機能を行ふ。感覺の昂奮は前意識の中にあつて使用し得るエネルギー含量の一部分をば、その昂奮の刺戟に對する注意力

として指揮するのである。であるから、夢はいつでも覺醒させる、前意識の休息中の力の一部分を活動させる、といふ事は承認されねばならない。夢はこの力から、吾々が前に全體の聯絡と理解のために第二次加工作用と名づけた、あの影響を蒙る。言ひ換へると、夢はこの作用によつて凡ゆる他の知覺內容と同じく取扱はれる。夢の材料が許す限り、夢は知覺內容と同一の期待表象に從ふのである。夢經過のこの第三部に於いて經路の方向を問題とすれば、それは矢張り前進的である。

誤解を防ぐために、この夢經過の時間的特性について一言附け加へておく。明らかにモーリの斷頭臺の夢の謎によつて刺戟されたゴブローの或る非常に面白い考察は、夢は睡眠と覺醒の間の過渡期の時間以外の何等の時間をも要求するものではない事を、說明しようと試みてをる。目が覺めるのには時間が要る、この時間の間に夢が起る。吾々の夢の最後の光景は非常に强力なので、それが覺醒を促したのである、と考へられてをるが、併し實際は、吾々はその光景の時には旣に覺醒に近づいてをつたから、それでその光景はそんなに强力なのである。(「夢は始まりつつある覺醒である。」)

ゴブローがその說を一般的に支持せんとするならば、數多の事實的なものを先づ片づけねばならない、といふ事を既にデュガが力說してをる。夢みてる者がそれから目を覺まさない夢もある。例へば、自分が夢みてる事を夢みてる夢もある。夢の仕事について知つてしまつた後では、吾々は、夢の仕事が覺醒作用の時期の間だけに擴がつてるものだ、とは承認することはできない。その反對に、夢の仕事の第一部は既に日中に、前意識の支配の下に始まつてをる、といふ方が吾々にとつてはありさうな事に思はれねばならない。その第二部、即ち檢閱による變更、無意識的場景による吸引、知覺への迫進、それ等は確かに全夜中繼續する、そしてその限りに於いては、假令何であつたかは言ふことができないにしても、夜通し夢をみてをつた、といふ氣持がしたと吾吾が言ひ出すのは、常に道理ある事なのである。併し私は、今說明したやうな時間的繼續を、即ち、先づ第一に交付作用を受けた夢願望があつた、次に檢閱のための歪みが行はれた、そしてそれに次いで逆行への方向轉換が起つた、といふやうな繼起を、夢の經過が意識に至る迄の間行つたのである、などと假定する必要があるとは考へない。吾々はかやうな繼起を記述のため作つてみねばならなかつたのであつて、實際に行はれるのは寧ろ、あの道を取らうか、この道を取らう

か、と同時的に試みてみることや、昂奮があつちへ波打ち、こつちへ波打つことやが主であつて、そして終にそれ等のものの最も合目的的な堆積によつて、或る一つの群が殘るのである。私自身は或る箇人的な經驗に基いて、夢の仕事はその結果を生むためには一日一夜以上を必要とすることも屢々である、と信じたい。そして若しこれが本當だとすれば、夢の構造に於けるかの非凡なる術も總ての不可思議さを失つてしまふ。知覺の結果として理解を得ることに對するあの顧慮でさへ、私の意見では、夢が意識を自分の方へ惹きつける以前に作用してをるのである。意識を惹きつけてから先は、夢は今や他の知覺されたものと同一の取扱ひを受けるのであるから、勿論或る促進を得る。それは丁度、數時間の間かかつて用意され、そして後に一瞬間に點火される煙火のやうなものである。

さて、夢の仕事によつて夢經過は、意識を自己へ惹きつけそして前意識を目ざめさせるだけに十分な、そして睡眠の時間と深さとからは全く獨立した强度を獲得するか、或ひは又、その夢の强度はそれには十分でない、それで目の覺める直前に於いて、一層活動的になつた注意が自己を迎へてくれるまで、用意の出來た儘で待つてゐなければならないか、どつちかである。大抵の夢

は比較的僅少なる精神的强度を以て仕事をするらしい、何故かといふと、それ等の夢は覺醒を待つてをる方であるから。吾々が突然に深い眠りから呼び起されると、吾々は普通に何か夢みてたものを知覺する事實も、かうして說明がつく。さういふ場合には、自然に目が覺める場合と同じく、第一の注意は夢の仕事によつて作られた知覺内容へ注がれ、その次の注意は外から與へられたものに注がれるのである。

併しもつと大きな理論的興味は、睡眠の最中に覺まさせることのできる夢に、向けられる。他の夢に於いてはいつでも證明の立つかの合目的性のことを想起して、何故に夢に對して、卽ち無意識的な願望に對して、前意識的な願望の實現である睡眠を妨害する力が許されるのであるか、と問を出すであらう。これはエネルギーの關係に由るものに相違ないと思はれるが、その關係を吾々は見拔くことはできない。若し吾々にしてこの洞察を有してゐたならば、夢の自由默認と注意の或る一部分の消費とは、無意識は日中と同じく夜の間も制限の中に入られてゐなければならない事を考へての、夢のためのエネルギーの儉約を現すものである、といふ事情が眞實らしいと判るのであらうのに。經驗の示すところでは、夢みる作用は一夜の間に數回も睡眠を中斷する場

合であつてすらも、睡眠と妥協し得るものである。吾々は一瞬間目を覺す、そしてすぐ再び眠り込む。それは丁度、眠りながら蠅を追ひ拂ふのと同じだ。吾々は ad hoc に（或る一定の箇々的な目的のために）目を覺すのである。再び眠り込んでしまへば、その妨害を排除してしまつたのだ。睡眠願望の實現は、寢小便等の既知の實例が示すやうに、注意力の或る消費を一定の方向へ保持することと全く合致し得るのである。

併しここで一つの抗議に耳を傾けねばならない。この抗議は無意識的な諸經過についてのよりよい知識に立脚するものである。吾々は無意識的願望は單に動いてるものだと言つた。然るにそれは日中には覺知されるだけ十分に強力でない。然るに睡眠狀態が存續しそして無意識の願望が一つの夢を形成しそれを以て前意識を目ざめさせる力を示したのに、その夢が知られてしまつた後に於いては、何故にこの力が働きをしなくなるのであるか？ 寧ろ夢は、丁度邪魔物の蠅が追ひ拂つても追ひ拂つてもやつて來るのと同じに、斷えず更新されるのが當然ではなからうか？夢が睡眠妨害を排除する、と吾々が主張するのは、如何なる理由を以てであるか？

無意識の願望が常に動いてをる、といふのは全く正しい。昂奮の或る定量がこの願望を利用す

る限りは、この願望は常に歩き得る道を表示する。無意識的經過は破壞すべからざるものである。これはこの無意識的經過の一の嶄然たる特異性でさへあるのだ。無意識界に於いては何物も終ることなく、何物も過ぎ去つたり、又は忘れられたりすることはない。この事については、吾々は神經病、特にヒステリー症の研究に際して最も強い印象を受ける。發作の際に放出される思想の無意識的な流れは、昂奮が十分に集拾されてしまふや、直に再び動き出す。三十年前に起つた屈辱は、それが無意識界の情念源泉へ入り込んでしまつた後に於いては、その三十年の間、恰かも今受けたばかりの屈辱のやうな作用をする。それの記憶が搖り動かされる度に、それは再び生き返へり、そして昂奮を以て充たされてをるが、その昂奮は或る發作となつて運動を起し放出されるに至る。精神治療學は正にここに手を着けねばならない。精神治療學の任務は、あの無意識的な經過の爲に解除と忘却を與へてやることである。卽ち、吾々がそれを自明的なものと考へ、且つ精神的記憶殘存に對する時間の第一次的影響だと說明するに傾いてるもの、記憶の褪色と、もはや近時的ではなくなつた印象の情念衰退と、これは、實際に於いては、骨折りに充ちた勞役によつて成立する第二次的變更なのである。この勞役をなすものは前意識であり、そして精神治療

學は無意識を前意識の支配に服從させるより以外何等の道をも辿ることはできない。

かくして箇々の無意識的昂奮經過にとつては、二つの出口がある。その經過が放任された儘でゐる、その時にはそれは終には何處かを突き破り、自己のこの度の昂奮のために運動力への放出の道を作つてやるか、或ひは、その經過は前意識の影響下にある、その時にはその昂奮は前意識によつて放出されずに束縛されるか、いづれかである。然るに夢經過にあつては後の場合が起る。エネルギーは意識的昂奮によつて導かれたのであるから、そのエネルギーが前意識の側からして、知覺となつてしまつた夢を迎へる時には、その夢の無意識的昂奮をそのエネルギーが束縛して、そしてそれを妨害として無害なものにする。夢みてる人が一瞬間目を覺すならば、その時に彼は實際、睡眠を妨害せんと脅かした蠅を追ひ拂つてしまつたのである。今や吾々には次のやうな豫感が起り得る、卽ち、無意識を睡眠の全時間中抑制しておくよりは、無意識的願望を許容し、それに逆行への道を自由に步ましめ、そして以て一つの夢を形成させ、しかる後この夢をば前意識勞力の小さな消費によつて束縛し、夢の役目を果さしめる方が、實際、より合目的的であり、より安價であつたのだ、と。假令夢は元來は何等合目的的な經過ではなかつたのであるにもせよ、

精神生活の力の運轉の間に於いて夢は或る一つの機能を手に入れてしまつたのであらう、といふ事が期待されたのである。この機能が如何なるものであるか、吾々に判る。夢は無意識の放任された昂奮を再び前意識の支配の下へ持ち來すべき任務を引き受けてをる。その際夢は無意識界の昂奮を放出させ、自からはその安全瓣の役目を勤め、同時に覺醒活動の僅少な消費によつて前意識の睡眠を安全にしてやる。かくして夢は、その類の他の精神的形成物と全く同じく、仲介者として、前意識と無意識と兩者の願望を、それが相互に妥協し得る限りに於いて實現し、以て兩意識に對して同時的に役立つ地位につくのである。上卷第一三七頁に報告してあるローベルトの「排泄說」を一見するならば、吾々はこのローベルトに對しその前提と夢經過の評價の點については同意しないが、眼目、卽ち夢の機能の決定に對しては贊成を與へねばならないことが判るであらう。

(これが、吾々が夢に對して認めてやることのできる唯一の機能であらうか? 私は外に一つの機能をも知らない。メーデは成程夢のための他の「第二次的の」機能を要求しようと試みてはをる。彼は、夢の中には、爭鬪の解決の試みを含み、そしてその試みは後になつて現實的に實行される、從つて覺醒活動に對して前稽古のやうな關係に立つところの夢も澤山ある、といふ正しい觀察から出發した。それ故に彼は夢の作用をば、

持つて生れた本能を練習的に實行するもの、そしてこれから後の眞劍な行爲に對する準備であると解せられるべき、動物や小兒の遊戯と、竝べてみた、そして夢作用の fonction ludique なるものを提出した。メーデよりも少し前に、夢の「前以て考へる」機能はアードレルによつても力說されてをつた。私が一九〇五年に發表した或る分析の中では、計畫と解せられるべき夢が毎夜毎夜、その實行に至るまで、繰り返へされてゐた。——併しながら少しよく考へてみれば、夢のこの「第二次的の」機能なるものは夢判斷の範圍内に於いては何の承認にも價しない事が考へられるに相違ない。前以て考へるとか、計畫をつけるとか、解決の考案とか、それ等は後に時として覺醒時に於いて實現されるかもしれないが、それ等及び他の多くのものは、精神の無意識的及び前意識的活動、それは「日中殘存物」として睡眠狀態の中へも繼續せられ、然る後に夢形成のために或る一つの無意識的願望と會同するところの、精神活動の業績である。從つて、夢の前以て思考する機能は寧ろ前意識的覺醒思考の一機能であり、それの結果は、夢又は他の現象の分析によつて暴露され得るのである。世人は夢をその顯在的内容と合致させることを隨分長い間やつてをつたのであるが、それを止めた後に於いて今度は、夢をその潛在的夢思想と取り違へることをしないやうにも用心しなければならない。)

兩方の願望が相互に妥協し得る限りに於いて、といふ限定は、夢の機能が中途挫折するに至る

可能的な場合に對する一つの指示を含んでゐる。夢經過は先づ無意識の願望實現として許される。若しもこの試みられた願望實現が前意識を非常に强度に搖り動かし、その結果前意識がもはやその休息を保つことができなくなる時には、夢は和解を破つたのであり、自分の任務の第二部をもはや實行しなかつたのである。然る時には夢は直ちに中絶せしめられ、完全なる覺醒がそれに代る。普通には睡眠の保護者である夢が今はその妨害者となつて現れねばならないとしても、それは實は夢の罪ではない、そして吾々はそのために夢の合目的性を疑ふの必要はない。これは有機體に於ける唯一の場合、即ち、普通には合目的的な或る設備が、それの成立の條件のうち何物かが變更せられるや否や、非合目的的で妨害的となる、ただ一つの場合ではない。そしてかかる場合には、その妨害には少くとも、變更を通告しそしてその變更に對抗する有機體の統制手段を呼び覺まさうとする新しい目的に、役立つのである。かく言ふ私は勿論恐怖の夢を考へてをる、そして願望實現の理論に反對するこの證人を私が回避するやうな外觀が尤もらしく考へられないために、私はせめて暗示を以てでもこの恐怖夢の說明に肉薄してやらうと思ふ。

恐怖を展開する一つの精神經過が猶ほ且つ一つの願望實現であり得る、といふ事は、吾々にと

つては久しい前からもはや何等の矛盾を含まざるものである。吾々はこの出來事を次のやうに、即ち、願望は無意識の組織に屬するが、前意識の組織はこの願望を排斥しそして抑壓してをるのである、といふ工合に說明をする。(「第二に考察すべきは、素人が誰でも等閑に附してゐる非常に重要な非常に深奧な因子に就いてである。即ち一般に願望實現は確かに快感を齎らすに違ひない。併し、一體誰に快感を齎らすのであるか。勿論願望を抱いたその當人に齎らすのだ。だが、私達は夢見た人の自分の願望に對する態度は全く特殊なものだといふ事實を知つてゐる。夢見た人はその願望を非難し、檢閱する。一言で申せば夢みた人はその願望を承認しないのだ。即ち願望の實現は夢見た人に何等の快感をも齎らし得ないのである。快感どころか、快感とは正反對のものだけを齎らすのだ。この快感と正反對のものが何であるかは未だ說明されてはゐないが、經驗上正反對のものは恐怖の姿を以て現れてくる。だから夢見た人の自分の夢の願望に對する態度から言へば、夢見た人は恰かも二人の別人の合體である、而も二人はある重要な共通點で固く結びついてゐる、と譬へられる。この事實を詳細に述べる代りに、私は諸君に有名なお伽噺を語ることにする。そして諸君はこのお話のなかにこれと同じ關係を發見するに相違ない。親切な魔法使が貧乏夫婦二人に三つの願望かなへてやらうと約束した。夫婦は雀躍して、十分愼重にこの三つの願望を選擇しよう

と決心した。ところが妻は隣の家で焚いてゐる腸詰の香氣に迷はされて、ああ、あんな腸詰を二つ欲しいなと思つた。忽ちに腸詰が目の前に現れた。これで第一の願望が實現されたのである。これを見て良人は立腹して憤怒のあまり、糞、こんな腸詰など嬶の鼻さきにぶらさがれと願つた。腸詰は妻の鼻さきにぶらさがつた、腸詰はその鼻さきからどうしても取れなかつた。これは第二の願望實現で、この願望は良人の懷いた願望である。その實現は妻にとつて至つて不愉快なものである。諸君もこのお伽噺のおしまひを御存じであらう。二人は結局のところ夫婦として一體であるのだから、第三の願望として腸詰が嬶の鼻さきからとれるやうにと願つたに相違ない。私達はこのお伽噺をいろいろな意味に於いて何度も拜借したいのであるが、唯今のところは單に、二人がお互ひに一致しなかつたなら、一人の懷く願望實現は片方の人には不愉快なものになる、といふ事實を解說するために引用したことにする。」精神分析入門。安田德太郞氏譯、上卷、三一三頁以下)。前意識による無意識の抑壓は十分に精神の健全なる場合に於いてすらも、決して隈なく行き亙るものではない。この抑壓の程度が吾々の精神の常態性の程度を現す。神經病の徵候はこの兩つの組織が相互に爭闘してをる事を告知するものであり、その爭鬪に一時的の終りを與へる妥協和解の結果である。あれ等の徵候は一方では無意識に對してその昂奮の放出の爲に一つの出

口を與へ、脱出の門の役目を勤めてやる。そして而も他方に於いては、前意識のために無意識を若干統御する可能性を與へてやる。例へばヒステリー性恐怖叉は場處恐怖の意味を考察してみれば得るところが多い。或る神經病患者は獨りで街路を橫切る力がない。これを吾々は「徵候」として引用してよろしい。さて、この患者を强制して、患者自身がそれをなす力が無いと信じてをるこの動作を行はしめて、この徵候を解消させようとする。さうすると恐怖の發作が起る、これは、丁度街路上に於ける恐怖發作が屢々場所恐怖の發生に對する動機となつてをるのと同じことである。かくして吾々は、かの徵候は恐怖の爆發を禦がんが爲に構成されてをるのである事を知る。恐怖症は恐怖に對して一つの國境要塞の如くに設けられてをる。

吾々の檢討は、若し吾々にしてこれ等の經過に際しての情念の役目如何の問題に立入ることをしなければ、これ以上進むことはできない。その問題に立入ることは併し、ここではただ不完全にしか可能でないのである。即ち、無意識の抑壓は何よりも先に次の原因から、放任されてをる表象經過は無意識界に於いて、元來は快感の性質を持つてゐたが排斥作用經過以後は不快の性質を帶びてをる、さういふ情念を伸張せしめるかもしれないが故に、といふ原因から必要となるの

である、かういふ命題を吾々は揭げる。抑壓作用はこの不快の伸張を禦ぐ目的を持ち、更に又、それを禦ぐのに成功する。抑壓作用は無意識の表象內容の上へ及ぶが、それは、その表象內容からして不快の發生が起り得るからである。これについては、情念展開の性質に關する或る全く一定的な假說が根據に置かれてをる。情念展開は或る運動力的又は分泌作用業績なりと見做され、その業績の神經分布の鍵は無意識の表象の中にある。前意識の側からの統御によつてこれ等の表象は謂はば縊め殺され、情念を展開しつつある衝動の擴大を阻止される。從つて、前意識の側からの占領が止む場合に於ける危險は、無意識的昂奮が情念——それはより以前に行はれた排斥の結果、ただ不快として、恐怖としてのみ感ぜられ得るやうな情念——を產み出す、といふ點に存する。

この危險は夢經過の放任によつて持ち上がつてくる。この危險の實現化に對する諸條件の主なるは、排斥作用が行はれてしまつてをる事、及び抑壓された願望の動きが十分强化し得る事である。即ちそれは、夢形成の心理學的範圍の全然外部にあるものだ。若しも吾々の論題がこの一點によつて、即ち睡眠中の無意識の解放といふ一點によつて、恐怖の情の展開の題目と觸れ合つて

るのでなかつたならば、私は恐怖夢に論及することを斷念し、それに關聯する曖昧な諸點をここに放置しておいてもよかつたであらうが。

恐怖夢の學説は、私が繰り返へし口外した通り、神經病心理學に屬してをる。吾々にして一旦それと夢經過の論題との接觸點を指摘してしまつた後に於いては、吾々はもはやこれ以上それを相手にする必要は全くない。私のなし得ることはまだ漸く一つだけある。神經病的恐怖は性的源泉から發してをる事を私は主張したのであるから、私は恐怖夢の夢思想の中にある性的材料を證明するために、いくつかの恐怖夢を分析にかけてみることができるのである。

立派な理由によつて私は、神經病患者が豐富に私に提供してをる凡ゆる實例を擧げることは斷念し、若い人々の恐怖夢を特に選み出すことにする。

私自身は數十年この方もはや一つも本當の恐怖夢を見たことはない。七歳か又は八歳の頃にみた一つの恐怖夢を私は記憶してゐて、ほぼ三十年も後にそれに判斷を加へてみたことがある。その夢は非常に生々としたもので、私に母を見せてくれた。「母は異常に落ち着いて眠つてるやうな顏の表情をして、二人（又は三人だつたか）の人々によつて鳥の嘴を以て部屋の中へ運ばれ、床

に寢かされた。」私は泣き叫びながら目を覺し、そして兩親の眠りを妨げたのだつた。鳥の嘴をした背の高すぎる――異様に布地を以て蔽はれた――姿を、私はフィリップソンの聖書の挿畫から借りたのであるが、あれは埃及のどこかの墓の浮彫から取つた鶚の頭をした神々だつたらう、と思ふ。その他に併し分析は私に、差配の家の行儀の惡い一人の少年についての記憶を提供した。この少年と吾々子供達は家の前の草原で遊ぶのが常であつた。彼の名がフィリップであつたことを言つて置きたい。次には、私はこの少年から初めて性交を現す野卑な言葉を聞いたのだつた、といふ氣がした。その言葉の代りに敎養のある人々はラテン語の Koitieren を使つてをるが、鶚の頭が特に選まれて現れた事によつてその野卑な言葉の特徴は十分明瞭に示されてをるのである。私はこの言葉の性的な意味を世慣れた學校の先生の顏付から推測してをつたに相違ない。夢の中の母の顏の表情は祖父の顏面から摸寫されてをつた。私はこの祖父が死ぬ二三日に嗜眠狀態で鼾をかいてるのを見たことがあつた。それでこの夢に於ける第二次加工作用の判斷は、母が死ぬ、といふのであつたに相違ない。墓の浮彫もそれに合致する。この恐怖の中に私は目を覺し、そして兩親を目ざめさせるまでは止めなかつた。母の姿が目に入つた時に、恰かも私は、そら、

彼女は死んぢやゐないんだ、といふ安心を必要とでもしてをつたものかのやうに、突然安心したのを憶えてをる。夢のこの附隨的判斷は併しながら既に展開された恐怖の影響の下に行はれたのである。母が死ぬ夢を見たが故に私は心配になつたのではない、却つて、私は既に恐怖の支配下に立つてをつたが故に前意識的加工の間にさういふ工合にこの夢を判斷したのであつた。ところでその恐怖は、排斥作用を通して、或るぼんやりした、明らかに性的なる慾情に溯るのであつてそれはこの夢の視覺的內容の中に立派に表現されてをつたものである。

一年以來ひどく惱んでゐる二十七歲の男が、十一から十三歲の間に幾回も重い恐怖の下に、次の夢を見た、「一人の男が斧を持つて彼を追ひかけてくる。彼は走りたいと思つた、併し痲痺したやうで、その場から動けなかつた。」これは、極く一般的な、性的な點で疑ひのない恐怖夢のよい一例である。分析をしてみると、この夢を見た男は先づ伯父から聞いた話、卽ち彼が衝路で一人の怪しげな人物から夜中襲はれた、といふ話を思ひついたが、その話を聞いたのは、時代からすると夢より後のものであつたが、彼自身はこの思ひ付きからして、彼がその夢の頃に何か類似的な體驗を聞いてをつたのかもしれない、と推定を下した。斧に對しては彼は、その年頃の時に一

度薪を割らうとして斧で手に負傷をしたことがあつたのを思ひ出した。やがて又彼は突然に彼の弟に對する自分の關係に思ひついた。この弟を彼は虐めたり投げ倒したりするのが常であつた。そして彼は特に、或る時の事、彼が弟の頭に長靴を叩きつけたので弟は血を出し、母が、お前はいつか弟を殺すかもしれないやうで氣がかりだ、と言つたことがあるのを思ひ出した。かく彼は暴行の事項のみを固執してをるやうに見えるかと思ふと、實に九歳の時の或る記憶が彼に浮んで來た。兩親は夜晩く歸宅した。彼が眠つたふりをしてをると、兩親は床に就いた、そしてやがて彼は喘ぐやうな、又、彼には氣味惡く思はれた他の雜音を聞いた、そして兩人の寢床の中に於ける形勢をも推測することができた。彼の他のいろいろな思想は、兩親のこの關係と、彼の弟に對する關係との間に、彼は或る類似を作つてしまつてをつた事を、示してをる。彼は兩親の間に起つた事柄を、暴行と摑み合ひなる觀察の下に總括したのであつた。彼にとつてこの解釋を裏づける一つの證據は、彼は時々母の寢床の中に血を認めたことであつた。

大人の性交がそれを見つけた子供等にとつては不氣味に思はれ、そして彼等の心に恐怖を呼び起す事は、日々の經驗の示すところだ、と私は言ひたい。私はこの恐怖に對して次のやうな說明

を與へた、即ち、問題の中心は一種の性的昂奮であるが、その昂奮は彼等子供等の理解にとつては手に負へないものであり、且つその中へ兩親が捲き込まれてをるがために拒否せられ、そしてそれがために恐怖に變形するのである、と。未だもつと年少の時代には、父母いづれかのその小兒と性的對照する側への性的昂奮は、まだ排斥に會ふことはない、そして自由に現れたことは、既に前に知り得たところである。(上卷第四四五頁)。

小兒にかく屢々現れる錯覺を伴へる夜の恐怖發作(pavor nocturnus)に對して、私は躊躇なく同一の說明を應用するであらう。この發作にあつても亦、中心は理解せられなかつたそして拒否せられた性的昂奮であつて、性的リビドの昂揚は偶然的に刺戟する印象によつてと同じく、自然的な段々に現れる發達經過によつても亦、生ぜられ得るものであるのだから、かの小兒發作の性的昂奮を書き列べてみるならば、恐らくは或る年代的な週期律が發見せられるであらう。

この說明を貫徹するためには、必要な觀察材料が私には缺けてゐる。(この材料はその後精神分析學文獻によつて豐富に提供せられてをる。)反之、小兒科の醫師達には、それのみが大きな一群の現象の理解をば身體的方面からも竝びに精神的方面からも與へるところの、觀點が缺けてをる

やうに見える。醫學の神話の遮眼革によつて盲目にされて、かかる場合の理解を如何に世人が素通りしてをるか、に就いての一つの滑稽な實例として、私はデバッカーの小兒夜間恐怖發作に關する論文の中に發見した事件を引用したい。(Debacker, Terreurs nocturnus des Enfants. 1881. p. 66)

虛弱な十三歲の一少年が過敏となり夢見がちになり始めた。彼の眠りは不安となり、そして殆ど每週一度錯覺を伴ふ恐怖の重い發作によつて妨げられた。それ等の夢に對する記憶はいつも甚だ明瞭であつた。であるから彼は、惡魔が彼に、さあ、俺達はお前を捕らまへたぞ、さあ、お前を捕らまへたぞ、と呼びかけた、そしてその後で瀝靑と硫黃の匂ひがし、火が彼の皮膚を火傷さした、と語ることができた。その夢からやがて彼は驚いて目を覺ました、最初は叫ぶこともできなかつたが、後に聲が出るやうになり、明瞭に次のやうに言ふのが聞かれた、「いや、いや、僕をぢやない、僕はだつて何もしないんだもの」とか、又は、「ご免よ、捕へないで頂戴よ、僕はもう決してしないから。」二三度はまたこんなことを言つた、「アルベールがそれをやつたんぢやないよ。」後には彼は着物を脫ぐのを避けた、「着物を脫いぢまつたら、火が付くばかりだもの。」彼

の健康を危險に曝らしたこれ等の惡魔の夢に惱まされてる最中に、彼は田舍へやられた。其處で一箇年半の間に健康を囘復し、後で十五歲の時一度次のやうに告白した。「私は敢て自認しかねたが、併し實際、遊樂に對する衝動と昂奮とを斷えず感じてゐた。遂にはそのためにひどく苛立つて、幾度も寢室の窓から身を投じようと考へたほどである。」

次の諸點を推量することは確かに困難ではない。（一）、この少年は以前に手淫をやつた、だが恐らくそれを否定して、そしてその不行儀に對して重い罰を以て嚇されたことがあつた。（「僕はもう決してしないから」といふ告白、「アルベールがそれをやつたんぢやないよ」といふ否定。」（二）、春機發動期の衝動の下にあつて、手淫の誘惑が生殖器を捺つてるうちに再び目覺めた。（三）、併し今では排斥の爭鬪が彼の心に始まり、リビドを抑壓し、そしてそれを恐怖に變形せしめたのであるが、その恐怖はあの頃に嚇かされた罰を今になつて追補的に取りあげたのである。

然るにこれを報告した著者の推論を聞いてみよう。「この觀察からして次の諸點が明らかになる。（一）、健康の衰弱した少年に於ける春機發動期の影響は非常に虛弱な狀態を招ぐ、そして甚だ著しい腦貧血に至ることがある。（二）、この腦貧血が性格の或る變化、惡魔幽鬼の錯覺と非常

に烈しい夜間の、恐らくはまた日中の、恐怖狀態を生ずる。(三)、少年の惡魔幽鬼の錯覺と自己非難は、小兒の時に彼に作用した宗敎的敎育に溯る。(四)、總ての現象はかなり長い田舍滯在の結果、身體の鍛錬と精力の囘復とによつて、春機發動期の經過後に消失してしまつた。(五)、恐らく吾々にはこの少年の腦貧血に對する素質的影響を、遺傳とその父親の古い梅毒とに歸してよいであらう。——結語はかうであつた。「吾々はかかる觀察を飢餓の無熱的錯亂の範圍内に置いた。なぜなら、この特殊の狀態を腦貧血に關係あるものとなすからである。」

第五節　第一次經過及び第二次經過——排斥

夢經過の心理學へより深く押し入らうとする試みを敢てすることによつて私は、私の敍述法では殆ど片づけることができない一つの難しい仕事を企ててしまつたのである。あのやうに複雜な關聯の同時性をば繼起的な敍述によつて再現し、そしてそれにも拘らずどの提示に於いても假說を含まぬやうに見えることは、どうしても私の力にとつては難しくなる。私はいまや、夢心理學の敍述に於いて私の見解の歷史的展開に從ふことができない事實も、その刑罰と思はねばならな

い。夢の解釋に對するいろいろな觀點は、私には、それに先立つて出來てゐた神經病の心理學に就いての研究によつて與へられたのであつて、私はそれをここに引き合ひにしてはならないのに拘らず、繰り返へし引き合ひにしなければならない、而も私としては逆の方向で進み、夢からして神經病の心理學への接續を得たいと思つてるのである。そのために讀者にとつて生ずる凡ゆる難澁難解を、私は知つてをる、が併し私はそれを避けるべき何の手段をも心得てゐない。

この情勢に不滿を感じて、私は私の辛勞の價値を高めると私には思はれる一つの他の觀點に好んで足を留めるのである。第一章の序說が示したやうに、いろいろな著述家の意見に於いて最も鋭い矛盾によつて支配されてゐた一つの題目を、私は私の前に見出したのだつた。夢の諸問題を吾々が研究した後に於いては、それ等の矛盾の大部分にとつて、餘地が與へられた。ただ人々が言つた見解のうちの二つ、即ち、夢は一つの無意味な經過だ、夢は一つの肉體的な經過だ、といふのに對しては、斷乎として反對せねばならなかつた。その他は併し、吾々は相互に矛盾し合ふ凡ゆる意見に對して、その紛糾した關聯の何等か一つの箇所に於いて道理を與へ、そしてそれ等が或る正しいものを見付け出してをつたのだ、といふ事を證明してやることができた。夢が覺醒

生活の刺戟と興味とを繼續する事は、蔽匿された夢思想の發見によつて、全然一般的に實證せられた。夢思想はただ吾々に重大と思はれ吾々の興味を强く惹く事柄のみを問題とする。夢は決して些細なことを取扱はない。併しながらその正反對をも吾々は認めて拾ひ上げるので、日中の大きな關心事を自由にわがものにすることができるのは、それが日中の精神仕事から若干離れてしまつた後に於いてである。吾々はこの事實を、夢思想に對して歪みによつて或る表現を與へるところの夢內容に當てはまる、と見做した。吾々はかう言つた、夢の經過は聯想機構の原因からして、覺醒時思考活動によつてまだ抑留されてゐない新しい又は無關係的な表象材料を一層容易に自家勢力內のものとなし、又、檢閱の原因からして、意義のある併し目障りなものの精神的强度を無關係的なものへ交付する、といふ事を吾々は言つた。夢の異常記憶力と、小兒時代材料の驅使と、これが吾々の學說の礎柱となつた。吾々の夢理論に於いて吾々は幼兒時代に源を發する願望に對して、夢形成にとつての缺くべからざる發動期の役目を歸した。睡眠中の外部的感覺刺戟の實驗的に證明されてをる意義を疑ふことは勿論吾々に思ひ浮かび得なかつたが、併し吾々はこの材料を、夢願望に對し、日中の仕事から殘つた思想の殘存物が有すると同一の關係に入るもの

とした。夢が客觀的な感覺刺戟をば或る幻影のやうな工合に判斷する、といふ事實を吾々は論議する必要はない。併し吾々はいろいろな著述家達によつて不定の儘に捨てておかれたこの判斷の動機を附け足して說明した。その判斷は、知覺された對象は睡眠の妨害にはならないし願望實現のためには利用できるものだ、といふ工合に行はれる。睡眠中の感覺器官の主觀的な昂奮狀態はトラムブル・ラッドによつて證明されたやうに見えるが、吾々はその狀態を特別な夢源泉とは認めないけれども、夢の背後に働いてをるいろいろな記憶の逆行的再生作用によつて說明することができる。人が好んで夢の解說の要點として用ひる內部的器官性感じにも、吾々の解釋では、ささやかではあるが或る一つの役目があるものとなされてをる。あれ等は――落下とか浮動とか阻止されてるとかの感じは――必要がある度每に、夢の仕事が夢思想の表現のために利用する、凡ゆる時に用意のできてる一つの材料である。

夢の經過は急速な瞬間的なものである、といふ事は、意識によつて既に形づくられてゐた夢內容にとつては正しいと思はれる。夢經過の先行的な部分に對しては吾々は或る徐々たる波形の經過があるらしいことを發見してをる。豐富すぎるほどなそして極めて短い瞬間に凝縮せられた夢

內容の謎に對しては、かかる豐富と凝縮の生ずるのは精神生活の旣に出來上つてをるいろいろな形成物を掴み上げるためである、といふ解釋を與へて、吾々はその解決に寄與することができた。夢は記憶によつて歪められ畸形にされる事實をその通り尤もだと思つたが、それが夢の判斷に邪魔になるとは考へなかつた。何故ならば、これはただ夢形成の發端からして作用してをる歪みの仕事の最後の顯在的部分にしかすぎないのだからだ。精神生活は夜間に眠るものであるか、それとも日中に於けると同じくその一切の能率を自由に使つてをるものであるか、といふ深刻にして殆ど和解し難い論爭に對しては、吾々はその兩者に道理を認めた。がそのいづれに對しても全然の道理を認めてやることはできなかつた。夢思想の中に吾々は或る極度に複雜なる、そして精神道具の殆ど凡ゆる手段を用ひて仕事をしてをる知的業績のいくつもの證據を見出した。ではあるが、この夢思想が日中に發生してしまつてをるのである事は拒否せられ得ない、そして精神生活の一種の睡眠狀態が存在することを假定するのは缺き難く必要である。かくして部分的睡眠の學說すらが行はれるに至つた。併し精神的諸聯絡の崩壞を以て睡眠狀態の特性なりとは吾々は考へなかつた、寧ろ吾々は、その特性は日中を支配してをる精神組織が眠らんとする願望へ迎合する點に

ある、と考へたのである。外界からの轉向作用は吾々の解釋にとつてもその意義を保留し得た、そしてその作用は、假令唯一の契機としてではないが、夢表出の逆行作用を可能ならしめるに助けをなしてをる。表象經過を任意に導くことを斷念せねばならないのは、議論のないところである。だが、そのために精神生活は目標を持たないといふことにはならない。何故ならば、欲せられた目的表象の廢棄の後に欲せられなかつたそれが支配を得る事を、吾々は聞いたからである。夢に於ける一層弛緩的な聯想結合を吾々は承認したばかりでなく、その支配に對して豫想せられ得た以上に大きな範圍あることを認めてやつた。併しながら吾々は、この聯想結合は或る他の正確でそして意味に充ちた結合の強制的な代理物にすぎない事を、發見してをる。確かに吾々も亦夢を不合理なものだと呼んだ、けれどもいくつもの實例は吾々に、夢は不合理な風を裝うてをるけれども、いかに利口な者であるか、を敎へる事ができた。夢に對して承認せられたいろいろな機能については、何の矛盾をも吾々は認めない。夢は一箇の安全瓣の如くに精神の重荷を下ろしてやる。ローベルトの言葉に從へば、ありとあらゆる有害なものは夢に於ける表象によつて無害にされる、といふ事は、夢による二樣の願望實現の吾々の學說と精密に合致するばかりでなく、

ローベルトが考へてゐたよりも、一層吾々にとつてその意味は理解がいくのである。精神がそのいろいろな能力を動かして自由に樂しむ事實は、吾々の解釋にあつては、かの前意識活動による夢の放任の事實の中にやはり見出される。「精神は夢の中で胚種的な立場へ復歸するのである事」、及びハーヴェロック・エリスの言葉、「漠然たる感情と不完全な思想の太古的な一つの世界」云々は、吾々から見れば、原始的な、日中には抑壓されてゐた仕事の方法をば夢形成に參加せしめる、吾吾の所論を既に旨くも捕へたものと思はれる。（「夢は吾々の以前に順次に發達して來た人柄を再現する。事物を見る吾々の昔のやり方、久しい以前に吾々を支配したことのあつた衝動や反應を再現する」といふスーリの主張を、吾々はその全面に亙つて、吾々の主張とすることができた。）そしてドラージュに於いてと同じく吾々に於いても、「抑壓されたもの」が夢みる作用の原動力となるのである。

シェルネルが夢空想に歸する役割、及びシェルネル自身の判斷は、吾々は全範圍に亙つて承認した、併しその判斷を吾々はこの問題に於ける謂はば或る他の方面に屬すべきものとせざるを得なかつた。夢が空想を形づくるのではなくして、夢思想の形成に對して無意識の空想活動が最大の加勢をなすのである。吾々が夢思想の源泉の指示を受けたのはシェルネルからであることに變り

はないが、併し彼が夢の仕事に歸する殆ど總ては、日中に動いてをる無意識の活動に歸せらるべきであつて、この活動は神經病徵候に對し刺戟を與へるのに較べて劣るところなく夢に對して刺戟を與へる。吾々は夢の仕事を、この活動に對して或る全く相異るもの、そして遙かにより多く束縛されたものとして、區別しなければならなかつた。最後に、吾々は精神障害に對する關係を決して放棄することなく、寧ろその關係をば新しい地盤の上に一層しつかりと基礎づけたのである。

かくの如く吾々は、吾々の夢學說の新味と或るより高き統一とによつて統率せられつつ、いろいろな著述家達の實に種々様々で極めて矛盾的なる成果をば、吾々の學說の建築に組み込んだのである。その中の多くは別の意味で使用せられ、ただ僅かなものだけは全然に排棄せられた。併し吾々のその建築も未だ未完成である。心理學の暗闇の中へ押し入つたがために自から招いだ幾多の不明瞭な點を除いてみても、猶ほ一つの新しい矛盾が吾々を壓迫するやうである。吾々は一方に於いて夢思想を十分に常態的な精神作業によつて成立せしめてをるが、他方に於いては併し、夢思想の間に、且つそれから發して夢內容にも及んで、一群の全く變態的な思考經過がある事を

見出してをる。そしてこの經過を吾々は夢判斷の際に繰り返へしてをる。吾々が「夢の仕事」と呼んで來た一切のものは、吾々に正確だとして知られてをる經過からは非常に遠く離れてをるらしいので、夢みる作用の低級な精神的業績を云々する著述家達の冷酷極まる批判は吾々にこそうつてつけであると思はれざるを得ないほどである。

ここに至つては、吾々は恐らくただ猶ほ一層前へ進むことによつてのみ解明と救助を得るであらう。私は夢形成に導くいろいろな狀況の一つを取り出してみよう。

夢は吾々の日中生活から發しそして完全に論理的に仕組まれてをる多數の思想を代表することを、吾々は知つた。それ故に吾々は、これ等の思想が吾々の常態的な精神生活から出て來るのである事を、疑ふことはできない。吾々の思想經過の尊重すべき、そしてそれあるがためにその經過は高い程度の複雜なる業績である徵ともなるところの特性を、吾々は夢思想にもやはり見出す。併しながらこの思想經過が睡眠の間に實行されたなどと假定する必要は成立しない。さやうな假定をなすならば、精神的睡眠狀態に就いての吾々の今までに固められた考へはひどく混亂するに至るであらう。これ等の思想は寧ろ、甚だ確かに、日中から發してゐて、その衝擊を受けた

時以來、吾々の意識には氣づかれずに、繼續し來りそして就眠と共に完了してゐたのである。この事情から何事かが引出されるとすれば、それは、精々、極めて複雜せる思考業績が意識の參加なくとも可能である、といふ證明であつて、この事實は吾々がヒステリー患者又は强迫表象を持つ患者の精神分析の度毎にも經驗せねばならなかつたものである。これ等の夢思想はそれ自體は確かに意識の能方なくはない。それ等が日中の間に意識的になつてゐない場合には、種々の原因があるのかもしれない。意識化は一つの精神的機能即ち注意力の集中と聯絡し、この注意力はただ一定の量に於いてのみ使用される樣であつて、當該思想進行からして他のいろいろな目標のために注意力は他へ轉ぜられてをるかもしれない。かかる思想進行が意識にとつて留保せられる、もう一つの方法は次の如くである。卽ち、吾々の意識的瞑想からして吾々は、注意力の使用に際しては或る一定の道を辿るものである事を、知つてをる。この道の上で、批判に對して持ちこたへられない或る表象に到達すると、その時は中止する。吾々は注意力の占有を放棄する。ところで、その開始せられてそして捨てられた思想進行はその後、若しその進行が或る箇所に來て或る特別に高い强度に達しそして注意力を强制することでもない限りは、注意力は二度と集中せられ

ることはなくなつても、猶ほ繼續することがあるらしい。かくの如くであつてみると、これは正しくない、又は思考行爲の實際的目的のためには使用し得ないものだ、といふ批判による、最初の、若しかすると意識を以て行はれた排斥が、或る思考經過が意識から氣づかれずに就眠の時まで繼續する事の原因であるかもしれない。

吾々をして繰り返へし要約せしめよ、吾々は一つのかかる思想進行を前意識のものと呼び、それを十分に正確なものと考へるのである。そしてかかる思想進行は單に閑却され、且つ中斷せられ抑壓されたものであるにすぎない。また吾々をして、如何なる方法を以て吾々がこの表象經過をありありと思ひ浮かべるかを、腹藏なく言はしめよ。吾々の信ずるところに據れば、或る目的表象から出發して、吾々が「占有エネルギー」と呼ぶところの或る種の昂奮質量がこの目的表象によつて選み出された聯想に沿うて轉移されるのである。「閑却された」思想進行はかやうな占有を受けてゐなかつたのであるし、「抑壓された」又は「排斥された」ものからはその占有エネルギーは取り戻されてしまつたのである。兩者ともに自己自身の昂奮に放任されてをる。目的のためのエネルギーに占有された思想進行は或る種の條件の下に於いては、意識の注意を引くだけの能力あ

るものとなる、そしてその時には、意識の仲介によつて「超過エネルギー」を與へられる。意識の性質及び業績に關する吾々の假說を吾々は少し後になつて明らかにせねばならないであらう。

かやうにして前意識に於いて刺戟された思考進行は自然に消滅するか、又は維持されるかする。消滅する場合を吾々は次のやうに思ひ浮べる、卽ち、そのエネルギーはこの進行から發する凡ゆる聯想の方向へ飛散し、思想の全連鎖をば或る昂奮狀態へ移し、そしてその狀態は暫くの間持續するが、やがてその放出を必要とする昂奮が落着いたエネルギー占有へ變形するとともに、消え去るのである、と。思想進行のかかる落着が現れる場合には、その經過は夢の形成にとつてはそれ以上何の意義をも持たない。然るに吾々の前意識の中にはもつと別な目的表象が蟠居してをり、それ等は吾々の無意識のそして常に動いてをる願望の源泉から發生してをる。これ等の表象は自己のなすが儘に放任された思想圈內の昂奮をわが勢力下に引き入れ、その思想圈と無意識的願望との間に結合を作り、その思想圈に對し無意識的願望に固有なるエネルギーを交付する、そしてかくなつた以後は、かの閑却された又は抑壓された思想進行は、假令それがこの强化によつて意識への進出に對しては何等の要求をも持つやうになるのではないにもせよ、自己を維持すること

はできることになる。今までは前意識的であつた思想進行が無意識の中へ引き入れられたのである、と言ふことができる。

夢形成についての他の狀況は次のやうであらう、即ち、前意識的思想進行は初めからして無意識的願望と結合してゐた、そしてそれがために有力なる目的エネルギーの側から排撃せられるか、又は、或る無意識的な願望が他の（例へば肉體的の）原因から動き出してゐた、そして迎合を受けずに、前意識によつて占有されてゐない精神的殘存物へ交付を與へようと求めてをる。以上三つの場合の總てが、最後に、或る一つの結果の中に綜合される、即ちそれは、前意識的エネルギーからは見捨てられたが、無意識的願望からしてエネルギーを受けた一つの思想列が前意識の中に成立する、といふ結果である。

ここから先では、かの思想列は猶ほ幾多の變形を持たされるけれども、その變形を吾々はもはや常態的の精神經過とは認めない、それ等は吾々には親しみなき一つの結果、一つの精神病理學的形成物を生ずるものである。吾々はそれ等を摘出して列べてみよう。

（一）。箇々の表象の强度はその全體に亙つて放出し得るものであり、一つの表象から他の表象

へと移る、その結果、大きな強度を具へた箇々の表象が形成される。この經過が幾度も繰り返へされる間に、一つの思想列の全體の強度が或る唯一の表象要素の中に結局集められる事がある。これが壓縮の事實であつて、吾々にはそれが夢の仕事の間にあることを學び知つた。この壓縮作用が夢の不思議な印象についての大責任を負ふものである。何故ならば、それに類似のものは、常態的なそして意識に到達し得る精神生活に屬する範圍では、吾々に全く知られてゐない。ここにも吾々は思想の全連鎖の結び目か又は終局結果として大きな精神的意義を所有する表象を持つのであるが、この重大さは內的知覺にとつて明白なる性質となつて現れることはない。であるからその中で表象されたものはいかにしても一層強度を增すこともない。壓縮經過に於いては一切の精神的聯絡は表象內容の強度に置換へられる。それは、私が一册の本の中でその本を理解する上に拔群の價值を附加すべき或る一つの語を、緩るくか又は太く印刷させるのと、同じやうな場合である。口で述べる時には私はその語を高い聲でゆつくりと言ひ、そして特に力を入れて發音する。前の方の比喩はかの夢の仕事から借用した一つの例（イルマの注射の夢に於けるトリメチラミン）にすぐ聯想を呼ぶ。最古の歷史的彫刻は、描かれる人物の階級の偉さを大きさによつて表

現してをるから、上述のと似た原理を守つてをるものだ、とは美術史家が吾々に注意してくれるところである。王者はその家來又は征服された敵より二倍乃至三倍の大きさに形づくられてをる。ローマ時代の或る彫刻品は同一の目的のために一層巧妙なる手段を利用してをるらしい。皇帝の姿は眞中に置かれ、高く眞直ぐに現され、その形姿の仕上げには特別なる配慮が注がれ、そして敵をその足下に横たへてをるが、併しもはや一寸法師の間の巨人としては現されない。今日猶ほ吾々の見てるところで下僚が上官の前で腰を屈めるのは、あの古い描寫原理の名殘りである。

夢の壓縮が進んで行く方向は、一面に於いては夢思想の正確なる前意識的關係によつて、他面では無意識に於ける視覺的記憶の吸引によつて、規定されてをる。壓縮の仕事の結果は、知覺の組織に向つて突破するために必要とせられる強度を目標とするものである。

(二)。更にまた、强度の自由なる交付可能性により、及び壓縮の實行のために、中間的表象、謂はば妥協が形成される(多數の實例參照)。同じやうに、常態的な表象經過に於いては嘗つて聞いたことのないやうな事が生ずるが、それにあつては、何よりも「正しい」表象要素の選擇と確保とが中心となつてをる。それに較べると、前意識的思想を言葉で言ひ現さうとする場合に、混

合竝びに妥協形成物が、異常に屢々現れ、そしてそれ等は「言ひ損じ」の種類として擧げられる。

（三）。互ひにその强度を交付し合ふ表象は、相互に極めて弛緩した關係をなしてをり、吾々の思考によつて突き返へされ、ただ機智的な結果を生ずるために利用されるにすぎない。これ等の中に吾々は特に、語音や文言の聯想を見出す。

（四）。互ひに矛盾し合ふ思想は互ひを廢棄しようと努力することはなく、互ひに相竝存し、時としては、恰かも何の矛盾もないかの如くに、組み合はさつて壓縮の産物となるか、又は、吾々の思考に於いては決してそれを許さないだらうけれども吾々の行動では屢々それをよしとしてをるやうな、妥協を形成するかである。

これ等は最も著しい變態的な經過の二三であつて、前以て合理的に形成されてゐた夢思想は夢仕事の間にかかる經過の下へ引き入れられるのである。それの主要性質としては、占有せんとするエネルギーを動かし得るそして放出可能にすることに凡ゆる價値が置かれてをる點が、認められる。この占有エネルギーが附着してをる精神的要素の內容と特有なる意義とは、第二義のものとなる。若し思想を形象化することが中心的仕事であるならば、壓縮と妥協的形成はただ逆行作

用のためにのみ行はれる、といふ意見もあるかもしれない。併しながら形象への逆行を缺いてをる夢、例へば Autodidasker の夢――N教授との會話などの分析は――そして猶ほ一層明瞭に、その綜合は、他の夢と同一の轉移及び壓縮の經過を示すのである。

かやうな次第であるから吾々は、夢の形成に對しては二様の本質的相違ある精神的經過が參加してをる、といふ見解を拒むことはできない。その一つは、完全に正確で、常態的思考と同等の價値ある夢思想を作る。他の一つは、その夢思想をば極めて異様なるそして不正確なる方法を以て取扱ふ。後者を吾々は既に第六章に於いて本來の夢仕事として取りのけて置いたのであつた。さて、この第二の精神的經過の由來について吾々は如何なるものを提示せねばならないか?

これについては、若し吾々にして神經病症、殊にヒステリー症の心理學へ、一歩深く押し入つてみなかつたら、答を與へることはできないだらう。然るにこの心理學からして吾々は、同じやうな不正確な精神的經過が――その他猶ほ擧げ示されてない他の經過も一緒に――ヒステリー性徴候の成立を支配してをる事を、知つてをる。ヒステリーに於いても亦、吾々は先づ、十分に正確で、吾々の意識的思想に全然等しい價値の思想の一群を見出すのではあるが、併しさういふ形

を以てのその存在については吾々は何事をも知ることはできず、漸く後になつてから吾々はそれを再建してみるのである。それ等の思想が何處かで吾々の知覺に達した場合に、吾々はその形成された徵候の分析からして、これ等の常態的な思想は或る變態的な取扱ひを蒙つてをる、そして壓縮妥協的形成によつて、表面的な聯想を經て、矛盾に蔽はれながら、そして時としては逆行の道を踏んで、徵候となるに至つたのである事を、看取する。夢の仕事と、それから精神神經病的徵候に終るところの精神的活動との間には完全なる同一性が存するのであるから、吾々は、ヒステリーが吾々に強制する結論をば夢の上へも移すのを以て、道理ありと思ふのである。

ヒステリーの學說から吾々は次のやうな命題を借用する。或る常態的な思想列に對するかくの如き變態的なる精神的加工は、この思想列が、幼兒時代に由來しそして排斥を加へられてをる或る無意識的願望の交付のために用ひられてをる場合にだけ、現れる。この命題に副はんとして吾吾は夢の理論をば、その原動力的なる夢願望はいつでも無意識から由來してをる、といふ假說の上に樹てた。この假說は、吾々自身が告白したやうに、一般的には立證されないが、又、拒否もされない。吾々が既に再々その名稱を弄んだところの、かの「排斥」が何であるか、を言ふこと

ができるためには、吾々は吾々の心理學的足場を猶ほもう少し建て增さねばならない。

吾々は一つの原始的な精神的道具なる假說を突つこんで立ててみた。この道具の仕事は、昂奮の蓄積を避けそしてできるだけ昂奮なく身を維持しようとする努力によつて統制されてをる。であるからこの道具は或る反射道具の仕組によつて作られてゐた。運動力、先づ第一に身體の內的變化への道は、この道具の驅使に任される放出路であつた。次いで吾々は或る滿足の體驗の精神的結果を檢討してみた、そしてその際旣に、昂奮の蓄積――それは、吾々には顧慮する必要なき或る種の方式に從つて行はれてをる――は不快として感ぜられ、その昂奮の減殺が快感として感ぜられる滿足の結果を再び招ぎ來らしめんがために、この道具を活動せしめるのである、といふ第二の假定を組み入れることも、しようと思へば、できたのであつたかもしれなかつた。一つのかやうな、不快から出發し、快感へと目ざすところの、精神道具の中の流れを、吾々は願望と呼ぶ。吾々は前に言つた、願望以外のいかなるものもこの道具を動かすことはできない、そしてこの道具の中での昂奮の經過は快と不快との知覺によつて自動的に統制されてをる、と。一番最初の願望は滿足の記憶の或る錯覺的な占領であつたに相違ないと思はれる。併しながらこの錯覺

は、若しもそれが消耗するまで保留されないやうなものであつたなら、欲求の停止、從つて滿足と結びついてをる快感を招來せしむる能力はないものだ、とわかつた。

かくして或る第二の活動——吾々の言葉で言へば、或る第二の組織の活動——が必要となつた。この活動は、かの記憶の占領が知覺にまで押し進みそして其處からして精神のいろいろな力を束縛することを許さず、寧ろ、欲求刺戟から出發する昂奮をば一つの迂回路へ導くのである。そしてその迂回の道は、最後には任意の運動力作用を經て、外界をば、滿足の對象の現實的な知覺が現れ得るやうに、變化せしめるものである。ここまでは、吾々は旣にかの精神道具の圖表を辿つて到着してしまつてをる。その二つの組織は、吾々が無意識及び前意識として十分に發達を遂げた精神道具の中に組み入れるものに對する、萠芽である。

外界をば運動力作用によつて合目的的に變更し得るためには、記憶組織の中に多量の經驗が蓄積してをり、そして種々の目的表象によつてこの記憶材料の中に喚起されるいろいろな關係を樣樣に定着せしめる事が、必要である。さて、吾々は吾々の假定を猶ほ進めて行かう。第二の組織の活動は摸索的であり、そして占有エネルギーを派出してはまた再び呼び戻すものであるが、この

活動は一方に於いては凡ゆる記憶材料を自由に驅使することを必要とする。他方に於いては、若しもこの活動がエネルギーの大量を箇々の思考の道へ派出するならば、それは餘計な消費となるであらう。然る時にはそのエネルギーは非合目的的に流出し、そして外界の變化のために必要なる量を減少せしめることになるであらう。であるから私は合目的性のために、次のことを要求する。即ち、占有エネルギーを大部分休息せしめておき、ただ一小部分だけを轉移のために使用することが、この第二組織に成功するやうに。これ等の經過の機構は私には全然未知である。これ等の考へを眞劍に究めてみようとする人は、物理學的類例を探し出しそして神經病昂奮に於ける運動經過を明らかにする道を開拓せねばならないであらう。私はただ、第一の精神組織の活動は昂奮量の自由なる流出に向けられてをる、そして第二の組織は自分から出發するエネルギーによつてこの流出を阻止し、恐らくは水準を高めながら安靜なるエネルギー占有狀態へ轉換せしめる、といふ考へに固く據るのみである。かくして私は、第二の組織の支配下にある昂奮の經過は、第一の組織の支配下に於いてとは全く別の機構的事情に結び付いてをる、と假定する。第二の組織はその試驗的な思考の仕事を終つてしまふと、昂奮の阻止及び停止をも止め、そして昂奮をして

運動力へ向つて流れ去らしめるのである。

さて、不快原理による統制のために第二組織が昂奮流出を阻止する諸關係を眼に留めるならば、興味ある一聯の考へが生じてくる。第一次的滿足體驗に對する對照物を探すと、それは外部的な恐怖體驗である。原始的な精神道具に對して、苦痛昂奮の源泉である或る知覺刺戟が作用する。さうすると、長い不秩序的な運動作用の現れが生じ、そして終にそれの一つはこの道具を知覺から、それと同時に苦痛から引き離す。そして知覺が再び現れるやこの運動作用の現れが直ちに繰り返へされ（例へば逃走運動として）、終にまたその知覺は消失してしまふ。併しここにはその苦痛源泉の知覺を錯覺的にか又は其他いかやうかに再び占領しようといふ傾向は一つも殘らないであらう。寧ろ、初期の精神道具に於いては、この苦痛的な記憶像がいかやうにか呼び覺まされる時には、それを直ちに離れ捨てようとする傾向が持續するであらう。何故ならば、知覺の上へその昂奮が注ぎ溢れるのは不快を惹起するだらう、（もつと精密に言へば、惹起し始める）からである。記憶からの逃避、それは知覺に對する嘗つての逃避の反復にすぎないのであるが、その記憶が、知覺のやうに、意識を刺戟しそしてそれによつて新しいエネルギーを自分の方へ引きつける

だけ十分の性質を所有してゐない事によつても、記憶からの逃避は容易とならしめられる。嘗つて苦痛であつた事の記憶からかやうに骨折りもなく且つ規則的に生ずる精神的經過の逃避は、精神的排斥の模範にして第一の實例とすべきものである。苦痛からのかかる逃避、駝鳥の戰術の如何に多くが成人した人の常態的な精神生活の中に猶ほ歴然と殘つてるかは、一般にも知られてをる。

不快原理の結果として第一の精神組織は、何か不愉快なものを思考聯絡の中へ引き入れる能力を、大體所有してゐない。この組織は願望することより他には何事もできない。事態斯くの如き儘であるとするならば、經驗によつて貯へられてをる一切の記憶を自由に使用せねばならない第二の組織の思考仕事は妨害されることになるであらう。されば今や二つの道が開かれる。即ち、第二の組織の仕事は不快原理から全く自由となり、記憶の不快などを顧慮することなく自己の道を續けるか、又は、その仕事は不快の記憶をば、不快の發生がその際避けられるやうな工合に、占領してしまふ事ができるか、どつちかである。吾々は第一の可能性を否定することができる。何故ならば、不快原理は第二の組織の昂奮經過にとつての統制者としても現れるからである。かくして吾々は、この組織は或る記憶をば、その記憶の流出が、即ち或る運動神經刺戟にも比較さ

れる不快發生のための流出が阻止されるやうに、占領してしまふといふ、第二の可能性に頼るのである。第二の組織による占領は同時に昂奮の流出に對する阻止を現すものであるといふ假說へ、吾々は二つの出發點からして、卽ち、不快原理への顧慮及び最少の神經力消費の原理から、導かれる。併し吾々は次の考へを固守しようと思ふ。――それは排斥の學說の鍵である――卽ち、第二組織は或る表象をば、その表象から發する不快展開を阻止する事ができる場合に於いてのみ、占領することができるのである、といふ考へを固守しようと思ふ。この阻止を免かれたものは、第二組織にとつても近づき難いものとして殘り、不快原理の結果として直ちに放棄されるであらう。不快の阻止は併しながら何等完全なるものである必要はない。不快が一寸現れ始めることは許されねばならない。何故かと言ふと、それが現れるのは、第二組織のために、その記憶の性質と、更に若しかすれば、思考によつて求められてる目的にとつてはその記憶が不十分にしか適しない事を示してくれるからである。

第一の組織のみが許す精神的經過を私は今第一次經過、第二組織の阻止の下に生ずる經過を第二次經過と呼ぶであらう。私は猶ほ一つの別の點によつて、第二組織が何の目的のために第一次

經過を訂正しなければならないのかを、示すことができる。第一次經過は、集められた記憶の量を以て或る知覺の同一物を作り出すために昂奮の放出を努力する。第二次經過はこの目論見を捨てて、その代りに、思考の同一物を獲得しようとする他の目論見を抱いてをる。思考全體は、目的表象として用ひられた滿足の記憶からその記憶の同一化占領に至るまでの一つの迂回路であるに他ならない。そしてこの記憶の同一化占領はやはり運動作用の經驗を通過する道に於いて達成されるべきものである。思考はいろいろな表象の間の結合の道に關心を持つには相違ないが、併しその表象の强度によつては迷はされない。ところが、表象や中間的及び妥協形成物の壓縮はこの同一化目的の達成に於いては妨害になる事が明らかである。壓縮作用は一つの表象を他の表象の代りに立てながら、第一の表象によつてもつと先へ導かれる樣な道から傍へ離れる。斯くの如き經過は第二次思考に於いては細心に避けられる。不快原理が普通ならば最も重要な支持點を與へてをる思考經過に對して、思考の同一物を追ひ求める場合には、いろいろな難儀を背負はせる事は、これは見てとるに難しくはない。かくして思考作用の傾向は次の方へ向いて行く。即ち、不快原理になる獨立的統制から益々自由となり、そして思考の仕事による情念展開を、辛くも信

號として使用され得る最小限度に制限せんとする方へ、向つて行く。意識が仲介する新しい占有エネルギー過剰によつて、業績のかやうな微妙化は達成せられる筈なのである。併し吾々は知つてをる、かかる微妙な業績は常態的な精神生活に於いてすら稀にしか完全に成功することはないし、又、吾々の思考作用は不快原理の干渉のために依然として虚僞に陷り易いのである。

併しこれは吾々の精神道具の機能力に於ける缺陷ではない。この缺陷によつて次の事が可能となる、卽ち、第二次思考仕事の成果として現れる思想が第一次經過の中へ入り込むのである——丁度この公式を以て、今吾々は夢に、及びヒステリー性徵候にまで導く仕事を記載することができる。この缺陷、この不十分なる場合は、吾々の進化の歷史にある二つの契機の併發によつて生ずる。その中の一つは、全く精神の道具に歸屬しそしてかの二つの組織の關係に對して決定的な影響を及ぼしてをるし、他の一つは程度を變動上下しつつ發揮せられそして器官的系統の原動力を精神生活の中へ導き入れてをる。兩者ともに小兒時代生活から發し、そして吾々の精神及び肉體の組織が幼兒時代以來蒙つてをる變化の沈澱である。

私が精神道具に於ける一方の精神經過を第一次的と呼びなした時、私はそれを啻に等級と能率

を顧慮してやつたのであるばかりでなく、更にこの名を與へるについては時間的の事情も亦理由となつてよかつたのである。第一次經過のみを有するやうな精神道具は、吾々の知るところでは、存在してゐないし、そしてその限りに於いては一箇の理論的假說であるが、併し次のやうなことだけは事實である。卽ち、第一次經過は精神道具の中に最初からして與へられてをる、それに反して第二次經過は生活の間に漸く徐々に發達し、第一次のを阻止しそれの上に陣取り、そして恐らくは人生の頂上に達すると共に初めて第一次のを完全に支配するに至るものである。第二次經過がかく後れて現れる結果として、無意識的願望の動きから成立つ吾々の本質の中核は、無意識にとつては摑み難い、また阻止し難いものとなつてをる。この前意識の役目は無意識から發する願望の動きに對して合目的的な道を指示してやることに、どうしても局限されるのである。これ等の無意識的願望は凡ゆるその後の精神的努力にとつては一つの强制を現すものであり、それ等の努力はこの强制に順應しなければならないし、又、場合によつてはその强制を轉向せしめそして一層高い目標へと導くやうに骨折ることもある。又、前意識支配がかく後れた結果、記憶材料の大きな一領野が吾々には近づき難いものとなつてをる。

さて、幼兒時代に發し、破壞することも阻止することもできないこれ等の願望の動きの中には、それの實現が第二次思考作用の目的表象に對する矛盾の關係へ入り込んでしまつてるやうな、願望の動きも亦見出される。かかる願望の實現はもはや快感でなくして、不快感を惹起するであらう。そして正にこの感情の轉換こそは、吾々が「排斥」といふ名目を與へるものの本質をなしてをるのである。如何なる道を通り、如何なる原動力によつて、かかる轉換が行はれ得るか、そこに排斥の問題が存するのであるが、それには吾々が此處でただ一寸觸れておけばよい。かかる感情轉換は進化の間に現れる事（小兒の生活に於いて最初は缺けてゐる嫌惡の情の出現を思ひ出してみるがいい）、轉換は第二次組織の活動に結びついてをる事を、確定するだけで十分である。無意識的願望がそれに基いて情念發生を惹起する記憶は、前意識の決して近づけないものであるから、從つてその記憶が行ふ情念展開も亦阻害されることはない。正にこの情念展開のために、これ等の表象には今でも猶ほ前意識的思想が近づけないのである。しかもその思想に對して表象は願望力を交付してしまつたのであるが。寧ろ不快原理が實行せられ、そして前意識がこれ等の交付思想から逃避する原因を作る。すると、これ等の交付思想は放任されてをる、「排斥されてを

る。」かくして或る幼年時代的な、最初から前意識を脱離した記憶の寶庫の存在が、排斥作用の豫備條件となる。

前意識に於ける交付思想からエネルギーが取り去られるや否や、最も都合のよい場合には不快の展開は終りを告げる。そしてこの結果は不快原理の干捗が合目的的なものであることの印である。しかるに若し排斥せられた無意識の願望が或る器官的强化を蒙り、それをその交付思想に讓り與へて、そのためにこれ等の思想をしてその昂奮を以て、假令彼等が前意識のエネルギーによつて見捨てられてしまつてる場合であつても、進出する試みをなさしめるやうな時であるならば、事情は別である。その時には、前意識は排斥せられた思想に對する反對を强化するから、防禦の爭鬪となり、そしてそれを更に續けて行くと、無意識願望の負擔者たる交付思想が象徴形成によ る何等かの妥協的形式となつて進出するに至る。けれども排斥せられた思想が無意識の願望昂奮によつて力强く支配せられ、それに反して前意識エネルギーによつては見捨てられるその瞬間から、それ等の思想は第一次精神經過に從屬し、ただ運動力的な放出をめがけるか、又は若しも道が自由である時には願望せられた知覺同一物の錯覺的刺戟をめがけるかする。吾々は前に、かの

不正確な經過は排斥作用を受けつつある思想だけを相手に進行するものである事を、經驗的に發見してゐる。今吾々はこの關聯をもつと先へ進めて考察してみよう。これ等の不正確な經過は精神の道具內にある第一次的のものである。それ等は、表象が前意識エネルギーによつて見捨てられ、放任せられる場合、そして表象が阻止せられてゐない、無意識からくる流出を求めつつあるエネルギーによつて滿たされ得る場合には、必ず現れる。この不正確と言はれる經過が實際は常態的經過の欺瞞、思考の錯誤ではなくして、精神道具の或る阻止から解放された仕事の方法である、といふ解釋を支持するのに、猶ほ二三の他の觀察がある。例へば吾々は、前意識昂奮を運動力へ傳導するのは同じ經過によつて行はれる事や、前意識表象と言語との結合は容易に同一の、不注意に歸せられる轉移や混同を示す事を、觀察する。最後に、この第一次的經過の方法の阻止に際して必要となるところの仕事の增大に關する一つの證據を私は、次の事實から引き出したいと思ふ。卽ち、吾々が思考のこの經過の樣子を吾々の意識にのぼらしめる場合には、吾々は或る滑稽の效果、笑ひによつて流出される或る過剩を得るのである。

精神神經病の理論は完全な確信を以て次の事を主張してゐる。小兒時代の發達期にあつて排斥

（情念の轉換）を蒙つてをり、そしてその後の發達期に於いて、起原的な兩性的傾向から形成される性的體質の結果であるにせよ、又は、性生活の不便なる影響の結果であるにせよ、復活する力があり、從つて凡ゆる精神神經病的象徵形成にとつて原動力となるものは、幼兒時代に基く性的な願望の動きのみである、と。排斥の理論の中で猶ほ指摘されるべき缺陷は、たゞこの性的力を應用することによつてのみ充足される。夢の理論にとつても亦性的とか幼兒時代的とかの事柄の要求が持ち出されてよいか、どうか、の問題には私はその儘觸れずに置きたい。私は此處ではこの理論を未完成の儘にしておく。何故かと言ふと、夢の願望は必ず無意識から由來する、といふ假定によつてさへ、既に私は證明の立つ事柄以上に一歩出てしまつてるのであるからだ。

（他の數箇所に於いてと同じやうに、此處に、主題の取扱方の缺陷はあるのだが、私はそれを故意に放置した。それは、その缺陷を充足するには一方に於いて餘りにも大きな努力が必要であり、他方に於いて夢にとつて無關係な敎材の斟酌が必要であるからである。例へば私は、私が「抑壓された」といふ語に對し、「排斥された」といふ語とは別の意味を結びつけるのか、どうかを暗示することを、囘避して來た。たゞ、後者の方が前者よりは一層强く無意識に對する從屬性を高調するものである事だけは、明瞭になつてるだらうと思ふ。

夢思想が意識へ向つて前進繼續を斷念して逆行の道を取るに決定する場合にあつても亦、何故に夢思想は檢閲による歪みを蒙るのであるか、といふ道理ある問題へ、私は言及するところがなかつた。其他にも論述を控へたものはもつとある。私にとつて主要なるは何よりも先づ、夢の仕事の分析を一層進める時に生ずる諸問題に就いて或る印象を喚起し、そしてその分析の仕事の途上に於いて遭遇する其他の題目を暗示することであつた。如何なる箇所で問題の追及を止めたらよいか、その決斷は私にとつて必ずしも容易なものではなかつた。——私が夢に對する性的表象體驗の役目を剩すところなくは取扱つてゐない、そして明白に性的なる内容を持つた夢の判斷を回避したのは、或る特別な動機に由るのであつて、その動機は恐らく讀者諸君の期待と合致しないものであるかもしれない。性生活を以て醫師も科學的研究家も顧みる必要なき一つの卑猥なものと見做す如きは、私が神經病理學に於いて抱いてをる見解と信條とから正に全く離れたる事である。又、私は、「夢の象徴」に關するダルディスのアルテミドロスの本を飜譯した人が、その本にある性的夢に於いての章を省略して讀者に知らしめないでをるその動機たる德義上の憤りを、滑稽だと思ふ。私にとつては、性的夢を説明する場合には倒錯と兩性の未解決の諸問題へ深く捲き込まれざるを得ないだらう、といふ考へだけが決定的だつた。それで私はこの材料をもつと別の關聯のためにと取つて置いたのである。)

私は又これ以上、夢形成の際と、ヒステリー症徴候の形成の際とに於ける精神的力の活動に存する區別が何に存するかを、吟味するつもりはない。それをするのに、比較せられるべき兩者の中の一方に就いての一層精密なる知識が吾々には欲けてをる。併し私は或る他の一點に價値を置き、そしてこの一點の爲にのみ私はかの兩つの精神的組織、それの仕事の工合、及び排斥作用に關する檢討を此處に企てたのである事を、私は豫め告白する。であるから今のところ、私がその問題となつてゐる心理學的事情をほぼ正しく理解したか、それとも、このやうに難しい事柄にあつては容易にあり得る如く、斜視的に欲陷を包藏しつつ理解してをるか、それは肝要な事ではない。精神的檢閲の判斷、夢內容の正確な加工や變態的な加工の判斷が、假令如何に變化する事あらうとも、かかる經過が夢形成に際して働いてをる事、及びそれ等の經過がヒステリー症の徴候形成に際して認められる經過に對し本質に於いて非常に大きな類似を示してをる事は、依然妥當なのである。さて、夢は決して病理的現象ではない。夢は決して精神的均衡の混亂を前提とするものではない。夢は決して能率低下の跡を示しはしない。私の夢と私の神經病患者の夢とからして健康な人間の夢を推定はできない、といふ抗議は、恐らく一顧にも價しないであらう。即ち吾

吾がそれ等の現象からしてその原動力を推定する場合には、吾々は次の事實を認識してをる。神經病が使用する精神的機構は精神生活を襲撃する何等かの病的妨害によつて初めて作られるのではなく、精神道具の常態的な構成の中に既に出來上つてをる。無意識及び前意識なる二つの精神的組織、兩者の間に存する過渡の檢閲、一方の活動が他方のそれによつて阻止せられ且つ蔽匿される事、意識に對する兩者の關係——或ひは、事實上の事情を正しく判斷すると之等の代りに如何なるものが生じてくるか知れないとしても——これ等一切は、吾々の精神といふ道具の常態的構成に屬するものであつて、そして夢はこの道具の構造の知識を探る道の一つを吾々に示してくれる。若し吾々にして十分に保證された認識增加の最小限度を以て滿足しようと欲する者であるならば、吾々は下の如く言ふであらう。抑壓されたものは、常態的な人間にあつても亦存在を續け、そしていろいろな心理的仕事を爲す力を依然として持つてをる事實を、夢は證據立てる、と。夢はそれ自身がこの抑壓されたものの現れの一つである。理論から言へば夢は凡ゆる場合に於いて左樣であり、的確な經驗に徵すれば、夢生活の著しい性質を正に最も明白に示現するやうな、少くとも多數の場合に於いて左樣である。覺醒時に於いては矛盾の對立的な解決のために表現を

妨害せられ、内的知覺から切斷せられた精神內の被抑壓物は、夜間にそして妥協形成作用の支配の下に、意識へと進出する手段及び方法を見つけ出すのである。Flectere si nequeo Superos, Acheronta movebo.（われ天の神を動かし得ずんば、われ地下の力を動かさん。）

（排斥された本能の動きの努力を暗示するウィルギリウスのこの詩句に倣つて、私は次のやうな文を作つてみた。「夢判斷は併し精神生活に於ける無意識についての知識に對する via regia 大道である。」）

夢の分析に導かれて吾々はこの凡ゆるものの中で最も奇怪なる、そして凡ゆるものの中で最も神祕的なる道具の組立てを少しばかり覗いてみた。勿論それはほんの少しばかりではあるが、併しそれを以て、他の――異常的と呼ばれるべき――形成物からして猶ほ一歩深くこの道具の分解へ立ち入る發端が作られたのである。何故かといふと、病氣――少くとも當然機能的のと名づけられる病氣は、この道具の破損、その內部に於ける新しい分裂の成立を前提とするものではなくして、その病氣は、常態的な機能の間にはそれの多くの作用が蔽匿されてをるところの力の運轉の成分が強くなつた、及び弱くなつた事によつて、動力的に說明されるものなのである。二つの關門組織から出來てをるこの道具の組立てが、ただ一つの組織だけにとつてならば不可能である

かもしれないやうな或る微妙化を常態的な仕事に對しても許す事實は、別の箇所に於いて猶ほ示され得るであらう。（夢だけが、精神病理學を心理學の上に基礎づけしめる、唯一の現象ではない。小さなそして未だ終了されてゐない一聯の論文、「忘却性の心理的機構に就いて」――「隱蔽記憶に就いて」等の中に、私は日常の精神的現象の多數に對し、上述の事實の認識を支持するものとして、判斷を試みた。Über den psychischen Mechanismus der Vergesslichkeit, 1898; Über Deckerinnerungen, 1899. これ等の及びその後の、忘却、言ひ損じ、摑み損ひ等々に關する論文は、その後、「日常生活の異常心理」として纏めて出版されてゐる。）

第六節　無意識と意識――現實

若し一層精密に注視するならば、前節の心理學的檢討によつて吾々に說明された假說は、精神道具の動力端の近くに二つの組織が存在する事ではなくして、昂奮の二樣の經過又は二樣の方法の存在である。それは吾々にはどうでもよい事であらう。何故ならば若し吾々が吾々の補助的な表象の代りに未知の現實に一層よく接近してしまつてをるものを置くことができると信ずる場合

には、いつなりともそのやうな表象を進んで捨て去らねばならないからである。吾々がかの二つの組織をば最も手近なそして最も粗大な意味を以て精神といふ道具の以内に於ける二つの場所として考へてをる限りは、誤解的に生じ得たところの二三の條件、「排斥する」とか、「突き抜ける」とかの言葉の中にその殘滓を見せてをる見解を、ここで吾々は匡正してみようと思ふ。即ち、或る無意識的思想が前意識へ移らんと努力し、そして更にその後意識にまで突き抜けんとする、云云と述べる場合に、吾々は、或る第二の、新しい箇所に陣取る思想が作られる筈だ、謂はば一つの書替へが作られそしてその傍に原本が依然存在してをる筈だ、といふやうなことを意味するのではない。又、意識へ向つて突き抜ける云々に就いても亦、何等か場所の變更の考へなどは些しも含まれてゐない。或る前意識的思想が排斥せられそしてその後無意識によつて拾ひ上げられる、云々と述べたりすると、或る土地を獲得せんとする爭鬪といふやうな考へからでも借りて來たやうなこの形容は、ややもすれば、實際に一方の心的地域に於いて或る統制が解體せられ、そして他方の地域に於ける或る新しい統制がそれに代るのである、といふやうな假定を思ひつかせるかもしれない。この比喩の代りに、もつと一層よく實際の實狀に適應するかと思はれる言ひ方を用

ひよう。卽ち、或るエネルギーが或る一定の統制へ移し置かれるか、又はそれから引き去られるかする、その結果その精神的形成物は或る一つの關門の支配下に陷るか、又はそれから脫却するかする。更に吾々は地域的な考へ方の代りに、動力的なそれを用ひる。吾々に動かし得るものと見えるのは、精神的形成物ではなくして、それの神經感應である。（この見解は、前意識的表象の本質的性質は言語表象方法との結合であると認められた後に、或る變更と纏まりを得るに至つた。「無意識」參照。Das Unbewusste, 1915）

それにも拘らず私は、かの二つの組織の具體的な表象を猶ほ續けて用ひるのが、合目的的であり又正しいと考へる。表象とか、思想とか、精神的形成物とかは、一般に神經組織の器官的要素の中に配置されてをるものではない。寧ろ謂はばそれ等の要素の間に、抵抗や通路がそれ等に適應する相對關係を形づくる處に、存在するものである事を想起する時に、吾々は上述の言ひ現し方の凡ゆる濫用を避けて行く。吾々の內的知覺の對象となり得る總てのものは、丁度望遠鏡の中に光線の入ることによつて生ずる形象と同じく、假の、可能的のものである。然るにそれ自身が何等心的のものでなく、そして決して吾々の心的知覺の到達し難いものであるところのかの二つ

の組織を、吾々はかの形象を作り出す望遠鏡のレンズに同じきものと假定しても無理ではない。この比喩を續けて行くと、二つの組織の間の檢閲は一つの新しい媒介物へ移る際に於ける光線の屈折に相應するであらう。

吾々は今まで自力を以て心理學を云々して來た。今や、現代の心理學を支配してをる學說を探し求め、それと吾々の所說との關係を吟味すべき時である。心理學に於ける無意識の問題はリップスの力ある言葉に據れば、一箇の心理學的問題といふよりは寧ろ心理學の問題である(「心理學に於ける無意識の概念」參照。Lipps, Der Begrifb des Unbewussten in der Psychologie. 1897.)。心理學がこの問題をば「心理的のもの」は「意識的のもの」である、そして「無意識的心理的經過」は明白なる矛盾撞着である、などと言葉の說明で片付けてゐた間は、醫師が變態的な精神狀態について獲得することができたいろいろな觀察を、心理學的に價値づける事は、あり得なかつた。醫師と哲學者とが相提携し得るのは、兩者が、無意識的心理的經過とは「或る確定的事實に對する合目的的にして十分道理ある表現である」事を承認する時に於いてである。醫師の方では「意識は心理的の欲くべからざる性質である」といふ斷言を肩を聳かして卻け、そして

萬一彼に未だ哲學者達の言說に對する尊敬が十分强く存してをる場合だつたら、自分と哲學者達とは同一の題目を取扱つてをるのではない、同じ學問をやつてをるのではない、と考へこむより他はないのである。何故ならば、一人の神經病者の精神生活をただ一度でも十分な理解を以て觀察するならば、ただ一度でも夢の分析を試みるならば、どうしてもそれに對し心理的經過といふ名稱を拒まれない極めて紛糾した、そして極めて正確な思想經過が、その人自身の意識を動かすことなくして、おこり得る、といふ動かし難い確信が湧いてくるに相違ない。（夢の研究からして、意識的活動の無意識的活動に對する關係に就いて私と同じやうな結論を引き出してをる一人の著述家を指示し得るのは、私の喜びである。デュ・プレルは下の如く言ふ。「精神とは何であるか、といふ問題は、明らかに、意識と精神とは同一であるか否か、に就いて先づ豫備的吟味を命ずる。この先決問題こそはさて夢によつて否定されるものである。夢は、丁度例へば一つの星の引力はその星の光力範圍以上であるのと同じに、精神の概念が意識の概念以上に及ぶものである事を、示してくれる。――意識と精神とは同等の大きさの概念ではない、といふ事は、いくら力を入れて力說しても十分ではないほどの一箇の眞理である。」Du Prel, Philos. d. Mystik, p. 47., 306.）醫師がこれ等の無意識的經過について知ることを得るのは、それ等の經過が

報告なり觀察なりを許すやうな作用を意識に對して行つた後に於いてである事は、言ふまでもない。併しこの意識に生ずる結果は無意識的經過からは全然離反してをる心理的性質を示し得るのであるから、內的知覺が一方を他方の代表であると認めることは不可能である。醫師は推理の運びによつて意識の結果からして無意識的心理的經過へと押し進んで行く權利を保留せねばならない。彼はこの道を步いて、意識の結果は無意識的經過の或る遠廻しな心理作用である事、無意識的經過はその儘では意識されてゐない事、及びこの經過は意識に對して如何やうな工合を以ても自己を暴露することなくして、過ごし來り、作用し來つてをる事を知る。

意識の特性を過度に尊重する事を止めるのは、心理的のものの經過を正しく洞察するためには、いかにするも缺くべからざる先決條件となる。リップスの言葉に從へば、無意識は精神的生活の一般的な基礎であると假定されねばならない。無意識は意識のより小さな範圍を己れの中に包含するより大なる範圍である。凡ゆる意識的のものは或る無意識的な前提を有してをる。而も無意識はこの段階の上に留まつた儘でゐてそして或る精神的業績の十分なる價値を要求し得るのである。無意識はこれこそ本當の精神的のものであつて、その內的性質から言ふと丁度外界の現實と

同じに吾々には未知であり、そして外界が吾々の感覺器官の指示によつて不完全に與へられると同じく意識の事項によつて不完全に與へられる。

意識生活と夢生活の古い對立が若し無意識的心理をばそれに相當する地位へ置くことによつて解消するならば、昔の著述家が詳しく論議した一群の夢問題は除去される。夢の中で實現されて人を驚かし得たあの澤山の業績は、もはや夢に歸屬せしめられるものではなく、日中に於いても亦動いてゐる無意識的思考に歸屬せしめられる。夢がシェルネルに據ると身體の象徴化的な表出を弄ぶやうに思はれる場合、吾々は、これは或る種の無意識的空想のなす業績である事を、知つてゐる。そしてこれ等の空想は多分性的昂奮に服從してをり、そして啻に夢に於いてばかりでなく實にヒステリー恐怖症や其他の徴候に於いても表現されるものである。夢が日中の仕事を續けそしてそれを成し果し、價値ある思ひ付きをさへ現れしめる場合に、吾々はその事實からして夢の仕事の業績として及び精神の奥底の曖昧なる力の援助的業績の印として、夢の變裝だけを抽出しなければならない（タルティニスのソナータの夢に出る惡魔を參照せよ）。知的な業績そのものは、日中の間に總てのかかる業績を成就するのと同一の精神力に歸屬する。吾々には恐らく知的

及び藝術的制作などの意識的性質を餘りにも高く尊重し過ぎる傾向があるかもしれない。ゲエテとかヘルムホルツとか二三の非常に制作的な人々の報告によつて吾々は寧ろ、彼等の創作の本質的にして新しいものは不圖した思ひ付きとして彼等に與へられ、殆ど出來上つたものとして彼等の知覺に達したのである事を知る。其他の卽ち凡ゆる精神力の努力が存してゐたやうな場合に於ける意識的活動の援助は、何も不思議ではない。併し意識的活動が協同してゐると、それが凡ゆる他の活動を隱蔽することは、特權の甚だしい濫用である。

夢の歷史的意義を一つの特別な題目として出してみるのなどは、殆ど骨折りの甲斐があるまい。例へば或る首領が一つの夢に動かされて何か大膽な計畫をやる決心をなし、その計畫の結果が歷史に變化を及ぼしたとすると、その夢を何か或る外的な力として他のもつと親密な精神力と對立せしめる限りは、そこに一つの新しい問題が生ずるけれども、若しその夢を昂奮、その昂奮の上には日中の間は一つの抵抗が蔽ひかぶさつてゐて、そして夜の間に、奥深く存してをる刺戟の源泉から强化が與へられ得た、さういふ昂奮の表現の一形式だと見做すならば、もはやそこに問題は生じない。(これに就いては、上卷第一七〇頁に報告された、ティルス包圍の際に於けるアレク

サンデル大王の夢を參考せよ。）併し古代の民族が夢に對して拂つた尊敬は、人間の靈魂に存する拘束すべからざる破壞すべからざるもの、それは夢の願望を與へそして吾々の無意識の中に再び見出されるところの幽鬼的（デモーニッシュ）なものに對する、正しい心理學的豫感に基く恭順であつたのである。

私は故意に「吾々の無意識に於いて」といふ。それは何故であるかといふと、吾々が左樣呼ぶところのものは、哲學者達の無意識と合致せず、リップスの無意識とも亦合致しないのだからである。哲學者達のいふ無意識は意識に對する反對を示すにすぎない。無意識的經過の外に無意識的心理的經過も亦存在する、といふ認識は、熱烈に論難せられ、そして力强く辯護せられたものである。リップスにあつては吾々は更に一層進んだ命題を聞くことができる。卽ちそれに據ると、一切の心的のものは無意識として存在してゐる、それの中の若干は又意識としても存在する。併しながらこの命題の立證のために吾々は夢とヒステリー症徵候形成の現象を持ち出したのではなかつた。常態的な日中生活の觀察のみがこの命題を些しも疑問なき確定的のものたらしめることができる。精神病理學的形成物、否、その最初の部分卽ち夢の分析が吾々に敎へてくれた新しい

事柄の要點は、無意識は――従つて心的のものは――二つの區分されてをる組織の機能として現れ、そして既に常態的な精神生活に於いてさういふものとして現れる、といふ事實である。であるから、二通りの無意識が存在するのであるが、心理學者達は未だその區分を立ててゐない。二通りのいづれもが心理學の意味に於いて無意識である。併し吾々の意味に於いては、吾々が無意識と呼ぶところの一方は意識となる力のないものであるが、他方のものを吾々は次の理由からして前意識と名付けてをる。即ち、それの昂奮は或る種の規則を遵奉した後に、恐らくは或る新しい檢閲に合格したときに初めて、而も無意識組織を顧慮することなく、意識に上り得るものである。昂奮が意識に到達するがためには、その昂奮は或る不可變的な順序、檢閲の加へた變更から推測される關門通過を實行せねばならない、といふ事實は、場所的關係の或る比喩を持ち出さしめたのであつた。吾々は二つの組織の相互同志の關係及び意識に對する關係を説明するのに、前意識組織は無意識組織と意識との間に一つの屏風の様に立つてをる、と言つた。前意識組織は啻に意識への通行を杜絶するばかりでなく、隨意的な運動力への通行をも支配し、そして或る動力的なエネルギーの派出を自由に取扱つてゐる。このエネルギーの一部は注意力として吾々に知ら

れてをるものである。（「精神分析に於ける無意識の概念に關する管見」參照。この論文の中に、「無意識」といふ多義的な語の記載的、動力的、及び組織的意味が區別されてをる。Bemerkungen über den Begriff des Unbewussten in der Psychoanalyse.）

精神神經病の新しい文獻の中によく好んで用ひられるやうになつた上部意識及び下部意識の區別も亦、かかる區別こそは心的のものと意識とを同一に列することを力說するらしいのであるから、吾々はこれを採用してはいけない。

嘗つて全能視せられ、一切の他のものを隱蔽せしめた意識に對して、吾々の論述に於いては如何なる役割が當てがはれるか？　ただ、心的性質のものを知覺するための一感覺器官の役目のみ。吾々の圖表による試みの根本の考へに從つて、吾々は意識の知覺をただ或る特別な組織即ち簡略に呼ぶためにBw（意識）と言つて置く組織の特有なる業績と解釋する。吾々はこの組織はその機構的性質に於いては知覺組織（W）と類似してをると想像する、從つて心的性質によつて昂奮させられるが變化の跡を保留する力を持たない、即ち記憶力を持たない、と想像する。W組織の感覺器官を以て外界に向いてをる精神道具は、Bwの感覺器官にとつては自分自身が外界である。Bw

の目的論的存在理由はこの關係に存してをる。精神道具の構造を統制してをるやうに見える關門通行の原理は、ここでもう一度吾々の注目を惹く。昂奮の材料はBw感覺器官へ向つて二つの側から流れ込む。一つはW組織からであつて、心的性質のものによつて左右されてをるこの組織の昂奮は多分或る新しい加工をくぐり抜けて、終に意識的感覺となる。他の一つは精神道具そのものの內部からであつて、それの量的經過は若しも或る種の變化を蒙るに至るならば、快と不快の質的な系列として感ぜられるのである。

意識の參加なくとも正確にして且つその組立ての高尙なる思想形成が可能である事を知るに至つた哲學者達は、意識に對して或る仕掛けを配屬せしめるのは困難事であるのを見出してをる。彼等には意識は既に完成した心理的經過の餘計な反映であると思はれた。併し吾々の言ふBw組織と知覺組織との類似は、吾々をこの昏惑から救ひ出してくれる。吾々の理解するところによれば、吾々の感覺器官を通じての知覺は、注意のエネルギーをば、現れつつある感覺の昂奮が擴大して行く道の上へ向けしめる、といふ結果を持つものである。又、W組織の質的な昂奮は精神道具の動力的量に對しその經過の統制者として役に立つ。それと同一の仕掛けを吾々はBw組織の優勢な

る感覺器官のために要求することができる。この器官は新しい性質を知覺しながら、動力的なエネルギー量を指導し且つ合目的的に分配することに新しく貢獻するのである。快及び不快の知覺によつて、この器官は、普通無意識的に且つ量の轉移によつて仕事をしてをる精神道具の以內にあるエネルギーの經過に對し影響を與へる。不快原理はエネルギーの轉移を先づ自動的に統制するらしい。併し次の事は確かに可能である。卽ち、これ等の心的質の意識は或る第二の一層微妙なる統制を附け加へる。そしてその統制は第一のに對して牴觸することさへもあり得るが、併しそれは精神道具をばその元來の素質に反して、不快の發生と結びついてをる場合でもエネルギーの支配と加工に從はしめ得るやうにしてやりながら、精神道具の能率を完全ならしめる。神經病心理學からして知り得るところによれば、感覺器官の量的昂奮によるこれ等の統制は、精神道具の機能の活動に際して一つの大きな役目をなすものと考へられてをる。第一次的な不快原理の自動的支配及びそれと結びついてをる能率の制限は、それ自身がやはり自動組織であるところの感覺統制によつて破られる。元來は合目的的なのであつたが、併し結局は阻止と精神統制をば危險にも斷念するに終るところの排斥作用は、知覺によつてよりかも、記憶によつて遙かに容易に行

はれるが、それは、後者にあつては感覺器官の昂奮によるエネルギー增大は生ぜずにをるからである事が、知られてをる。或る拒否されるべき思想が或る場合に、それは排斥を蒙つてしまつてをるが故に、意識的にならないとすると、他の場合に於いてその思想は、他の理由からして意識の知覺を免かれてをつたがために、ただそのために排斥されることもある。これ等の事實の中には、治療學が完行された排斥作用を取消すために利用するいくつもの暗示がある。

Bw感覺器官が運動量に對して與へる統制的影響によつて作り出される過剩エネルギーの價値をば、目的論的關聯に於いて最もよく說明するものは、一つの新しい質の系列．從つて、人間が動物に對して有する優越權を資格づけるところの、或る一つの新しい統制の創造である。卽ち、思考經過それ自體は、思考の可能的な妨害として柵內に繫留せられねばならない隨伴的な快及び不快昂奮を除いていふと、質のないものである。その經過に或る質を與へるためには、その經過は人間にあつては言語の記憶と結びつけられ、その記憶の質的殘存が、意識の注意力を自己の上へ引きつけそして意識からして思考に或る新しい動力的なエネルギーを振り向けるだけに十分であらねばならない。

意識の諸問題の多様なる全面は、ヒステリー症思考經過の分析の際に初めて概觀される。その時人は、前意識から意識エネルギー支配への過渡も亦一つの檢閲、丁度無意識と前意識との間の檢閲に類似した檢閲に結びついてをる、といふ印象を受ける。この檢閲も亦或る種の量的限界のところに於いて初めて働きだすのであるから、强度の少い思想形成物はこの檢閲から免かれる。意識からの脫離、及びいろいろな制限を受けつつ行はれる意識への進出のありと凡ゆる場合が、精神神經病的現象の範圍の中に統合されてをる。それ等の現象は全部、檢閲と意識との間の密接で兩面的な關聯を指示するのである。かやうな二つの出來事を報告して、私はこの心理學的檢討を終りとしよう。

去年私は一人の賢さうなそして無邪氣さうに見える少女を診察した。彼女の服裝が可笑しかつた。普通婦人の衣服は一つの皺もないやうに氣が配られてをるものだのに、彼女は片方の靴下をずり下げてはいてるし、胴着の二つのボタンは外づれてゐた。彼女は片方の脚が痛いと言つて、要求もされないのにふくら脛をむき出して見せた。併し彼女の肝腎の訴へは、彼女の言葉通りに言ふと、からであつた。彼女はお腹の中であちこちと動いて彼女を全くゆすぶり動かすやうな何

物かが潛みかくれてをる感じがする。時々はさういふ時になると彼女の腹全體が硬直するやうだ。一緒に居合はせた私の同僚は彼女がかう語つた時私を凝つと見た。彼はこの訴へを誤解の餘地ないものと思つたのである。私と同僚と、吾々二人には、この患者の母がこの樣子について何も考へ浮べない、といふ事がをかしかつた。だつて、母はその娘が說明するやうな境遇に幾度も立つたことはあつたのだから。娘自身は自分の話の持つべき意味については何も察するところがなかつた、でなければ、こんな話を口にすることはなかつたのであらう。この實例に於いては、普通に前意識に留まつて動かない或る空想が、或る無邪氣なやうに見える訴への假面に包まれて、意識に出ることが許されるまでに、檢閱はうまうまと欺されたのである。

もう一つの實例。顏面筋肉痙攣、ヒステリー性嘔吐、頭痛等に惱む十四歲の少年に對し、私は彼が眼を閉ぢた後で何か物の形を見たり又は思ひ付きが浮んだりしたら、それを私に告げねばならぬと敎へながら、精神分析的診療を開始した。彼の答は物の形によるものであつた。彼が私のところへ來る前に受けた最後の印象が彼の記憶の中に視覺的に復活したのである。彼は叔父と將棋をさした、それで今その將棋の盤面が彼の眼前に浮んだ。彼は都合のよい、又は都合の惡い樣

様な位置や、やつてはならない動かし方などを研究した。その時彼はその盤の上に一本の短劍が置いてあるのを見たが、それは彼の父親の持つてる品物であつて、それを彼の空想がこの盤の上へ移し置いたのである。その後で一挺の鎌が盤の上にあつた、次には一挺の大鎌がそれに附け加つた。さうしてると今度は、一人の老農夫の姿が現れた。農夫は少年の遠い故鄕の家の前で大鎌を以て草を刈つてゐた。二三日經つた後で私はこの連續した形象についての理解を得た。面白からぬ家庭の事情がこの少年を昻奮せしめてゐたのである。冷酷で恐りつぽい父は母と仲が惡しくその教育の方法は威嚇であつた。優しい氣の弱い母と父の離別。父は再婚して、或る日一人の若い女を新しいママとして家へ伴れて來た。その後數日の間に十四歲になるこの少年の病氣が突發した。あれ等の形象を筋の通つた暗示となるやうに組立てたのは、父親に對する抑壓された憤怒である。神話についての或る記憶が材料を提供してゐる。鎌はヅェウスがそれを以て父を去勢したものであるし、大鎌と農夫とは、自分の子供等を喰つてしまふ亂暴な老人コロノスを描出するものであつて、ヅェウスはこのコロノスに對して子としてあるまじき復讐をなすのである。この少年は昔子供であつた時陰部を弄んでゐたので（將棋を弄ぶ、禁ぜられた動かし方、人を殺す事

のできる短劍)、父から非難と威嚇の言葉を聞かされた事があつた。その非難と威嚇を今度は父に向つて投げ返へすのによい一つの機會は、父の結婚であつた。この實例では、作られた迂回の道を通つて外見上はいいいい意味のないいい形象としてこつそりと意識に出て來たのは、長い間排斥された記憶とそれの無意識の儘でゐた派生物とである。

かやうなわけで私は夢の研究の理論的價値を、心理學的認識への貢獻と、精神神經病の理解に對する準備の中に求めたいのである。假令旣に吾々の知識の今日の狀態が精神神經病のそれ自體治療され得るいろいろな形に對し成功的な治療學上の影響を許してをるとは言ふものの、精神といふ道具の構造と業績を根本的に知り得ることは如何なる高い意義を持ち得るだらうか、それを誰か豫想し得るか? 精神の知識、個人個人の匿れた性質の特色の發見にとつて、この研究の實用的價値は、どうであらう? 一體、夢が啓示する無意識的な動きは精神生活に於ける現實の力の價値を持つものではないのか? 今日夢を創造する如くに、他日何か別のものを創造し得るであらうところの、抑壓された願望の倫理的意義は輕視すべきものであるか?

これ等の問に答へるだけの權利がある、と私は自分を感じてはゐない。私の思想は夢問題のこ

の方面をこれ以上進んで辿ることをしなかつた。私はただかう考へる。一人の臣下が皇帝を殺害する夢を見た、といふのでその臣下を處刑せしめたかのローマの皇帝は斷じて間違つてをる、と。この皇帝は先づ最初に、この夢が何を意味するかについて顧慮すべき筈だつた。恐らくその夢が見せてをるのと、實際とは同一ではなかつたであらう。そしてもつと別の內容の或る夢がこれと同じく帝位に對する叛逆の意味を持つてる場合であつても、やはりかのプラトンの言葉を想起するのが當を得たることであらう。プラトンは言つた、有德の士は惡人が實生活に於いて行ふ事柄を夢に見るだけで滿足する、と。即ち私の考へるところでは、夢には自由を與へるが一番よいのである。無意識願望に對し現實性を認めるべきか否か、私はそれを言ふことはできない。凡ゆる過渡及び中間の思想に對しては勿論現實性は拒否されるべきである。窮極的でそして最も眞實なる表現を得た無意識願望を目前に見た場合であつても、吾々は、精神の現實にとつては單に一つに止まらない存在の形が與へられる事を、想起せねばならない。（窮極的でそして最も眞實なる表現を得た無意識願望を目前に見た場合には、吾々は正に下の如く言はねばならない、その形式を物的現實と混合してはならないのだ、と。自分の夢の不道德性に對して責任を取るまいと反抗したりするのは、愚なこと

と思はれる。吾々の夢や空想生活の倫理的の嫌惡すべきものは、精神道具の機能の樣子を評價しそして意識されたものと無意識のものとの間の關係を洞察することによつて、大抵は消滅せしめられる。ザックスはかう言つてをる。「夢が現在（現實）に對する諸關係について吾々に告知してくれたものを、吾々はその後意識の中にも探し出さうと思ふ。そして分析の擴大鏡の下に眺められた怪物などやがて滴蟲類として再び見出すことがあつても、驚いてはならない。」）人間の性格批判の實際上の必要にとつては、大抵の場合その人間行爲と、意識的に口外される思慮とで十分である。殊に行爲は第一列に置かれる價がある。何故かと言ふと、意識にまで突き進んで來た多くの衝動は、精神生活の現實的力によつて、それが行爲の中へ流れ込む以前に放棄されるからである。實際、これ等の衝動がその進出の途上に於いて何等の精神的妨害に遭遇しないのは、無意識が彼等をもつと別に妨害し得る確信を持つてるが爲である。吾々の道徳がその上に傲然と突き立つてをる、ひどく掘り返へされてしまつた地盤を學び知つておくことは、どつちみち得るところが多い。凡ゆる方向へ向つて動的に動いてをる人間の性格の複雜さは、吾々の老朽せる道學が好むやうな、簡單な善か惡か二者の中のいづれか一方と、いふ如き片づけ方に從ふことは極度に稀である。

そして未來を知ることにとつての夢の價値は？　勿論かかる價値は考へられない。寧ろその代り、過去を知ることにとつて、と言ひ換へるがよい。何故ならば、夢は凡ゆる意味に於いて過去から由來する。夢は吾々に未來を示す、といふあの古い信仰は、なるほど全然には眞實の中味を缺いてるわけではない。夢は或る願望を實現されたものとして吾々の前に現すのであるから、吾吾を未來の中へ勿論伴れ込むことはある。併し夢みる本人によつて現在と見なされてをるこの未來は、かの破壞すべからざる願望によつて、過去の寫し繪として作られてをるのである。

第八章　補　遺

第一節　判斷可能の限界

夢生活の凡ゆる點について覺醒生活の表現方法へ完全に且つ確實に飜譯（判斷）ができるか、どうかは、抽象的に論議されるべきではなくして、その夢判斷の仕事を行ふ時の事情に對する關係の下になさるべきである。

吾々の精神的活動は或る有益な目的を遂げようとするか、又は、直接的な快感を獲得しようとする、どつちかを努力する。前者の場合には、知的な決定、行動又は他人への報告に對する準備などがある。後者の場合には、吾々はその活動を遊戲する及び空想すると呼んでをる。人も知る如く、有益なものと雖もただ快感に充ちた滿足への一箇の迂回の道でしかない。さて、夢みるのは第二の種類の活動であつて、この第二の種類は進化論の歷史からいふと一層起原的なものであ

る。夢の作用は人生の目前に控へた任務について骨折るものであるとか、日中の仕事の諸問題を完了しようとするものである、などと言ふと、誤解を生じ易い。さういふことについて顧慮するのは前意識的思考である。夢作用にとつては、かかる有益な目論見は、誰か他人へ報告するための準備の目論見と同樣、無關係である。夢が人生の或る任務などを取扱ふ場合ありとすれば、夢はそれを、分別ある熟考に相應したやうにではなく、不合理な願望に相應したやうに、解決してみせる。たつた一つの有益な目論見、一つの機能を、吾々は夢に對して認めてやらねばならない。即ち、夢は睡眠の維持に役立つ一片の空想である、と說明を加へることができる。

以上の事實からして次の結果が生ずる、即ち、夢が自分に委托されてをる事をさへ成し果すならば、夜の間に如何なる事柄が夢みられたかなど、睡眠中の自我にとつては全くどうでもよい、そして覺醒後にそれについて何一つも言ふことができないやうな、さういふ夢がその機能を最もよく實行したものである。若しも屢々それとは別の成行となることがあるとすれば、若しも吾々が夢を――數年後、數十年後にも――記憶してをるとすれば、これは必ず、排斥された無意識が常態的な自我の中へ闖入したことを意味する。かかる報復でなかつたなら、排斥された無意識は

を斷念し、夢の判斷をば直感的な把握によつて知らうとする人には、當てはまらない。併し夢みる時に迫りつつある睡眠妨害を拂ひのけるための援助を與へることを欲しはしなかつたらう。夢のためにに精神病理學に對する意義を持たしめてくれるのは、この闖入の事實である事を吾々は知つてゐる。若し吾々にして夢の原動力的な動機を發見することができるならば、吾々は無意識の中にある排斥された動きについて思ひも設けなかつたものを知るに至るのであらう。他方に於いて、若し吾々が夢の歪みを取消さしてみる時には、吾々は前意識的思考をば、日中の間にも意識を自分の方へ惹きつけはしなかつたやうな、内部的集合の狀態の儘で窺ふことができるであらう。

いかなる人も夢判斷を孤立的な仕事として行ふことはできない。夢判斷は分析の仕事の一部に留まる。分析の仕事に於いて吾々は必要に應じて、吾々の興味を或る時には前意識的夢内容に向け、或る時には夢形成に對する無意識の關與に向け、そして屢々他方のために一方の要素を閑却することがある。誰かが夢を分析の以外に於いて判斷しようと企てることがあるなら、それは實際何の効もない。その人は分析的局面の諸條件を離脫し得ないだらうし、そして自分自身の夢を取扱ふ場合には、彼は正に自己分析を行ふものなのである。この言ひ分は、夢を見た本人の協同

た本人の聯想を顧みることなき斯かる夢判斷は、最も好都合な場合にあつてすら、非常に疑はしい價値の非科學的な好事家的仕事に留まる。

正當なりと認められる唯一の技術的處置に從つて夢判斷を行ふ時に、直ちに氣づくのは、その結果は覺醒した自我と排斥された無意識との間の反抗的緊張に全然支配される、といふ事である。「高度の反抗的壓迫」の下に於ける仕事の時は、私が別の箇所で詳論した通り、低度の壓迫の場合に於いてとは、別樣なる態度を分析者は取らねばならない。分析に從事してをる間、久しい時間に亙つて、強い反抗を相手にしなければならないが、この反抗は不明であり、そして不明である限りは、決して取り除かれない。從つて、患者の夢の制作の中でただ或る一部しか、そしてその一部分でさへも、大抵の場合、完全には飜譯も評價もされ得ない事は、怪しむべきではない。假りにその人自身の熟練によつて、夢みた本人はそれの判斷のために殆ど參考を提供しないやうな夢をも理解し得る境地に至つてをるとしても、依然、かかる判斷の確實性は疑問の中にある、と反省し、そして自己の推測を患者に強ゆることを躊躇すべきである。

さて、批評家は次のやうな異議を述べるであらう。假りに取扱ふ總ての夢を判斷するとして

も、自分が抱くことのできる考へよりもより以上の事を主張してはならない、そして判斷によつて意味を含んでをる事が認められる夢もあるが、判らない夢もある、といふ告白で滿足せねばならない、と。併し判斷の成功は反抗の如何に左右されるといふ關係こそは分析家をしてかかる謙遜の必要なからしめるのである。分析家はこんな經驗をすることができる、初めの間は理解のできない夢が、その夢を見た本人の反抗を何かうまい言葉によつて拂ひ除けることに成功したその瞬間に透明になる。突然その本人に今まで忘れられてゐた夢の一部が思ひ浮びそしてそれが判斷に對する鍵を齎らすか、又は、何か新しい聯想が現れそれの助けを以て暗黑が明るくなる。又、分析の骨折りを數箇月數箇年やつた後で、診察の最初には無意味で理解ができないと思はれた一つの夢を再び取上げてみると、今やその後に得られた洞察によつてそれが十分に明瞭となる、といふやうな場合も起る。それが更に夢の理論から、子供の模範的な夢業績は徹頭徹尾意味がありそして容易に判斷し得る、といふ論證を取り出して、參考とするならば、吾々は當然次の主張をなしてよいと思ふ、即ち、假令事情は必ずしも判斷を與へせしめないかもしれないが、併し夢は全く一般的に言つて一つの判斷の可能ある精神的形成物である。

一つの夢の判斷を見出してしまつた場合に、果してその判斷が「完全である」か、否か、と言ふのは、他の前意識的思想も亦同一の夢によつて表現を得てゐるのではないか、を決定するのは、必ずしも常に容易ではない。その時、夢をみた本人の思ひ付きと境遇の評價を斟酌して得る意味は證明のできたものとして通用せねばならない、かと言うてそれが爲に他の意味を必ず拒否すべきではないのである。他の意味は證明されてゐないにしても、可能なのである。吾々は夢のかかる多義性の事實に親しまねばならない。けれどもこの多義性は必ずしも判斷可能性の不完全さを濃厚ならしめるものではない。それは潛在的夢思想そのものに根を有してをる事がある。吾々が聞いた或る意見が、吾々に與へられた或る說明が、かうも解釋できるし、ああも解釋できる、その明らかな意味の外に猶ほ或る他のものを暗示してをる、といふやうな場合は、無論覺醒生活に於いて、夢判斷の立場以外にも起る。

同一の顯在的夢內容が同時に、或る具體的な表象群とそれに依據する抽象的な思想の列にも表現を與へる、興味ある出來事は、餘りにも調査されてゐない。抽象的思想に對する表象の手段を見出すことは、當然夢の仕事にいろいろな面倒を與へてゐる。

第二節　夢の內容に對する德義上の責任

この書の序說にあたる章(「夢問題に關する學問上の文獻」)に於いて私は、夢の放埒なる內容が實に屢々その夢をみた本人の德義的感じに矛盾する、といふ心苦しい事實に對して、著述家達が如何なる工合に反應するところあるか、を敍述しておいた。(私は「刑事犯罪的なる」夢を云々することを故意に回避するが、それは、この心理學的關心以上に出づる稱呼を以て、全く無くもがなと考へるからである。)夢の不道德な性質からして、夢の心理的價値づけを拒否せんとする一つの新しい動機が生じてをるのは、尤もなことである。若し夢にして混亂せる精神活動の無意味なる產物であるならば、然らば、無論、夢の外見的な內容に對して何等かの責任を取るべき凡ゆる因緣は脫却する。

顯在的夢內容に對する責任の問題は「夢判斷」のいろいろな解明によつて根本的に押しのけられた、否、實を言ふと、除去せられてしまつた。

顯在的內容は一箇の幻惑物である、一箇の表玄關である事を、吾々は今や知つてをる。それを

倫理上の吟味にかけてみる、道德に對するそれの違反をば論理と數學に對するそれの違反以上に眞面目に取り上げるなどは、甲斐のないことである。夢の「內容」を云々する時には、ただ前意識思考の內容と、排斥された願望の動きの內容とだけを意味しなければならない。そしてそれ等は判斷の仕事によつて夢の表玄關の奥に於いて發見される。ともあれ、この不道德な表玄關は吾吾に一つの問題を課するものではある。といふのは、吾々の聞き知つたところでは、潛在的夢思想は顯在的內容の中へ採用される以前に或る嚴格な檢閲に合格しなければならない。してみれば、普通には些細なものに對しても干涉するその檢閲が顯然と不道德なる夢に對してはそのやうに働きを止める、といふのは如何して起り得るのであるか?

その解答は手近にはない、恐らく全然滿足の行くやうには與へられ得ないかもしれない。人は先づそれ等の夢を判斷にかけるであらう。そしてそれ等の中の二三は、根本に於いて何等の惡を意味しないものだから、檢閲に對して何の衝突をも惹起しなかつた事を、見出すであらう。それ等は無邪氣な大言壯語であつたり、一寸變裝をして欺ましてみようとする同一化であつたりする。それ等は眞實を言はなかつたが故に檢閲されなかつたのである。然るに他の夢は——この方

が一層多數であることは承認せねばならない——それが告知することを實際に意味してをる、そして檢閲によつて何の歪みをも蒙つてはゐない。それ等は不道德な、近親相姦や破倫なる感情の表現であるか、又は、殺伐なサディスムス的な慾情の表現である。かういふ夢の中には、夢みる本人が恐怖に充ちて目を覺すほどの反應を起すものもある。その場合には夢の立場はもはや不明瞭ではない。檢閲はその活動を怠つた、氣づいた時にはもう間に合はない、それでかの恐怖の情の發生するのは行はれなかつた歪みに對する代理なのである。この種の猶ほ他の夢にあつては、かかる情の發生すらも缺けることがある。嫌惡すべき內容は睡眠中に到達した性的昂奮の頂點を示すか、又は寛容を享受してをり、そして本人が目を覺しながらも、憤怒の發作、怒りの氣分、殘忍なる空想に耽るのに對して、その寛容をその儘與へることもある。

夢の多數は——無邪氣な、情念のない夢や、恐怖夢は——若し檢閲が加へた歪みを取消してみるならば、不道德な——戀愛的な、サディスムス的な、破倫な、近親相姦的な——願望の動きの實現であると暴露される事を、分析によつて知るならば、如上の顯然と不德義なる夢の發生に對する吾々の興味はうんと低下せしめられる。この覆面せる犯罪人は、丁度覺醒生活の世間に於い

てと同じやうに、公然たる面貌を持つた犯罪人よりも、比較にならないほど頻々たるものである。「オイディプス王」の中でヨカステが思ひ出すところの、母を相手の性交の正直な夢は、精神分析が同じ意味に判斷しなければならない種々樣々な夢に較べると、稀有のものである。

夢の歪みに對し動機を提供する夢のこの性質に就いては、私はこの書の中に非常に詳しく論述してしまつてるのであるから、今はその事情を飛び越し、急いで吾々の目前の問題へと歩を進めることができる。人は自分の夢の內容に對して責任を取らねばならないか？　考へを完全にするためにただ次の事を加へて置かう。夢は必ずしも常に不德義な願望實現ばかりを示すことなく、屢々「刑罰の夢」の形を以てそれに對する烈しい反動をも示す。言ひ換へると、夢の檢閱は啻に歪みや恐怖の發生の中に働きを現すばかりでなく、不德義な內容を全然抹殺し、それの代りに或る他の、贖罪の目的ある內容を作るほどに努力することもできるのであつて、吾々はこの代りの內容を通して元來の內容を認め得る。不德義な夢內容に對する責任の問題は併し、嘗つて潛在的夢思想や、吾々の精神生活のなかに存する排斥されたものやに就いて何事をも知らなかつた著述家達に對して嚴存したやうには、吾々にとつてはもはや存在しないのである。言ふまでもなく、

吾々は吾々の悪い夢の動きに對して責任を感ぜねばならない。その他にはどうしようとするのであるか？　若し夢の――正しく理解された――內容が他人の精神の入智慧でないとするならば、その內容は私の本質の一部である。私の心中にある努力を社會の標準に從つて善いのと悪いのとに分類する時には、その兩種に對して私は責任を帶びねばならない。そして知られずして無意識的に且つ排斥せられて私の心中に存するものは、それは私の「自我」ではない、と否認的に言ふとすれば、その時私は精神分析の地盤に立つものでなく、精神分析の解說を受け容れない者であつて、そして同胞の批評により、私の行動の混亂と、私の感情の紛糾を通して、心を改めることもできる。私によつて拒否されたこのものは啻に私の中にあるばかりでなく、更に時としては私からして「作用する」事を、私は經驗することができる。

超心理學的意味に於いて言へば、この悪しき排斥されたものは勿論私の「自我」に屬してはゐない――卽ち、私が一箇の道德的には非難なき人間である、と假定してである――却つてそれは私の自我を乘せてをる「或る物」に屬する。併しながらこの自我はその或る物から發達して來た、その或る物と自我とは或る生物學的一致を形づくつてをり、自我は或る物の特別に變容せられた、

周邊的な一部分であるにすぎない、そして或る物の影響に從屬し、或る物から發する刺戟に順應してをる。自我をその或る物から區分せんとする如きは、何等かの生活的目的にとつては見込みなき仕事であらう。

さて併し、假りに私が私の道德的自負心に服從して、そしてかの或る物の中に存する惡などを道義的に價値づけする必要はない、私の自我をそれに對して責任あるものたらしめる必要はない、と說かうとしたところで、それが私に何の役に立つだらうか？　而も私はそれをやる、それを如何やうにかやらずにゐられない事を、經驗が示してをる。精神分析は吾々に、强迫神經病といふやうな或る病的な狀態を敎へてくれたが、この狀態にあつては、憐れな自我は、自から何の關知するところなく、なるほど意識の中に提示されはしたが併しそれに從ふ氣にはなれなかつたところの凡ゆる惡しき心の動きに對して、自分が責任ありと感ずるのである。かういふ狀態の幾部分かは凡ゆる常態的な人間にも見出される。彼の「良心」は、彼が道德的であればあるだけ、一層敏感となるのは、著しいことだ。これに較べて次の事實を想像せよ、人間は健全であればあるだけ――一層「襲はれ易い」。夢の感染と作用とによつて一層多く惱むのである。これは確かに、

良心そのものはかの或る物の中に感ぜられる悪に對する反動の形式である事に由來する。それの抑壓が强ければ强いだけ良心は益々動く。

人間の倫理的ナルチスムスにとつては、人間は夢の歪みの事實の中に、恐怖夢や刑罰夢の中に、丁度夢判斷によつて彼の悪い本質の存在と强さに對する證據を與へられると同樣に、彼の德義的本質の明白な證明を與へられる、といふのだけで滿足だとしておかねばならない。それに滿足でなく、自分が作られてをるよりも「より善良で」あらうと欲する人は、人生に於いて僞善か又は阻止以上のことができるか、どうかを試みてみるがよからう。

技巧的に超心理學的自我に局限されるやうな一種の責任を社會的目的のために作り出すことは、醫者はこれを法律家に任せるであらう。かかる事情からして人間の感情にとつて抵觸しないやうな實踐的な結果を引き出すことが如何なる面倒に遭遇するかは、一般に知られてをる。

第三節　夢の神祕的意義

夢生活の問題の結局は見通しがつかないとして、それを不思議がるのはただ、精神生活の一切

の問題は夢といふ現象に際して再發する、而も夢の特殊なる性質に關係する二三の新しい問題だけ増加して再び現れる、といふことを正に忘れる人だけである。夢に際して現れるが故に夢を手がかりとして研究されてをる事柄の多くは併し、夢のこの心理的特殊性とは全然か、又は殆ど關係がない。それで例へば、象徴作用は何等の夢問題ではなく、却つて吾々の太古的な思考作用、パラノイア研究家シュレーベルの適切なる言葉に從へば吾々の「根本の言語」の一題目であつて、夢を支配するのに較べて劣らず神話や宗教的儀禮を支配してをる。夢の象徴作用には特に性的なる著しきものを蔽匿せんとする特異性さへも保留されないほどだ！ 恐怖夢と雖もその解説を夢の學說から期待する必要はない、恐怖は寧ろ神經病の問題であり、ただ恐怖が夢作用の條件の下に於いては如何にして成立し得るかを檢討すればよいだけである。

私の考へるところでは、神祕的な世界の假託的な事實に對する夢の關係についても亦、何等異る事情はない。しかし夢そのものは常に或る神祕的なものであつたから、あれ等の他の未知の神祕と密接なる關係に置かれて來た。夢は確かにさうされるだけの歷史的權利を持つてゐた。何故かといふと、吾々の神話が形づくられた太古に於いては、夢の形象は神話といふ精神表象の成立

に關與してをつたらうからである。

神話的現象に數へられる夢の二種があるとのことだ。卽ち、豫言的のと、精神感應的のと。兩者の存在を肯定せんとする見渡し切れないほどの證據がある。又、兩者の存在に反對するものには頑固なる忌避、强ひて言へば、學問の偏見がある。

その內容が未來の如何やうかの構成を現してをる、といふ意味に於ける豫言的夢が存在する事は、勿論些しの疑ひも容れない。ただ、この豫言が何等か注目に價する工合に、その後に實際起る事と一致するか、否かは、依然として疑はしい。私は告白するが、この場合に對しては公平たらんとする意圖は私を途方に暮れさせる。未來の出來事を箇々に亙つて豫見することが烱眼なる打算以外の何等かの心的業績にとつて可能である筈だといふ事は、一方では、學問の凡ゆる期待と立脚點とに對して餘りにも甚だしく矛盾し、他方では、批判をば不當なる越權であるとして非難せずにはをられない原始的な、よく人に知られてをる人類願望に對しては餘りにもまた忠實に適應するのである。であるから私は思ふのに、大抵の報告が輕信的であつて信用し難く當てにならない事と、感情的に氣休めに行はれる記憶の錯誤があり得る事、及び箇々のまぐれ當りも必ず

ある事などを併せ考へるならば、豫言的の眞實の夢の幽靈は結局解消して無に歸するであらうと期待してよいのである。私は箇人として、もつと好都合なる臆說を呼び起し得るやうな事柄を嘗つて決して體驗したことも、見聞したこともない。

精神感應的夢の事情はそれと異る。しかしこれについては何よりも先に次の事を注意しておかねばならない。卽ち、精神感應的現象は——感覺的知覺の方法とは別の方法で或る人の或る精神的經過が他の人によつて受け容れられる現象であるが——これは、ただ夢に結びつけられてをるにすぎない。精神感應(テレパティー)はやはり何等夢の問題ではない、吾々はこれの存在についての批判を精神感應的なる夢の研究から汲み出す必要はない。

精神感應的な出來事（思想交付、といふのは不正確である）に關するいろいろな報告に、他の神祕的主張を拒否したのと同じ批判を加へるにしても、併し著しい材料が猶ほ殘存し、吾々はそれを左樣に輕々に閑却する事はできない。その上、この方面に於いてだと、自己の觀察や經驗を集めることは遙かに容易にできる。それ等の觀察や經驗は、假令一つの大丈夫な確信を作るには未だ猶ほ十分でないかもしれないけれどもが、精神感應の問題に對して或る親しみある立場を道

理づけるものである。吾々は先づ假りに、精神感應は事實存在しそして多くの他の普通には信じ難い陳述の中心的眞實をなすものであるかもしれない、といふ意見を作つてみる。

精神感應の事柄に於いても懷疑の凡ゆる立場を頑固に辯護し、そして立證の力の前に止むなく退却することをするのは、確かに正當なる仕業である。私は普通なら承認される大抵の疑惑を脫却した一つの材料を發見してをると信ずるが、それは、職業的な易者の實現されなかつた豫言である。殘念なことには私の使用し得るこの種の觀察はほんの僅かしかない。併しその中の二つは私に强い印象を殘したものであつた。それが他の人達にも作用し得るだらうほど詳しくそれを報告することは私にできない。私は二三の重要な點を力說するに留めねばならない。

その關係者達に對して――他國で、そして他國の易者によつて、この易者はその時何等かの、恐らくはどうでもいいやうな術を行つた――或る一定の時期の爲に或る事が豫言されたが、それは出現し**なかつた**。豫言の衰微時代はとうに過ぎてゐた。證人達が嘲笑や幻滅を以てせずして、明らかなる滿足を以てその體驗を物語つたのは、著しい事であつた。彼等に與へられた告知の內容の中には、全く所定的な細かな事柄があつたが、それ等は勝手氣儘なそして理解し難いものに

見え、ただ萬一の實現によつてのみ道理づけられる様なものであつた。例へば、その手相見は二十七歳になるがずつと若く見える離婚した婦人に向つて、貴女はまた結婚をして三十二歳の時には二人の子供を持つだらう、と言つた。この婦人が重病になつて分析治療を受けてをる際に私にこの出來事を話した時に、彼女は四十三歳であつた、そしてそれまで子供を持たなかつた。パリホテルのホールに居たその「先生」には確かに知られてゐなかつたこの婦人の內密話を若し人が知つてゐたら、その人は豫言の兩つの數字を理解し得たのであつた。彼女は娘であつた時異常に強烈な父びいきであつたが、結婚をした後は自分の良人を父の代りに立てることができるために非常に子供を欲しがつた。多年の幻滅の後に、彼女は豫言を受けて來た、それは——彼女に彼女の母の運命を約束したものであつた。三十二歳で二人の子供を持つたといふ事實はこの彼女の母に當てはまることだつた。さういふ譯で、表面は外部からして起る報知の特色を意味あるやうに判斷するのは、精神分析の助けをかりてのみ可能であつたのである。この助けをかりて判斷する時には、いかにも明白に所定的である、その全體の事情は次のやうな假定によつて最もよく解說される事ができた。卽ち易者に訊ねつつあるその婦人の或る強い願望——實際には彼女の情念生

活の最も強い無意識の願望であり、そして彼女の芽ざしつつある神經病の動力であるもの——が、直接的な交付作用によつて、一種の誘致的取扱ひを行ひつつあるその易者に傳へられたのである、といふ假定だ。

私は親密な會合に於けるいろいろな實驗に於いて幾度も、強い情念の籠つた記憶の交付は困難でなく成功する、といふ印象を得てをる。交付を受ける筈の人物のいろいろな思ひ付きに或る分析的な取扱ひを加へてみる事を敢てするならば、さうしなかつたなら認められずに終るであらうところの一致が出現することは屢々である。多くの經驗に基いて私は次のやうな結論を引き出したいと思ふ。卽ち、かかる交付は、或る表象が無意識から浮び上がる時に、それを理論的に言ひ現せば、その表象が「第一次的經過」から「第二次的經過」へと移るや否や、その瞬間に成就するのである、と。

この題材の影響範圍、新奇さ、及び曖昧さの爲に凡ゆる用心を命ぜられるに拘らず、精神感應の問題についてのこれ等の意見發表を遠慮して控へるのをば、道理ある事とは、私もはや思惟しなかつた。これ等のこと總てが夢と關係するのはただ次の如き限りに於いてのみである。若し精

神感應的告知が存在するならば、それが睡眠中の人へも達することができる、そしてその人によつて夢の中でそれが捕捉され得る事は、拒否されるべきでない。然り、他の知覺の及び思想の材料との類推によつて、日中の間に受け容れられる精神感應的告知がその夜の夢の中に於いて初めて加工される、といふ事も亦、拒否されることはできないのである。精神感應的に媒介された材料は夢の中に於いて他の材料と同じく變更せられ改造せられるとしても、そこに何の異論すらあることはないであらう。吾人は進んで精神分析の助けをかりて精神感應に就いて一層多く一層よく確められたことを知りたいと思ふ。

夢判斷（下）

定價金貳圓

昭和八年十月二十六日印刷
昭和八年十月三十日發行

譯著者　新關良三

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　宮下桃太郎
東京市淀橋區戸塚町一ノ一〇九

發行所　東京市神田區今川小路二ノ一
アルス
電話九段（二一七五番／二一七六番）
振替東京二四八八八番

Freud
Die Traum-
deutung

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說『精神分析』とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴露し人間內奥の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絶性交、潜在的同性愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

夢判斷 下

フロイド精神分析大系

ARS

夢判斷 下

新關良三 譯

フロイド精神分析大系

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出せるもの、その譯者は悉く我が學界の最高權威者！現代において求め得べき最適者のみであります

第一卷 ヒステリー
ヒステリー研究・ヒステリーの病理
醫學博士 安田德太郎

第二卷 夢判斷(上)
第三卷 夢判斷(下)
東京帝大講師 學習院教授 新關良三

第四卷 日常生活の異常心理
東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰

第五卷 戀愛生活の心理
リビドー說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理
經濟學士 醫學士 木村麗吉

第六卷 快感原則の彼岸
快感原則の彼岸・集團心理
廣島文理大教授 文學博士 久保良英

第七卷 精神分析入門(上)
第八卷 精神分析入門(下)
醫學博士 安田德太郎

第九卷 洒落の精神分析
醫學博士 正木不如丘

第十卷 藝術の分析
レオナルド・ゲーテ・シエークスピヤ・ミケランゼロ
陸大教授 篠田英雄
文學士 濱野修

第十一卷 トーテムとタブー
トーテムとタブー・精神分析運動史
大倉高商講師 關榮吉

第十二卷 幻想の未來
幻想の未來・素人分析・自傳
東京帝大教授 文學博士 木村謹治
新潟高校教授 內藤好文

第十三卷 超意識心理學
慶大助教授 醫學博士 林髞

第十四卷 戰爭と死の精神分析
浪速高校教授 菊池榮一
文學士 石中象治

第十五卷 異常性慾の分析
慶大助教授 醫學博士 林髞
醫學士 小沼十寸穗

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解釋される。心の不可思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！

赤刷は既刊

豫約に非ず選擇隨意